

---

# ノーライフ・ライフ

クロル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーライフ・ライフ

### 【Nコード】

N8390N

### 【作者名】

クロル

### 【あらすじ】

立身出世に興味は無いけど低底も嫌だ。くれるならもらうけどこっちは欲しがらない。そんな無欲でも強欲でもないマイペースな青年が何の因果かノーライフとして生を刻まない話。

## 一話 死亡、転生

何の事は無い、どこにでもある様な人生だった。

母が新興宗教にはまって両親が離婚するハメになったりトラックに撥ねられて手術を受けたりしたが、経済的には終止困る事は無かったし、友人もそれなりにいて成績も平均以上は常に取っていた。家庭内暴力も無い。

少々変わった経験を積んだ俺は高校に入る頃にはある程度達観した考えを持っていた。

紛争地帯ではなくこれでもかと言うほど平和で豊かな日本に生まれた時点でかなりのアタリクジを引いたのだ。交通事故で手術も両親の離婚も珍しく無い出来事だ。むしろ五体満足で大学まで進める環境にある事を感謝すべき。

……とは言ってもガリガリ勉学に打ち込んだり白球を追いかけて青春をスポーツに費やしたりはせず、ほどほどに勉強してほどほどに遊び、それなりの大学を目指し、模試でB判定を貰って満足していた。

元来苦境を苦境と感じない気性だったのだろうと思う。手術も両親の離婚も人生に影を落とす事は無く、マイペースにマイペースに生きていた。

特徴が無いと言われるほど没个性的でも無い。クラスを引っ張っていくほどリーダーシップを発揮してもいない。

クラスメイトに俺の印象を聞けば「現国が強い」とか「身体力測定幅跳びで超飛んでた」とか「カラオケでよく音程を外す」とかそんな評価を頂けるだろう。

日本人高校生平均と比べてちょっと人生思索を多くしてきた、しかし自慢できるほど輝くものも無い平凡な学生。それが俺だった。

それが俺「だった」。

大学入試の三日前にトラックに撥ねられ、俺は病院に担ぎ込まれた。

幸い大事は無く両手の骨折のみという事で、トラックの若い運ちゃんやんの平謝りを俺と父は許した。勿論賠償金は相応の金額を頂いたが。

災難だったなあと見舞いに来る友人に人生二度もトラックに撥ねられるなんて俺はトラックに好かれてるんだなと冗談を言う余裕すらあつた。入試は来年に持ち越したと安堵すればいいのやら悔しければいいのやら分からない気分になる。

しかし入院二日目の深夜に急転直下、首にかかる吐息に目を覚ますと俺の上に髪を振り乱した女がのしかかっていた。

えっ、ナースの夜這い？ それなんてエロゲ？

「あんたのせいで……あんたのせいで俊也は会社クビになったのよ！ どうしてくれんの!？」

あ、違った。包丁持って目を血走らせるナースなんて居ねえわ。

俺は自分でも驚くほど冷静にナースコールを押そうとした。トラツクの運ちゃんの仕事か妻か妹かそんな感じがどうも鼻屑目に考えても正気じゃない。が、手はギプスでがっちり固定され上手く動かない。そろそろナースコールに手を伸ばすと女の目がギョロンと動き、包丁の柄で俺の手をもちにぶつ叩いた。手術して間もない骨が悲鳴を上げる。当然俺の口からも悲鳴が出る。痛いなんてもんじゃない。腕が爆発したかと思った。

結果的に絶叫がナースコールの代わりになったのかにわかに病室の外が騒がしくなった。女は忌々しそうに舌打ちをする。

九死に一生だと激烈な痛みで涙を流しながら耐えていると、俺の頭上で包丁を振りかぶっている女の姿が目に入ってしまった。どうやら一生すら許してくれないらしい。

「お、お姉さん、おお落ち着、いでえ！ あだだだだあゝ！」

「あなたにお姉さんなんて呼ばれる筋合いは無いわよおおお！」

「ちよ、ま」

ザクツと。

首に包丁が付きたてられ。

そんな馬鹿な話があるかと考えて。

走馬灯を見る隙さえ無く再び振り上げられる包丁の切っ先が俺の人生に引導を渡した。

まあ、結論から言えばぶっちゃけ転生した。それも明らかに日本

では無い寒村に。

輪廻転生はさっぱり信じて無かったんだけどなあ。なんせ母がどつぷり浸かったオカルト宗教が死後の人生が、魂を清らかに、手から高次元の波動が、なーんて事を言っちゃってたもんだからそれこそ輪廻転生（笑）だったんだけどさ俺にとっては。転生したもんは仕方無い。

もしかしたら俺が転生したと錯覚しているだけで今の肉体の持ち主が日本人高校生の十八年分の夢を見ていただけかも知れないし、あるいは生まれた直後の赤ん坊に憑依しただけかも知れん。

そのあたりはつきりしないけども我思う、故に我ありって言うしね、転生で片付けておこうと思うよ俺は。

……さて、現実逃避はやめて授乳に戻ろうか。

## 二話 赤子、異世界

死んだ直後にオギャアだったら楽なものを、俺が意識を持ったのは授乳の最中だった。

母乳吹いたよ。なんせ目の前にでかい乳がドアップだったからな。ドアップってか顔を埋めてた。

授乳プレイとかマジ勘弁と身を引いて胸をはだけさせは金髪ねーちゃんの顔を拝んでビビり、身を引いたせいで抱えられた腕の中から落ちそうになってビビり、体が小さくなっていく事に気付いてビビり、赤ん坊になっていく事を自覚してまあいいやと思った。

赤ん坊が母乳を吸う。これ哺乳類の常識。高校生が乳にむしゃぶりついたら逮捕だけど赤ん坊なら許される。今の状況セーフ。

乳を押し付けてくる母っぽい金髪さんにイヤイヤと首を振り、もう要らんと意思表示をする。すると金髪さんは胸をしまつて歌を歌い始めた。

多分子守歌。聞いた事無い言葉だったから意味は知らん。歌を聞いてゆつくりと揺らされながら考える。

なんだろーなこれは。夢かな。にしてはリアル過ぎるな。バーチャルリアリティか？ マトリックスみたいだな。いやいや赤ん坊でスタートとかねーよ、記憶あるし。すると転生か？ 前世の記憶を消去し損ねた転生。

……それが一番アタリっぽいな。つーか転生があるって事は魂がそれに準ずる何かが存在したって事だよなあ。ごめん宗教家の皆さん、今まで人間は電気信号で動いてると思ってたわ。

子守歌はラテン系っぽいから欧州のどこかだろうか？

……あー、なんか眠くなってきた。まだ考えるべき事はあるけど眠い。もうだめだ俺は寝る。

異常な状況下でも持ち前のマイペースを発揮して転生先に馴染めるかと思っただが、甘かった。ベツタベタに甘かった。

子守歌で寝て起きたら猛烈な頭痛が襲ってきて悲鳴を上げた。なんだこれということだと原因を考えると益々頭痛が強くなる。悲鳴を聞きつけてはたばた駆け寄る金髪ママンにヘルプヘルプともがくがママンはオロオロするばかり。使えねー！ と思っただけど俺も原因が分からん。責めたらいかんな。

あばばばばばは頭蓋骨割れる砕け散る！ 脳味噌飛び散ってない？ 大丈夫？ この痛みは大丈夫じゃねえなうわばばばばば！

正体不明の頭痛はそれから実に二年近くも続きやがった。ぼーっとしていてもズキズキと痛み、何か考えようとすると激痛が走るの  
で思考放棄して流れに身を任せた。お陰で二年間の記憶がほとんど

無いが結果オーライだ。なんせ授乳の記憶も排泄物垂れ流しにした記憶も薄ぼんやりとしか無い。

二年経って頭痛も収まり、俺はどうも知恵熱だったらしい事に思い当たった。

医学が指す知恵熱は母体から受け継いだ抗体が期限切れになって免疫力が低下し、病への耐性が下がる事が原因の症状だが、俺の場合は読んで字の如くだ。恐らく赤ん坊の未発達な脳内回路が高校生の思考力に耐えられなかったのだと思われる。

だってさあ、生まれて数日の赤ん坊の思考は「快」「不快」しか無いんだぜ？脳神経もそれ相応だ。そんなスカスカの脳味噌に理的な情報把握処理をやらせようとしたらそりゃオーバーヒートするわ。

んで二年経ってようやく脳味噌がこなれてきてまともな思考が出来るようになった訳けども、すんげえ田舎なんだな俺が住んでる地域は。

電気製品は見た事無いしさ、水道無くて井戸水だしさ、行商人らしい人が馬に乗って来るんだぜ？ 中世かっつての。

言葉はまだ覚えていないので詳しい所は分からないが、とりあえず今住んでいるのは牧歌的な山間の村だ。見る家見る家全て木造平屋で、ガラス窓なんて洒落たものは無い。道路は勿論舗装されておらず土むき出し。お隣さんの鶏は毎朝コケコツコッククドゥールドゥーとうるさい。時折間延びしたンモオ〜なんて鳴き声が聞こえるから多分牛もいる。

ド田舎もド田舎。郵便ポストさえ見当たらないし、転生ついでに時間溯行でもしたんじゃないかと思えてくる。ハハハッ！

八八八……

笑えねえ。三歳になってようやく言葉を覚え、母に尋ねた所聞いた事も無い国名が飛び出してきた。ビルテファ王国？ 何そのちよつと間抜けな響きの国名。地図にも載らない小国とか？ え？

大陸一の大国？

ウェイ、ストップ、落ち着こうぜ。からかつて無いよねマイマザー。からかう理由はどこにも無いから大まじめだつて分かるけどさ。転生に加え異世界なのかこれ。世界史は詳しくないから国名知らないだけで時間逆行なのかも知れないけどさ、服とか家とか見ると中世の手前ぐらいにはなつてはるはずなんだよ。

それなのにその名轟くローマ帝国に全く聞き覚えは無いんですつて。あらまあ奥さん、こいつぁマジだ。

平行世界か全くの異世界か知らんが前世の世界とかけ離れた世界である事は間違い無いっばい。

参つたな……いつか金貯めて日本へ行こうと思つてただけだな……  
…完璧に無理だ。

ま、無理なら無理でいいか。

異世界ならそれはそれでアリだ。幸い家は村の長みたいな役割を果たしてる家柄らしいし、余程の大飢饉でもない限り冬も餓えない程度の収穫を確保できている。

食う寝るに困らず地位も普通以上。五体満足で両親健在。充分だろ。現代科学に埋もれて過ごした感性で見れば不便な世界だが、頭痛に苦しんで過ごした三年間で培った感性で見れば新鮮味に満ち溢れた世界だ。

第二の人生も無理せずグダグダにならない程度に頑張っただけでどに生きよう。現代知識を活かせば驚異的な立身出世も可能な気がするけどそんな面倒な事はしない。地位も名誉もくれたら貰うけど、進んで欲しいとは思わない。その程度の物のために馬車馬の様に働くのは嫌なのさ。

どんな環境だろうと本人が幸せだと思えば幸せだ。そして俺は寒村の村長（予定）で満足できるチンケな男なのだよ。

### 三話 薬草、実験

俺は生後二年を知恵熱でふいにした訳だが、一年で全て取り戻していた。赤ん坊のやゝわらかい脳味噌に高校生の精神だか魂だかそんなもんをぶち込んだ影響か、知恵熱が収まってからは異様に頭が回った。思考速度は早いわ記憶力は高いわ二つの物事を同時に考えられるわ。特に最後が便利だ。なんだったかな、マルチタスク？今の俺なら数学の方程式解きながら作文書けるぜ。

しかし反面身体はあまり強く無かった。生まれて二年間頭痛に苦しんでろくに身体を動かさなかったもんだから筋肉の発達が遅れている。致し方なし。

でも農業が産業の主体のこの村で身体の発育が遅いのは不味いから軽く腹筋とか腕立つとかしてる。あんまり小さい頃から筋肉つけると身長が伸びないからほどほどにね。何事もほどほどが一番だ。

四歳の頃から少しずつ家事を手伝わされる様になった。家の家族構成は無口で寡黙な父、顔はパツとしないがとにかく巨乳な母、物知りで物静かな祖母。皆金髪碧眼だ。当然俺も金髪碧眼。

鏡も無いので水瓶の水面で自分の顔を確かめてみたが、不細工でもなければ格好良くも無い微妙な顔立ちだった。なんかこう……彫りが深いとか柔和とか中世的とか目が釣りあがってるとか、そういう特徴が見当たらず、適当にイギリス人の幼児を想像して個性をそぎ落とした後に申し訳程度に顔を整えようとしたが途中で面倒くさくなって放棄しましたみたいな感じだ。言うなれば西洋版田中太郎？ 全国の田中太郎さんには申し訳ないがイメージとしてはそれであっているはず。

ちなみにじーちゃんは昔村を襲った二十人の盗賊を一人で撃退し、その時の傷で亡くなっただらしい。強かったんだな、じいちゃん。

俺はばーちゃんの手伝いをよくした。専ら薬草摘みだ。この村の長は医者と裁判官を兼ねた役割を果たしていた。怪我したら村長。

揉めたら村長。そんな感じだ。

揉め事の仲裁の仕方を学ぶにはまだ早いと判断されたらしく、ばーちゃんにくつついて薬草学の勉強。知恵熱を乗り越えた自慢の頭脳でどんな知識を吸収していくのではーちゃんは嬉しそうだった。あれは切り傷に効く、それは咳に効く、これは痺れ薬になる、などなど教えてくれ、季節が一巡りする頃には全ての薬草を知り、効果を暗記してしまった。ばーちゃんは食卓で俺を褒めそやす。マンは手放して褒めてくれたし、とーちゃんは無言で頭を撫でてくれた。

村の子供達は村長の子供だということ遠慮しているのか声をかけて来なかった。こっちからグイグイ突っ込んでも無理矢理遊ばせるみたいで嫌だなと思って俺から声をかけるのん遠慮していたら、いつの間にかそういう性格だと思われたらしい。漏れ聞いた所によると俺はばーちゃんっ子で独り遊びが好きなの変わらななんだってさ。大体合ってる。確かにばーちゃんは好きだし精神年齢を子供に下げて皆と遊ぶより独りで勝手に遊ぶ方が気楽だ。

六歳にして薬草学免許皆伝を貰い、俺は十二歳まで暇を出された。薬草学を修了し、村人の裁き方を学び終わるとそのまま村長の権限は移行する。今から裁き方を教えると十にも満たない村長が誕生してしまいそうなので、しばらく自由に遊んでよし、との事だった。

そんな言われてもなあ。

現代知識で農業を進歩させてみようかとも思ったが、地質が良いのか現状で収穫量に困っていないのでやる意味が無い。水脈が地下にあるようで井戸も各家庭に一つあり、水車や水道を作る意味も無い。電気は………実用的な段階まで開発するのは無理だろ。

こうしてみると案外やる事無いんだな。まあ無理して現代知識を使う必要も無いやね。

すっかり好きに遊んでるって言われても同年代の子は（寒村だからか二、三人しかいない）畑の草むしりを手伝ってるし、目的も無く遊び惚けるのはなあ……

薬草研究でもしますかね。効能のはつきりしない薬草とか使い道の分からない薬草とかあるし。

まさか効果の分からない薬草をいきなり人間に試す訳にもいかないので、魚とネズミで試す事にした。

村から少し離れた平原の小川で小魚を捕まえ、川の傍に石を組んで作った小池を作って隔離しておく。そして同じ様な池を幾つか作り、すりつぶした薬草を放り込んでいくのだ。

魚が弱ったり浮いたりしたら毒がある。元気だったら毒は無い。それだけ確かめ、後はネズミに試す。毒は痺れ毒だけで間に合っているので、試すのは薬になりそうな薬草のみだ。

ネズミはよくしなる木の枝と硬い枝を組み合わせて作った簡単な罠で捕まえた。中に熟れた木の実を入れておくだけで簡単に捕まる。村のそばの森にはネズミが沢山いた。作物を食い荒らす害獣退治にもなつて一石二鳥だ。

俺が喜々として実験に取り組むのを村人達は変な目で見ていたが、子供の遊びだと思ったのか口を出しては来なかった。まあ半分遊びみたいなもんだし、変に話し掛けられるよりはそっとしておいてくれたほうが実験に集中でき……あれ、そういえば俺、家族以外ともにも会話した覚えが無い。

ぼっち？ 俺ぼっちなの？

……まあいいや。別に苛められてる訳でなし。友達居なくてもば

「ちゃんが構ってくれるからな。」

そうして黙々と研究を続け、何十匹と無くネズミを毒殺してしまい、従来の物より効き目の高い薬草を三種類見つけた時、俺は九歳になっていた。

薬草研究つてのは凄く地道な作業だ。何に効くか分からないので片端から試すしか無く、乾燥させると劣化するものも多いのであるべく新鮮な薬草で実験したい。そうになると自然に実験数と実験期間が限られるのだ。

俺は化膿止めになると分かった薬草の名前を木の板に石で書き付け、次の薬草の実験に取り掛かった。

書いたのはこっちの文字だ。アラビア文字っぽいが左から書く。村で文字を書けるのは村長一家だけだった。

薬草研究が一段落したら識字率向上を目指してみようか？ 地味に喜ばれそうだ。

四種目の薬草は魚に与えてもネズミに与えても何の変化も見られなかった。また用途の無い雑草かなと思いつりつぶした液を舐めてみる。

お、甘い？ 甘いなこれ。

しばらく舌の上で転がし、飲み込んだ。十分ほどじっと待ってみたら体に異変は見られない。散々ネズミで試したので遅効性の毒という事も無かろう。

俺はニヤけながら残りの液を飲み込んだ。青臭いけども果物とはまた違った甘さがあつて良い。なかなかの発見かも知れない。

甘い薬草を舐め尽くした夜、俺は粗末なベッドの上でイライラしていた。眠れないのだ。

全身がむず痒いと言つかもぞもぞすると言つか、妙な気分がする。ばーちゃんに相談しようかとちらりと思っただが、もう寝ているだろうし、何か変な物を食べたのだろうかと言われたらグウの音も出ない。あの甘い薬草が原因か？

痒さとはちよつと違うムズムズ感にイライラする。ムズムズに効く薬草なんぞ知らんわ。どないせえっちゆうんだ。

イライラムズムズが我慢できなくなり、手で全身を搔いてみたらなぜかムズムズ感が手に集まった。

……なんだこれ。超絶ムズムズだ。むしろソワソワする。ムズムズが手に集まるとか有り得るのだろうか。実際集まったのだから有り得るのだろうけども。

しばらく首を傾げていたが、手に集まったなら切り離しも可能なのでは無いかと思いついた。ベッドの縁に手を擦り付け、離れる、離れる、と念じるとムズムズはポロリと手から離れた。

もうムズムズもソワソワも感じない。

訳分からん。なんだったんだ？

疑問に思いはしたもののムズムズが取れてスッキリしたので、深くは考えずに素直に眠りについた。

ところが翌朝、凄まじいソワソワで目が覚めた。体の奥底から溢れ出るソワソワ感。もうソワツソワ。思わず飛び起きて叫びながら部屋を駆け回ってしまった。

何事かと顔を覗かせたとーちゃんの厳つい顔を見て我に帰り言い繕う。

「ごめんなさい、良い朝だったから嬉しくて」

「……曇りだぞ」

「お、俺、実は曇りが好きなんだ」

「……………」

とーちゃん、無言で首を引っ込めないで。気になる。

気にはなつたがこのソワソワをなんとかするのが先だ。俺は昨日の様に体を撫で、手にソワソワを集めて投げ捨てた。うむ、スッキリ。

俺は清々しい気分で朝食へ向かった。

次の日もその次の日も正体不明の感覚が付き纏った。日を追うごとにくすぐったさは消え、ソワソワもムズムズも感じなくなったが依然として「何かがある」事は感じる。

最初は手で集めて捨てていたが念じるだけでも集められる事が分かり、ソワソワ感が完全に消えてからは体の中で「何か」を移動させて遊んでいた。

また変な薬草に当たると嫌なので薬草研究は止め、自室の椅子に腰掛けて「何か」を操る練習をしながらうつらうつらする事が多くなつた。

家族からは魚・ネズミに雑草を喰わせる遊びに飽きたと思われるらしい。間違つてはいない。

「何か」が何なのかは分からなかったが、確かにそこにあるのは

分かった。まるで五感につぐ感覚器ができたかの様にその存在を感じ取る事が出来た。あたかも                   あたかも……  
……魔力のような？

#### 四話 魔力、村長

「何か」が魔力では無いかと思った俺は家族で一番物知りなばーちゃんに聞いてみた。魔法という単語は通じるか分からなかったので、手を触れずに物を動かしたり何も無い所から火を出したり出来る人はいるか、と聞いてみる。

「おうおう、そりゃ魔法の事じゃのう。旅人にでも聞いたのかの？」あるんですか、魔法。衝撃の事実！この世はファンタジーだった。詳しく聞けば、魔法は才能ある者が超高価な秘薬を飲んで魔力を引き出し、更に何年も修行を積んでようやく使える様になるものだとか。秘薬は高過ぎて村中の金を掻き集めても全然買えないらしい。秘薬って……あの薬草確かにちよつと珍しいけど森の奥に普通に生えてたぞ。

あの薬草はさぞ高く売れるだろうな、と思ったが黙っておいた。この時代に種の保存の概念があるとは思えない。秘薬の原料の存在が知れたら最後、瞬く間に採り尽くされてしまうだろう。

秘薬が高価なものも乱獲で原料の薬草が減ってしまったからに違いない。俺が見つけた薬草は乱獲を逃れた貴重な自生地のも物だったのだ。

俺はばーちゃんにお礼を言っつて自分の部屋に戻った。

うーむ。良いよね、魔法。ロマンがあるよね、魔法。手から気功波とか憧れだよな。

大きな街に行けば魔法の先生とか居るのかな。居るだろうな。魔法使いたいな……

……でもなあ……

俺は村長の一人息子だから、村を放つて街へ行くのは無責任過ぎる。村長を継ぐ資格があるのは俺だけだ。

仮に弟か妹が生まれてそちらに次の村長の座を譲渡したとしても、街で魔法使いに弟子入り出来るツテが無い。

百歩譲って魔法を教えてください。人を見つけたとしよう。そうなれば何故既に魔力に目覚めているのか問詰められる事は疑う余地が無い。この世界で魔力を目覚めさせる秘薬は馬鹿高い上に貴重品らしいしどこで手に入れたんだって話になる。

魔法を学ぶのは面倒臭そうだ。よし諦めよう。

物事に執着しないのも俺の取り柄だ。マイペースマイペース。無理はしない。魔法は惜しいけど無いといけないものでもないし。もしかすると師につかなくても簡単な魔法ぐらいなら使える様になるかも知れない。呪文とか魔法陣が必要ならアウトだけど。

ま、独学でしばらく頑張つて出来るなら良し。出来なくても今まで通りだ。なるようになるぞ。

丸々二年間ひたすら飽きもせず魔力を体に巡らせ操作する練習をして体から薄皮一枚ほど離す事も出来る様になった。それ以上離すと零れて霧散してしまう。

魔力操作が精密さを増すにつれて周囲の魔力も感じ取れるようになっていた。魔力はどこにでもあるが密度に差があった。大気中には薄く、植物には少し濃く、動物には濃く、人間が一番濃い。家族比べると俺の魔力は濃い目で、量も倍ほどあった。しかし村人の中には俺の更に倍ある人もいたし、俺よりも更に濃い人もいたので自慢にならない。俺の濃さと量は常識の範囲内だった。少しがっかりする。

十一歳になり、魔力操作も思い通りに行く様になり、魔法を使おうとしてみた。

呪文も印も陣も知らないし、あるかも定かでは無いので取り敢えず念じてみる。

使う魔法は念動だ。

炎や水を出すのは質量保存の法則を無視していて難しい気がするし、空間転移は失敗したら危なそう。念話は人相手に試す事になるから気が引ける。

その点念動なら力の始点を体から離すだけだから楽そうに思えた。コソコソ人目につかない森の中に入り、足元の小石を睨み付ける。

動けっ！

動いてくれ！

「……………」

小石はぴくりともしない。うん、まあ念じただけでは多分動かないだろうなとは思った。次！

今度は魔力を出し、小石に手を近付けて魔力で包み込んだ。体から出たスライムで小石を包んだ様な感じだ。この状態でもう一度。

動けっ！

動いてくれ！

「……………」

反応が無い。ただの小石の様だ。

俺は少しがつくりしてその場にどっかかり腰を降ろした。

あーあ、怠い怠い。練習が足りないから出来ないのか理論的に不可能だから出来ないのか、それだけでも分かればなあ。何も反応が無いと無駄な努力してる気分になって嫌なんだよ。

魔力を打ち出す魔弾！とかよくファンタジーにあるけどさ、魔力って体の中を巡ってる血液みたいなもんなんだよね。血液を勢い良く出しても炸裂しないのと同じで、魔力を打ち出してもヒョロツと飛んであっさり拡散して終わる。はあ虚しい。

何の進歩も無いまま十二歳になり、父の揉め事解決につき合わされる様になっていた。喧嘩の仲裁から泥棒の裁きまで大体十日に一度くらい厄介事が持ち込まれる。平和な村だからそんなもんだ。

後は納税だろつか。年末に来る王国の徴税官に村から集めた羊毛と小麦を規定量渡さなければならぬ。しかし本当に渡すだけのあつさりしたもので、儀式めいた事も無く徴税官は分量を確かめて羊皮紙に何やら書き留めるとさっさと帰って行った。

適当だよなあ。徴税の時に人口の確認があつたが口頭で父が変わりありませんと言うだけでOKだったし、ああしろこうしろとも言われない。税を回収するだけして放置だ。この時代この文化レベルだとそんなもんなのかねえ。徴兵が無いだけマシと思うべきか。

仕事の引き継ぎは順調に進み、日本の憲法を知る（うる覚えだが）俺の裁きは概ね好評だった。村長の権限には少し恐ろしいものがあり、一度裁定が下ると誰にも覆せない。裁きの基準が明文化されていないため裁き方も村長の裁量一つに任せられる。一種の独裁だ。そこまで権力が集中していると賄賂を贈って良い様に取り計らって貰おうとする輩が出て来る。とーち ьяんはそこに一番気をつけると言っていた。賄賂ダメ絶対。裁きは公平に。

今はこの裁き方で何とかなっているけれど、将来的には文書にした法が必要になると思う。このままではいつか性根が曲がった奴が村長になって村が無茶苦茶になる。そうならない様に普遍的な法が必要だ。

十五歳でとーちゃんから村長の座を引き継ぎ、俺は石盤に法を文字にして刻み始めた。日本国憲法をそのまま適用するには文化レベルが違い過ぎるし、あまり壮大なものをぶち上げると王国の方から目をつけられる可能性があったので簡単なものにしようと思ってる。

大体常識的な事しか書いていないが、常識を文字にするってのは案外大切だ。「常識」は人によって微妙に違うから、はっきりした指針が無いと混乱が起こる。

石盤に法を刻むのと同時に村内の文字の普及にも努めた。折角法を作っても、それを村長一家しか読めないのでは今までと変わらな。誰でも、とまではいかないが大多数の村人は読める様にしなければならぬ。

俺は朝早く起きて薬草を採りに行き、朝食を挟んで石盤に文字を書き付け、昼頃に一時間ほど村人を集めて文字の勉強。昼過ぎからは揉め事解決や農作業の手伝い、開いた時間は木陰で休みながら魔力操作の研磨、日が暮れたら夕食をとって眠る、という生活サイクルを繰り返した。

それなりにやり甲斐と張り合いがあり、疲れもせずだらけもせずの程よい日々だ。相変わらず魔法は使えなかつたけども。

#### 四話 魔力、村長（後書き）

まだプロローグみたいなもんだからすっ飛ばして書いて四話目なのに、まだノーライフのノの字も無いと言っ……

## 五話 病気、死亡

早いもので俺も十九になっていた。最早転生前よりも転生後の人生の方が長い。情報化社会の現代と比べてここは時間の流れが緩やかで、生き急いでいる感じがしない。前世の十八年の倍はこの村で過ごしている気がした。

俺は並列思考が出来るから一度二つの陳情を同時に聞いて同時に解決してみたら村人から益々変な目で見られる様になった。頭良いし凄いいんだけど変わっている村長様、と見られ、頼りにはされるが人気があるかと聞かれたら微妙な所。

信頼はされてると思うんだけどね。なんかこう、フレンドリーにはされない。あとモテ無い。一つ年下の可愛い娘がいるんだけど、何となく距離をおかれている。外見は村人と何も変わらない金髪碧眼だし、顔の作りは自分ではよく分からないけど結構良い(母談)。体はマツチヨではないがヒヨロリともしていない。見た目で敬遠はされてないはずだ。

そうすると行動かな。変な行動してるかなあ？ 理解されないレベルの突飛な事はしてこなかったつもりんだけど。

可愛いあの娘は村の慣習に従い俺の所に嫁ぐ事が確定してるっつか半分嫁いでる。子供が出来るまでは通い妻で、妊娠したら村長一家に迎えられるらしい。変な慣習だ。

……ええはい。夜はやる事やってますよ。たまに昼間でもやります。情事は嫌がられないから嫌われてはいないと思うんだけどさ、ぎこちなさは抜けない。綺麗な花をプレゼントしたら微笑んでくれたがやっぱり距離がある。

女心はさっぱり分かん。

で、遠回しに攻めるのが面倒になったのでストレートに聞いてみた。そしたらプレッシャーみたいなものを感じて近寄れ難いんですっ

て頭を下げられた。えー、そんなもん出した覚えは……あ、あったわ。あれだ。魔力だ。

試しに体中の魔力を集めてポイツと捨てる则彼女は目を丸くして直後に抱き付いてきた。好き！抱いて！とは言わなかったけど非常に嬉しそつだつた。魔力があるつても良い事ばかりじゃないんだねえ。

彼女との仲が急接近したのは良いが、二十歳の初冬に俺は病に倒れた。原因不明。薬草も効かない。

村唯一の医療家系である村長一家が所有する技術が通用しないとなると、もう死へ一直線だつた。心臓付近の痛みが一日中体を蝕み俺はベッドから起きられなくなつた。痺れ薬でどうにか痛みを誤魔化し、天井の木目をぼんやり見つめる毎日だ。感染する病だといけないので部屋には誰も居ない。

不幸中の幸いで彼女の腹の中には既に子が居た。俺が死んだ後は父が村長に戻り、やがて子にその座を譲るだらう。辛うじて法律を刻んだ石盤も完成していた。識字率も五割を超えている。

俺は俺なりに人生を楽しんだしやり遂げていた。思い残す事は無い。

不思議と死は怖くなかつた。一度死んでいるからかも知れない。

魔力も薬草も現代知識もよく回る脳味噌も病気に勝てない。世の中そんなもんだ。

苦しんで死ぬのは嫌だが微かな完治の希望も捨て切れず、俺は  
ずると生きていた。徐々に心臓の痛みは強くなるが心停止とま  
はいかない。

妻は時折扉越しに俺に話し掛けてきた。たわいもない話をする  
だけで病状には触れなかったが、決まって最後は泣き崩れてしま  
う。ばーちゃんも、母もそれは同じだった。

父は一度だけズカズカと部屋に入ってきた。感染するかもしれな  
いと拒否する俺を正面から無言で抱き締め、また無言で行った。  
それきりだ。それでも愛情は十分伝わった。

優しい人達だった。

前世と今世合わせて四十年も生きられなかったが、世の中には一  
歳になる前に死ぬ者もゴロゴロしている。俺は幸せな方だと思う。  
自分よりも下の者を数えて俺はまだマシだと自分を慰める少々情け  
ない考え方だったがそれで幸せになれるなら良いじゃないか。

病床に伏して尚、俺は焦らなかったしマイペースだった。馬鹿は  
死んでも治らないな。

次もまた転生するのかしないのかは定かでは無い。今度は消失す  
るのかも知れないし、はたまたこれはあの病院で女に刺され危篤状  
態に陥っていた長い長い明晰夢という可能性も無きにしもあらず。  
答えは死ねば分かる事だ。

そして殊更寒い冬の日の朝、俺はベッドの上で体温を失い冷たく  
なつた骸をさらしていた。

俺は自分の死体を地面から二メートルほど離れた空中に漂いながら見下ろした。綺麗な顔はしちやいなかったが即死亡判定を出せる青白い顔だ。

自分の死体を見ている俺。オイオイ転生の次は幽霊かよバリエーション多いな。

ぼかんとしていると、突然体が溶けていくような感覚に襲われた。自分の体が空気と同化する様な感じた。

連続する不可解な事態に頭はいささか混乱していたが、直感的にこのままでは消滅すると思った。そりゃあ死は受け入れたし実際死んだらしいけども、霊体になりまだ存在している。

消えたく無い、と思った。やり残した事は無いけれど、消失と存在継続どちらが良いか問われりや後者を選ぶのは当然の帰結。

俺は空気に溶けていく体をつなぎ止めようとした。片方の思考では気合いでつなぎ止めを試み、同時に並列思考で打開案を模索する。もう何度も超常現象を体験しているだけあってすぐに冷静になる事が出来ていた。消滅しかかかっていても焦ってはいけない。落ち着け、落ち着け……

高速回転した思考回路が解を弾き出す。超常的存在が超常的現象で消えかかっているのなら、対抗手段もまた超常だ。

俺は唯一自由に行使できる超常、即ち魔力操作で自分の体をつなぎ止めた。すると体の融解がピタリと止まった。成功したらしい。

あぶねえなああと息を吐く。危うく消える所だ。

一心地ついた俺は自分の体を検分してみた。輪郭のみで向こうが透けて見える透明な体。肌がかさついていて皺が寄っている所を見ると死亡直前の体をトレースしているらしい。寝間着代わりの小麦色のローブも着たままで裸ではない。

試しにベッドに触れようとしたらすり抜けた。意識して触ろうとしても触れない。物理干渉は不可能か。

そして周囲の空気がまだ俺を溶かして霧散させようと引っ張って

きている。気を抜けば溶けて消えてしまいそうだ。

……どうやらこの霊体は酷く薄い魔力でできているようだった。量も密度も生前の十分の一ほど。大気中の魔力よりも薄い。

生前の実験と妻の反応から分かった事なのだが、濃い魔力は薄い魔力を圧迫して乱す。妻は保有魔力が少なく密度も無かったため俺の魔力に押されて圧迫感を感じていたのだ。

今の俺の魔力は大気よりも薄い。すなわちこの世に存在する全ての物が俺を圧迫し、乱し、拡散させようとしてくるのだ。

魔力操作の研磨を続けていて良かったと心底思った。根気良く魔法も使えないのに魔力操作の練習を続けていたおかげで吹けば飛ぶ様な薄い霊体を保っていられる。

生前何の役にも立たなかった技術は、死後になってようやく役立っていた。

五話 病気、死亡（後書き）

の  
か  
やっとスタート地点。死んでいるのにLifeって表記はOKな

## 六話 霊体、草原

困った事になった。

昼頃、部屋をノックしても返事が無い事に気付いた妻がドアを開き、俺の死体を発見した。恥も外聞も無く泣きじゃくる妻を慰めようと近付いてみたが、危うく消滅しかけた。平均よりも魔力量・密度共にかなり低い妻でこれだ。ちよつと魔力の多い人間なら息を吹き付けるだけで俺を消し飛ばせるだろう。

俺は部屋の壁をすり抜けて逃げ出した。

村の上空をしばらく漂ってみたが村人は誰も気付かない。明らかに視界に入る距離まで近付いて声をかけてみても気付かない。どうやら見えないし聞こえない様だった。

触れない見えない聞こえない。生者とコミュニケーションをとるのは不可能だ。寂しい気分になる。

俺は上空から村の鐘が鳴り、俺の死体が運び出され、広場で薪を組んで燃やされるのをじつと見ていた。嘆き悲しみ涙を流す村人達を見て、ああ俺は慕われてたんだなと嬉しくなった。

葬儀は一昼夜かけて行われ、骨は共同墓地に埋められた。土葬では無く即日火葬にしたのは俺の遺言だ。死体から変な菌が広まってもいけないから燃やしてもらった。

葬儀の後数日は皆暗く沈み妻などは虚脱状態になっていた。皆沈痛な表情だ。俺は気を抜くと消滅してしまつので眠る事もできず

霊魂に睡眠は要らなかつたようで苦にはならなかつた。ずつと嘆く村人達を見ていた。

変な話だが嘆かれのを見ると嬉しかった。生前それだけ大切に思われていたのだという実感が沸く。失って始めて分かる大切さもあるのだ。

しかしいつまでも嘆いていては先に進めないだろうと心配に思っていたが、村人強し。春の訪れと共に陰鬱な雰囲気は払拭され、明

るさを取り戻し始めた。

妻も徐々に大きくなるお腹を見ている内に悲しみを乗り越え、子供と共に強く生きる事を誓っていた。時折物思いに沈んでいたが、夏の始めには家族の気付いに微笑みを見せるまでになる。

……俺が見守っていたのはそこまでだった。妻が元気を取り戻したのを確かめ、娘が生まれるのを見てからすぐに村を離れた。

俺にとって村は危険過ぎる。

地上付近に居ると村人や牛や鶏が持つ魔力で消えそうになる。空高く飛んでいれば村人の魔力に押される事も無いが、時折音も無く鳥が飛んできて生きた心地がしない。

いくら思い入れがあり家族がいるからと言っても、24時間消滅と隣り合わせの日々は神経を磨り減らす。

俺は村から東に離れた所にある草原に活動拠点を移した。背の低い草が一面に生い茂り、ステップというかサバンナというかそんな雰囲気だった。森や村と比べて生き物の気配は少なく、加えて見晴らしが良いため警戒もしやすい。

俺はしばらくここで新しい体をならそうと考えた。魔力操作技術が更に安定すれば村に戻れるかも知れない。

どんな場所でも楽しみは見つけられるものだ。俺は草原の野ネズミや昆虫を観察しながら幾度と無く移り変わる四季を過ごしていた。平坦に見える草原もじつと観察していると生命の輝きが満ちている。

雨の日の後はミミズやモグラが土の下から顔を出し、それを狙った小動物が森からやって来る。春に草原の草は小さな白い花を咲かせ、夏になると少ない降雨と強烈な日差しの助けを借りて背丈を伸ばし、秋に実をつける。そして小さな実は冬を超えて再び春に芽吹くのだ。

草原にもサイクルがあるらしく、大体三年置きに植生が変わる。白い花を咲かせる葉の細い草と薄い水色の花を咲かせる円形の葉の草が交互に草原を占有していた。見ていてなかなか面白い。

草原の観察を行う一方、霊体にも慣れていった。今では気張らなくとも無意識に体をつなぎ止めておく事ができる。

しかし相変わらず大気よりも濃い魔力に近付くと消えかける。一度芽吹いたばかりの弱々しい草の芽に触ろうとしたら手が消滅してしまった。半年ほどかけて魔力を手に流し再生させる事ができたがヒヤヒヤした。

霊体は温度差に強いのは幸이었다。ある程度温度変化を感じても冬の寒さで凍える事はない。死んだ時に着ていた小麦色の通気性の良いローブっぽい服に紺の長ズボンを身につけている訳だが、霊体の温度差緩和が無ければ到底寒さを防ぎきれない装備ではなかった。ゴーストが凍死とか勘弁な。

十年かそこら懸命に魔力操作技術を研いでいた俺は次第に限界を感じる様になった。幾ら強く体を固定するとしても限度がある。雑草にも触れないのに人間に触れる訳が無い。

そこで自分の体の魔力密度を上げてみる事にした。

俺の体の魔力密度を1、大気中の魔力密度を2としよう。魔力操作を止めると俺の体は莫大な体積を持つ密度2に溶けてしまう。

そこでわざと微かに魔力操作を緩め、大気中の濃い魔力をほんの少し自分の体に取り込んだ。

毒物は摂取量を減らすと薬になる事がある。密度の濃い大気中の魔力は俺にとって有害だったが、極少量取り込む事で薬になった。

自分の魔力密度を上げる事に成功したのだ。

とは言っても密度の上昇率は僅か。密度1が1・001になつたに過ぎない。あまり一気に上げようとすると消滅してしまうので地道に確実に行かなければならない。

ゲームの最初の村付近でレベル99を目指している気分だった。マゾい。人生は死後もクソゲーだ。

しかし辛い時間はいくらでもあつた。霊体は魔力操作を続けている限り劣化する様子は無かつたし、寿命は無限なのだろう。霊体は老いる体を持たないのだ。

俺はじわじわじわと自分の体を成長させていく。途中観察していたネズミが突然ジャンプして避け損い下半身が消滅したり、飛んで来た八工に腹に風穴を開けられたりと何度も消えかけたが、どうにか存在を保っていた。

あと数回消えかけて分かつた事だが霊体には器官が無いらしい。体全体で一つの「個」を作っている。頭が消えても心臓が消えても大体半分以上体が残っていれば時間をかけて復活できる。

まあ逆を言えば頭も心臓も内蔵にあたる部位が残っていても半分以上体を失えば消滅する。気をつけないとな。

草原で暮らし、最初の二十年ほどは大体年一で村に顔を出していた。

ばーちゃんが寿命で死んでしまう時は俺の様に霊体にならないかなと思つたが、息を引き取つた直後にばーちゃんの魔力は一緒に大気に溶け、消滅してしまつた。

魔力操作で魔力をつなぎ止められなければ霊体にはなれないようだった。

哀しかったけれどどうしようもない。あの魔力を引き出す秘薬の原料になる薬草の自生地は俺しか知らない。村人が魔力操作技術を身に着けるのは不可能だ。しかし悲しい事ばかりでも無い。

俺の娘は妻に似て美しく成長してくれた。村の男の誰もが振り返る美しさだ。父として誇らしい。

娘はやがて男と結婚し、男は数年の研修の後村長となった。頭脳はイマイチだった俺の残した法律の石盤を使ってなんとかかんとか村を治めていた。

世界は俺が居なくても回っていくのだとしみじみ感じた。寂寥感があったが、娘に、石盤に、確かに俺の生きた証は残っている。俺はそれなりに満足できた。

村が消えたのは霊体になって二十年数年経った頃だった。村があった場所には燃え尽きた家の残骸があるばかりだった。隣接していた家は全て全焼していて、離れて建っていた家に人の気配は無い。どうやら大きな火事が起きて引越したらしい。年に一度しか顔を出さなかったため気付かなかった。

火事で家が燃えても建て直せばいいじゃないか、と現代人なら思うだろう。俺もそう思う。

しかしここは文明が発達していない土地であり、迷信がはびこっ

て深く根付いている。

大きな災害（火災）が起きる「この土地は呪われている。

そんな阿呆らしい公式も受け入れられてしまう。そういう迷信が確かに村にはあった。

村跡の周辺を探したが既に人の気配はどこにもなく、村人達を見失ってしまった。

俺は独りになった。

寂しくないと言えば嘘になる。しかしまだまだ人間を探し人間の近くで暮らすにはこの体は弱過ぎる。

千里の道も一歩から。まずは体を強くしないといかん。

遠いなあ……生前レベルまで魔力濃度を戻すにはどれだけかかるのやら。

六話 霊体、草原（後書き）

主人公は未だミジンコにも殺される（消される）レベル。

## 七話 森林、木霊

大気中の魔力を取り込むとしばらく気分が悪くなり、体から異物感と違和感が抜けない。三日程で体調は回復するため最速で行けば三日に一度のペースで濃度を上げて行ける訳だが、苦しい事に手を出すのは誰だつて嫌なものだ。だつて人間だもの。

誰に強制された訳でも無い、時間制限も無い。俺は休みを挟みつつ急がず焦らず自分のペースで濃度を上げて行つた。

最初は人恋しくなる事もあつたが何にでも慣れてしまふ物で、やがて独りが苦にならなくなる。いつしか年月もあやふやになる。

多分五十年経つた頃、俺は大気と同程度まで自分の濃度を上げる事に成功していた。これで四六時中魔力操作をせずつも消滅する事は無い。自然体で過ごす事が出来る。自由つていいなあ……

もつとも魔力操作は五十年ぐらい二十四時間三百六十五日いつでもどこでも休む事無く続けたので既に本能レベルで身に着いていた。呼吸をするように無意識に魔力を自分に引き止めている。

しかしまだまだ動物に触ると呆気なく霧散する。多少楽になつたが消滅の危険は去つていない。

俺は次のステップに進む事にした。生物の魔力に体をならし始める。まずは草から。

大気中の魔力に慣れてからは草原の草に触れても消滅しなくなつていた。強烈な吐き気と圧迫感、体がねじれてよじれる嫌いな感覚がするがひとまず消えはしない。

冬は草が枯れてしまうので休憩期間にして、専ら春から秋にかけてじわじわと草の魔力を極少量取り込んで濃度を上げて行つた。

時間的なペースは四分の三になった。しかし魔力が濃くなつて以前より霊体が安定したのか若干濃い目の魔力にも耐えられる様になつており、濃度上昇速度は結果的に早くなつた。YES、確かに進歩している。俺はやれば出来る子。

大気に慣れるまでより短い歳月を経て　恐らく三十年弱　俺  
は草原の草の魔力濃度にも慣れた。途中で驚つばい鳥の体当たりで  
体をほとんど半分消されなければもう数年は短縮できただろうが悔  
やんでも仕方無い。

草原で蛍の光を三番まで歌って別れを告げ、東の森に移動した。

鬱蒼とした深い森で、頭上の枝には蔦が絡まり日の光を遮ってい  
る。昏間でも薄暗くどこかおどろおどろしく、お化けでも出そうだ  
った。ああ俺がお化けだったわ。うっかり。

森の中は小動物が忙しなく飛び回っていて危険極まり無いので、  
まずは森の入口で膝丈ほどの若木を見つけてそれにならせた。

若木は成長するにつれて微妙に魔力密度を上げていき、丁度良い  
塩梅で俺の魔力密度上昇と釣り合った。なんか木の苗を植えてその  
上を毎日跳び越し、十年後には強靱な脚力が貴方の物に！　みたい  
な訓練法をしている気分になる。

森の奥の姿の見えない動物達の鳴き声を聞きながら、ここでも俺  
はじわじわと魔力密度を上げて行った。八十年だか九十年だかそれ  
ぐらいの間延々と地味な作業を続けていた俺は半ば悟りの境地に入  
っていた。当初の人間の近くで暮らすためという目的が薄れる。

なんかね、同じ事繰り返し返していると心の不純物が取れるね。感謝の  
突き一万回じゃないけどさ、そこはかとない充実感が無くも無い。  
やっぱり面倒臭い事には変わり無いんだけども。

あーああ！ どうかに一瞬で世界最強レベルまで強くなれるアイテム落ちてねーかなあ！ ……落ちてないよなあ。

まあ早々都合良く強化アイテムをゲットできたなら誰も苦労しない訳で、俺は若木と共にまた一歩ずつじわじわと濃くなっていった。もうホントこれ亀の歩み。塵も積もれば山となるとか継続は力なりとかそういう言葉が似合う男だと思つよ俺は。

やがて若木は俺の身長を追い越し立派に実をつけるまで成長したのだが、所詮は植物。現状以上に魔力は濃くなりそうもなかった。

木は草と比べて魔力が濃いが、動物よりは薄い。スモウレスラーが三人集まって作ったようなぶつとい幹の大木でさえ密度は小ネズミに劣る。その代わりに魔力量は動物より成長量が多いが俺の役には立たない。俺は蛍の光を一番だけ歌つて森の中へ突入した。

霊体は物質をすり抜ける。

この特性は非常に便利で、俺は森の大木に体を飲み込ませて安全を確保した。幹に完全に埋まっているのでうっかり動物に接触してアボンなんてこたあ無い。俺天才。

大木の幹から顔だけ外に出し、木から生えた生首みたいな状態で動物が通りかかるのを待つ。動物が木の前を横切つたら素早く幹から出て動物の体から漏れる魔力をほんの少し頂戴し、素早く幹の中に戻る。この繰り返し。

時折キツツキが幹に穴を開け始めるのでその時はまた安全な大木

を探してその中に移住し、俺はまったりのんびりと成長した。消失の危険性は限り無くゼロに近いのだから急がず焦らず。マイペースマイペース。

「それ」に遭遇したのはキツツキに追われて住家を変える事三回目の移動中だった。

くねくねと曲がった枝に白い幹の大木の枝の上で半透明な……あー、マンドラゴラ？みたいな奴が踊っていた。なんかこう、大根を根分かれさせて棒みたいな手足を作り、葉っぱを大雑把に髪に見える様に整えようとして失敗したみたいなの姿をしている。顔は無い。のっぺらぼうだ。

え、モンスター？ 今更？

なんだこいつはとしばらく観察していたが、腰を振り頭の葉っぱを振り乱して陽気に踊るばかりでどうも悪い奴には見えない。半透明だし俺と同じ霊体だろうか。

見た所「それ」の魔力密度は俺よりも少し低い。接触しても安全だろうと判断し、「それ」の正面まで飛んで行って手を振ってみた。「！」

体を硬直させ、「それ」は踊りを止めた。顔が無いから判断がつきにくい、顔に当たる部分を俺に近付けて凝視しているように見える。

言葉通じるのかコレ、と悩んでいると「それ」の手が動き、先程俺がしたのと同じ動作で振った。手を振り返してくれたらしい。大

根モドキが盛んにぶんぶん手を振る姿には妙に愛嬌があった。  
良い奴っばい。

俺は大根モドキに主にジエスチャーで会話を試みた。言葉が分からなかったからだ。

身振り手振りの説明を十日ほどかけてなんとか判読した所によると、大根モドキはある種の木の霊らしい。木の霊だから木霊、と安直に命名したら名前の概念を知らない様で説明に苦労したが、なんとか個体名を認識させる事に成功した。

それはともかく。

木霊の元になった木の葉には魔力を目覚めさせる作用があった。秘薬の薬草の木バージョンらしい。しかし同時に強力な毒を持っていたため、虫や鳥に脅かされる事無く順調に成長していた。

そして順調に成長して、成長しきり、老い、寿命を迎えて枯れた。木霊はその木の霊体だった。自然にゆっくりと生命活動を止めたせいか急激に魔力を散らす事も無く、かなり小さくなりはしたもののじんわりと無事霊体になったらしい。魔力を目覚めさせる木なのだから、まあ少しぐらい魔力操作が出来ても不思議では無い。

人間以外も霊体になるんだな。確率めっちゃ低そうだけどさ。

納得した所でそれじゃあその踊りは一体なんなんだと聞いてみた。まさか木霊の元になった木は歌って踊れるスーパーツリーだったの

か、と問詰めると頭をぶるぶる横に振る。

一生懸命身振り手振りで説明を始めたので腰を据えて再び解読作業に入ると、数匹の猿が木霊と同じステップで踊りながら俺達の居る木の下を通り過ぎて行くのが見えた。

OK、把握。ファンキーなモンキーから学んだんだな。

その後マイムマイムを教えてやると喜んでいた。

七話 森林、木霊（後書き）

主人公を撥ねた運ちゃんの名前は一話目に出てるのに主人公の名前が今だ出ていない。不思議！

## 八話 進化、変化

森の植物は多種多様だった。針葉樹落葉樹広葉樹、松の木の様なものからバオバブっぽい太い木まで節操が無い。環境帯を間違えているとしか思えない取り合わせの木々だ。

木霊の元になった種類の木もこの森にある。一度木霊の案内で見に行った事があったが、木霊をそのまま拡大したようなでかい大根だった。もうどこからどう見ても大根。すべすべの白い木肌に青々とした葉。木と言うよりは突然変異の巨大大根。

珍妙な植物に呆れるばかりだったがここは地球とは違う異世界。その中でも魔力覚醒作用を持った特殊な種類の木となれば、まあこんなキテレツな姿も不思議では無い。

俺は秘薬大根木の中に埋もれて隠れてすくすくと成長した。魔力を持つ木だからなのだろう、非常に居心地が良い。

で、ぬくぬくと安全な住家で暮らしていたら魔力操作が進化した。いや進化っつーか進歩っつーかレベルアップっつーかね。魔力操作の範疇だと思っけどももしかすれば違う技術なのかも思わなくも

……

つまりどうなったかと言うと。

- LV1……魔力覚醒
- LV2……魔力の体内移動、排出（ここまで生前）
- LV3……自らの魔力密度固定（ここから死後）
- LV4……意識的魔力とりこみ
- LV5……魔力圧縮（今ここ）

お分かりか。今の俺は薄い魔力を圧縮して濃くできるのだよ。

これに気付いたのは住家に行っている木の前を一カ月ほど動物が通りかからず暇を持て余していた時だった。切り株に兎が頭ぶつけて

気絶するのを待たずとも木から離れて獲物をあさりに行きやあ良い訳だけでも、うっかり大型動物に遭遇して接触、頭パーンとかなたら嫌だ。体の一部が消失すると再生に一、二カ月かかる。

なんとか安全な場所ですくを負わず安全に成長できないものかと頭を悩ませ、出した結論が魔力圧縮だった。

実は俺、生前に魔力圧縮を試みた事があった。

俺の魔力は村人平均よりは濃かったが村人一とは口が裂けても言えない。何となく悔しかったし魔力密度は低いよりは高い方が良いと思っていたので試行錯誤してみた。漫画なんかもよくあるだろ？垂れ流しのエネルギーを一点に集中！とかさ。ありがちだけど効果的。

しかし失敗した。結局生前にできたのは魔力の移動と排出のみ。一度失敗してはいるものの今はこれ以上成長しないじゃね？ってぐらい魔力操作技術の熟練度が上がっている事だし駄目で元々もう一度試してみようってな具合にやってみたらできた。

俺、狂喜乱舞。気付けば木霊と一緒に踊っていた。うははははは！

まあ圧縮しても自分の魔力密度に掛ける事1.01倍ぐらいまでしか圧縮できなかったが、これで一層効率良く安全に成長できる。

更に！

今までの成長法では理論上世界最高の魔力濃度と同等までしか成長できなかった。しかし魔力圧縮を使えばノーリスクで際限無く成長できる。やっぱり成長速度はカタツムリだけだ。

もつとも世界最強を目指す気なんてさらさら無いだけださ。人間平均ぐらいまで濃度が戻れば俺は満足だよ。魔法が使えりゃモアベター。どうやら霊体の寿命は永遠らしいし、楽しみは多いに越した事は無い。

俺は人生に適度な生き甲斐を求めるタイプだ。人間って種族は自由を求めるもんだけどさ、「あんた何もなくていいよ！　いつでも美味しい食べ物作ってあげるし好きな時に好きなだけ寝て良い！　漫画もゲームもネットも、お望みなら娼婦だって好きなだけ提供しようじゃないか！　他にもあんたが望む事はなんだって即座に叶えてあげる！　対価はいらんよ！」なんて言われたら墮落するだろ確実に。それが人間。それが現実。

与えられるだけで自墮落に生きたくは無いから、目標とか仕事が欲しい。裕福な生活でもやるべき事が無ければ虚しい。でもあんまり厳しいノルマは勘弁な。

俺は今も昔もそういう思考回路の人間なのだよ。

今現在俺は時間的制約から完全に解き放たれていて、目の前には何の障害も無い。障害物の無い障害物競走ってお前ただの徒競走じゃねえか。ジヨギングで平坦な道を走ってその内ゴール、などというヌルい競技を俺は好かん。

そこで暇つぶしに霊体増殖計画を発動してみた。特に利益も求めない、興味本位の計画だ。

今現在この森に存在する霊体は俺と木霊のみ。霊体は物理干渉能力が無く食物連鎖の法則から弾き出されているからどれだけ増えても困りはしない。大抵の動物に触れても消滅しない程度に成長していた俺は森の中を徘徊して実験体を探した。

生物は死ぬと例外無く保有していた魔力を大気中に拡散させる。それを魔力操作によって防ぎ、拡散を防いだ者が霊体になる。魔力操作を身に着ける為には魔力を覚醒させなければならん訳だがこの森にある秘薬木は猛毒を持ち、喰うと死ぬ。偶発的に魔力に目覚めた生物が死後霊体になる可能性はゼロと言っていい。

そこでその魔力操作を俺がカバーするのだ。死んだ瞬間に標的の体を俺の体で包み込み、魔力が拡散できない様にする。死んで拡散するはずの魔力は俺という壁に阻まれ拡散できない。

これで拡散しなかった魔力は霊体になるはず、と考えたのだが世の中はこんなはずじゃなかったって事ばかりだよ。

何かの病気で鱗がボロボロになって衰弱しているトカゲを見つけ、死ぬのを待って死の抱擁（殺す訳ではないが）をした所半分成功半分失敗した。

うん。モンスターっぽいもんになったんだ。ちなみにアンデッド系。

予測通り拡散できなかった魔力は一晩ほどで拡散を諦めてくれたのだが、霊体にはならず再び肉体に定着しやがった。いや驚いたね。反魂か黄泉返しか、俺はファイアもケアルも習得してないのにいきなり数段飛ばしにリザレクションを覚えたのかと思った。

……まあしかしリザレクションでは無くクリエイト・ゾンビの類だったらしく。

心臓動いて無いし、元々変温動物だからかも知れんが体温も無い。魔力量と密度は小癩な事に生前と変わらず。食事は摂らず呼吸せずどうやら老いもしない。別段日光に弱くも無い。昼型だったはずが夜行性になってたけど日に当たった所で灰にはならないし浄化もされない。

これだけ列挙する分にはむしろ死んで良かったねってなもんだがそこはやはりアンデッド、ペナルティはある。

一つ、回復しない。

怪我したら治らない。足がもげたらもげたまま。霊体の様に再生は出来ないし生物の様に傷口が塞がったりもしない。痛覚は無いみたいだから痛くは無さそうだけどさ。

二つ、俺に服従。

ゾンビ化した際に微妙に魔力操作を身に着けたらしく、俺の存在と意思を感じ取り、従う。単純に強者に従っているのか、生みの親

を慕って従っているのか、はたまた魔術的な強制力が働いているのかは定かではない。普段はその辺りをチヨロチヨロしているが俺が呼ぶと飛んで来る。

多分、無理矢理この世界の「魂」に該当する物を肉体に押し込み戻した訳だから色々と不具合が出たんだろうな……あ、いや魔力は魂では無いんだけどね。死ぬとまず魔力が拡散して、後には何か小さな魔力の塊が残るけどそれもすぐに拡散する。その核の様な小さな魔力の塊が魂にあたる働きをしているのだろうと俺は目星をつけているがハテ真実はどうだろう。その内研究してみようかね、魂と魔法の神秘を。

つらつらと考えながら俺は月明りに青白く照らされた小枝の上を這い回るゾンビニユートをぼんやり眺めていた。

## 八話 進化、変化（後書き）

ようやくノーライフっぽくなってきた。ダークにはなりません。

## 九話 骨、町

魔力圧縮の恩恵により、俺は人間平均を通り越し生前と同じ魔力を取り戻していた。霊体になってから実に二百年以上が経過している。ジジイもジジイ、大ジジイだ。かつての村の知り合いは曾孫や玄孫の世代になっている事だろう。

ゾンビは順調に増殖していた。俺の体で対象を包み込む性質上あまり大型の動物はゾンビ化できなかったが、ネズミ、イタチ、ウサギぐらいまではゾンビ化できた。オオカミとか熊はちよいと大き過ぎて無理だ。包めない。

森に住む大概の動物はゾンビにしてしまえたので、ゾンビになるために体質や種族は関係無いと思われる。死亡する際に原型を保っていたればどんな生物もゾンビにできる。多分人間もいける。

ゾンビは特に何を喰うでも襲うでもなく、腐りもしないただそこにあるだけの存在だった。一応生前の活動範囲と行動をある程度はなぞっていたが、俺の命令が無い限り闘争も行わない。

ゾンビの癖に人畜無害というよく分からん奴等だった。

しかしまあ肉体を持って存在し徘徊している訳で、森の動物に狩られる事もある。多分ゾンビも死肉の扱いになると思うが色が悪くなく生気が感じられないだけで腐ってはいないため、最初にゾンビにしたトカゲは鷹にばっくり喰われた。

目の前でいきなり空から急降下してきた鷹に無抵抗でかつさらわれたトカゲに慌てて「抵抗、脱出せよ」と命令したのだが時既に遅く。嘴で何度も挟み直され体がズタズタになっても命令通り暴れていたトカゲは首が千切られると共にぱったり動かなくなった。ゾンビの弱点は首チョンパらしい。

頭を失っても半分以上体積が残っていれば復活する霊体と違いゾンビは少なからず肉体に依存している。物理攻撃は有効だ。で、首チョンパされたトカゲを復活させようと再び包み込んで魔力の拡散

を阻害すると、今度はスケルトンになった。

二度とも無理をさせたせいでますます肉体と魂の剥離が進んだらしく、肉と内蔵が腐り落ち骨だけになって動いている。

スケルトンの動きはゾンビと大差無いが命令の反応が悪く、強く強く念じて命令しなければ反応しない。単純な命令しか理解できない上に自律行動もせず応用力の無い単細胞。細胞無いけどな。脳味噌が無くなったのが拙かったのか。

そんなゾンビの劣化版とも言うべきスケルトンにも一応利点はある。ゾンビと違い、魔力が続く限り再生するのである。四肢を折られようが粉々の骨粉になるまですりつぶされようがビデオの巻き戻しの様に破片が集まって元通り。

再生を繰り返して一度でも魔力が切れれば二度と動かなくなる訳だが、そこはこまめに外部から程よい濃度の魔力を注入してやる事で解決する。スケルトンはゾンビや霊体……もうゴーストでいいか、その二種と異なり自力で魔力を精製できないので、ゾンビよりも更に創造主〃俺に依存した存在となっていた。

なんか俺、ゴーストっつーよりネクロマンサーになってきた。

・生体 ゾンビ スケルトン

・生体 ゴースト

の二通りの分岐をするようだった。スケルトンの先は無い。ゴーストの先があるかは知らない。

俺は百体弱に膨らんだアニマルアンデッド集団に自衛を命じて森で待機させ、人間を探しに旅に出た。もう精神が擦り切れて人恋しい訳でもないが人間の発展具合に興味がある。

前世、二百年もあれば人間は凄まじい進歩を遂げた。特に1800〜2000年の人間の変化は著しい。同じ二百年、魔法がある世界ではどんな発展を遂げているのか知りたい。

あといい加減に魔法についても知りたかった。

実は俺、未だに魔法を使っていない。

ばーちゃんは火を出したり触れずに物を動かすのが「魔法」だと言っていた。従って俺が行使しているのは魔法ではなく単なる「技術」。クリエイトゾンビもクリエイトスケルトンもただの技術。

ああ魔法使いてえ。魔法使えば物理干渉できるかも知れない。ホラ、念動とか実体化とかさ。

草木に覆われ自然に還った村跡を越えてその先へ。道無き道を行く。肉体が無いので睡眠も食事もとらずひたすら一定速度でふよふよ飛んだ。特筆すべき事は何も無い、平和な旅だった。

雨も感じず風も感じず、雪にも夏の暑さにも動じないゴーストの起伏の無い旅。景色も森山川草原ぐらいでさして面白くもない。

ダルダルと飛んで一月ほどだろうか。俺は小さな町を発見した。高さ一メートル程の低い石垣に囲まれ、煉瓦作りの家々が建ち並ぶ石畳の大通りには馬車が行き来していた。

うんむ。車も無ければガス灯も無く、道行く人々が着ている服は恐らく麻、時々シルク。産業革命はまだなのか。魔法世界に産業革命があるか知らんけど。

町からほど近い森の中から俺は三日ほどゴソゴソ観察していた。勿論町中に踏み込まないのには理由がある。

俺はゴーストである。アンデッド系のモンスターでゾンビと双壁を成す存在であると言えよう。

俺はモンスターになった覚えは無いが生きている人間の視点で見れば紛れも無いモンスターだろう。病死した姿をトレースしてるか

ら顔が土気色だしな。

そんな奴が素知らぬ顔で町中をうろついていたら普通退治する。俺が生者でゴーストを退ける手段を持つていたら多分退治する。

一般人には見えなくても恐らく魔力覚醒した奴なら俺の存在を感じし、見る事ができるのだ。

見敵必殺、悪霊退散で消滅とかシャレにならん。少なくともこの世界での、ゴースト、の位置付けを知っておく必要がある。

そんな訳で慎重に慎重に遠巻きに魔法使いを観察し、この世界でのゴーストの認識や魔法の使い方などを探る事にした。危なそうになつたら即逃亡。焦る要因は何も無いから臆病ぐらいで丁度良い。

観察を始めて三日目。町の近郊で遊んでいる子供や畑で木製の鍬を振るう大人達の側をウロチョロしてみたが、誰一人として気付く様子は無かった。少なくとも生前の知識の通り魔力が覚醒した人間が少ない事は事実らしい。

魔力覚醒の秘薬は高価であり、それを服用出来る者は裕福な立場にあると推測される。つまり魔法使いは恐らくおしなべて金持ちエリート。そんな連中が町の外周部に住む筈は無い。基本的に町というものは中心部ほど富める者が住むのだ。中心部には人も金も物も情報もよく集まる。

で、これ以上町近郊での情報収拾は無理だと判断し、俺は意を決して町中に踏み込もうとしたのだが……

「おじさん、誰ですか」

なんか小娘に見上げられてる。見てる見てる超見てる。見られて

るよ俺。

町の入口から少し離れた木立ちの影。門から出て来て不意にこちらに目を留め、とっとこ近付いて来た金髪碧眼、町娘風。真っ白い肌触りが良さそうなチュニツクに、水色のなんかギザギザ折れた丈長の……なんだっけ、プリーツスカート？ 歳の頃は十二、三か。落ち着きと冷静さが伺える整った顔立ちをしていて、まあ胸も含めて将来が楽しみではある。

小娘は俺に触れようと手を伸ばし、スカッタのを見て目を瞬かせた。

「凄い魔法。どこの魔法使いですか？お祖父さまに御用事でしょうか」

「え、これは魔法なのか？」

「えっ、違うんですか？」

「さあ……魔法の定義も知らんし分からん」

小娘は眉を寄せてむむむ、と唸る。

俺はひとまず小娘から害意を感じなかったので逃げるのは止めておいた。出合い頭に悲鳴を上げたりしない所から察するにゴーストは嫌悪されるものでもない、らしい。多分。

「……あの、おじさん魔法使いですよ？」

「あー……秘薬は飲んだ。生前魔法を使った記憶は無いな。死んだらこうなった」

「ええ？ おじさん死んでるんですか？」

「おお、バツチリ死んでるともさ」

「蘇りの魔法なんて始めて見ました」

「蘇ってねーよ。死んでるって」

小娘はハア？ という顔で首を傾げる。なんか話が通じない。大丈夫か小娘。大丈夫か俺。

「死んでるって……ここに居るじゃないですか」

「居るけどさ。触れないだろ？俺は物理干渉が出来ない。ゴースト死者の霊だ」

「えええ……なんだかよく分からないです。魔法使いじゃない？  
死んでるのに生きてる？」

小娘、混乱中。あーとかうーとか言って頭を抱え込んでしまった。  
そこはかとなく面倒な事になりそうな予感。こいつはゴーストを  
知らないのだろうか？ それともそもそもゴーストの存在が認知さ  
れていない？ いやまさか。しかし……

「なあ、」

「黙ってて下さい。私、悩んでいます」

質問を拒否された。

別にながについて問詰める事でもないのんびり思考が回復する  
のを待っている、十分ほどしてから小娘が顔を上げた。

「お、質問して良い？」

「すみません、あなたは色々と私の手には負えません。お祖父さま  
の所へ案内するので着いて来て貰えますか？」

「はあ、まあ俺に危害を加えないって保障するなら構わんけどな。  
お祖父さまって誰だ」

「大魔法使いエマールリオです」

薄い胸を張って自慢げな顔をする小娘。俺は首を捻った。誰だそ  
れ知らねえ。百年単位で隠者やってた俺に人名の知識求めんな。

釈然としない俺に小娘がまさか御存じない？ と聞いてきたので  
頷いてやると何やら驚愕していた。そんなに有名人なのか。すんま  
せんね無知で。

「それじゃ何故この町に？」

「何故って特に理由も無いな。たまたま人里探して最初に見つけた  
町がここだったってだけで」

「……はあ。呆れました。おじさんと話しているとどんどん訳が分か  
らなくなります。お祖父さまに解決してもらいましょう」

「望む所だ」

「では着いて来て下さい。こっちです」

俺は翻るポニテの後を素直に追った。大魔法使いなんて大仰な名

前がついているからには知識も豊富に違いない。  
はてさてどんな人間なのやら、大魔法使いエマーリオ。

## 十話 大魔法使い

「そういえばおじさん、お名前は？」

「随分久し振りに名乗る気がするな……ロバートだ」

「ありきたりですね」

「黙れ。そういうお前はとうなんだ」

「シルフィア」

「お前もありきたりだ」

「ええ、そうですね？ 他にシルフィアって名前の知らないんですけど。どんな名前ならありきたりじゃないんですか？」

「……ブンガロバツサとか？」

「それ人名じゃないじゃないですか」

ちなみにブンガロバツサは痺れ薬になるこの世界の薬草の名前だ。生前痛み止めに使っていたアレ。

阿呆な会話をしながら俺はふよふよとシルフィアの横を漂い、街中に行く。シルフィアは商店街に差し掛かった所ですれ違う町人の怪訝な目線に気付いて口を噤んだ。俺は一般人には視認されないため、シルフィアは傍目からすればぶつぶつ会話調で独り言を言う怪しい人だ。黙った方が賢明だろう。一方的に話し掛けても面白くないので俺も黙った。

シルフィアの背後霊と化しながら商店街や道端の露店から大体文明の発達具合を推測し、思ったよりも遅い発達速度にもややも感を抱く。前世の人類が長足の進歩を遂げただけなのか、この世界の人類の歩みが遅いのか。同じ人間なのだからもつとばんばか発展していくのだろうと思いついていたがそれでも無いらしい。

魔法があるからか？ 人間の気質から言って魔法と化学の融合とかやってみる発展速度が急上昇しそうなもんだけどなあ。

『もつすぐ到着です』

「……あ？ なんだ今の」

突如頭に響いた音と言うか意思と言うかイメージと言うか、何かそういうモノを感じて俺は顔をしかめた。頭にもやもやした粘つく綿の様な物をつつまれた感覚だ。気持ち悪い。

『念話です』

シルフィアは前を向いて脇目も振らずつたかたと歩きながらまた音っぽいモノを発した。横から顔を覗き込んでみるが唇は動いていない。

「念話？ この吐き気を誘うヤツが？」

『情報を頭の中に直接送信する魔法なので最初は念話酔いをします。でも慣れてしまえば便利ですよ』

「便利だが酔う、と。自動車みたいだ……いや少し違うか」

『ジドウシヤ？』

「いやこつちの話」

シルフィアの疑問をサラツと流してまた一人考える。

魔法つてのは色々種類があるらしい。エクスプロージョンとかテレポートもあるんだろうか？念話は呪文を唱えている様子はなかったが、本来呪文が必要な所を無詠唱化したのか、ハナから呪文はいらないのか、何かマジックアイテムの補助を受けているのか。

発動形態も分からない。神や精霊に魔力を渡してお願いして魔法を起こして貰っているのか、それとも自分で魔力を消費し魔法を起こしているのか。

その他諸々聞いてみたい事は山ほどある。しかし俺はシルフィアの理解を超えた存在であるらしく、先程質問を拒否されたばかりだ。「大」魔法使いなのだからエマーリオとやらはさぞ魔法に詳しいのだろう。ここでシルフィアに散発的に質問を浴びせるよりはエマーリオに聞いた方が良さそうだった。

そう結論を出して非効率な質問を控えた俺とシルフィアは会話も無く黙々と歩く。商店街を抜け大通りから脇道に逸れて人気の無い小道をしばらく進み、唐突にシルフィアが足を止めた。

『ここです』

「ほつ」

着いたのは町外れの小さな屋敷だった。華美な装飾は無いながらも門柱に刻まれた模様や煙突の上の魔除けの石像、ドアのノッカーなど随所に品のある金の使い方を感じた。良い趣味をしている。門から入りこじんまりとした前庭を越えた先にすぐ赤煉瓦造りの屋敷はある。広さは一般的な民家三、四件ほどか。如何にも一線を引いた御隠居が住んでいそうな落ち着いた趣の屋敷だった。

「良い金の使い方してるな」

「よく言われます」

「世辞じゃないぞ」

「それもよく言われます」

シルフィアが門の前でゴソゴソ手を動かすと、カチャリと軽い音を立てて門が開いた。よく油が差してあるようで滑らかな開閉だった。

「どうぞ」

シルフィアが一步下がって俺に促す。なかなか礼儀正しい娘だ。

一瞬間から入ろうと動きかけたが、ふと意地悪を試みたくなくなった。方向を少し横にずらし、門柱をすり抜けて屋敷の敷地内に入る。門だの塀だのは俺にとってあって無きがごとし。不法侵入のエキスパートとは俺の事。

「えええー……」

振り返るとシルフィアがなんとも言えない微妙な表情をしていた。してやったり。勝ち負けかで言えば勝ちだ。

「うん？」

子供相手に子供っぽい優越感に浸っていると、突然シルフィアが何か気付いた様に声を上げた。首を傾げながら俺の顔をマジマジと見つめ、ぽそつと言った。

「えっちなのは駄目ですよ」

「ハア？」

「いきなり何を……ん？ ああ、そういう意味か。それは深読みし

過ぎだ」

一般人には見えず何でもすり抜ける「覗き放題」という事か。女の立場からしてみれば男に最も持つて欲しくない能力の一つだろう。しかし俺はゴーストになってから人間の三大欲と言われる睡眠欲も食欲も性欲も感じていない。覗きは可能でも動機が無い。

そう説明すると、シルフィアはうさん臭そうな顔をしていたがひとまずは納得したらしかった。嫌だねおい、まさかこんな潔白の証明をしようがないもので嫌疑をかけられるとは。

前庭を抜けて玄関から屋敷に入る。屋内も外見通りに落ち着いた高級感に溢れていた。廊下の壁に掛かった風景画、縁を蔦模様彫り込まれた採光窓。窓際の鉢植えの鉢や壁紙、美しい木目の床板などは全体的に暖色系で揃えられている。どことなくアンティークな雰囲気だった。

「屋敷の造りはエマーリオの趣味か？」

「そうです」

いいねえ。なかなか気が合いそうだ。

会う前から大魔法使いの評価を上方修正し、魔法しか能が無いという事は無さそうだと安堵もする。シルフィアの躰具合からも分かるがなかなかできた御仁の様だった。

シルフィアが迷いなく歩いていくので嫌味無く配置された調度品の数々をゆっくり見ている暇は無い。後で見させて貰おうと頭の中の予定帳に書き込んでいると、急に寒気がした。体がざわつき、これ以上先に進む事を拒否する。

それは孤独な二百年間に散々味わって来た 魔力を乱される感覚。

俺は進むごとに強くなる圧力にたまらず移動を止めた。ゾクリと背筋を走る悪寒に知らず体を後ろにのけ反らせてしまう。

この先に何かやばい奴がいる。

動きを止めた俺の気配に気付いたのか、シルフィアが怪訝そうに振り返る。

「何か？」

シルフィアは何も感じていないらしい。俺は三步分後ろに下がってから答えた。

「何か高密度の魔力を持った存在がいる」

シルフィアは目を瞬かせ、よく意味が分かっている様子ではあ、と曖昧な言葉を出した。

「高密度の魔力、とは祝福の強い魔力の事でしょうか？」

「ん、ああ、使ってる言葉が違うのか。密度云々は俺が勝手に作った概念だから……まあ多分その通りだろ。しかしおい、この屋敷にはドラゴンでもいるのか？」

「どらこん？ どらこんが何を指しているのかは知りませんが、屋敷に住んでいるのは私とお祖父さまだけです」

「じゃあそいつ エマーリオだな」

俺は内心とんでもない奴もいたもんだ、と呟いた。量は把握できないが、密度に関して言えばこの先の部屋にいるであろうエマーリオはずば抜けている。

はてさて。

俺は生前一般人よりも密度の高い魔力を持っていた。一般人を1・0とするとその倍、2・0ぐらいだろう。俺が住んでいた村でも魔力密度の高い村人が3・0ぐらいだ。

俺の妻は逆に最も低く、0・5ほどだった。俺に対し常に得体の知れないプレッシャーを感じていて、俺が魔力を捨てるとそれが消えた事から大きな密度差は圧力を生むと考えて良い。妻は3・0の村人からもプレッシャーを感じていた様だし、ゴースト期間の経験から言ってもこの法則に間違いはないと断言して良い。

妻との密度差は四倍。即ち四倍以上の密度差は圧力を感じる原因となる。

現在の俺の魔力密度は生前と同じ2・0まで回復しており、シルフィアの密度は4・0弱。二倍の差はあるが圧力は感じない。

と、ここまでを前提とした上で廊下の先から漂ってくる魔力を観

察してみよう。

推定密度、10・0強。俺の五倍。まだ部屋の中にすら入っていないというのに廊下まで漂って来る、恐らくは莫大な魔力量。常人は精々肌から弱く発散する程度で、一メートルも離れれば大気魔力に溶けて分からなくなると言えばその異常性は分かるだろうか。

俺はまたエマーリオの評価を上方修正した。エマーリオ株急騰。本日トップ高。

「私の祖父ですから」

戦慄する俺の様子を見て何を納得したのかシルフィアは深々と頷き、誇らしげに言った。お爺ちゃん子っぽい。

俺は普段から無意識に行っている魔力固定に意識を向け、更に念入りに気合いを入れて強固になぎ止めた。プレッシャーは消えないうが安定感はず。これで多少は近付いても拡散させられずに済むだろう。エマーリオに直接触れでもしたら即死する確信はあるが。

「ひとまず大丈夫だ。先へ案内してくれ」

「先って言ってもその部屋がお祖父様の部屋なんです」

シルフィアは右手側の二メートル程先にあるドアを指した。

うっは、もうですか。武者震いがする。これほど緊張するのは妻との初チヨメチヨメ以来だ。

シルフィアがドアに歩み寄り、ただいま帰りました、興味深いお客様がいらっしやっていますのですが、ノックをしながら言った。そして何事かくぐもった声の返事を聞き、俺に視線を向けて頷く。

シルフィアに続いてドアを潜った俺は濃密な魔力に叩かれながら室内を観察した。

魔法使いっぽいものも特に無い、極普通の書斎風の部屋だった。格子模様の茶色いカーペットが敷かれ、壁際の本棚には本がみっちり詰まっている。隅の小さめのベッドはしっかり整えられており、几帳面な性格を伺わせた。そして部屋の中央、ロッキングチェアに座って木製のどっしりした文机越しに俺に興味深気な視線を向ける老人が一人。

「……ようこそ」

宙に浮かぶ半透明の俺を見て一瞬驚いた様子を見せたが、それほど動揺する事無く言った。

短い白髪頭に皺が目立つ顔に、豊かに蓄えられた白髭。理知的な輝きを放つ瞳は深い碧色。ゆったりとした藍色のローブを見事に着こなしている。

正直な話、今まで「殺気の籠った目とか憂いを帯びた目とか言うけど目を見ただけでそんなもん読み取れる訳ねーだろ、創作物の中でしかありえん（笑）」なんて思っていたがこれは撤回せざるを得ない。それほど圧倒的なカンストしてんじゃねえのかってレベルの知性がこれでもかと溢れている。この老人……できる！

「中へどうぞ」

俺が入口で停止してあるとエマーリオが促した。後ろから入ってきたシルフィアがドアを閉めたので、俺はできる限りエマーリオから離れるべく部屋の隅に移動する。

エマーリオは不審そうに眉を顰めた。

「貴殿は特殊な魔法を使っておられる様ですが、私は別段危害を加える意思は持っておりません。もう少し近付いてはいかがか」

「無理。死ぬ」

「ほう？　すると近付いた者を殺す様な……いや……なるほど……そのまま結構」

エマーリオは俺の台詞を「俺が死ぬ」のではなく「エマーリオが死ぬ」と勘違いしかけたらしかったが、すぐに俺のすぐそばの肘掛け椅子にぼすんと座ったシルフィアと本棚に半分埋もれている俺の腕、更に浮いている足に素早く目を移し何事かを理解した。やはり大魔法使いともなればゴーストを知っているのか。

「名は」

「ロバート」

「私はエマーリオ。大魔法使いなどと呼ばれております。では御用件を」

「魔法についてできる限り教えて欲しい」

「……残念ながら弟子はとっておらんのです。それにそれほどの魔法を行使できるならば弟子入りの必要も無かるうかと」

「いやこれは魔法じゃなくてだな。ゴースト……死者の霊？ 死人の記憶の残滓？ 正式名称は知らないが」

「魔法では無い、と？ 魔法が発動している様にしか見えませんが？」

「……んん？ ちょっと待て。大魔法使いがゴーストを知らない？ 質問に答える前に聞かせて欲しい。エマーリオ……さんは魔法の実力と知識で評価するとどのあたりにいるんだ？」

「呼び捨てで結構。恐らくはロバート殿が聞き及ぶ噂の通りかと」

「いや知らん」

「……知らない？ それはどのような」

「お祖父様、ロバートさんお祖父様の名前を聞いた事ないみたいです」

シルフィアが挟んだ言葉にエマーリオは虚を突かれた様に目を瞬いた。そんなにな有名なのか？

「……まあよろしい。私の知る限り、少なくとも王国、帝国内部では魔法に関して言うならばあらゆる面において最も優れている、と自負しております」

「つまり最強？」

「最強……そうですね。不遜な言い方ですが」

「偉いのか」

「いえ、既に一線は退いております。しかし妙ですな」

「何が」

「貴殿の魔力は魔法が使えるほど祝福が強く無い様に見えるのですが、同時に非常に流動が少なく固定的にも見えるのです。新しい魔法の発動法を発見し、その発動法に対し魔法以外の名称を付け、魔法では無いと主張なさっているという理屈でよろしいか」

俺は数秒かけてエマーリオの言葉を咀嚼してから頷いた。

「そうかも知れん。が、これは完全我流だからはつきり分からん。簡単に言つとだな、偶然秘薬を飲んで自分なりに魔法を使おうと一人で四苦八苦してたらこういう状態になったんだよ。魔法に関しては秘薬を飲まなきゃならんって事以外何も知らん。祝福だのも分かん。分かんから教えを乞いに来た。……教えて貰っても今は対価を払えんが……礼をしようとは思っている」

最初はコソコソ偵察して知識をつけようと思っていたが、こうして友好的な知識人に会った以上はその必要も無い。エマーリオは俺の言葉を聞くと顎に手を当てて思案顔になった。シルフィアは俺とエマーリオの顔を交互に見比べてから、真面目くさった顔になりエマーリオと同じ様に顎に手を当てた。よっぽどそのポーズは小娘がやっても似合わんと言つてやろうかと思つたが空気を読んで止めておく。

やがて考えが纏まつたのか、エマーリオは重々しく口を開いた。

「ロバート殿。貴殿の行使している魔法と現在世界に知られている魔法は根本的に異なっておる様です。従つて今この場で貴殿の魔法についての講釈をする事は出来ない、と理解して頂きたい。しかしながら現在知られている魔法に関して教える事は可能」

「弟子はとらないんじゃないか？」

「左様。弟子はとりません。弟子では無く取引の形になりますかな。私からは知り得る限りの魔法の知識、技術を提供しましょう。対価として貴殿の魔法について研究させて頂きたい」

「いや、人体実験は勘弁してくれ」

「同意の得られない実験は行わない事を誓いましょう」

「……………」

好条件に思えるがすんなり承諾して良いものか。

裏の意図を勘ぐつて悩む俺にエマーリオは言葉を重ねた。

「ロバート殿、私は魔法に目覚めた少年時代からこの歳までただただ魔法を研究し、鍛えておりました。今日この日まで、間違なく私は誰よりも魔法の神秘に近い場所に居たのです。貴殿の魔法は私の

生涯の研究に匹敵……凌駕する程の物。私は我流でその域に辿り着いた貴殿に尊敬の念を抱いております」

エマーリオの「尊敬している」という言葉を聞いて、さつきから空気になっているシルフィアが息を飲んだ。

「どうしてそのような人物に無礼を働き陥れる事がありましたらどうか」

エマーリオは立ち上がり、胸の前　　心臓部分に右手の握り拳を当ててゆっくり一礼した。

この仕草は知っている。俺が村長だった時、公の場で村人によくされたものだ。目上の者に対する最大限の礼である。意味的には平伏に近い。

俺はちよつと迷ってから同じ様に礼を返した。頭を上げたエマーリオは皺くちやの顔に微笑みを浮かべる。俺は苦笑を返した。

俺が魔法についての知識を求めエマーリオを評価しているのと同じ様に、エマーリオも俺の技術の知識を求め俺を評価している。

俺とエマーリオは対等なのだ。

「個人的には取引ってか協同研究が良いんだけどな」

「なるほど、そちらの方が効率的ですな。共に魔法の神秘を解き明かしましょうぞ」

十話 大魔法使い（後書き）

Q・魔法が使えるようになったら何をする？

A・魔法の研究をする

そんな捻くれた作者の捻くれた話、それがノーライフ・ライフ  
ゼロから仮定や実験や考察を繰り返して魔法法則を解明していきま  
す

## 十一話 現状認識

「では研究の前に細々とした事を。宿はどちらに？よろしければ屋敷に部屋を用意しますが」

「いや、宿はとつてない。仮にとろうとしても自分の意思で姿を現せないからな。部屋は……まあ狭くて良い。家具も要らん。俺は常に飲食睡眠排泄不要で物体に触る事が出来ないんだ。老いもしない。そしてこの状態は解除出来ない」

「……………それはまた」

長い沈黙の後、エマーリオは適当な言葉が見つからなかったのか曖昧に呟いた。反応から察すると多分俺が使ってるのは前代未聞の魔法？なんだろうなあ。

これは！ まさかまさかの俺 T u e e e e e e ! の前触れか！？  
……………いや無いな。物理的には無敵でも魔法つつか魔力に対して弱過ぎる。むしろ俺 Y o e e e e e e !

表情に出さず一喜一憂していると、それまで大人しく話を聞いていたシルフィアが言った。

「お祖父様、私は？ なんだか大事になってますけど」

「おお、すまなんだ。ロバート殿、これは御存じかも知れませんが私の孫娘のシルフィア。なかなか聡明な子でそれなりの魔法の才も持つております。出来ればロバート殿の知恵をこの子にも授けたいのですが……………」

「大丈夫だ、問題無い」

「感謝します。シルフィア」

「えーと、よろしく願います」

シルフィアがぺこりと頭を下げたので俺は鷹揚に頷いた。シルフィアの態度が「変なおっさん」から「大魔法使いが認める魔法使い」に対する物に変化していた。ナメられるよりずっと良い。

「ロバート殿は着の身着のままこの屋敷へ？」

「まあそうだな。家も無ければ家族も居ない。とつくの昔に戸籍も消えてるだろうさ。子孫はどっかで生きてると思うけどな。背後関係を気にする必要は無い。完全に独立一個だ」

森に残してきたアニマルゾンビの群を思い出したが、特に気にする事は無いだろう。無害な連中だし、いざとなったら処分しても良い。俺の都合で甦らせておいて俺の都合で殺すのは忍びなくもあるが、世の中そんなもんだ。

「ロバート殿の出自を知る者は居ない、と？」

「居ないだろうな。少なくとも死んだと思われてる」

「偽装死でしょうか」

「いや普通に死んだ……と言うか……ああ説明めんどくせ」

こうして言葉にしてみると自分がどれほど奇妙な立場にいるかよく分かる。ゴーストが認知されていれば説明も楽に済むんだけどな。世界で初めてのゴーストつぽいが嬉しくも何とも無い。

「俺は二百年前に病死した辺境の村の村長だ。魔法について知らなければ現代社会についても知らん。分からん事だらけだな」

「え、じゃあロバートさん二百歳なんですか」

「そうなる」

「……二百歳……不老……」

ぶつぶつ呟くシルフィアの目には微かな欲望の火が見える。

まあ不老不死は人類の夢だからな。正常な反応だろう。醜いとは思わない。

シルフィアの反応に特に何も言わずに流したエマーリオはふむ、と一つ頷いて言う。

「では軽く我々を取り巻く現状を説明しておきましょう。まず念頭に置いて頂きたいのですが、現在ビルテファ王国は帝国の侵攻を受けております。帝国は魔法を持たぬ国ではあるものの王国のおよそ十倍の国土と民を抱え、強大な兵力を以て戦線を王国側に押しつけておるのです」

何やら国情を説明し始めたエマーリオ。まだ存続してたのかビル

テファ王国……と言うか兵力十倍ってそれも詰んでないか？

「包み隠さず申しませう。魔法という帝国には無い武器があるからこそ未だ押し潰されず済んでいるものの、王国の落日は時間の問題であると私は考えております。両国の戦力差を鑑み王国に甘く見積もったとしても果たして五年保つかどうか」

滑らかに話すエマーリオの横でシルフィアがそわそわキョロキョロしている。そりゃまあ「俺の国負けるぜ！」なんて事を国一番の魔法使いが断言していれば目と耳が気になるだろう。口振りからして内密の話っぽいし、どこからか話が漏れれば王国の士気がガタ落ちするのは確定的に明らか。

エマーリオは俺とシルフィアの様子に気付いたのか安心させる様に頷いた。

「ああ、この部屋には現在防聴魔法をかけてあります。心配御無用。さて、王族と貴族も無根拠に勝利を確信してはいるものの無策でもありません。王国の利点である魔法使いの数を増やそうと教会に働き掛けを……教会については御存じか？」

「全然。そういう物があるって事は聞いている」  
問い掛けに首を横に振って答える。すまんね無知で。

「ふむ。教会は魔法を管理し、絶対神を奉ずる組織ですな。魔法の管理とは即ち秘薬の管理。秘薬が無ければ魔法使いに成れぬ訳ですから、その秘薬の原料となる薬草、及び毒の中和法を握る教会の権力は王族のそれに等しいと認識」

「ちよつと待て。秘薬の薬草って有毒なのか？」

「左様。毒の中和をしなければ身体に重度の機能障害が………まさかロバート殿が服用した薬草は？」

「副作用無かつたな」

あのソワソワムズムズ感は副作用と呼ぶほどでも無いだろ。

エマーリオはふー、と長く息を吐き、天井を仰いで椅子に深く体を沈めた。驚きを通り越して脱力しているっぽい。

「大発見ですね！」

「そうだな。自分達の特権を守ろうとして教会の連中が俺（達）を殺しに来るぐらいの大発見だな」

「あ……」

呑気に言ったシルフィアに五寸釘を刺しておく。

俺が見つけた薬草は森の奥に普通に群生していた。多分今でも普通に繁茂している事だろう。

それを公開すれば今まで教会が独占していた秘薬の価値と教会そのものの価値がガタ落ちする事間違いない。毒性が無くそのまま服用できる分、既存の薬草よりも有用性は高いだろう。薬草を巡る争奪戦が起き、帝国の侵攻を待たずして国が割れる可能性すらある。

なんか想像以上にヤバいぞ俺の立場。情報が漏れたら国がひっくり返る。

「……ロバート殿が発見した薬草について知る者は？」

「俺以外にいない」

あの薬草については乱獲されないようにずっと黙っていた。森の側にあつた村は火事で消え、俺以外に知る者はいない。

黙っていて良かった。本当に良かった。

「では薬草の問題は口外無用と言う事でひとまず置いておきましょう。」

現在王国上層部は教会に働き掛け魔法使いの数を増やそうとしております。祝福が強い魔力を持つ者を選び、秘薬を飲ませ、修練のちに戦線へ。しかし秘薬も無限に作れる訳では無く、戦死する者も出る為常時魔法使いが不足しているのが現状。

ああ、私は後進　　シルフィアの教育と加齢を理由に戦線から引いております。今までの功績もある事ですし、なんとか隠居を認められました。本音を言えば私が出た所で焼け石に水でしょうかな。無駄に命を落とすつもりはありません」

「質問。魔法使いはそこまでして必要なものなのか？ 装備の充実を図ったり兵士を鍛えたりした方がまだ安上がりな気がするが。時間の問題か？ 魔力覚醒して魔法使いになれば即戦力になるとか？」

「魔法使い一人で熟練した兵士二十人分の働きをすると言われていますな。魔法に覚醒し、戦闘が可能になるまでには最低一年間の修練が必要となりますが、それでも一般兵を訓練するより格段に早く強力な戦力となる事は間違いありません」

「でかいな、魔法のアドバンテージ。帝国に魔法が無いのは秘薬が無いからか？ それならば、

「もしかして帝国は秘薬を狙って？」

「御察しの通り。あちらも始めこそ売買交渉を持ち掛けて来たのですが、教会が断ると途端に先端を開いたのです。教会は神が与えたもうた秘薬を奪おうとする帝国を神敵とし、魔法技術を流出させたく無い王族、貴族の合意の下に徹底抗戦の構えを取っておるのです。……大部話が逸れましたな。つまるところ今ロバート殿の魔法が王国に露呈すれば王族もしくは教会に利用され尽くされるだろう、という事です。平時でさえ革新的進歩をもたらすであらうその魔法、戦時下に於いては言うまでも無し。研究は秘密厳守で行わなければなりません。ただでさえ私は教会に目をつけられていますから、死の概念を超越する様な新しい魔法を発見したとなれば、恐らく我々は三人共……」

おい、途中で切るな。怖えだろうが。

「……そうですね、万が一事が露見した場合は東の未開の森へ逃げ込む事も視野に入れておきましょう」

東の森って俺がアニマルゾンビを待機させてる場所じゃねえか。今それを言うともたややこしくなりそうだから後で伝えよう。

しかし疑問なのは、

「エマーリオとシルフィアは帝国に亡命しないのか？ 負け戦って分かってるんだろ？ 二人共それほど王国に愛着がある様に見えないんだが。帝国につけば優遇されるだろうに」

「ああ、それは単に王国の方が研究環境が整っているからです」

「私はお祖父様についていきます」

あっさり愛国心ゼロの台詞を吐いたエマーリオとファザコンもと

いグランドファ……語呂悪いな。ジジコンを發揮したシルフィア。  
王国随一の魔法使いがこれとか王国終わったな。どうでもいいけど。

俺も一応は生前王国に所属していた訳だが、年で村から税を徴収していくだけの国になぞ愛着もへつたくれも無い。

エマーリオが口を噤むと三人とも黙ってしまった。エマーリオはおよそ現状の軽い説明は終えたと判断したらしく、最初から時々喋る置物と化していたシルフィアも黙りつ放し。

これは質問タイムと判断していいのか？ エマーリオ、黙って俺を見てるし。

「帝国つてどこにある国なんだ？」

「大河を挟んだ南に位置する大国です。国土面積は王国の十倍とも二十倍とも。現在は大河を越えて徐々に北へ向け領土を広げております」

「ほー。どんな国？」

「どんな……ふむ。まずは帝国に住む住民は肌の色が黄色の蛮族です」

「ほっ」

黄色人種か。俺達

ビルテファ王国の民は例外無く金髪碧

眼の白人。蛮族発言はどうかと思っただがひとまずはスルーしておく。

「背と鼻が低く」

ふむふむ。

「瞳は黒」

……ん？

「独特の文化を形成しており」

……んん？

「ああ、髪の色は紫ですな」

……なんだよ。日本人かと思っただろうが。よくあるだろ、西洋ファンタジーにジパングとか日本風の国とかさ。にしても紫髪とか流石ファンタジー。帝国民が集まったら一面紫に染まるのか……あ

んまり見たくない光景だな。

「言語は王国南部の訛りを更に強くした帝国語。鉄器も使いますが防具は革が主体ですな……申し訳ないのですが私もそれほど帝国については詳しく無いもので」

頭を下げるエマーリオに構わないと頷いておく。

あと聞くべき事は……

衣食住については興味はあるが今聞くほど重要じゃ無いな。三つともゴーストには要らない（住はかすってるか）。衣食住が必要無く人間の三大欲も無いとか俺ほんと人外。

ん？ あれ、意外と聞くべき事が無い。文明レベルについて聞いとくか？ 上下水道とか科学レベルとか社会体制とか。

……いや、あんまり一気に聞いても訳が分からなくなりそうだな。並列思考が使えて頭の回転も結構早いのが、二百年停滞していた頭に現代情報を一気にぶち込まれたら流石に混乱するだろう。

一度手に入れた情報を整理する必要がある。俺は遠慮がちに言った。

「あー、エマーリオ、一度情報を纏めたい。悪いが別の部屋に移ってしばらく時間を開けさせてもらっていいか？ この部屋にいるとエマーリオの魔力で消滅しそうだな」

「ああ、構いません。一度に喋り過ぎましたかな。シルフィア、客間へ案内を」

「はい」

エマーリオに促されシルフィアが立ち上がって部屋のドアを開けた。部屋の隅に張り付いていた俺は壁を抜けて廊下に出る。ドアの前で俺に先を譲ろうとしていたシルフィアが微妙な顔を向けてきた。すまん。俺ゴーストだから。

エマーリオの濃密な魔力が充満した空間から解放され、シルフィアに着いて客間に向かいながら、俺は予想外に厄介な存在だった自分に分んわりしつつ最初に会ったのがシルフィアで良かったと心底思った。

教会の魔法使い？ に見つかったら魔法か何かで拘束されて延々とゾンビ兵製造作業を強制されていた気がする。  
俺は十分有り得た未来を想像し、ぞつとして身を震わせた。

## 十一話 現状認識（後書き）

ちょっと頑張って連日更新。現状説明だけで五千字近く。次でよ  
うやっとな魔法の具体的な話ですかね

## 十二話 魔法

あてがわれた部屋でゆっくり一人でよく考えてみると、今の状況は潜在的危険性は高いものの案外悩む必要の無いものである事に気が付いた。

魔法について知る、という目的はエマーリオが約束を果たす限り達成の見通しが立っていて、短い間だが話してみてもエマーリオが約束を破る人間には見えなかった。つまり魔法は無事修得できるか、修得できないにしても知識は得られる。

俺はかなり面倒臭く厄介な存在らしいが、魔力で構成された存在なので一般人には全く知覚できず、現在俺の存在を知っているのはエマーリオとシルフィアのみ。

この二人がバラさなければ早々「もしも教会です。珍しいゴーストを捕獲しに来ました」なんて事にはならない。出合つて半日も経っていない人間を信用して自分の命運を預けるってお前馬鹿だろとも思つたが、既に二人を信用する以外の道は無くなっている。

ここから逃げてバラされたら追手が来て捕まるだろうし、吹けば飛ぶ様な霊体では口封じも出来ない。いや逃げないし口封じが可能でもやらんけど。

迂闊に出歩かず普通に共同研究してりやまず安全だろ。出歩くにしてもうつかり教会の魔法使いに遭遇しない様に壁の中とか土の中を移動すれば良い。

そう考えるとかなり気が楽になった。シリアス(哀)とか勘弁してくれよ、俺は陰鬱な事嫌いだから。好きな奴なんて居ないだろうけどな。

しかし早急に結論を出してしまうのもアレなので、時間を置いてもう一度考えよう、とその日一杯は屋敷にある美術品の数々を鑑賞して過ごした。俺が通された客間の家具もカーペットも嫌味にならない気品に溢れている。宝石やら黄金やらはほとんど見当たらず、

風景の写真や陶器の類が多かった。エマーリオは家具と芸術品に金をかけるタイプなのかねえ。あの歳で女遊びも無いだろうし体格的に食道楽してる様には見えないし。

研究環境云々ってのは案外家具芸術品の事なのかも知れない。帝  
国文化のものより王国文化のものの方が好みとか？ …… ありそう  
だ。

俺は半分妄想の予想をしながら客間を出てぶらぶらと屋敷の中を漂い、美術品をじっくり眺めて回った。と言っても移動範囲は廊下だけ。迂闊にそこらへんの部屋に入ってシルフィアの着替えに遭遇していやんとかそんなお約束は御免だ。エマーリオの着替えに遭遇してうげえはもっと御免だ。

共同研究者とは言え勝手に部屋に入るのは不味いだろうし、物理干渉が出来ないので鍵が開いてるかどうかも確かめる術が無く、入口に部屋の用途が書かれプレートがある親切設計なんて事も無いので自然廊下しか動けない。

教会関係者に見つかる危険なので庭にも出れない。夜になったらちょっと出てみるか？ 別に霊体は発光していないので暗闇に居れば見えない。はず。

廊下を一通り見て回って暇になり、シルフィアを探してどの部屋なら入って良いか聞こうとしたが屋敷の中に気配を感じず、どうも俺を客間に案内した後に出かけたらしかった。

エマーリオに聞けばいいのだが奴にはあまり近付きたくない。消し飛びそうになるから。

夜の帳が降りてもシルフィアは帰った来ず、やがてエマーリオの部屋から時折聞こえていた物音も止んだ。シルフィアは何かの事件に巻き込まれて帰ろうにも帰れない状況にあるのではと一瞬心配になったが、エマーリオが全く騒いでいない所を見るに、いつもこうなのか今日は何か用事で外泊しているのだろうと気付いた。放置だ  
放置。

俺は静まり返った屋敷の客間で徐々に昇り、降りていく円い月を

見ながら長い夜を過ごした。夜が長いと感じたのは久し振りだった。この二百年で退屈という感情は薄れていたが、今日人と触れ合い密度の濃い時間を過ごした後では随分と暇に感じられた。月を見て、星を見て、風と虫の音を聞き、夜も感覚を鍛えれば面白い変化に満ちているものだと思っではいたが、自然のささやかな変化は人間がもたらすそれと比べると物足りな過ぎる。

人間の激動を知らず和やかな自然で満足してしまうのが幸せなのか、人間の激動な身を投げ自然の流れに鈍くなってもそれが幸せなのか、俺にはよく分からない。やっぱり幸せだと思えば幸せで、楽しいと思えば楽しいってのが不変の真理なのかね。衣食住足りて金銀財宝に囲まれてもまだ満足しない奴もいれば、俺みたいにほどほどで満足できる奴もいる。幸福の基準は人それぞれだ。

結局俺はとりとめもない事を考えながら、夜が明けるまでずっと窓辺から星空を眺めてしんみりしていた。

翌朝改めて状況を纏めてみたが結論は昨日と変わらず、当面の間はエマールリオの屋敷に居候して魔法研究に精を出す事に決定した。昨日の時点で既にそれは決定していた訳だが、勢いに流されてなあなあな感じに行動するよりしっかり考えて納得づくで行動した方が良いに決まっている。

要は「契約書に書名はしたけど約束破棄しようかなどっしようか……書名した以上逃げれんが」から「契約書に書名したし頑張るぜ！」に変わったのだ。些細な様で結構違う。主に気分が。

日の光が窓から差し込み、さてエマーリオもそろそろ起きたか、という頃にシルフィアが堂々と朝帰りした。妙に肌がツヤツヤして幸せそうな顔をしている。おい、お前何して来た？

「おかえりシルフィア。どこ行ってたんだ」

「……ただいま帰りました。恋人の所です」

「そうか、こいび……恋人!？」

「何か？」

驚く俺に首をこてんと傾げて不思議そうにする。

なんだこいつ。別にシルフィアぐらいの歳(十三歳)であんなことやこんなことやっても王国の法律的には無問題なはずだが、明らかにやる事やった顔で朝帰りして恥ずかしげも無くあっけらかんと恋人の所に居ましたって。お前に恥じらいは無いのか。

「きのうはおたのしみでしたね」

「はい。たくさん愛してもらってきました」

「……あ、何かもういいわ。すまん俺が悪かった」

皮肉ったつもりが普通に幸せそうに答えられてちよつと引いた。

なんだこのストレートな惚気は。ここまでいくといっそ清々しくなってくる。

シルフィアは玄関で邪魔をしていた俺の横をすり抜けてさつさと屋敷に入り、朝食の用意をしますので、と言って奥の部屋に消えた。それを黙って見送る俺。朝食係はシルフィアなのか。食べ終わる頃になったらエマーリオの部屋に行こう。

食器を下げるシルフィアと入れ違いに俺はエマーリオの部屋へ入った。昨日と同じくロッキングチェアに座るエマーリオは文机に羊皮紙の束とインク壺をスタンバイして待っていた。やる気あり過ぎだろ。いや俺がやる気無いのか。魔法については知りたいが絶対エマーリオほど熱心じゃない。

俺は部屋の隅の出来るだけエマーリオから離れた位置に移動した。今日もエマーリオの魔力はハンパない。

「おはようございます。考えは纏まりましたか？」

「ああ。待遠しいみたいだから早速始めようか」

部屋にいるのは俺とエマーリオの二人。シルフィアは居てもぶつちやけ議論に参加できないだろうという事で後でエマーリオが纏めた資料を見るだけにするそうだ。

「ではお言葉に甘えて。まずは研究の前段階として互いの情報の共有をしておきましょう。先に私が一般的な従来の魔法と私が新たに発見した魔法について説明して宜しいか？」

「どうぞどうぞ」

エマーリオ、新しい魔法を発見しているらしい。凄いのか凄くないのか魔法知識が欠けてる俺には分からんがなんとなく凄そうだ。だってエマーリオだし。

俺が促すと、既に話す内容を纏めていたのか滑らかに話し出す。

「魔法を修得するにはまず教会の認定を受ける必要があります。教会に多くの寄付をした者は魔力の祝福の強さが充分である場合に限り、更に金を積む事で秘薬を授けられます」

教会あこぎな稼ぎ方してるな……」

「魔力の祝福が弱ければ魔法は発動しませんので、教会は最低限の祝福を得ている者、付け加えるならば寄付額が多い者にもみ秘薬を授けるのです。貴重な秘薬は無駄に出来ませんからな」

「そのついでに軽く儲けてる、と。聞き逃せない所があつたんだが祝福が強ければ魔法が使える、弱ければ使えない、間違いないか？」

「左様。ロバート殿は祝福が魔法の使用が可能となる最低限の強さに届いていないようですので、正確に言うならば『既存の魔法は祝福が強くなければ使えない』ですな」

「はーん。俺が普通の魔法を使えないのは密度が薄いからだつたのか？ エマーリオの口振りからして祝福が強い魔力＝密度が高い魔力って事らしいが、一応確認しておくか。」

「エマーリオ、試したい事がある。今部屋に広がってる魔力を一端引っ込めれるか？」

「……難しいですな。この状態を保つ事が体に染み付いておりますので……ロバート殿の周囲だけならばなんとかできない事も」

「それで良い。頼む」

エマーリオは頷き、目を閉じて集中した。俺の体を取り巻く魔力がぬるぬるとゆっくり動き、じれったいぐらいのノロさで引いた。

俺を中心として半径一メートルほどが台風の目の様にエマーリオの魔力の無い空間になる。

エマーリオ魔力操作おっせえ。魔法は得意でも魔力操作はド下手なのか。まあいい。

俺は自分の周囲が標準的な大気魔力の密度になっている事を確認し、自分の体を構成する魔力固定を保ちつつ、右手を横に伸ばして右手のひらの周囲の魔力を集めた。

魔力圧縮をするつもりだ。自分の魔力プラス数パーセントにしか圧縮できないから、エマーリオの阿呆みたいに濃い魔力は圧縮不可能。そのためにわざわざ俺の周囲の魔力を引っ込めて貰ったのだ。

横に差し出した右手を訝しげに見るエマーリオに尋ねる。

「魔力は万物に宿るって認識は共有してるよな？ 大気中にも魔力があるって事も？」

「はあ。それは承知しておりますが」

良かった。これで知らんとか言われたら泣く。説明が面倒過ぎて「じゃ、俺の右手に纏りついてる大気魔力の……祝福の強さ、をよく覚えてくれ。覚えてるか？」

エマーリオは無言で頷く。それを確認してから俺は右手の周囲の大気魔力に圧縮をかけた。大気魔力を直接は操作できないので自分の魔力を道具代わりに大気魔力を手繰り寄せ、薄い魔力を操作し、集め、集中させ、一カ所に押し込める。

薄い薄い大気魔力は体積に反比例してみるみる濃度を上げていく。まだ上がる。まだ上がる。

自分と同濃度まで密度を上昇させてからエマーリオを見ると、絶句して持っていた羽根ペンを取り落としていた。

「馬鹿、な……そんなまさか……いや、現にこうして……  
……………素晴らしい魔法、いや技術ですな、ロバート殿」

驚愕していたエマーリオはあつと言う間に復帰すると瞳を少年の様に輝かせ羽根ペンを拾って猛烈な速度でメモをとりはじめた。

素晴らしく立ち直りが早い。エマーリオって取り乱したりするか？ 慌ててる姿の想像がつかんぞ。

「今祝福の強さが上がった様に見えたか？」

「はい。確かにそのように見えましたな。革命的な 技術です。それは一体どのような方法で？ 始めから使えたのですか？

それとも研究に発見と修得を？ その半透明の姿にならなければ行えないのですか？」

「ちょ、質問は一つずつ頼む、というか後回しにしてくれ。いやそんな顔するな、後でしっかり教えるから。ただまずはエマーリオの話を通り聞かせてくれ。俺の話はその後だ。」

あー、今のは俺が魔力圧縮、と呼んでいる技術だな。大気中もしくは動植物が持っている魔力を圧縮して密度を高める。一般的には

祝福の強さ？ で魔力の密度を表現してるみたいだが、この通り祝福の弱い魔力、つまり密度の低い魔力を集めて圧縮すれば祝福が強く 密度が高くなる。祝福って表現から推測するに教会が広めた言葉なんだろうが、『祝福』よりも『密度』の方が魔力の本質を的確に捉えていると俺は思う」

「……………ふむ。私も同意見です」

「よし、それじゃ以後密度で表現してくれ。そっちの方が（俺が）分かりやすい」

「了解しました」

ガリガリと高速で羽根ペンを動かしていたエマ―リオは頷き、更に数秒羽根ペンを動かしてから手を止めた。羽根ペンを脇に置き、咳払いして話を続ける。

「では続きを。秘薬により魔力に目覚め、数日置いて魔力の感覚に馴染めばもう魔法を使う事が出来ます。魔力の……密度が魔法の威力、量が規模にそれぞれ反映されますな。魔法は己の魔力を消費して発動され、魔力が尽きれば使えなくなります。おおよそ一晩休めば全快します。また魔法は己が発する魔力が存在する場所でのみ発現します。魔力覚醒直後は自身の体内、体表にのみ魔力を纏っている状態であり、従って行使可能な魔法は自己に作用するものに限定されます。魔力に目覚めた後の修練は主に自身の魔力を体から伸ばし、魔法の射程を伸ばす事となります」

「魔法の発動に道具とか呪文は要らないのか？」

「必要ありません。発動の鍵となるものは意思一つですな」

……………えー、と、いう事は、部屋に魔力を充満させているエマ―リオは部屋全体を魔法の有効範囲に納めている訳か。

こええな……今の俺の状況は槍の穂先を全身に突き付けられてる様なもんだ。害意が無いと分かっけていても恐ろしい。

「自分にかけるだけなら魔法は数日で使えるんだろ？ 自分を魔法で強化して戦う魔法戦士みたいな奴はいないのか？」

「おりません」

エマーリオは俺の質問をばつさり両断した。

「昨日説明した様に魔法使いは貴重な存在です。負傷し命を落とす可能性が高い近接戦闘よりも安全地帯から魔法を飛ばす遠距離戦闘の方が良い事は自明でしょう」

「ああ……まあ確かに」

素手より剣。剣より槍。槍より銃。攻撃の射程の長さはそのまま強さに繋がる。魔法戦士とか魔法剣士は個人的に格好良いと思うが、現実的に考えて遠距離攻撃が出来るのにわざわざ近接を選ぶ奴はいないか。

そりゃあ近接攻撃の方が威力だけ見れば高い事もあるかも知れないが、腕に超強力なドリルを装備していても敵に近づく前に銃で撃たれりゃ死ぬ。遠距離攻撃は偉大だ。一体なぜ前世の戦争で銃やミサイルが発達しハンマーや刀が消えたのかという話。

「攻撃として使う魔法の利点はその射程と隠密性です。熟練した魔法使いならば弓矢の射程よりも長くなりますし、魔力は一般人に見えない為遠距離から魔力を敵兵の目前まで伸ばし……例えば炎魔法を使えば、前触れも無く突然火達磨なつた様に見えるでしょう。魔法使いを相手にする時、相手はいつどこから来るかも分からない攻撃に怯える事になるのです」

「えげつねえな……」

「だからこそ魔法を持たない帝国に抵抗できているのですが」

まあなあ。やられる方はたまつたもんじゃないだろうが、やる方は良いよな。パツと思いつくだけでも色々戦略がある。

同じ魔法使いでさえも見ただけでは相手が魔法使いだとは分からない。俺もシルフィアを見ただけでは魔法使いだとは分からなかった。魔力密度が高くてそれだけでは魔法使いであるとは判断できないのだ。

つまり「この軍には魔法使いがいる」とブラフをかけても相手は嘘か本当か分からない。実際に交戦して魔法が飛んで来なければ嘘だと分かるが、それまでは事実の場合を考えて慎重にならざるを得

ない。

更に魔法使いが相手側に居ると分かっても、誰が魔法使いか分からない。よくファンタジーでは先に魔法使いを潰せ！ という戦法があるが、この世界ではそうもいかないだろう。

何しる魔法を自分の手元から飛ばすのでは無く自分の魔力が存在する場所からいきなり発動できる。魔法を使っても自軍の数が多ければ敵は誰が魔法使いか特定できず（後方にいるって予測ぐらいは立つだろうが）、魔法を封じようとするなら片端から殺していくしかない。

わざと目立つ魔法使いっぽい奴を影武者に立てて本物の魔法使いは陰で魔法連射とか常套手段なんだろうなあ。

戦略のド素人が少し考えるだけでこれだけ思いつくのだから、さぞ魔法使いは凶悪な戦力として帝国に恐れられているに違いない。

それでも帝国が押ししてるって事はやっぱり戦いは数だよ兄貴って事なんだろうーけどな。

「魔力の受け渡しはできるのか？ 一般人から魔法使いが魔力を補充したりは？」

「不可能です。人は皆それぞれ固有の魔力を持っていて、受け渡せない事も無いのですか、受け取った側の魔力と渡した側の魔力の質が違つたため混ざりあい、混合された魔力を使用した魔法は使えません。操作も不可能です」

「違う色の色水を混ぜると濁るようなものか」

「ああ、その比喩は的確ですな」

赤い魔力じゃないと魔法が使えない奴と、青い魔力じゃないと魔法が使えない奴。魔力を混ぜたら紫になって二人共使えなくなる。

「一度魔力が混ざると二度と魔法は使えないなんて事は……」

「それもあります。最長でも二日経過すれば再び魔法が使える様になります」

ふむ。それならわざと魔力を混ぜて相手の魔法を封じるのは無理か。いや一時的には可能か？ 二日で回復してしまつても二日間魔

法を封じられるというのはなかなか……

……いやちよつと待て。今嫌な事に気付いてしまった。

生身なら魔力を使い切ろうが何もなくても一日あれば魔力は全回復する。しかし俺は存在自体が魔力の塊であり、自分の魔力でなければ魔法を使えないという事は、魔法を使える様になった時に文字通り身を削らなければならない可能性が高い。一応自分よりも密度が低ければ周囲の魔力を操作できるが、それは一時的に操作しているだけであつて自分の魔力とは呼べない。

自分の魔力を使つて魔法を使う＝自分の体を削つて魔法を使う、という公式が成立ちやがる。

生身の魔法使いは肉体があるから魔力を使いきつても時間が経てば回復するが、俺の場合は恐らく自分の体を構築している魔力を削つて魔法を発動させる事になるので、自分の体の体積の半分を超える魔力量を消費してしまつた時、俺は消滅する。メガンテか。

消費量が半分以下なら復活できるが、腕一本分の魔力を再度体に取り込むのでさえ一カ月はかかる。ゴーストは魔力が自然回復しないのだ。

つまりMP上限が生身の魔法使いの半分で、MPが自然回復せず、意識的に回復させる必要があり、その意識的に行う魔力回復の速度は生身の人間の三十分の一ほど。

なにこれマゾい。

欠損した体の再構築にかかる時間はこの二百年で少しずつ短くなつているから、意識的魔力回復速度はこれからも上がっていくだろうが、現状三十日かかる回復速度を生者と同じ一日まで短縮するにはあと何十年かかることやら……

思わず虚しいため息を吐いた俺なエマールイオが不審そうな顔を向けて来たので何でもないと手を振つて誤魔化す。俺T u e e e !  
なんて期待していないが、俺H u t t u u u ! ぐらいにはなりたかつた。

いや、魔法が弱い代わりに物理干渉無効があるから差し引きそれ

ほどマイナスにもならないか？　そもそも魔法が使える（見込みがある）時点で一般人よりは……

……まあいいか。このあたりの事はまた後で考えよう。さっきから黙り込んでしまった俺をエマーリオがジッと見てる。

「すまん、続けてくれ」

「はい。射程を伸ばす必要性から魔法使いは通常徹底的に魔力を伸ばし広げる技術を磨きます。シルフィアは魔力に覚醒して二年ほどですが、八ミールまで伸ばせます。熟練の魔法使いが九十ミールから百ミール。私は睡眠時以外は常に周囲八ミール四方に展開し、最高二百七十ミールまで伸ばせられますな」

「二百七十つてお前……」

ミールはメートルと大体同じ距離を表す単位だ。物差しが無いからはずり分かんが、ほぼ一ミール＝メートル、のはず。

二百七十ミール離れた距離から不可視の空間跳躍（一般人の目から見て）攻撃？　やだこの老人ほんと人間兵器。エマーリオが有名な理由が段々分かってきた。

「私がロバート殿を見て妙だと感じた原因はそこです。魔法使いは皆必要に迫られ魔力を体から離す技術を磨いているというのに、ロバート殿はむしろ魔力を体に引きつけ離さない様にしておられる。

従来の魔法とは対極。ロバート殿の魔法の秘密はそこにある、と私は睨んでおります」

「……………あー……………何となく、分かった気がする」

「本当ですか」

「いや、長くなるから後でまとめて話す」

エマーリオは落胆した様子で僅かに乗り出した身を戻した。

道理で今までゴーストが存在しなかつたはずだ。魔法使いは皆例外無く魔力を体から離す訓練を積んでいたのだから。

魔力を体から離す、即ち魔力放出に慣れた普通の魔法使いが、死んだ瞬間に拡散しようとする体を固定できるとは到底思えない。体

内魔力操作に慣れた俺でさえ危うく拡散する所だったのだから、体外魔力放出に慣れた魔法使いでは抵抗しようが無い。それこそ魔力覚醒していない一般人よりも一瞬で拡散してしまうだろう。

俺は偶然魔力密度が一般人よりも高く、

偶然毒性の無い秘薬の薬草を食べ、

偶然魔法を知らないまま魔力の、体内、操作を磨き、

運良く死んで拡散する前に魔力操作で体を固定でき、

運良く消滅する事無く生前と同程度まで密度を取り戻し、

偶然教会に見つからず、

偶然シルフィアに会って、エマーリオと今こうして話している。

これはもう一生の運を使い果たしたんじゃないかなろうか。前世で余った運で補填できないかなあ……補填されたからこそ今の状況なのかも知れんけどな。

「では基本的な要素はお話ししたと思いますので実際に魔法をお見せしましょう」

そう言うときエマーリオは羽根ペンを置いて椅子から立ち上がった。いよいよか。エマーリオは一步後ろに下がり、ゆっくりと語る。

「魔法は、魔法に変換する魔力を意識しつつ起こす魔法を強く想像する事で発動します。魔力を意識するだけでは発動せず、魔法を想像するだけでも発動しない。しかしその二つを同時に満たした時

部屋に充滿しているエマーリオの魔力の内、エマーリオの正面の魔力がいきなり火の玉に変わった。呪文も魔法陣も前触れも何も無い。握り拳大の火の玉は一瞬激しく燃え上がり、ふっと消える。

おおお……ちょっと感動。魔法だ魔法！ 地味だがこの部屋全体の魔力を炎に変えたら屋敷が焼け落ちそうだし、実演としては妥当か。

「魔法でできるのは炎を出すだけじゃ無いよな？」

「勿論です。想像次第でいくらでも魔法の種類は変わります。密度と量により威力と規模の制限はつきますが」

今度は文机の上の羽根ペンを包む魔力が、何かの力、に変わり、魔法を受けた羽根ペンがふわりと宙に浮かび上がる。

「魔法で不老不死になろうとした場合は？」

「効果がありません。恐らく刹那の一瞬不老不死になり、すぐさま効果が切れ生身に戻っているのだからと推測されております」

なるほど。威力が関係無い様な魔法は持続時間が限定されるって事か？

エマーリオは効果時間が切れたのか力を失い落下した羽根ペンを拾ってペン立てに入れた。

「炎は魔力を消費し一気に燃え上がり消滅し、念動は密度が持続時間に影響します。魔法で物質を創造した場合は」

突然ばしゃんと音を立てて宙に現われた水球が落下し、落下地点のカーペットを水浸しにした。高そうなカーペットがぐっちゃぐちゃ。

しかし俺にはエマーリオはこんなデモンストレーションで家具を無駄にする事はないという確信があった。つまり、

しばらくじつとびたびたになったカーペットを見てみると、ずっと水が消えて元通りになった。一度濡らされた影響が多少けばくはなっていたが水気は無くしっかり乾いている。

「この通り、効果時間が切れると同時に消失します」

「効果時間と威力は魔力密度と比例しているのか？」

「……いいえ、厳密には比例しておりません。基本的にはその通りなのですが、同系統の魔法を幾度も行使していると威力と効果時間は微々たるものですが上がっていきます」

「それは魔力密度が上がってる訳じゃないんだな？」

「左様。密度に変化はありません。神へ魔力を捧げる魔力通路が太くなつていくからだ、と、一般的には、言われております」

エマーリオは一般的には、を強調して言った。まるで実際は違つかのような口振りだ。

「エマーリオはそう思って無いのか？」

「思っておりませんし、事実そうではありません」

「なぜ言い切れる」

「神など存在しませんから」

「ちよっ」

エマーリオ、さらっと言いやがった。それ教会に聞かれたら完全にアウトな台詞なんじゃないか？ いや防聴魔法かけてるんだろっけど。危ない会話も今更だけどさ。

前世までは無神論者だったから神がないという言葉には賛成したい所だが、俺は転生を経験し、魔法という超常現象の存在を知ってるから、「この世界には神が居るかも知れない」と思っている。実際会った事は無いが、俺の観点で見れば魔法があるなら神が居てもおかしくない。

ホントかよ、という感情が顔に出ていたのか、エマーリオは静かに付け足した。

「神の不在は既に証明しております。公表はしておりませんが」

「……………」

証明しちゃったよ。

え？ 神の不在って証明できるものなのか？ 悪魔の証明とどこいだと思うんだが。

「……………参考までに聞くがその証明方法は？」

「ふむ。少々時間をとっても？」

「時間はたっぷりある」

俺が答えるとエマーリオは頷き、文机に歩み寄り引き出しを開けてゴソゴソし始めた。

「教会は魔力を神に捧げる事で神が奇跡を起こしている、と主張し、それが一般論となっております。神に捧げる魔力を定め、神に奇跡を望む事で、神が魔力を受け取り魔法を起こしていると」

エマーリオは引き出しから手のひらサイズの砂時計を二つ取り出し、文机の中央に置いた。インク壺と羊皮紙、羽根ペンは隅に寄せる。

「教会が信仰する『神』とは、『人を創造し、天界から全てを見通し、魔力を対価に奇跡を起こす者』です。細く言えばもう少しあるのですが、支柱はこの三つ。三つの内のどれかを崩せば神を  
少なくとも教会が主張する存在としての神を  
否定できま  
す。さて」

エマーリオは片方の砂時計を指で軽くつついた。今の所エマーリオは何も矛盾した事を言っていない。砂時計を何に使うのかは分からなかったが、口を挟まず黙って聞く。

「始めに砂時計を魔力で包み、砂時計が落ち切ったら爆発する魔法を行使します」

エマーリオは砂時計を魔力で包み、ひっくり返すと同時に魔法を使った。見た目に変化は無いが、砂時計を包んでいた魔力が消えたので魔力が消費されたのは分かった。

ゆっくりと落ちる砂時計の砂。言葉通りの魔法が発動したなら砂が落ち切った時に爆発するはずだ。

砂時計から目を離してエマーリオを見ると、何故か目を閉じて両手を耳でふさいでいた。

「なにやっつてんだエマーリオ」

尋ねても耳をふさいだエマーリオには聞こえない。このままだと爆発するじゃねえか。いいのか？

見ざる聞かざるになったエマーリオと刻一刻とタイムリミットが近づく砂時計を見比べる。なんかドキドキしてきた。爆発したら砂が飛び散るだろうと部屋の隅に避難しようとしたが、既に隅に居た事に気付いてその場に待機。

やがて、というほどの時間も経たない内に、そわそわ見守る俺と目と耳を動かして石像になっているエマーリオを尻目に砂時計は最後の一粒を落とすしきり、

「……………あん？」

爆発しない。砂時計は爆発するとも思ったの？ 馬鹿なの？  
という風情で沈黙している。何？ ストライキ？

爆発魔法をかけたってのは嘘だったのか？

疑問に思ったがエマーリオは耳をふさぎっ放しで質問しようがない。何がしたいんだ。

砂時計が落ち切ってから一分ほど経過し、気が弛んで来た時、エマーリオが目を開け耳から手を離し、文机に置かれた砂時計を見た。瞬間、派手な爆発音と共にガラスと砂をまき散らして砂時計が爆散した。

呆気に取られる俺。なんだそれ。砂が落ち切ったら爆発するんじゃないかったのか。あと部屋の中砂まみれになってるぞ。

空中に飛び散った砂が全てカーペットに落ち切ってから、何かの防御魔法を使ったらしい身綺麗なエマーリオは唾然としている俺に説明した。

「この様に、特定の条件により発動する魔法を行使した場合、行使者が条件が満たされた事を知覚できなければ発動しません。今回は私が目を開け、砂時計が落ち切っているのを知覚した瞬間に爆発が起きた。これは条件魔法の発動が私の認識に依存している事を意味しています。魔法そのものは条件を認識しない。神が魔法を起こしているのなら魔法行使者が砂時計を知覚しているか否かに関係無く魔法は発動し、爆発していたはず。にも関わらず魔法が発動せず、私が砂時計を認識した瞬間に爆発が起きたと言う事は、教会が主張する全てを見通し魔法を起こす存在としての神は存在しない、という事です」

「……………そう、なる……………のか？」

ざっと論理展開の穴を探してみたが見つからなかった。

わざわざ『全てを見通し魔法を起こす存在としての神』というもってまわった言い方をしたのは、三つの神の定義の内二つしか否定できていないからだろ。『人を創造した存在としての神』が存在するかどうかははっきりしない。が、二つ否定されれば充分過ぎる。どうやら神はいないらしい。魔法は人が自らの意思で起こしている現象なのだ。

俺は魔法で部屋に飛び散った砂時計の破片を一カ所に呼び寄せているエマーリオを見て思った。こいつ天才だ。

実験がでは無い。実験と考察も見事だとは思うが、それ以上に凄いのは神を否定するその発想。

前世の世界、中世では全てが神の意思によって成り立つと考えられていた。雨が降るのもリンゴが木から落ちるのも人が死ぬのも「神がそう定めたから」。そこに疑問を挟む余地は無い。あまりに当然の事だから。

今世、今俺が存在する世界の価値観は前世の中世によく似ていて、「神の意思で世界は動いている」という風潮が俺の村にもあった。村を襲った火事の原因を（恐らく）土地が呪われている（＝神に見放されている）からだと見做したのもその価値観が根本にある。

超常の意思によって世界が存在し動いているという考え方は、現代の日本人が「世界は物理・科学法則に従って動いている」と考えるのと同じくらい強固なものであると断言できる。

しかしエマーリオは「当然存在する」はずの神を疑い、あまつさえ神の不在証明さえ成し遂げた。

その発想力が恐ろしい。概念を学ぶのは誰でもできるが、概念を打ち破るのは本物の天才にしかできない。

エマーリオは本物の天才だ。なんちゃって転生者の俺とは格が違う。

無事な砂時計と集めた砂時計の破片両方を魔力で包み、ビデオの逆回しの様に修理しているエマーリオ（多分無事な砂時計の状態を壊れた砂時計にトレースしているのだろう）が偉大な科学者に見えてきた。魔力密度王国一。量も王国一。頭脳は超一級。何となく若かりし頃は運動神経も抜群だった気がする。

道理でエマーリオが有名な訳だ。これだけハイスペックならそりゃあ有名にもなるだろうさ。

元通りに直った砂時計を引き出しに戻し、さて話を続けましょう、と言うエマーリオを見て、こいつ俺が持つてる情報を渡せば共同研

究をするまでも無く一人で魔法の真理に辿り着くんじゃないかと思  
った。

十二話 魔法（後書き）

説明だらけでごめんね！ しばらくこつこつ話だよ！ ゆっくり  
読んでね！

2011/7/13

一部修正

2011/8/24

一部修正

## 十三話 魔法 - 2

才能の差をまざまざと見せつけられた訳だがエマーリオが賢過ぎる分には俺には何の不利益も無く、むしろ魔法の知識を増やせて好都合。

そもそも俺が魔法知識を得ようと思ったのは単純な興味と、魔法が使えれば物理干渉ができるのではないかという打算。あとは自分の現状把握が少々。三つ共既にほぼ達成されている。

魔法知識を惜しげも無く提供してくれた恩はしっかり返すつもりだ。エマーリオの魔法の知識を聞き終えたら俺も全てを話そう。クリイトゾンビノスケルトンがあれば不死の軍も作れる訳で

想像してみるともの凄く悪役っぽい光景だなおい。教會的に死者復活はOKなのかね？

……まあ今は余計な事考えて無いで魔法知識の吸収に集中しようか。せつかくだから疑問に思った部分はバンバン聞く。

「ついでに聞いておくがあのまま砂時計をどこかに隠して放置してたらどうなったんだ？ 忘れた頃にうっかり視界に入れて爆発なんてしたら厄介だろ」

「いえ、発動待機状態の魔法は時間経過と共に徐々に威力を落とし、やがて発動しなくなります」

なるほど。発動待機状態の魔法を大量に用意しておいて一斉爆撃みたいな戦略は不可能、と。

しかしなんか魔法が攻撃方面に特化されてる様な気がする。お国柄か？ エマーリオも爆発魔法とか炎魔法とか攻撃的な魔法ばかり……いや、念動と防聴も使ってたか。シルフィアは念話使ってたし。「魔法はどの範囲まで想像を実現できる？」

「どの範囲まで、とは？」

「あー、と、物理の再現については分かったんだが……こう……概念的な」

「念話や治癒、探査は可能ですが」

「そうじゃなくてだな……」

説明が難しい。俺は言い淀み、少し考えて言葉を纏めてから続けた。

「本来物理的に存在しないもの、物理的に存在しえないもの

水の中で燃える炎とか、空気よりも軽い鉄とかは出せるのか？」

「出せますが……それは物理的に存在できないのですか？ 魔法で再現できるという事は存在するのでは」

「……………は？」

俺が声を漏らすとエマーリオは微かに首を傾げた。

有り得ない事は有り得ない理論か？ いや何か違う様な……

「空気よりも軽い鉄は物理的に存在しないだろ？ 魔法を使えば一時的に作り出せるみたいだが」

「なぜ物理的に存在しないと断言できるのでしょうか？ 世界のどこかに物理的に存在する物質、現象だからこそ魔法で再現できるのでは？」

「いやいやそんな馬鹿な。いくらファンタジーでも鉄が空気よりも軽くてたまるか。それもう鉄じゃないだろ。エマーリオなら分かるだろ、鉄つてのは原子数が……………んっ？ ……………そうか、分からないのか」

「冗談では無く素で言っているらしいエマーリオの真面目な目を見て俺はハッと気付いた。

この世界の人間は魔法と物理の境界を見分けるのが難しいのだ。俺は魔法が存在しない世界の記憶を持っているから、何が「物理」で何が「魔法」かはつきりと区別する事ができる。物理を知っているから、魔法が分かる。しかし魔法が実在するこの世界で生まれ育った人間は、物理と魔法が入り交じった思考で物事を捉えざるを得ない。魔法が空想では無く目に見えるものとして存在しているのだから。

簡単に言えばエマーリオは魔法を物理に無理矢理組み込もうとし

ている。だから『空気よりも軽い鉄が実在する』という台詞が出て来るのだ。

俺は普通に暮らしている限りこの世界が物理法則に則って動いている事を体験的に知っている。物理法則が狂うのは魔法が関わった時だけだ。

俺はそこまで考えて困ってしまった。これは一体どうやって説明した物か。

物理と魔法の判別方法を教えるには物理学の知識を使う必要がある。それを使うためには前世の事も話さなければならぬ。ゴーストとは言え一介の辺境の村長としての経歴しか持っていない男がこの世界にしてみれば革命的なものである物理学知識を持っているのはおかし過ぎる。流石に天啓を受けたとか言っただけで情報源を誤魔化そうとしてもエマーリオには通じないだろう。

さて一体どうやってごまかせば……

……ごまか……

……待てよ。誤魔化す必要あるのか？

「ロバート殿？」

「ちよつと待て。今纏めてる」

何度目かの沈黙に突入した俺にエマーリオが声をかけてきたので適当に答えておく。

生前俺が前世について口を噤んでいたのは変な子扱いされないうめだった。村長一家とは言え頭脳的に普通の範疇に収まっていた家族は元より村人達にも『俺は前世の異世界の記憶がある』と言った所で返ってくるのは生暖かい目か『頭大丈夫？』という心配だっただろう。

文字も読めない、読めても一次方程式すら理解できないほど学が無い人に口で異世界の存在を納得させるのは難しい。どれほど高度な知識を披露しても、それが高度かどうかすら分からないから。

まあ後は説明が面倒臭かったというのもある。別に言わなくとも全く困らなかつた。

しかしエマーリオは違う。世界をひっくり返す様な超一級の頭脳を持つスーパージョイなら、俺の主張する前世・異世界についての真偽の判別ぐらい容易いだろう。

エマーリオなら信じられる。研究者の意味で。エマーリオほどの聡明さがあれば現代知識を知っても悪い様には使わないだろう。

俺は洗いざらい全てを話す事にした。

「エマーリオ。長くなるが口を挟まず最後まで聞いてくれ。俺はここからずっと東へ離れた辺境の名も無い村に生まれただが

」

俺の生い立ちを一から十までぶちまけて、ざっと前世も含めた経歴を話してから現代科学物理知識の話に入る。前置きだけで一時間以上かかった話の間エマーリオは何度か口を開こうとしたが、結局何も言わず羊皮紙に文字を刻みつけるのに終始していた。

俺は前世で死ぬ直前まで大学受験勉強をしていて、生まれ変わってからの知恵熱が原因の高い記憶能力のお陰でほとんど劣化していない高校レベルの知識を保っている。原子の概念から入って元素周期表に科学公式、生物の細胞とその働き、遺伝子、物理の加速度やら何やらと。

教科書や参考書を思い出しながらひたすら喋りまくる俺とひたすら書き続けるエマーリオ。朝から話し始めたはずが昼になっても全く終わらず、シルフィアが持って来た軽食を上の方で食べながら書き続け話し続け……

俺が小学校から高校にかけて学んだ知識を科学方面限定とは言え全て伝えるには一日では到底足りない。

日が暮れた頃に一度休憩するかと問いかけたが、エマーリオは首を横に振った。疲労は魔法で消しているらしい。

疲労を感じない霊体の俺の講義は夜を徹して続いた。延々と話している内に段々となぜ自分が科学知識を伝えようとしているか分からなくなってきた。月が登る頃にはもう機械の様に無心で話していた。

一徹して翌朝になり、エマーリオは仮眠を取る。魔法で一応眠気は消せるが、それは眠くならないだけで頭の回転は鈍るらしい。この時点で束ななっていた羊皮紙は残り二枚になっていたのでエマーリオが寝ている間にシルフィアがお使いに行つて追加の分を両手に抱えて山ほど買って来た。

シルフィアは羊皮紙をエマーリオの部屋に運び込む時にチラリとびつしり書き込み済みの羊皮紙を見て行つたが、俺を見て真顔で『何かの暗号ですか？』とのたまつた。残念、それは暗号ではなく科学だ。予備知識の無い奴がアンモニアソーダ法の化学式見ても暗号に見えるのは分かるけどな。

三時間ほどソファで寝てスツと起きたエマーリオははつきりした目で文机に着くと俺に続きを促した。起きた五秒後に再開だ。とんでもなく寝起きが良い。

そして再開後、また一徹し、エマーリオは淡々と仮眠に入る。俺が話している間は瞳に熱狂的な輝きを灯している癖に寝る時はあっさり眠りに入った。おっそろしく切り替えが早い奴だ。

疲労を消しているとは言え丸一日俺の話を書き留め続ける集中力と言い、エマーリオは何から何までハイスペックだった。こいつに苦手な事なんてあるのか？ 魔力操作は下手だったが、二、三日訓練すれば俺なんて簡単に抜いてしまいそうな気すらする。いくらなんでもそれは無いと信じたいが有り得ないとも言い切れないのが恐ろしい。

結局全て話し終えたのは四日目の朝日が登つてからだった。既に五本使い潰して六本目になっていた羽根ペンを置き、何か質問をしてくれと言つて来たので元素周期表を暗唱しろと言つてみると、御丁寧に質量数まで付けて完璧に諳んじた。他にも幾つか質問してみたが文句の付けようが無い回答を返す。

もう凄いを通り越して怖い。怖いよこの御老体。こいつ三日で高校レベルの科学知識を暗記しやがった。こんな人間が存在するとは……俺は人間は生まれながらにして不平等だと確信した。漱石め、

嘘つきやがったな。

「大変興味深い話でしたな」

「ああそう……」

満足気に積み上がって塔を作る羊皮紙を見るエマーリオにげんなりした声を投げ捨てる。霊体は疲れるべき肉体は持たないが、精神的に疲れた。もう一生分喋った気がする。なんでエマーリオはそんなに元気なんだ？

「この叡智は大いに魔法の探求の助けになる事でしょう」

「……あん？ そのまま使わないのか？ 魔法に転用するまでも無く産業革命でも起こせば」

「ロバート殿は魔法という現象を捉える下地として前世の記憶を私に明かされたのでしょうか？ ……ああ、ロバート殿の前世、異世界については信じております。到底妄想で作れる話ではありませんかな。転生メカニズムにも多少興味を惹かれましたが何か魔法的要因が作用したのであるという事以外は皆目検討も 失礼、話が逸れました。」

私は魔法の理を探求しておるのです。ロバート殿の知識は魔法の探求にのみ使用させて頂くつもりです。直接的に科学知識を使えば世に大革命をもたらす事も難しくは無いのですが、それは科学の進歩であり魔法の進歩では無い。

ロバート殿は魔法研究の助けになる様にと話して下さったのでしよう。私は世を騒がせるつもりはありません。ただ魔法の神秘に一歩でも近付く事を生き甲斐とする老いぼれです」

「……」  
つまり現代知識で俺 S u g e e e ! をやるつもりは無いと？  
いや別に良いけどさ。

王国が滅ぶまで十年無いらしいし、折角近代化できてもあつという間に消え去る。不完全でも銃やら爆弾やらを再現できれば戦線を持ち直す……かも知れないのにそれをやらないって事はエマーリオにとって王国はどうでもいい存在なんだろう。俺もどうでもいいと

思う。勝手に侵略されとけば良いんじゃないね。

「それはそうと」

羊皮紙の塔をぺらぺらとめくっていたエマーリオはふと思い出した様に言った。

「ロバート殿の村は火事で無くなったと聞きましたが」

「多分」

「その村人の行方は御存じでしょうか？」

「いや。全員焼け死んだなんて事は無いと思うが」

村の家屋は全焼していたが死体は見当たらなかった。墓っぽい盛り土もいくつかあったし、生き残った村人はどこかへ移住したと見ている。

俺の言葉にエマーリオは頷き、謎めいた目を向けてきた。

「私の家系に代々伝わる、法の石盤、と呼ばれる四枚の石盤があるのです」

「法の石盤……まさか？」

「これです。確認して頂けますか」

エマーリオは俺の目の前の空間に石盤をテレポートしてきた。カーペットに積み重なった四枚の石盤をまじまじと見る。確かに俺の字だ。書かれた内容も物凄く見覚えがある。

なぜこれがここに、って理由は明白だよな。何だ、俺は奇縁属性でも持ってるのか。

石盤から目を離しエマーリオの顔色を伺うと、皺くちやの顔を更に皺くちやにして微笑んでいた。

「御先祖様とお呼びした方が宜しいか？ ロバート殿」

## 十三話 魔法・2（後書き）

ずっとエマーリオのターン！

現代知識で内政科学発展SUGEE！ 展開にはならないのであしからず。ただエマーリオの発想と思考力にブーストがかかっただけです。

次話からようやく魔法研究分析……に入れるはず。

## 十四話 魔法 - 3

エマーリオは祖父から聞かされたという自らの家系のルーツを語った。

中世に似たこの時代、文字の読み書きは特技として扱われる。読み書きが出来れば就職活動が格段に有利になるのだ。火事でもくなく家財も持ち出せず最寄りの町に移住した俺の村の村人は読み書きができるお陰で職に困らなかつた。俺が死んだ時点の村の識字率は五割程だつた。核家族でも一家に一人は読み書きができる計算になる。そうして手に職をつけた村人達の中でも村長一家は薬草の扱いにも長け、安価で治療を請け負い、町で高い地位を確立した。教会が魔法による即時治療も行っているがかなりぼつたくらわれるとか。

教会との客の取り合いが起こるかと思われたが、教会の客は金払いが良い富裕層で、村長一家の客は高い金を払ってまで即時治療を求めない（そもそもそんな金が無い）中々下流層。利権の衝突も無く着実に財を蓄え評判を高めていった。

そんな裕福な家に生まれたエマーリオの祖父は、王都へ移住し文官として王宮に仕えた。エマーリオほどでは無いがかなり優秀な人だつたらしく、王宮、ひいては教会にコネを作る事に成功する。この頃から家伝の薬草学は徐々に廃れていく。

そして王都で暮らし始めた一家に生まれるエマーリオ。祖父は幼いエマーリオを教会に連れて行き、その莫大な魔力を見出す。エマーリオが幼児の頃から高い知性を発揮したのも助け、祖父がコネと溜め込んだ財を使ってエマーリオを魔力覚醒させる。

エマーリオ伝説の始まりだ。

教会は信仰心を神に示すためと称し、魔力覚醒した者を五年ほど教会に住まわせる。その間に魔法と魔力放出を学ばせつつ教会の教義を刷り込み、教会の忠実な駒に仕立て上げる訳だ。汚いさすが教会汚い。

が、そんな洗脳に屈するエマーリオでは無い。

エマーリオは魔力覚醒する前から家に伝わる法の石盤に強い興味を持っていた。もはや村も無く、王国法と差異がある役立たずだと思われていた石盤だが、そこは転生者（自嘲）直筆の法律文言、若干の特異性がある。神の存在に触れていないのだ。

村長や国王、貴族は敬うべきだが、罪を犯した時は差別してはならない。神については否定はしていないが肯定もしていない。

王国法には当然の様に『王の権威は神に授けられた絶対不可侵のものであり云々』と多分に『神』を含んでいると言うのに、法の石盤にはそれが無い。にもかかわらず見事に矛盾せず書かれた法は成り立っている。下手をすれば王国法よりも自然に。

エマーリオはそこに注目し、神の存在に疑問を抱いた。

普通の人間ならば一度疑惑を抱いてもすぐに忘れるが、五年に及ぶ教会の洗脳で考えを改めてしまっただろう。しかしエマーリオは思考を放棄せず考え続け、神と魔法の関係すら疑う様になる。

教会での五年の歳月を経て魔法使いとして認められた十七歳のエマーリオは、その才能を遺憾無く発揮し反乱の鎮圧や要人の護衛や重症を負った王族の治療などで華々しく活躍する一方で、魔法の探求を始めた。

魔法と神は密接な関係にある（と考えられている）。奇跡を実現する『魔法』の存在は強固な神の存在証明になっていた。

考察と実験の結果神が存在すると分かればそれで良し。神を疑った罪を懺悔し一生かけて償おう。

しかし存在しないのなら、居もしない神に祈る事ほど馬鹿馬鹿しいものは無い。

表立って神の存在に疑問を呈し煙たがられるほど馬鹿では無いエマーリオは表面上は神を敬い崇拜しながら研究と推論と実験を繰り返し、神の不在証明に至る。

やがて二十代も後半に差し掛かり、既に王国指折りの魔法使いとして名を馳せていたエマーリオは教会の黒い部分を誰よりも良く知

っていた。神の名の下に金を巻き上げている教会の上層部はもし自分が神の不在を唱えてもしたら総力を挙げて消しにかかるだろう。

いくら魔法に優れると言っても一個人が教会と事を構えるのは無謀。エマーリオは結果を一切公表せず、一人でこっそりと魔法研究をし続ける。何年も神の存在を確かめようと研究を続ける内にそれが生き甲斐になっていた。

四十歳を越え、帝国との仲が怪しくなってきた頃、教会に疑われ始める。何をしているかまでは発覚しなかったが一人で何かをしている事までは知られてしまった。

下手に誤魔化そうとすれば追求が厳しくなると判断したエマーリオは、研究結果の内当たり障りの無い物を開示する事にした。

エマーリオが発見した新しい魔法、二重持続魔法。

対象を二重の魔力で包み、魔法を発動させ、『魔法を持続させる魔法』を連続して発動させる事で魔法の持続時間を飛躍的に伸ばす。水魔法の場合は水の出現から消失までの時間が約四倍に伸びる。他の魔法も三〜六倍に伸びるらしい。

この魔法の利点は魔力密度の低い魔法使いでも持続時間を伸ばせる所にある。通常魔力密度は魔法持続時間に比例するため、魔力を多く消費するものの実力以上の持続時間を叩き出すこの魔法は革新的だった。

教会の教義に則れば、魔法は魔力の祝福が強く無い場合、神への強い祈りのみが持続時間を伸ばすものであり、祈り以外の手段で持続時間を伸ばすエマーリオの魔法は教義的にギリギリのライン。『魔力を二度に分けて続けて捧げる事で神の心証を良くし、祈りを届き易くする』ものであるとして落ち着いたものの、エマーリオは危険人物としてマークされてしまった。

大魔法使いの称号を得ると共にますます慎重に研究をするようになり窮屈さを感じる様になってきたエマーリオの家にある日強盗が入る。

強盗は家捜しの最中にエマーリオの妻に見つかり、これを殺害。

逃げようとした所で息子夫妻　シルフィアの両親　に騒がれ、逃げられないと見るや人質にとつて屋敷に立て籠もる。シルフィアは偶然出かけていて無事だった。

急報を受けて現場に駆け付けたエマーリオが遠距離から魔法で奇襲をかけ強盗を瞬殺したものの、人質にとられた二人は舌を噛んで既に事切れていた。体には拷問の跡があったと言う。

ただの強盗が拷問までして物を盗ろうとするのは不自然。教会の息がかかった者が強盗と偽って家を探ろうとしたのではないかと考えたエマーリオは、加齢とシルフィアの教育、精神的な傷を理由に職を辞し一線から退いて王都を出、権力から離れ王国の端にある今の町に移り住んだ。

そして今に至る。

なんてこつたい、俺の石盤が俺の子孫のエマーリオの今を形作っているという事なのか。これには数奇な運命を感じざるを得ない。ジヨジヨとどっこいどっこいなぐらい数奇な気がする。

なぜか成り行きで互いに身の上話をした俺達はどちらからともなく顔を見合わせ苦笑した。感慨深いというかなんと言うか、とにかく妙な気分だった。エマーリオも似た感覚を抱いているのだろうと俺は勝手に予測した。

その後俺が知る魔法についても事細かに話し、バックグラウンド

と知識を共有した俺達は出合って五日目にしてようやく研究に着手した。まあこの五日間の密度を考えれば、ようやく、より、もう、の方が適切な気がするが。

ちなみにシルフィアは両手で抱え切れない量の羊皮紙をエマーリオに渡され「覚えておきなさい」と言われて顔を引きつらせていた。覚えておきなさいって簡単に言うがお前それ……一体何年かかることやら。

まあ自分の部屋で現代知識と格闘を始めたシルフィアは放っておき、まずは言葉の定義から入る。

エマーリオは魔法を『自身の形質魔力を自らの意思により変換して起こす現象』と定義した。形質魔力については後述する。

魔法は神（失笑）が起こしているのでは無く、人間が行使する単なる現象である、というのだ。人間の意思に左右される現象ではあるが、人間の意思も突き詰めてみれば脳細胞の神経伝達に過ぎない。『イメージ』という一見ひどく曖昧なものが深く関わっている様に感じられてしまうとは言え、れっきとした 科学の様に厳密な法則に基づく 現象であると言える。

この定義はまだ仮説であり魔法発動に人間（魔力を消費する行使者）以外の何らかの意思が介在していないとも言切れないのだが、以下二つの実験によりその可能性は非常に薄いだらうと推測された。

#### 魔法認識実験？

水を入れた同形同質量の二つのコップを用意する。より水量が多い方が爆発する魔法をかける。……にしてもエマーリオ爆発好きだな……確かに結果が見て分かりやすいけど……

水の量を、ほぼ、等しくして魔法を使っても、見た目では量の違いを判断できず爆発しない（発動待機状態のまま）。しかし発動待機状態のコップを天秤に乗せると、片方に傾くのを視認した瞬間に爆発が起きる。

#### 魔法認識実験？

実験？と同様に水を入れたコップを用意し、同様の魔法をかける。

そして天秤に乗せる時に水量が少ない方に魔法行使者に見えないように分銅を乗せる（助手：シルフィア）。すると分銅が乗った水が少ない方のコップ側が傾き、それを視認した瞬間に『水量が少ないコップ』が爆発する。

以上の実験により、魔法発動条件を導き出す事が可能な要素を魔法行使者が知覚していても、魔法行使者が条件の達成を確信しない限り魔法は発動しない事が分かる。更に、実際に条件が満たされていない場合も魔法行使者が『条件が満たされた』と思えば魔法は発動するという事も分かる。

即ち魔法行使者の知覚を通して対象を正確に観測し魔法の発動を判定するような魔法代行者は存在しない。魔法発動条件の判定は魔力消費者に完全に依存して、魔力消費者⇨魔法行使者であると考えられる。

魔力消費者の知覚と意思を魔法代行者が感じ取り、魔力消費者が条件が満たされたと確信すると同時に魔法代行者が魔法を起こしている、という事も考えられなくも無いが、そこまで行くところじつげや屁理屈の類になってしまっただろう。

で、魔法を『自身の形質魔力を自らの意思により変換して起こす現象』と定義すると、俺の魔法は魔法ではないという事になる。

俺の魔法は突き詰めればどれもこれもやっている事は単なる魔力操作であり、魔法の前後で魔力を消費しない。エマールオと俺は魔力操作によって行うクリエイトゾンビノスケルトン、ゴースト化を纏め、魔法とは異なる『魔術』であると定義した。魔術は『魔力操作によって起こる魔法的現象』だ。

魔法が魔力変換現象であるのに対し、魔術は魔力を純粹に魔力として使った魔力現象。

例えるなら木（⇨魔力）を燃やすのが魔法で、木で家を建てるのが魔術か。

他にも『魔力を体から伸ばし、もしくは切り離れた状態で維持する技術』を魔力放出、『密度差がある魔力と接触した際の魔力拡散

を防ぎ魔力を固定する技術』を魔力固定、『魔力を体内で循環・移動させる技術』を魔力体内操作、『魔力密度を上げる技術』を魔力圧縮、『魔力密度を薄める技術』を魔力希釈と定義し、放出・固定・体内操作・圧縮・希釈を纏めて『魔力操作』と定義した。

ついでに言っておけば魔力密度は『体積辺りに占める魔力量』。こうして様々な定義付けが行われた一方で、定義出来なかったものの、解明の糸口が見えなかったものもある。

例えば『魔力』。これはいくつか性質は分かったものの、未解明の部分が多すぎて定義できない。

魔力とは一体何か？ それ自体が魔法を起こすエネルギーなのか、魔法を起こすエネルギーを保有した目に見えない特殊な物質なのか。その本質を捉えるのは容易ではない。

魔法で真空状態を作ると真空中に魔力を感じ取れなくなり魔力の無い空間が出来るが、外部から魔力を送り込むと真空中で質量が観測できない状態のまま魔力を感じ取れる様になる。

真空状態にした直後は確かに魔力を感じ取れなかったため魔力は空間では無く基本的に物質に宿っている事が分かったが、同時に能動的に送り込めば物質が存在しない真空中にも魔力は存在し得る事も分かる。魔力は基本的には物質が帯びているようだが、必ずしも物質に依存していなければならぬ訳でも無く、魔力単体でも存在できる。

魔力の受け渡しが可能である事から、人間が持っている魔力は一人一人異なるものであると推測できる。しかし一度空気中にある魔力は 恐らく誰でも 体に取り込む事ができる。まさか俺だけが魔力の取り込みができる特殊な存在であるという事は無いだろう。

大気中の魔力と人間が持つ魔力は異なる性質を持つが、同じ魔力である事に違いは無い。大気中や土中など無生物中に含まれる魔力を純魔力、人間が持つ受け渡し不可能な魔力を形質魔力……と定義したのだがこれも魔力の本質を表しているとは言い難く。

魔力を感じる感覚は五感で表現できるものではなく、秘薬によって第六の感覚（魔感）が開放され知覚できる様になるのだろうか、いやいや秘薬を服用しなくても魔力密度差が高ければ圧迫感を感じるといふ事は魔力覚醒せずとも魔感ほんの少しくらいは機能しているのだろうか、色々横道に逸れながら論議を重ねたが魔力の定義はつきり決まらなかった。

結局魔力の定義や本質を定めるには情報が全然足りないという事で問題は先送りになる。

魔力の他には神が存在しないならなぜ何度も魔法を使うと威力が高くなるのか？ という問題も予測がつかない。

慣れにより魔法のイメージが確立されていき、正確なイメージが出来る様になるためという事は考え難い。正確な（物理現象に則した）イメージが魔法の威力に影響するなら、高校レベルの科学物理知識を身に着けたエマーリオの魔法の威力は飛躍的に上がっているべき。しかし実際に複数種類の魔法を試してみたが上がっていない。イメージの正確さは……まああまりに曖昧過ぎると魔力は消費されず発動もしないらしいが、魔法の威力と関係しないという事だ。

筋肉がそうである様に反復する事で魔法が鍛え上げられていくというののもっと考えられない。そもそも筋肉は断裂した筋繊維が治る際により繊維を増やす事で成長していくものである。魔法には筋肉痛ならぬ魔法痛なんて無いし、魔法を連発しても魔力が減っていくだけで肉体的疲労も精神的疲労も無い。

反復による威力上昇には魔力消費量の増加は伴わないので、無意識下でなんらかの効率化がされているのだろうかという曖昧な結論しか出なかった。これも情報不足で問題を先送り。

こうして俺とエマーリオは日がな一日言葉の定義のためだけに議論と実験を重ね、既存の言葉や技術の定義付けが大まかに終わる頃には一カ月が経過していた。



十四話 魔法 - 3 (後書き)

研究三昧の日々。次話からは研究以外の日常的な話も混ぜていきます。

## 十五話 研究、一日

さてはて俺は一月ほどただひたすらに研究と言うか討議というかそんなものを続けていた訳だが、いい加減に飽きてきた。

エマーリオは消えない熱意で一足飛びに魔法学を発展させようとしているが俺にそこまでの気力は無い。ゴーストになってからひたすら魔力密度を上げていた時期も休憩をたっぷりとってチンタラ進めていたし、一カ月ノンストップで研究を続行出来たのは俺にしては上出来の部類に入る。

別に急いで研究しなくても（俺は）死ぬ訳でなし。根を詰めるとかえってやる気が失せる。俺はほどほどに人生のスパイスになる感じで研究を進めたかった。

しかしエマーリオに時間が無い事も分かるので手伝ってやりたくもある。

言葉の定義付けに突入する前後からエマーリオは魔術訓練に入っただが、どうにも結果が芳しくない。常時半ば無意識的に魔力を放出しそれを保持するほどに感覚が魔力放出に慣れきってしまったているエマーリオには魔力固定はハードルが高かった。体内で魔力を固定する以前に放出した魔力を引っ込める事ができないのだ。一カ月放出した魔力を体内に戻そうと四苦八苦して、ようやく一時間かけて魔力展開範囲を八ミール四方から七ミール四方に縮小するという有様。

既存の魔法形態に習熟しているからこそ、魔力操作が魔法と真逆の魔術への切り替えが難しい。

同時期に魔術訓練を始めたシルフィアの方が良い結果を出しているぐらいだ。シルフィアは既に体内でゆっくりと魔力を動かす事ができる。

魔術熟練度マイナスからスタートしたエマーリオは寿命が尽きるまでにゴーストになれるだけの魔力操作を修得できる可能性がほぼ

ゼロだ。既に王国の平均寿命を越えているというエマーリオは体力も筋肉も落ちてきており、あと十年もしない内に寿命を迎え死ぬだろう。

しかしエマーリオ本人に死を怖がっている様子は無かった。俺がエマーリオをゾンビにする手もあったが、俺がゾンビ化処理をするにエマーリオは俺に支配されてしまう。

そしてゴーストやゾンビになるなら以前にエマーリオは自分は寿命と共に死ぬべきであると考えていた。

自分は『今』の時代の人間であり、今を生きて死ぬべき。新しい時代は新しい人間が作らなければならない。自分が生き続ける事は世界に硬直化をもたらす。世界の人間は次々と新しい考え方を持った者が生まれ、死に、流動してこそ発展するもので、自分が生き続けると始めこそ世界に良い影響をもたらすであろうが、やがて新しい概念や考え方の発生発達を阻害する害悪になるであろう、と言うのだ。

分かるような分からないような。

しかし生き続ける事が悪なら俺は悪なのか、という話だが、エマーリオはあくまでも自分の私見でありロバート殿にこの考え方を強制はしません、と言った。自分の考え過ぎなのかも知れない、とも俺には死を受け入れるエマーリオの感性が分からない。シルフィアは明らかにゴースト化やゾンビ化を視野の中心に置いて魔術訓練をしているし、俺だって生き延びる可能性があればそれを必死に求めるだろう。前世はほとんど通り魔的に殺されたし今世は手の打ち様も無く病死した訳だが、死なずに済む手段があればそれに縋っていたはず。

エマーリオは自分が寿命を迎えるまでに魔法の神秘を解き明かせるとは考えていない。魔法の全ての内のほんのひとかけら、これからの研究の足掛かりを作るだけで精一杯だろうと言う。

だがそれでも良いのだと、稀代の大魔法使いは迷いの無い瞳で言った。自分の人生をかけて最後まで研究を続ける所に意味があるの

だ、と。

俺にはやっぱりエマーリオの考え方は分からない。魔法の神秘を追求したいなら魔法でも魔術でもなんでも使って寿命を伸ばせば良いじゃないか。理が通っているかも不明な訳の分からん理屈で自分の人生の幕引きを黙って見つめるエマーリオ。本当に理解に苦しむ。しかし今この時全ての情熱を傾け研究に取組むエマーリオには手を貸してやりたいと思う。魔法の知識を授けてくれた恩もある事だしな。

だから俺は飽きたからと言って研究を投げ出す事はせず、ある程度の休憩はとる様にしたものの毎日エマーリオと共に実験と考察を繰り返した。

命尽きるその日まで、ほどほどに付き合っただけよ。

俺の一日はシルフィアの帰宅と共に始まる。シルフィアはほとんど毎日夕方になるとふらっと出かけていき、朝帰りする。三回どこへ出かけていたのか聞いて全部回答が「恋人」だったので四回目からは聞くのを辞めた。通い妻か。そういえば俺の村にそんな慣習があった様な……

ある日台所で手際良く朝食を作っているシルフィアの背後に漂いながら聞いてみた。

「エマーリオはお前の恋人の事知ってるのか？」

「知ってますよ。シルフィアの好きにきなさいと言われてます。大御祖父様はエルマーに会った事ありませんでした？」

大御祖父様は俺の事だ。子孫バレしてから呼び名が変わった。

好きにきなさいと言うのはシルフィアに対する関心の薄さなのかシルフィアの判断を信用しているのか……多分後者だろうな。シルフィアの事をどうでも良いと思っていたらわざわざ教会に馬鹿高い金払ってまで魔力覚醒させたり自分の研究を教えたりしないだろ。

「エルマーってのは恋人の名前か？ まだ一度も会って無い。今度連れて来いよ。品定めしてやる」

「品定めしてどうするんですか？ 言っておきますがエルマーと私を別れさせようとしたら大御祖父様でも消し飛ばしますからね」

シルフィアは肉を捌いて血が滴る大振りの肉切り包丁を片手に俺を危険な目で見た。こええよ。

数日前、軽い実験で俺の腕に炎魔法を当ててみて貰った所あっさり消滅した。ゴーストは魔力だけでなく魔法耐性も脆弱だと判明している。シルフィアが本気で魔法を使ったら俺のか弱い霊体なんざ一瞬で跡形も無くなるだろう。

「いや品定めするだけで何もしない。というか何かしようとしても出来ないだろ。俺が物理干渉も魔法も出来ないって忘れて無いか？」

「なら良いですけど……大御祖父様こそゾンビを操れば一応間接的に物理干渉できるって忘れてるでしょう。それにエルマーは魔力覚醒して無いですから大御祖父様は見えませんかよ」

「単に俺がシルフィアの恋人を見てみたいだけだから問題無い」

「はあ。そういう事なら今度連れて来ますけど……一般人に見えないのを良い事にエルマーを付け回したりしたら」

「しないしない。良い子だから料理に戻れ。包丁をこっちに向けるな」

シルフィアは絶対零度の目で俺を一睨みしてから料理に戻った。ヤンデレてるなあシルフィア……こいつに愛されてるエルマーって

のはどんな奴なんだろう。

しばらくこの家で過ごしていて分かったのだが、シルフィアは良くも悪くも自分の感情に素直だ。好きなら好きと言うし、嫌いなら嫌いと言う。不老になりたければ一直線に努力をする。

もつともシルフィアの素直さは正直さと直結する訳では無いので、エマーリオを王都に呼び戻そうと時々屋敷にやってくる使者にはしれっと「今祖父は旅行に出かけておりまして……」などと嘘を吐いて追っ払っていた。エマーリオは滅多に外出しないので早々バレない嘘だ。

教会の魔法使いも王宮の使者と同じ程度の頻度でやってくるが、こちらでも手慣れた感じで上手く言いくるめて退散させていた。俺が前世の宗教について教えてからは毎回教会関係者に十字を切っただけから挨拶をしておちよくっている。十字の意味が分からない教会の使者が毎回不思議そうに首を傾げるのが面白いと言っていた。

神なんて信じて無い癖に他の世界の神に祈る仕事をするシルフィアの性根は揶揄してくれて捻くれた挙げ句一回転してかえって真直ぐになっている。

さて俺は朝食を作り終えエマーリオの部屋へ運ぶシルフィアに着いて行き、そのまま研究に入った。今日は魔力の法則について。

質量保存の法則が成り立つ様に魔力保存の法則も成り立つのだろうか？

例えば炎魔法を使うと炎が出現すると同時に魔力は消費され消失した様に見える訳だが、魔力が全て熱量と光量に変換されたのか、酸素が二酸化炭素になるように魔力が炎を起こし魔力その物は感知不能の何かになったのか。

魔力保存の法則を検証するにあたり、俺は魔力固定を使って魔力の存在しない空間を作った。大気中の純魔力を操作し立方体を作り、内側の魔力を側面に圧縮し空の立方体にする。これでこの立方体の中に魔力は無い。

次に立方体の中にエマーリオの形質魔力のみを入れ炎魔法を使う、

すると密度はそのままに体積をおよそ八分の七に減らした純魔力が残った。

消えた魔力は八分の一。これが魔法に変換されたと思われる。消費され損ねた形質魔力が純魔力になったと予想され、これは後で別の実験をして確かめる事になる（ ）。

しかし消えた八分の一の魔力は立方体の中に観測する事が出来なかった。炎の熱と光エネルギーに変換されたのか？

それを確かめるために水魔法を使った所、やはりおよそ八分の一の魔力が消失した。

炎魔法と違い熱も光も出さない擬似H<sub>2</sub>Oを一時的に発生させるだけの水魔法も炎魔法と同じだけ魔力を消失させるという事は、消失した魔力が魔法発動に伴う物理的エネルギーに変換されている訳ではないらしい。

魔法に使用した魔力は消失する。つまり魔力保存の法則は成り立たない事が分かった。

まあ魔力覚醒した人間が観測できると判明しているのは形質魔力と純魔力だけだから、消えた魔力は第三の観測できない魔力になっただけと言う可能性もあるのだが……正確に言えば『魔法の前後で形質魔力と純魔力の総量は等しいという法則は成り立たない』だろうか。

ちなみに観測できないなら存在しないと断言しない理由は魔力覚醒していない人間が魔力を観測できない事にある。一般人にとつて魔力は観測できないが、魔力覚醒した者であれば観測でき、確かに魔力は存在している。

魔力覚醒した者が更にもう一段階覚醒して消失したかに見えた魔力を観測出来る様になる、という事も考えられるのだ。

科学法則では質量は消失しない。ならば魔法法則でも同様に魔力が消失しない可能性が十分にある。消失した様に見えるのは観測方法が不適切だから……とは言っても魔法独特の法則で本当に魔力が消失している可能性も同じくらいに高いのだが。

さて魔力保存の法則が成り立たないとすると厄介な問題がある。いずれこの世から魔力が無くなるかも知れない。

魔力が消費されるのみの存在だとしたら当然の帰結で魔法を使い続けられればいずれこの世界から魔力は消える。大気にも土にも水にも薄いとは言え莫大な量があるから百年二百年じゃ無くならないだろうが遠い未来には消えてしまう。

しかし魔法行使で魔力が消失しても世界に存在する合計魔力量は減少しないパターンもある。

前世でやったあるゲームに魔力を精製する世界樹というものがあつた。魔法は魔力を消費するが、消費された分の魔力を世界樹が精製していると言うのだ。

この世界でも同じ様に、魔法で魔力を消費してもどこかで何かが新しく精製供給しているのかも知れない。

魔法の行使で魔力は消失するが、魔力を精製する「何か」が存在し消失した魔力を補填するという魔力精製論。

消費された魔力は戻る事が無いという魔力消失論。

観測できなくなっただけで消失していないという魔力不観測論。

魔力精製論なら問題は無いし、魔力不観測論でも観測不可状態になっても魔力は存在しているならやりようがある。

しかし魔力消失論だった場合はちょっと不味い。真にクリーンで持続的な魔力運用を目指すなら魔力を消費する魔法では無く魔力を消費しない魔術を身に着けるべき。

……が、こんな研究の足がかりを作っている段階で魔力が無くなるのではと心配してもそれは杞憂で終わるかも知れないし、ありとあらゆる物質に宿り世界に溢れている魔力を消費し尽くすとなれば途方もない年月がかかるに違いなく、未来に研究結果で魔力消失論が正しかったと判明するか、または大気中の魔力量が減り出したら（密度が下がり出したら）自重すれば良いと俺とエマーリオは考えた。

魔力消失論が真で、魔力がいずれ消えてしまう事が確定した資源

であるならば今使っても後で使っても結果は同じ。将来のために魔法は使わない様にしましょう、魔法を使いましょうと呼び掛けた所で魔術よりも圧倒的に利便性の高い魔法を捨てる者はいないだろう。石油の様なものだ。無くなるなら別のエネルギーが開発するまで。限りある資源の使用を一部が自重して大多数が好き勝手に消費するなんて馬鹿らしいだろ。

午前中一杯エマーリオの部屋に釘付けになっていた俺はシルフィアが昼食を持って来るのと入れ違いに退室する。午後はエマーリオは午前の実験や考察の整理と新しい問題の抽出を行う時間で、俺は読書タイム。

俺はシルフィアが言った様に新しく作ったネズミと猫のゾンビに物理干渉を代行させていた。

ゾンビは距離は離れていても命令は届くが、俺の存在は感じ取れなくなるらしい。東の森で待機させていたゾンビ達を呼ぼうとしたら『どこに行けば良いのか分からない』という困惑のイメージが伝わって来た。テレパシーが長距離でできても場所の特定はできないようだった。俺もゾンビがどこにいるかなんぞ感じ取れない。待機場所を覚えてるからいいけどな。

そこで遠路はるばるゾンビを迎えに行くのも手間なので、シルフ



エマーリオとシルフィアが魔力固定を訓練している様に、俺は魔力操作の訓練をしていた。

エマーリオは魔力放出に慣れたせいで魔力固定に四苦八苦しているが、俺は魔力固定に慣れたせいで魔力放出に四苦八苦している。肉体が無いため魔力を伸ばすと言うより体を伸ばすという感覚で、一度右手から魔力を放出しようと気張っていたら手が伸びてシオマネキになってしまった事がある。すぐに魔力体内操作で元に戻せたから良いものを、あのままだったら右手をだらんと伸ばした間抜けな姿で暮らす事に……

俺はそのシオマネキ事変と魔力放出シルフィアに実験で左腕を吹き飛ばされた事が切っ掛けで変身訓練も平行している。

腕が伸ばせるなら足も伸ばせるだろうし、伸ばせるなら縮めるのも可能はず。伸縮自在なら顔や体格を変えて変身する事もできる！はず。

物質に依存しない魔力体だし、体の体積が半分以上あれば頭が消えても心臓が消えても大丈夫なその特性上、人間だけでなく大型の動物や無機物への変身も理論上は可能。夢が広がる。いつかシルフィアやエマーリオと同じ姿に変身して「ドツペルゲンガー！」とかやってみたい。

しかし変身したまま戻れなくなるのも嫌なので、当面はほんっつの少し体を変形させては元に戻す、の繰り返しだ。あとはシルフィアに消された左腕を再生するついでに微妙に筋肉質にしてみたり、いい加減俺の病死人の青白い顔とカサカサの肌をなんとかしようとしてみたり。

そんな感じで窓から差し込む月明かりに照らされながらのんびんだらりと魔力放出と変身訓練をしている内に、今日も長い夜は過ぎていく。

## 十五話 研究、一日（後書き）

（ ） 確認実験とその結果

？ 特定の魔法を純魔力の存在しない立方体内で発動させ、残留純魔力量を計測する

？ の魔法を反復し威力を上げてから同様の立方体の中で再度使う

？ の残留純魔力量は？ の残留純魔力量よりも少なくなるといふ結果が出る。

つまり形質魔力が魔法に変換される際、使用したが魔法に変換されなかった形質魔力は純魔力となる事が分かる

なお、？、？ で使用する際に立方体内で消費した形質魔力は同密度同体積である。

実験や考察に具体的にどの程度の量の変化があったのか、という数値が出てきませんが、魔力は今のところ主観的に観測するしか計測する方法が無いので仕方ないんです。何十話か後に正確に魔力と密度の単位を定め小数点以下数桁で計測できるようにしますが、今は魔感で分かる顕著な変化しか観測できず、それ故に研究方法や研究の正確性が制限されています。

あとあまり厳密に魔力魔法魔術法則を設定すると一人で現代科学体系を一から作るのと同じぐらいの労力が必要になるだろうと予想されますので、話がややこしくなりそうな部分は端折っていきます。

## 十六話 魔力、剣士

俺達の研究テーマは大雑把に「魔力」「魔術」「魔法」の三つに分けられる。この内魔術は魔力の性質を利用した現象であるから、魔力の本質の理解は魔術の進歩に繋がる。魔法も魔力を利用した現象である以上は魔力をよく理解する事がプラスに働くには違いなく、自然と魔力についての研究の割合が増える。

そんな魔力研究の一つ、魔力回復実験はなかなか有意義なものだった。

### 魔力回復実験：

魔力とは生命体を作り出すエネルギーであるか否か？

前世の創作物には魔力やオーラは人間が生み出すエネルギーであるという理論が散見された。現実と創作をこつちやにするのはいいけないが、アイディア自体は確かめる価値がある。

まず俺が魔力操作で魔力が存在しない空間A、B、Cを作る。次に魔力を限界まで体外に放出し切り離し、保有形質魔力をほぼ完全に涸渇させたエマーリオとシルフィアがそれぞれA、Bの中に入る。A、B、Cは全て魔力の出入りを断絶された空間であるから、内部から魔力を作り出さない限り空間内で魔力を観測する事は出来ない。つまり魔力を涸渇させたエマーリオ、シルフィアが新たに無から魔力を体内精製しない限り魔力を観測できないという事だ。エマーリオとシルフィア二人で実験するのは個人差を考慮したもので、空間Cを用意したのは対象実験にするため。

一日そのまま空間内に居てもらった所、二人共魔力は全く回復する事が無く、対象実験Cからも虚空から魔力が湧き出る事無く。

よって形質魔力は外部の純魔力を取り込み体内で変換して精製している事が分かった。

の、だけれども。

丸一日放置した所、どうも俺の魔力固定が不完全だったらしく俺の形質魔力が魔力の存在しない空間の中に染み出してしまっていた。それほど量は多くなく、十分二十分では漏れている事が分ならず二、三時間前後でようやく何か漏れてる様な気がする程度。それでも漏れてるものは漏れている訳で、俺の魔力固定強度もまだまだ伸び白があつたらしい。

結果、魔力固定を利用した無魔力空間を使用した今までの実験の数々に若干の見直しを入れると共に、俺の魔力固定が完璧と言えるレベルになるまで無魔力空間を利用した実験は見合わせる事となった。

しかしこの実験で分かったのはそれだけでは無い。ゾンビ化の支配力の発生原因の予測が立った。

エマーリオの屋敷の地霊になつてはや半年、俺は魔力放出と変身の訓練をしながらもせっせとアニマルゾンビ軍団を再構築していた。構成員は専らネズミ、野良猫、たまにイタチや狼。一匹だけだが熊もいる。魔力放出に磨きがかかったお陰で三立方メートルほどの体積を俺の魔力で包み込みゾンビ化できる様になつており、周辺地域にいる全ての動物を甦らせられる。

勿論むやみやたらに増やすのでは無く様々な実験に利用しながら増やし、新しく魔法で屋敷に作った地下室に詰め込み人の目に触れない様にしている。ゾンビは呼吸も食事も要らず、命令すればひたすら文句も無く待機させられるので使い勝手が良い。

そんなゾンビ達だが死んでから大体八〜十時間で体に魔力が定着し、俺のテレパシー的なものでの命令に絶対服従になる訳だが、どうもこれが漏れ出した形質魔力の影響らしい。

死後自らの形質魔力が拡散しようと不安定になっている所を俺が魔力固定で無理矢理押さえつけ、八〜十時間に及ぶ拘束の中で俺の形質魔力がにじみ出て、死体の形質魔力に僅かに俺の形質魔力が混ざる。そして混ざり合い変質した形質魔力が体に定着し、ゾンビになる訳だ。つまり混入した俺の形質魔力が支配力とテレパシーの源。実験的にゾンビにする際に魔力固定を緩めて混ざる形質魔力の量を多くしてみた所、甦ったゾンビはスケルトン並に命令の効きが悪く、かつ自律行動をしなくなった。多く混ざった形質魔力が自律性を破壊してしまったと推測される。スケルトンは二度に分けて俺の形質魔力を混ぜられた結果混入量が増えて自律性が消えたのだろう。命令の効きが悪くなったのは混入量の比率の関係なのか、それとも別の要因なのか……

ついでとばかりに別の個体にほんの微量純魔力を混入させて甦えさせた所問題無く普通のゾンビになったため、形質魔力がゾンビの性格と言うか行動様式を形成決定しているのは間違いない。

アンデッドは肉体ではなく形質魔力が「個」を作っているのだ。

形質魔力は肉体情報を記憶していると考えられる。俺が形質魔力の塊であり、死亡直前の肉体と記憶（と服）をトレースしている事が理由の一。純魔力を死体に押し込み十時間固定しても甦えられないのが理由の二。服まで記憶されていたのは長期間同じ服を着続け、かつそれが体表を覆っている形質魔力の内部にあったため肉体の一部……のようなものと認識されたのだろう、というのが俺とエマールリオの共通認識だった。

形質魔力が個を作っているならば俺の形質魔力を混ぜる事無くゾンビ化処理が出来れば命令支配の関係から解き放たれたゾンビが作れる訳で。ゾンビになって不都合な事と言えば成長しない（裏を返せば老いない）、細胞活動が完全に、停止、しているため子を作れず怪我をしても回復しない（腐敗もしない）。

被支配力の発生を消せればそんなに悪い条件でもない。むしろ良い。怪我は少々面倒だが魔法で直せば良いのだから。

そこで少し問題になるのがゾンビになっても魔法が使えるか？という事。

ゾンビはスケルトンやゴーストと違い魔力が自然回復するもの、さて魔法を發動できるかとなると微妙だ。理論上は可能だろうが、人間と様々な齟齬が発生している存在であるゾンビ。断言は出来ない。それを言えばゴースト「俺が魔法を使えるようになるかも分からないのだが。

更に疑うなら人間以外の動物が魔法を使えるかも分からない。魔力を持つていても魔法に変換する工程ができるかどうか怪しい。まあ幸い呪文は必要無いから発声の問題は無いんだけどさ。

ゾンビやスケルトンは明らかに俺「魔力を認識している」魔力覚醒しているけども、どの程度覚醒しているかは分からない。エマールイオヤシルフィア、俺の様にはつきり感じ取っているのか、曖昧にしか感じ取れていないのか。テレパシーで聞いてもイメージが曖昧過ぎて分からない。こちらからのイメージは正確に伝えられるが、あちらからのイメージは非常にぼやけるのだ。

そこで話が人間のゾンビ化に移る。

普通にゾンビ化すれば命令しない限り生前の生活行動をほぼなぞって行動するので、人間をゾンビ化すればゾンビとの会話も可能。会話によりゾンビ研究は一層進むはず。

人体実験はどの世界いつの世も人類の発展に多大な貢献をしてきたのは紛れも無い事実。今俺達がやらなくてもいつか誰かがやるだろう。早いか遅いか、誰がやるかの違いであり結局人体実験が行われる事には変わりはない。ならば俺が手を汚そう。

……とか格好つけた事を言うつもりは無い。単にやってみたくいらやるだけ。罪悪感もあるがそこはいつか考えた様に浮浪者や孤児を使う事で解消する。

身寄りが無く放っておけば死ぬ様な人間を実験に使うという案はエマールイオも賛成したので、今は被験者を見繕っている段階だ。教会の連中に見つかるそまたグダグダ面倒な事になる事請け合いなの

で慎重に慎重に見繕っているとか。その辺りはエマーリオとシルフィアに丸投げしているのでよく分からない。

頑張り二人共。

ある日屋敷の地下室でアニマルゾンビ達を縦に積んでブレイメンごっこをしていると、シルフィアが跳ね戸を開けて顔を出した。

「……何やってるんですか」

「見て分らんか」

「分かりません」

「奇遇だな、俺もシルフィアの立場だったら多分分からん」

「はいはい良かったですね。エルマーが来てますけど、会います？」

「お、やっとか」

シルフィアが今度エルマーを連れて来る、と言ってから既に数ヶ月が経過していて、最近はいいつ忘れてんじゃねーのかと思いはじめた所だった。

事前の事情聴取によるとエルマーはシルフィアの二つ年上で、超絶イケメン（シルフィアフィルターがかかっている可能性あり）、凄く優しくて（シルフィアフィルターがry）、剣術の天才だと言

う（フィルター無し）。

その剣技は齡十五にして王国の騎士団級に到達しているとシルフィアのみならずエマーリオも太鼓判を押していた。将来の夢は世界一の剣士だとか。

世界一。良い響きだ。エルマーぐらいの年齢だと丁度封印された右腕を暴走させたり左目に封じた魔神を抑え込んだりするのに熱心な年頃だが、世界一の剣士を目指すというのは割合真つ当な夢だと思う。

前世ならいざ知らず、今世のこの時代で「世界一の剣士」「最強の魔法使い」というのは「大リーガー」「ノーベル賞」に相当……いやなんか違う様な……まあいいか、とにかくそんな感じ。

性格的にはそんなにぶつ飛んで無いようだが実際に会ってみない事にはどんな奴やら分からない。俺は動物園に珍獣を見に行く心持ちで地下室の天井をすり抜け、屋敷の一室の床から生える様にして地上に出た。そこには誰も居ない。

「どこにいる？」

「隣の部屋に」

壁を抜けて隣の部屋に移動すると、シルフィアの言う通り少年と青年の間ぐらいの男が居た。

王国民固有の金髪碧眼、髪は耳にかからない様にばっさり切られ、それなりに綺麗に整えられている。顔立ちは……ああ、まあシルフィアの言い分も分かるな。

十人いれば七、八人は格好良いと評するだろう爽やかなスポーツマン的造形をしている。汗をかいても暑苦しさを助長しないタイプだ。

白い半袖シャツに茶革のズボンというラフな格好で、服の上からでも単に身が細いだけではなく鍛えあげられた結果筋肉が絞り込まれている事がよく分かった。この歳でこれだけ筋肉がついているとなると身長は伸び難そうだ。

エルマーはリラックスした様子でソファに深々と腰掛け、右手で

鞘に納まった長剣の柄をしっかりと握っている。室内、しかも人の屋敷の客室で武器を手にとっているのは無礼千万不届き極まり無いが、シルフィアがスルーしているので一応許されるか。

しかしこれはアレか？ かの剣豪宮本武蔵が隙を見せるのを嫌い風呂に入らず常に武器を携帯していたという逸話のような、常時戦場の心構え。だとしたら見上げたモノだがそれでも礼儀知らずには違い無い。

正面に回り込んで穴が開くほど顔を凝視してみたが、反応無し。魔力覚醒してないらしいので当然だ。エルマーの魔力密度はシルフィアより若干高いから（5・0程度か）素質はあるものの覚醒していないので何の意味も無い。

目は濁っておらず、澄んだ光をたたえていて実直そうに見える……まあ俺ごときの眼力で性根の悪さが見破れたらそれはよっぽどオープンな悪人という事なんだが。正直目を見ただけで性格やスペックを掴むにはエマーリオぐらい極端で無ければ駄目だ。

俺がジロジロと不躰にエルマーを様々な角度から眺め回していると、部屋の戸が開いてシルフィアが入ってきた。逆さまになってエルマーの背後に漂う俺を見て渋面を作る。

「エルマー、背後に大御祖父様がいます」

「真後ろ？」

「そうです」

「よし！」

瞬間、白刃一線。

シルフィアの言葉に頷いたエルマーは突然立ち上がり、抜刀と同時に振り返り俺の胸を薙いだ。

無論何の効果も無く剣は俺の体を素通りしたが、驚いたのなんの、心臓はばくばくと激しく暴れている気がするし冷や汗がどつと吹き出た気もした。気がしたただけだが精神に悪い。何が『よし！』だこん畜生、『よし、斬ろう！』の略か。

「馬鹿野郎！ 殺す気か！」

俺の魂の叫びは刀身を指でなぞり首を傾げているエルマーには届かない。代わりにシルフィアが煩そうに顔をしかめた。

「物理攻撃で死ぬ訳無いでしょう。黙っていて下さい。エルマー、大御祖父様に何かされました?」

「いや、斬れるかなと思つてさ。斬れてる?」

「斬れてません」

「そりゃ残念。ごめんなロバートさん、魔が差してついやっちゃまったんだ。許してくれなくてもいいけど悪いとは思つてる」

「お前謝るのは良いが残念つてなんだよ、斬れてた方が良かったのかつて聞こえてないか。シルフィア、通訳」

「大丈夫だ気にするな、だそうです。良かったですね、エルマー」

「お　い　小　娘」

『みみつちいですよ。怪我もしてないんですから怒る事無いでしょう、度量の狭い人ですね』

シルフィアはエルマーの腕に抱きついてニコニコしながら念話で罵ってきた。

なんだこれ、俺が悪いのか? ……いやいやねーよ。出会い頭

に斬り付けられて斬られた方が悪いなんてそんな馬鹿な話があるか。シルフィアがおかしくなってる。普段こまっしゃくれた所はあるものの礼儀正しいシルフィアだが、恋人のやる事は全肯定なようだ。ベッタベタに惚れてやがる。

「ロバートさん良い人だ!」

「俺はこつちだ」

明後日の方を見てイイ笑顔を浮かべるエルマーに言つがやっぱり聞こえていない。

「シルフィア、ロバートさんつてお前の先祖なんだろ? 似てるのか?」

「いえ全然。私の方が可愛いです」

「ハハハ、当たり前だろ。シルフィアより可愛い生物が存在する訳が無い」

肩を抱かれてサラッとこっ恥ずかしい台詞を言われたシルフィア  
はポツと頬を染めた。

……どこから突っ込めば良いのか分からない。自分で自分を可愛  
いって言うなとか男と自分を可愛いさで比べるなとかエルマーてめ  
え爽やかに惚気るなとか。

言葉に詰まっていると二人は俺そつちのけでべつたりくつついた  
まま楽しげに話し始めた。エルマーは一カ月かけて王都に行き注文  
した剣を受け取って来たそうで、その土産話をシルフィアに詳しく  
語って聞かせている。最早俺は眼中に無し。

おつかしいな、なんか急に空気がスウィートになつた様な……  
一度口を挟もうとしたらシルフィアが俺を睨みつけて魔力を伸ば  
して来たので慌てて逃げ出した。くそ、エルマーが関わらなけりや  
基本的に良い娘なんだが。

エマーリオの部屋に逃げ込んだ俺は文机の上にゾンビネズミ入り  
ゲージを置いて何やら実験をしているエマーリオに文句をつけた。  
「今孫娘の恋人に斬られたんだが」

「……………申し訳ありません。よく言っただけ聞かせておき  
ましょう」

「頼む。俺が言っても聞きそうにないからなあ……………シルフィアは随  
分エルマーの優先順位が高いみたいだがエマーリオの言う事は聞く  
のか？」

「半々、と言った所ですか。あの子はエルマーを最優先に行動し  
ますので」

「やっぱそうなのか……………」

もしエルマーがロバートを殺せとか言ったらサクツと殺られそう  
で怖い。シルフィアは祖父を慕っているのは間違いないが、それ以  
上に強烈なエルマーへの恋慕がこの短時間でもひしひしと伝わって  
来た。

エマーリオのスペックがメーターを振り切っているせいで影が薄

くなっているもののシルフィアも魔法使いとしては十二分に優秀な部類であり、俺が居候を始めてまだ一年も経っていないと言うのに早くも中一、中二レベルの基礎的な現代知識の修得を完了しつつある事から分かる様に頭も良い。その気になれば魔法と頭脳を駆使して単騎で小都市程度なら落とせるだろう。

「危なくないか、アレ」

「最後の一线は守ると信じております」

主語は省いたが伝わったらしい。エマーリオは続けて言った。

「あの子が信用するのは家族のみです。エルマーは既にあの子の中で夫と見做されている様で、優先順位が最も高い。次が祖父である私、その次が先祖のロバート殿、と本人は言っております。他人の提言には耳を貸しません、家族の言う事は聞きます。私から自重する様に言い含めておりますので、大騒ぎになる様な事件は起こさないでしような」

「……その論法で行くとエマーリオより優先順位が高いエルマーに『一緒に虐殺しようぜ』とか言われたらホイホイ着いて行きそうな予感がするんだが」

「ああ、その通りでしょうな。しかし私はその様ないたずらに世を騒がせる真似をしない程度の良識は持っているであろう、という意味合いでエルマーを信用しております。些か常識知らずな行動はとる様ですが、根は正直で誠実な者ですから」

「……まあ……そうだな、それは分からんでも無いが」

興味本位で斬りつけて来たがゴーストに物理攻撃が効かない事ぐらいシルフィアから聞いていただろうし、一応反省したかは分かんが素直に謝って来た。

何よりエマーリオが問題無しと判断したのなら問題は無いのだろう。俺の観察眼よりもエマーリオの観察眼の方が十倍信用できる。エルマーはゴーストの存在、即ち教会に因縁をつけられる様な厄介な情報を（シルフィア経由で）得ているようだが、何となく口外はしない気がした。根拠は？ と聞かれて何となくとしか答え様が

無い。自分でもファーストコンタクトで奇襲されておいて『こいつ信用できる』なんて印象を抱いてしまうのは正気じゃないと思うが、ゴーストになってから人間の三大欲を失い怒りや悲しみにも若干鈍くなっているのです。その関係だろうと自己分析している。あと口外する恐れがあるならエマーリオが何か手を打っているだろうとも思う。

何だかんだで俺の子孫であるシルフィアには幸せになってもらいたいと思っているし、性格が少しおかしいからと言って最愛の恋人と引き離すのは忍びない。アレぐらいなら

ギリギリ

許容範囲かと思う。シルフィアを騙したり誑かしたりしている様子は無かった。

「さて話は変わりますが、ロバート殿、よろしければ少々実験を手伝って頂きたいのですが」

エルマーについて思考を巡らせているとエマーリオがゾンビネズミの尻尾を指で摘んでぶら下げながら頼んで来た。

俺は肩を竦め、エルマー案件をひとまず脇へ置いて頷いた。エマーリオは相変わらず研究熱心だ。

研究一筋なエマーリオ。冷徹な部分を持ちながら自分に素直なシルフィア。欲望が薄い俺。俺の一族は皆何かしら極端な物を持っているんだなと人事の様に思った。

## 十七話 少年、少女

シルフィアがエルマーと出合ったのは八歳の時、王都の路地裏での事だった。

父にお使いを頼まれ、商店街のパン屋で買った菓子パンの包みを両手に抱えたシルフィアは早足にゴミが散らばって歩き難く薄暗い路地裏に行く。八歳の少女が一人で歩くには王都の路地裏は些か危険な場所であり、両親からも入ってはいけないと言いつけられていたが、パンを買ったらすぐに帰る様に言われていたにも関わらず露店に並ぶ煌びやかなアクセサリに夢中になっていたためかなり帰宅が遅れており、近道の為に足を踏み入れたのだ。大通りからの脇道で道がそれほど長くなく一直線で、人影も見えなかったという理由もシルフィアの路地裏への警戒心を緩めていた。

まだ魔力覚醒をしていないため魔法は使えないが、護身用のナイフは身に着けていたし、大声を出せば大通りまで聞こえるだろう。そう考えたシルフィアは少しドキドキしながらも真直ぐ前を見て先を急ぐ。白いワンピースに身を包み、身綺麗な格好をしたシルフィアには路地裏の悪臭とゴミゴミした汚さが殊更嫌だったというものもあった。

「あう!?!」

路地裏の半分を過ぎた時、シルフィアは何か足を取られて転んでしまった。咄嗟に手をついたため怪我は無かったが、抱えていたパンの包みは落してしまふ。

シルフィアは手についた土汚れとぐちゃっとした黒い何かを見て不快げに顔を歪ませ、立ち上がって近くの壁に擦りつけてからハンカチで拭いた。それから一体何に躓いたのかと恨めしげに足元を見る。

そこにあっただのは茶色いボロ切れの塊だった。端にくすんだ金色の糸屑がもさつとついている。

腹立ち紛れにシルフィアがそのボロ切れを蹴飛ばすと呻き声が上がった。シルフィアは驚いて目を瞬かせる。

「にんげん？」

汚らしいボロ切れに手では触りたく無かったので足の爪先でひっくり返すと、酷く痩せこけ薄汚れた顔が虚ろにシルフィアを見た。糸屑に見えたのは髪の毛だったらしい。

歳の割に知識が豊富なシルフィアは「それ」を浮浪者であると判断した。

浮浪者。定まった職業・住所などをもたず、うろつき暮らす人。そしてシルフィアにとって無価値な人種でもある。

シルフィアは興味を無くす。人間を蹴ったという意識は無く、彼女にとって先程の転倒は空き箱に躓いたに等しかった。

小走りに駆けていくシルフィアの後ろ姿を、生気の無い瞳が映し出していた。

その十日後、どんよりとした灰色の小雨模様の空の下、シルフィアは歩いていった。特注の大きな傘をさし、人通りの少ない石畳の道を行く。季節は秋の中頃、日中の気温も随分と下がっており、吐く息は白くたなびいて流れていった。

あの日御使いに出かけてからというもの、シルフィアは独り歩き

が癖になっていた。

王都は他の町と比較しても治安が良く、表通りを歩いていればまず犯罪に巻き込まれる事は無い。白昼堂々の誘拐なども無いではなかったが、そこは偉大な祖父による保証がされている。

この世界の魔法使いは圧倒的な（応用力に富んだ）力とそれに付随する権力を持っており、その恩恵は家族にも及ぶ。シルフィアに手を出せば王国最強の魔法使いによる確実な殲滅が待っているのだ。エマーリオの孫娘として顔を知られているシルフィアに無体を働く者はまずいない。エマーリオ相手では人質も意味をなさない。事実、エマーリオの妻を攫った組織が一時間しない内に末端の構成員に至るまで一人残らず爆散した実例があった。勿論妻は無傷。

シルフィアの吐く白い息がゆるやかな風に乗って流れていく。

大道芸を観て、屋台で砂糖菓子を食べ、本屋で絵本を書き、大満足したシルフィアは鼻歌を歌いながら足取り軽く家路を辿る。

「……あれ？」

ふと、視界の端にすれ違う人の中になんとか見た顔を見つけた気がしたシルフィアは振り返った。

皆一様に傘をさしている通行人の中に一人だけずぶ濡れの少年がいた。どんよりと濁って見える金髪から灰色の水を滴らせ、道の端を歩いている。両手に木箱を抱えているためか別の理由か傘をさしていない。

後ろ姿だけでははつきりと判別がつかず、また十日も前にちらりと見ただけではいつそうよく分からない。少し興味を惹かれたシルフィアは小走りに少年に駆け寄り顔を覗き込んだ。

……正面から見てもよく分からない、が、がらんどうの瞳にはなんだか覚えがあった。

少年は不躰にじつと顔を覗き込むシルフィアをチラリと見たが、すぐに視線を前に戻して黙々と歩く。シルフィアもそれに合わせて歩く。雨足が少し強まり、傘を叩く雨粒の音が大きくなった。

「わたしとあなた、あったことあります？」

「ある」

シルフィアが尋ねると意外な事に即答だった。子供らしい高い声だった。不思議と重みを感じる。

「けったひと？」

今度は無言で首肯。

疑問を解決したシルフィアだが、聞くだけ聞いてはいサヨナラではなんだかモヤモヤする。少し話していく事にした。しかしシルフィアに少年を自分の傘に入れてあげるといふ発想は無く、少年もそれを要求しなかったため、ボロを着た濡れネズミと質の良いゆつたりとしたワンピースの可憐な少女が連れ添っているという妙な光景になっていた。多少周囲の人目をひいていたが声をかけられるほどでも無い。

「お名前は？」

「エルマー」

「どうしてかさをささないんですか？」

「持っていないから」

そう答えるエルマーの肌には鳥肌がたち青白く、肩が小刻みに震えていた。シルフィアは一瞬自分のショールをかけてあげようかなと考えたが、川に飛び込んだ様にぐしゃぐしゃに濡れたエルマーにかけるとお気に入り用のショールまでぐしゃぐしゃになりそうだったのでやめた。

この時、シルフィアにとってのエルマーはその程度の存在だったのだ。

「ないなら取りにもどればいいのに」

「家がない。かさもない」

「ふうん……かぞくは？」

「いない」

「どうして？」

「死んだ。びょうきで」

「えーとなんだったかな、こんなとき……そう、ゴシユウショウサ

マデス。あつてる？」

「さあ」

「分らないんだ。エルマー、ばかなんだね」

「ああ」

子供らしい残酷さを発揮するシルフィアと、淡々と一問一答を続けるエルマー。シルフィアは無遠慮に傷口を決る質問を連発し、エルマーは何の感情も見せずに機械的に答えていく。

奇妙で歪なやり取りは続いた。

「エルマーはなにをしているんですか？」

「しごと」

「どうして？」

「……はたらかないと死ぬから」

「うそ。エルマー、今ががんばってるでしょう」

嫌々やってるようには見えない、と言うシルフィアをエルマーは微かな驚愕を目に表し見つめた。まるで心を読まれたような錯覚すらした。

シルフィアにはエマーリオの足下になんとか及ぶ程度の才能があり、年齢に相応しからぬ観察眼を持っている。感情に乏しいとは言えおおよそ隠し事と無縁な生を送ってきたエルマーの誤魔化しを察知する程度はできた。

「……ぜったいに、ほしいものができたんだ」

「ふーん」

白状してもシルフィアの反応は薄く、根ほり葉ほり聞くだけ聞いて満足したのかじゃあね、と手を振って去っていった。

エルマーはほんの一瞬引き止めようと口を開きかけたが、躊躇っている内にシルフィアの姿は角を曲がって消えてしまう。

立ち竦むエルマーを迷惑そうに傘をさした通行人が何人が追い抜かし、やがて大きく息を吐いたエルマーも荷物を抱え直し歩き出す。いつの間にか、雨は止んでいた。

エルマーがシルフィアの名を知ったのはおよそ三ヶ月後、三度目の邂逅での事だった。

台車に小ぶりの岩を載せて運ぶエルマーの顔付きは以前よりも若干良くなり、表情も僅かに変化するようになっていた。服装もボロ切れからボロ服に進化している。

孤児は身元保証人がいないため、信用が無いし給料も安い。例えば孤児に高価な商品を任せ、持ち逃げされてしまった場合損害を賠償する保証人もいないため泣き寝入りするしかない。勿論その孤児は商人達の間でブラックリスト入りするだろうが、ちよるまかされた商品は十中八九返ってこない。

だからエルマーは安い品物の運搬しか任せられなかったし、知識もないので肉体労働しかできない。しかも土木作業や鋤夫など監督者の監視下で働く仕事ではなく監視がきかない運搬を任せる程度にはエルマーを雇った雇用主は人が良く、またエルマーもそこそこの信用を勝ち得ていた。

「おもそうだねー」

岩の重さにぎしぎしと軋む台車を歯を食いしばってノロノロ運んでいたエルマーは、不意に掛かった声に足を止めて振り向いた。そこには見るからに高価そうな純白の毛皮コートにマフラーの重装備をしたシルフィアがいて、手袋をした手で小岩をぺしぺし叩いていた。

「なにこれ」

「にわ石」

「ふうん。うににににに！……うごかない……」

小岩を抱えて持ち上げようとしたシルフィアは早々に諦めて手を離れた。シヨンボリするシルフィアをエルマーがボーッと見る。心なしかその目は楽しそうだった。

「なんですか。こっち見ないでくださいちょっと気色悪いです」

「ごめん、かわいかったから」

「なんだ、ならいいです」

嫌そうな顔から一転、シルフィアはフンスと自慢げに鼻から息を吐き、胸を張った。

普段から両親に可愛がられているシルフィアは褒められ慣れている。ちよつとやさつとの褒め言葉では照れないしデレない。

エルマーは得意そうなシルフィアをぼんやりと見つめていたが、不意にくしゃみをして身震いした。

今は真冬。雨は雪に変わり、朝の日課に井戸の氷割りが追加される季節。はつきりいつてエルマーが未だ凍え死んでいないのが不思議な寒さだった。

くしゃみをしたエルマーの唇が紫になり、顔色がなんだか白を通り越して土気色になっているのに気付いたシルフィアは不思議そうに首を傾げた。裕福な家庭でぬくぬくと育ったシルフィアは凍えた人間を見た事が無い。

「えーと、エ、エナ、エマ？」

「エルマー」

「エルマー、くちびるがへんな色してます」

「へんないろ……ああ、さむいとこんな色になるらしい」

「なぜですか」

「さあ」

「ううん、わたしのくちびるはダイジョブですか？」

シルフィアがぐつと桜色の唇をエルマーの顔に近づける。エルマ

「の身体が一瞬寒さとは別の理由で強張った。

「……………だいじょうぶ、だ」

「よかった」

ホツと息を吐いたシルフィアは顔を離して踵を返したが、途中でぴたりと足を止め振り返った。エルマーの貧相な服を上から下まで眺め、不愉快そうに眉をひそめて首に巻いていたマフラーを取った。そしてそれをべふつとエルマーに投げつけた。

顔面でキャッチしたマフラーを手で剥ぎ取り、困惑してシルフィアを見るエルマー。

シルフィアは短く言った。

「あげます」

「……………いいのか」

「いいのです。きょうはあたらしいマフラーを買いにきたのです。だから古いのはいりません」

そうキツパリ言つて立ち去ろうとするシルフィアにエルマーは声をかけて引き留めた。

「なあ」

「えう？ なんですか」

「……………名前は」

「あ、いってませんでした？ シルフィアです」

「ありがとう、シルフィア」

「……………どういたしまして。ではでは」

今度こそシルフィアは立ち去った。

その後ろ姿が通りの角を曲がって消えるまで見送り、エルマーはどこか陶然とした息を吐く。

手に持ったマフラーにはまだ体温が残っていて、首に巻くと微かにシルフィアの匂いがした。

「……………」

エルマーはしばらく硬直していたがやがて我に帰り、台車の取手を握り直すとまたえっちらおっちら引き始める。

実のところエルマーは明日にでも凍死する所だったのだが、シルフィアはエルマーの命を救った事に気付かず、エルマーもシルフィアに命を救われた事に気付かなかった。

冬を越え、春過ぎて、夏になった。

石屋の店先で箒を動かしゴミを掃いていたエルマーは額の汗を拭き取りつける日の光に目を細めた。先日荷物運びから下働きに昇格したエルマーは金銭的にも精神的にもささやかながらゆとりが生まれてきている。

エルマーの服装は多少くたびれた感はあるものの一般的な物に落ち着いていた。通行人に紛れても違和感のない、可もなく付加もななくの装いで、延び放題でもっさりしていた髪も見れる程度に切り揃えられている。ガリガリでこけた頬にも肉がつき始め、埋もれていた精悍さが発掘されつつあった。

この時点でシルフィアは九歳、エルマーは十歳。二人共無垢と捻くれが同居していたり過酷な生活を潜り抜けていたりであまり子供供した雰囲気はなかった。

「だーれだ！」

「シルフィア」

いきなり背後から手で目隠しされたエルマーは即答した。

「うわあ、ちょっと引くぐらい答えるの早いですね」

「シルフィアの声だからさ」

「それ、くどいてるんですか？」

「ここぞ近づいて悪戯を仕掛けたシルフィアは手を放し、エルマーの正面に回った。」

青いリボンがついた妻わら帽子に白のワンピース姿。身長差からどうしても見上げる形になるシルフィアの意図しない上目遣いに色々と射抜かれたエルマーはついうっかり言ってしまった。

「本当はもちろんだ、と答えたいけどここはあえてそのとおりだと答える……ん？」

「……え？」

「……口がすべった」

二人の間になんとも言えない微妙な沈黙が流れる。

エルマーとシルフィアの初遭遇は人と人ではなく人と物のそれであつたと言える。シルフィアにとっては大した印象を残さなかつた邂逅だが、エルマーは違う。

家族を失い、家を失い、五体以外の財産全てを失い、人知れずゆつくりと死に向かうのみだつたエルマーにシルフィアの姿はこの上無く鮮明に記憶された。

どん底の精神状態だつたエルマーには清楚に着飾つた同年代の少女がそれこそ神がかって可愛らしく、美しく見えたのだ。人が大自然を目にして自身の矮小さを知る様に、エルマーはシルフィアを見て心打たれた。自分との格の違いを思い知り、嫉妬や羨望を通り越した崇拜に違い愛情の様な物を抱いた。

人間としての格ならばエマーリオの方が上だが、彼に会つた所であまりにも隔絶し過ぎて現実感を感じられなかつただろう。

あの時あの場所での誰でもないシルフィアに会つたからこそ今のエルマーがある。歯を食いしばり耐え忍び生き延びて、感情を取り戻し人間らしくなり。

全てはいつかシルフィアの隣に立つに相応しくなるため。それま

で心にしまっておくはずだった思いの一端を口に出してしまったエルマーは顔を青くさせていた。

一方、シルフィアは会うたびにエルマーの評価を少しずつ上方修正していたが、未だ知り合いの域を出ない。正直そんな相手に口説かれても困る。お互いの年齢的にも。不快ではなかったが。

対応に困ったシルフィアは、結局エルマーの台詞を聞かなかった事にした。問題の先送りである。

「えーと、エルマー、ずいぶん普通にしゃべるようになりましたね？前はできの悪いふくわじゅつみたいな話し方だったのに」

話題を変えたシルフィアにエルマーは振られなくて良かったと内心安堵しつつ答えた。

「すぐくつかれてて口をひらくのもしんどかったんだ。いまはよゆうができたから」

「そうなんですか。口をひらくのも嫌になるほど何をしゃべったんですか？」

「いや、体がつかれると口もつかれるのさ」

「へえ、物知りですねー」

「自分で体験したからなあ」

シルフィアに感心されエルマーは照れ臭そうに頬を掻いた。

「体験ってゴミの中にゴミみたいにもれてたあれですか？」

「そう、あれ」

「私はやりたくないですねー」

「おれだって二度とやりたくないさ」

エルマーはシルフィアが吐く毒をサラツと流し実に満ち足りた微笑を浮かべ談笑する。

手を止めて無駄話をしているエルマーを叱ってやろうと店内から出てきた店長は、二人話の内容を聞いて帳簿を振り上げた姿勢で静止し何を言えはいいやら分らない、という顔をしていた。

エルマーはシルフィアに会うたび一歩ずつ確実に距離を縮めていった。特に待ち合わせも約束もしなかったが、行動範囲が上手く重なっているらしく二人は頻繁に遭遇した。

エルマーのスタンスは基本的にほめて誉めて褒め殺し。シルフィアのやる事なす事全肯定。それは世辞でもなんでもなく、エルマーの中ではシルフィアこそ至上だった。

裏表無くぐいぐい押してくるエルマーにシルフィアも惹かれていく。良家のご令嬢だけあってシルフィアは同格の家の子供と知り合う機会は多かったが、どうしても立场上礼儀や建前が優先される気兼ねなく自然体で話せるエルマーはシルフィアにとっても安らぐ存在で、知り合いが友達になり、友情が恋心に変わるまで長くはかからなかった。

エルマーもシルフィアの紹介で師匠を見つけ剣を学び、瞬く間に才能を開花させ剣士として名をあげていく。

シルフィアの両親はどこかの馬の骨とも知れない輩と愛娘を付き合い合わせる気は全くなく交際に猛烈に反対したが、二人の仲の妨害に出る前に死亡。図らずも障害がなくなり田舎町に引っ込んだため上流階級としてのしがらみもほぼ無くなったシルフィアは晴れてエルマーとイチヤイチャする事になったのである。

「狂ってる」

「それですね、それですね、エルマーはベッドに優しく私を下ろして服に手をかけながら唇を

「狂ってる」

「頭がとろけるぐらい情熱的に、ってなんですか狂ってるって。私、何か変な事言いました？」

「言った。変も何も最初から最後まで全部狂ってるわこのバカッブル」

シルフィア、十五歳の誕生日。エルマーから贈られた薄紅色のドレスをうっとり眺めていたシルフィアにふと気になって馴れ初めを聞いてみたらこれだ。

こいつら絶対可笑しい。感性も精神も歪みまくってやがる。その癖スペックは高いから質が悪い。

一体何をどう間違えれば死にそうな所に蹴り入れてきた奴に一目惚れするんだよ意味不明。シルフィアもよくもまあ第一印象がソレでここまで惚れ込んだもんだ。

「バカッブル……『熱愛の恋人同士を皮肉った俗語』ですね。褒め言葉です」

「黙れ」

罵ったはずだがシルフィアは最近急に膨らみ始めた胸を張って誇らしげにむふうと息を吐いた。やだコイツ。なにコイツ。

性格悪いとは言わんがひねくれ過ぎだ。エマーリオが育てりゃこ  
うなる訳がないから……

「まったく、親の顔が見てみたいな」

「きつと私は大御祖父様に似たんですよ」

「ねーよ」

帝国の戦線が町に近づきつつあるがまだまだ気楽な空気も保って  
いられる、そんな日の話。

十七話 少年、少女（後書き）

恋……愛？

## 十八話 帝国

王国の南に位置する大国、ナルガザン帝国は武力主義だ。

ここ百年ほどで急激に勢力を増した国で、国土面積は有象無象の小国とは比較にならず、ロバートの生前は大陸一であった王国の倍ほどの規模を誇る。ここ十年ほどは王国の領土を削り続け更に国土を拡大していた。

未発達な測量技術と情報伝達の不具合が重なって王国側には十倍と誤認されているが、人口は確かに凡そ十倍である。

ナルガザン帝国はそれほど高度な文明を持っているわけではない。建築、治水、農業、政治システム、服飾、芸術、全て王国に一段二段と劣る。

では何故王国を攻め立てる事が出来ているのかと言えば大きく二つの理由に分けられる。

一つは数の利。

国土に占める平地の割合、町や村の数が多いため人口も多く、兵数も多い。数の暴力は凄まじく、周囲に拮抗できる国と言えば辛うじてビルテファ王国のみという有り様。

ビルテファ王国も他の小国と同盟を結ぶなり協力体制を敷くなりすればあるいは帝国を押し返せたかも知れないのだが、「魔法」という異質かつ強力な戦力を持つため自国の戦力を多く見積もり過ぎていたのと、魔法技術の漏洩を嫌ったため実現しなかった。

もう一つは国民性。民族性と言っても良い。

大陸南部に住む紫髪黒眼の黄色人種は好戦的だった。考えるより先に手が出るとまではいかないが、かなり喧嘩っ早い。

しかし粗野でもなくスポーツマンシップ的側面があり、勝者には素直に従う。武術を学び、より強い武器を追求する向上心と知性もある。

野蛮人よりは武人という評価が正しい。

だがエマーリオはナルガザン帝国人を蛮族と評する。それは国民性は良くても政治形態が拙過ぎるのからだった。

端的に言えば帝国では自国で最も強い者が皇帝になる。

一年に一度武術大会が開かれ、優勝者と皇帝が戦い、勝者が次の一年間皇帝を務める。武官も大会の成績優秀者から選ばれる。流石に文官は別の筆記試験による採用だが、皇帝がある意味武官筆頭であるため発言力は低い。

武術大会と言えば聞こえは良いが、実力が近ければ手加減できず殺し合いになり、死傷者は当然の様になる。勝ったはいいが腕を無くしたり足を無くしたりと五体不満足になる皇帝が多い。そんな皇帝は十中八九次の年の帝位防衛に失敗する。降参が認められるので死ぬとは限らないのが幸いだが。

従って上手く転んでも任期は精々五年が限度、コロコロトップが変わる帝国は政局が常に危なっかしい。

武術大会で八百長が行われる可能性、武術大会での負傷による人材の損失、いずれ武器が発達すれば死傷者は加速度的に増えていくであろうし、戦闘力はあっても政治の才が皆無の者が玉座に着く危険性を常に孕んでおり、既に幾つかの問題はくすぶりはじめている。欠点だらけの政治体制。ぶっちゃけ脳筋。十年二十年は大丈夫でも、五十年後に国が存続しているかは怪しい。

にもかかわらずここまで巨大な国に成長しかつ国の体裁を保っていられるのはひとえに皇帝が名実共に国内最強であり、武人氣質の国民の圧倒的支持を得ているからだった。

ナルガザン帝国の国土の西側は天を突く山脈に面している。一年を通し頂上に雪を頂くその山脈は大陸の南端から北へまっすぐ伸び、王国と帝国の国境で途切れている。

その山脈の中央の山肌に、帝国の城はあった。

山を削り、削った岩を積み上げ、城壁と城を造る。八十年前に着工した建築は未だ全体の四分の一程度しか進んでいない。

ナルガザン帝国現女皇帝、エカテリーナは他区画に優先して建てられた王宮の執務室で報告書に目を通していた。壁をくり抜いて格子をつけただけの窓からは明かりと一緒に岩を削る高い音が入ってきている。就任当初は騒音にしか聞こえなかつたが慣れてしまえば心地良さすら感じる。

エカテリーナは二十代も後半になる小柄な女だった。目を細め報告書を流し読む顔は猫科の猛獣を想起させる。濃い紫の髪を耳にかからない様切りそろえ、機能性を重視したハーフパンツとチェインシャツのせいで女性に見えなければ権力者にも見えない。森で獣を狩っている方がまだ似合いそうだった。

「……ご老体はいつまで大人しくしているのやら」

エカテリーナは読み終わった報告書を机に放り投げ、深々と椅子に体を沈め呟いた。

エカテリーナの言うご老体はエマーリオを指す。

エマーリオと帝国は直接刃を交えた事こそ無いが、大魔法使いの名はよく知られている。帝国の充実しているとはとても言えない事前調査でさえ最強の魔法使いとして名前が何度も出てきた上、千人からなる反乱軍を相手に味方全員負傷から一人で逆転したとか、蹴り一発で人が十ミールも吹き飛んだとか、彼が率いる部隊の死傷率は半分以下になるとか、彼の正面に立つだけで心臓が爆発するとか、

頭上に落ちてきた雷を楽々跳ね返したとか、とんでもない噂が山ほどある。

どこまで本当かは知れないが魔法使いの中でも特に飛び抜けた人物である事は十分伝わった。

魔法使いは得体の知れない技　魔法を使うが、ある程度交戦を重ねてみれば倒せない相手では無い事が分かった。体力と同じ様に魔法にも限りがあるのだ。数を揃え、怯まず一気にたたみかけで押し潰せば殺せる。

しかしエマーリオは……資料を信じるならそんな生易しい人間ではない。魔法使い十人を一撃で吹き飛ばした記録もある。力の底が見えなかった。

魔法使いを捕獲して魔法について吐かせられれば対策も立つかも知れないが、生憎魔法使いは拘束できない。地下牢に入れても全身を鉄の鎖で雁字搦めに縛っても薬で体を麻痺させておいても逃げられる。

かと言って魔法使いでない王国兵を捕獲した所で情報は得られない。王国は魔法について厳重に秘匿していて、魔法の知識は魔法使いしか知らない。そして魔法使い達は教会の名の下に強固に結束しており、内部分裂は狙えない。

実に厄介だった。魔法さえなければ既に王国は二、三回落ちている。

帝国側の損害もそれなりになってきたが十二分に戦争を継続できる範囲であるし、何よりも勝てば魔法が手に入る。魔法は敵の物である内は恐ろしいが、自国の物になればこれほど頼りになる物もない。

魔法が王国にしかないのは必ず何か理由があるはずだ。血統か、土地か、儀式か、技術か、薬か。

王国には魔法がある。あちらに渡すつもりがないなら奪うまで。魔法使いが魔法の秘密を吐かずとも、王都にある教会の総本山を探せば魔法を得る方法も分かるだろう。

魔法が帝国のものになれば大陸統一も夢ではないだろう。

大魔法使いがなんだ。隠居しているなら好都合。そのまま寿命でくたばるがいい。戦線に出張って来ても負けはしない。

帝国は、強い。

エカテリーナは手の甲で強くテーブルを二回叩いた。一拍開け、執務室の扉を開け控えていた近衛が入ってくる。

近衛は踵を綺麗にそろえ、見事な敬礼をした。

「お呼びでしょうか」

「ああ。戦線は十分北上がった。本腰を入れるぞ。王都までの残りの町の数は十だったな？」

「ハッ！ その通りです。前線から帝都までの伝令の移動時間を鑑みますに、残り九になっている頃かと」

「よろしい。そろそろ私が出よう。指揮は現場で飛ばした方が良い。予備兵、訓練中の使える兵も全て出せ。国庫を開放し補給線を維持しろ」

「ハッ！ 了解しました！」

「一気に攻め上がるぞ。魔法に胡座をかいている王都の連中に恐怖の味を思い出させてやる」

エカテリーナは立ち上がりながら腰の短剣を引き抜き、犬歯を剥き出し獰猛に笑った。

大侵攻を、始めよう。

十八話 帝国（後書き）

わわ……わわ……

## 十九話 不死

帝国の戦線が北上するにつれて町に難民が逃げてくるようになってきた。とるものとりあえず逃げてくる難民は仕事も財産もツテも無く、寒空の下で野宿をするしかない。

国が救済策として従軍すれば飯喰わせてやるよー、なんて事を言っていたが、魔法使いが重用される王国での一般兵は壁役がメインで、訓練も積んでいない新兵ともなると完全に使い捨て。そもそも戦争から逃げてきたのに逆戻りつて本末転倒だ。

誰も自分から死に行く奴なんていやしねーだろアホか、と思ったのだがまだまだ俺も現代の価値観を引き摺っていたらしい。アホなのは俺の方だった。

明日のパンにも困る難民は結構な数が兵に志願していったのだ。何もせず緩やかに確実に死ぬより、生還する望みにかけて従軍した方が良い。そんな考えが働いたようだった。

しかしまあ誰も彼もが死地に行く覚悟がある訳も無く、神様がなんとかしてくれないかな、ゆつくり飢えて死ぬのは怖いけど戦場で砲火にさらされるのはもつと怖い。

人間らしいと言うべきか臆病と言うべきか。人間、理屈じゃない。最大効率の選択肢をとれる奴ばかりなら世の中もつと平和で機械的になっていく事だろう。

で、そこにつけ込んでしめたとばかりに難民を人体実験に使う鬼畜、エマーリオと俺。

難民に内容をぼかして募集をかけ、実験をする。例の人間のゾンビノスケルトン化実験だ。

失敗してもうまく逝けばすぐ安らかに死ねて、成功してうまく行けば飢えず渴かず無に還らないゾンビかスケルトンになれる。主体的意思是制限されるが命令が無ければ自立行動できるから良し。万一無残な失敗をすれば……まあ……うん……

死ぬ危険があるという意味では従軍と変わらなくとも、明確な「死」のイメージと結びついている戦争よりは死のイメージがはつきり浮かばない「実験」の方がとっつき易かったようで、表向きには特別な仕事をする奴隷に近い使用人という事で結構な人数が集まった。個体差を考えて一つの実験に三、四人協力していただく事になるのだが、それでも十分過ぎる人数だった。

老人は逃避行の途中で力尽きる事が多いらしく、ほとんど子供か中年で女が多い。働き盛りの男手は余程の事情が無い限り強制的に徴兵されているのだ。

研究に協力して頂く方々にはせめてもの誠意として三日間たらふくいい食べ物を食べ、いい服を着て、行動範囲はエマーリオ屋敷の敷地内に限るものの自由に過ごしてもらおう。

そして三日経ったら苦しまず死ねる毒薬で息を引き取っていただき、死体を魔術でいじくり回すのだ。

外道。まさに外道。俺もシルフィアも罪悪感をほとんど感じていないあたりに悪辣さが目立つ。人が極限状態で心身共に弱っている所に詐欺まがいの契約を持ち掛けるのだからもうね。エマーリオは罪悪感を感じているらしく険しい顔をしているが結局やる事はやっている。

そして肝心の実験結果だが、人間は獣と同じ手順で問題なくゾンビになった。予測通り主体的意思を保ち、思考も生前と変わらないようだった。

問答して確認した所によれば、やはりゾンビは魔力を感じ取れる様になっていた。ゴーストも見えるし、さらには魔力も操作できる。魔力操作は下手っクソだったが魔力に覚醒したばかりと考えれば妥当な程度だ。

ちなみに被支配力も発生した。テレパシーを送ると疑問すら抱く事ができずに自然と命令を実行している、との事。

ある意味当然の結果かも知れないが魔力密度が十分な人間をゾンビにすればあっさり魔法を使える様になった。魔法の使いも規則も通

常の魔法使いとなんら変わる事は無い。

と、いう事は秘薬要らずで魔法を使うゾンビを量産できる事になる。ナンテコツタイ。

現存する魔法使いの数が少ないのは教会が秘薬を独占しているからだ。俺が見つけた毒無しの秘薬薬草を使えば教会に知られず魔法使いを増やせるだろうが、それでも薬草に限りがあるため一気に増やせない。薬草を栽培して増やそうとしても時間がかかる。

ところがゾンビ化にかかる時間は八〜十時間。消費する物は安楽死用の毒薬のみで、要は死亡させられればいいのでその毒薬も必ず必要という訳ではない。

一日三人のペースで一年ゾンビ化させ続ければ千人の魔法使いが出来あがる。魔法使い一人で熟練兵二十人に相当するから……二万人分。兵糧要らずで創造者に忠実（＝脱走、離反の心配が無い）な兵が二万人。一年で二万人。しかも維持コストゼロ。

チートってレベルじゃねーぞおい。

首をはねない限り心臓を貫かれても向かってくるゾンビの軍勢。

なんつー悪役の絵図だ。

いやまあね？ 実際に行きしようと思ってもそう簡単に行くわけやあ無いんだけどさ。

魔力密度が十分な人間を千人揃えるだけで一苦労だろうし、流石に千人規模で人を集めてゾンビ化させれば良からぬ噂も立つだろうし、教会が嗅ぎ付けてきて衝突するだろうし。

例えそういう諸々の問題がクリアーされても俺やエマーリオにゾンビ軍をつくる気はない。

一日三人魔法使いが増えていけばそりゃあ王国が盛り返して戦線を押返して勝てる可能もかなり出てくるが、勝ってしまったらその後が大変だ。

管轄外に大量に現れたゾンビ魔法使いを教会にどう説明すればいい？ 力ずくなりなんなりで教会を黙らせたでしょう。するとクリイトゾンビは今の所俺にしか使えないからゾンビ軍勢は全員俺の

支配下という事になり、俺が管理責任を負わにやあならん。トonzラしようにも千人は流石に目立ち過ぎる

色々面倒臭い。

第一俺達には王国を助ける愛国心が無い。戦うぐらいなら普通に逃げるわ。

大人しく侵略されて王国兵が一人殺される事と反撃して帝国兵を一人殺す事にあまり差を感じられない。それならば俺は手間が無い方を選ぶ。

閑話休題。話を研究に戻そう。

人間のスケルトンも獣のスケルトンと変わりはなかった。喋れず、自ら動かず、主体的意思が無い。

しかしこちらはゾンビと違い魔力密度が十分でも魔法を使う事ができなかった。意思が希薄なため魔法行使に必要なイメージができないのだろう、とエマールリオは言った。それでまず間違いないだろうと俺も思う。

さてはて、そんな感じで外道な人体実験を行い淡々と魔法・魔術のデータを蓄積している間に俺の魔力固定が完璧になっていた。ゴーストの体の変形と合わせて地道にコツコツ練習した甲斐があった。以前の実験で俺の魔力固定が完璧ではなく、微妙に魔力が漏れている事が分かった。ゾンビが創造者の支配を受けるのもこの漏れた魔力が原因だと推測されている。

魔力固定が完璧で魔力を漏らさなければ創造者から支配を受けない独立したゾンビができるはず。

いきなり人間で試すのもなんなのでネズミで試してみた所、見事成功した。テレパシーは繋がっておらず、支配も及ばない。支配から解放されたフリーダム・ゾンビの出来上がりだ。素晴らしい。

俺が目の前をちよろちよろしても反応を示さないので魔力は認識できないようだがそれ以外はゾンビに同じ。

二、三日経過観察をしても問題なかったので今度は人間で試してみた所これも成功。やはり魔力覚醒はしなかったが、東の森から人

間のゾンビに命令し取ってこさせた秘薬を摂取するとしつかり覚醒した。

ゾンビ化してからでも魔力覚醒は有効らしい。ゾンビは消化器官が働いていないから秘薬は消化する必要は無いようだ。前もって覚醒した人間をゾンビ化させても魔力覚醒の状態は継続される事も判明した。興味深い。

この実験結果を受けて一番喜んだのが十七歳になったシルフィアだった。身内の鼻肩目を抜きにしてもちよつとコレ現実離れしてんじゃねえかと思うほど過剰に美しく成長したシルフィアは、エマールリオと違い酷く老いと死を嫌う。

月光と日の光のどちらを受けても宝石の様に上品に輝く艶やかで長い金髪<sup>ポニテ</sup>、磨き上げられた大理石も霞む美しくかつきめ細やかでシミ一つ無い柔らかな肌。服の生地を押し張り出した胸は詰め物などとしておらず、胸との対比腰のくびれが際立つ。

絵画から抜け出して来たような、という表現があるが、シルフィアの顔立ち、体型はまさしくそれだ。完成され過ぎていて実在の人間とは思えない。

事実、実験のために屋敷に入りシルフィアを見た人間は男女問わず目を擦るか愕然として静止してしまう。漫画じゃないんだからその反応はねーよと思うが反応してしまうものは仕方ない。クレオパトラや小野小町を目にした男達もこんな反応をしたのだろうか。

そんなシルフィアは性格がアレなだけあって自分の絶対的な美しさに自信を持ち、堂々と誇り、それを失うのを恐れている。

怪我は魔法で治せても老いは魔法では止められない。老いを止めてしまえるゾンビ魔術の完成は渡りに船だったのだ。

十八歳になるまで徹底的に美しさを追求してからエルマーと共にゾンビになる事にしたシルフィアは、永遠に続く二人のせいかつを妄想してはいやんいやんと首を振ってくねくねしていた。

シルフィアほど極端ではないがイケメン度を上昇させたエルマーも乗り気らしく、ここの所しばらくは屋敷にとどまり筋肉を絞り込

んでいる。生きている内に筋肉をつけておき、ゾンビになつてから剣技を磨くつもりだと白い歯を見せて言うエルマーに人外になる事への忌避感は全く感じられなかった。一年ほど前に東の森産秘薬草で魔力覚醒してから益々ズレて来ているように思える。

似た者同士お似合いだ。幸せになりやがれ馬鹿共が！

……と、いけば良かったのだが、二人の幸せ未来計画は捕らぬ狸の皮算用だったようで。

ノーリスクゾンビ化なんて話がうますぎるんじゃないかと頭の隅で思っていたら、やっぱり欠点がある事が発覚した。

腐るのだ。  
体が。

蘇生後数日は問題ないのだが、十日ほどで身体が動かしにくくなりはじめ、二十日で思考の混濁が始まり身体が動かなくなり、三十日で意識を失う。それからゆっくり身体が腐り落ちていくのだ。

ぬか喜びしたシルフィアのショックは酷い物で、実験結果を告げるとその場に崩れ落ちて何の反応も返さなくなった。美少女の無表情の虚ろな目は正直怖かった。

しかしその晩エルマーがシルフィアの寝室に慰めに行き翌朝に完全復活したのには呆れた。お前らもう爆発しろ。

そしてエルマーの隣の席で肩をくっつけ朝食を取りながらシルフィアが言う。

「大御祖父様、自律ゾンビの今後の研究はどうなっているのでしょうか」

「放置」

「え？」

「え？」

シルフィアとエルマーが仲良くポカンとした顔で俺を見る。こっち見んな。

「理論的に解決策が出なかったからな。腐食を止める方法は勘で当たりをつけて片っ端から試すしかない。それはエマーリオの流儀じ

やあない。時間も無いからゾンビ研究は据え置きで形質魔力の研究を煮詰めるんだとさ」

「なら私が研究します。十八歳でゾンビになれないと意味が無いんです」

即座に言ったシルフィアの静かに燃える瞳が一瞬エマーリオの物と重なった。ぞくり、と背筋に震えが走る。やっぱシルフィアはエマーリオの孫だ。こう、オーラと言いか魔力の感触がね、似てる気がするよね。覇気があると言っかね。

血縁の俺には全く無いものだ。泣けてくる。しかし涙は出ない、ゴーストだから。

「呑気に朝食とってる暇はないですよエルマー、研究です！」

「研究はいいけどさ、俺学がないから手伝えないぞ」

「傍に居てくれれば愛の力で研究効率が三倍になります」

「俺の愛なら四倍はいける」

ガタンと椅子から立ち上がり、二人はいちやつきながら部屋を出て行った。

くそ、ゴーストになってからずっと食事はできなかったが、ここ数年糖分ばっか摂取している。胸焼けがしてきた。

シルフィアが自律ゾンビ腐敗防止研究を始めて半年が経った頃、

嫌な知らせが届いた。帝国の進軍速度が上がったらしい。この町に押し寄せるまでおよそ四ヶ月だそうだ。

帝国軍が来たら東の森に逃げ込む計画は既に始まっており、研究資料やアニマルゾンビ、一部の人間のゾンビは夜陰に乗じて移動させ初めている。

俺達はギリギリまで町にとどまり、帝国が町を制圧するドサクサに紛れ痕跡を消して逃げる予定だった。上手くいけば戦火に巻き込まれて死んだと思ってくれるだろう。

エマーリオは帝国軍の動きが変わったという知らせが届く前日から魔法研究を止めていた。

代わりに絵筆をとってキャンバスに絵を描いたり、ノミとハンマーで石を削り彫刻をしたり、裏庭で剣の素振りをしたりあれやこれやとし始めた。

帝国が来て屋敷から離れる前に色々やっておこうって事か？帝国に寝返らないのも研究環境が悪いかららしいし。

まあそれはいいんだけどな？

「分かったのか？ 帝国の変化を」

「可能性は高い、と推測してありました」

エマーリオは海を描いているらしい油絵に筆を滑らせながら事も無げに言った。

こいつ帝国の進軍速度が変化する前日から研究止めたんだよなあ。もう予知だよ予知。

「お前苦手な事ってあるのか？」

「……………思い付きませんな」

だと思ったよ。もう驚かん。

あらゆるものに持つ高い才能。高い記憶力。学習能力。短い睡眠時間でも万全に動ける体。莫大な魔力に高い密度。

神懸かり的な洞察力に予知じみた推察力、その気になれば洗脳紛いの人心掌握も思うがままと言うし（シルフィア談）、エマーリオが栄達を望めば一代にして大陸を掌握するのも夢ではなかったので

はないかと思わせる。

しかしこれは邪推かも知れないが、エマールイオはもっと大きなものを見据えて動いているように思える。

前世には存在しなかった「魔法」。それが未来にどのような役割を果たしていくのか俺には分からない。いずれ廃れて失われるのかも知れないし、科学に変わり大発展を遂げるのかも知れない。

仮に後者、発展の道を行くのなら、稀代の大天才エマールイオの全精力をつぎ込んだ魔法研究資料は何にも代え難い貴重な資料になるだろう。

単なる趣味で研究している可能性も濃厚だが。

エマールイオは研究を中止した理由を語らなかつたし、俺も聞かなかつた。俺はエマールイオほど研究熱心ではないし、数ヶ月前にととう魔力密度が最低値を超え予測通り魔法を使える様になったので研究を続ける必要性も感じていない。予想通り魔法を使うと身体が削れるので使える様になったとは言えあまり使いたくはないが……魔力密度が上がっていけば密度を薄めて量を増やす事で魔法を使うたびに一々腕が無くなったとか腹に穴が開いたとかにはならなくなる。あとは時間が解決してくれる。

のんびり屋の俺とは違い時間に追われていたシルフィアの方だが、愛の力か才能か偶然かは知らんが腐敗防止の方法を見つけていた。

定期的に生きた人間の肉を食べるか、血を吸えばいいのだ。

その結果に至った道筋だが、まずシルフィアは形質魔力に着目したと言っ。

自律ゾンビと通常のゾンビの作成プロセスの違いは創造者の形質魔力が混ざるか混ざらないか。その差異のせいで腐敗が起きている。

ゾンビは蘇生する際に生前とは明らかに異なる体質を獲得しており、その体質は少なくとも数十年程度の時間経過で変わる事はない。魔法で生前の状態に戻そうとしても効果が無い。人間が不死化魔法を使った場合と同じ様に刹那の一瞬生前の状態に戻り、すぐに効果が切れてゾンビに戻っているのだろう。

最初は形質魔力の量を調節して（協力：俺）腐らずかつ支配が発生しない絶妙な量を探ろうとしたが、逆に支配が発生した上に腐っていくゾンビができただけで終わる。

そこでシルフィアは考えた。腐る体質になるのはこの際許容しよう。腐敗の進行を回復するか止めるかできればいい。

創造者の形質魔力が混ざれば腐敗しないのなら、他人の形質魔力が腐敗を防止しているのかも知れない。ゾンビになる際の形質魔力の調整が不可能なら、ゾンビになってから形質魔力を突っ込んでやればいい。

そこでシルフィアは自律ゾンビに自分の形質魔力を送り続けた。

結果、失敗。ゾンビの魔力と他人の魔力が混ざった状態が続いたのがまずかったのか、腐敗が早まってしまった。

しかしシルフィアは諦めなかった。このアプローチは間違っていないはずだと信じ試行錯誤を繰り返す。

その結果、ゾンビ自身と組成が近い有機物 即ち肉や血を

体内に入れ、物質から放出される形質魔力を取り込めば良い事が分かったのだ。外部からの供給ではなく、体内に取り込む事で血肉はゆっくりと形質魔力を放出していき、それで腐敗の進行は止まる。

欠点としては血肉は直接摂取しなければならない事。本体の身体から離れた血肉の形質魔力は無機物中だと長くて十秒で拡散してしまうから、生きた人間を食べるか生きた人間の血を吸うかしかない。ついでに言えばゾンビは消化器官が働いていないので摂取した血肉は後で吐き出さなければならない。

流石のシルフィアとエルマーもカニバリズムは嫌なようで他の腐敗防止方法が無いが研究しているが、今のところ見つからず、血を吸う手段で妥協する事になりそうだ。肉を食べるよりはマシ、らしい。失血は肉の欠損よりも回復が早いという理由もある。

俺はシルフィアの研究成果を受け、以降自律ゾンビをヴァンパイアと呼ぶ事にした。これほど相応しいネーミングも無いだろう。

さしずめシルフィアとエルマーは吸血鬼真祖か。

……案外似合っていて若干引いた。

シルフィアが十八歳になり、エルマーと共にヴァンパイアになった時、帝国の軍勢はもう町の目前まで迫っていた。

十九話 不死（後書き）

ゴースト

ゾンビ

スケルトン

ヴァンパイア NEW!

ノーライフ族はまだ増えていきます。

## 二十話 The end of . . . . .

「は？ すまんもう一度」

「私が単独で帝国軍に立ち向かい玉砕します」

帝国があと三日で町に辿り着くという時になってエマーリオが何か言い出した。

とうとう惚けたか。もう歳だからな……いやエマーリオに限ってそれは無い、こりゃ素面だ。

流石エマーリオ、俺達に出来ないことを平然とやってのけいやいや待て待て待て。何言っちゃってんの。何言っちゃってんの。お前俺達と一緒に東の森に逃げるんとちゃうかったんか。

「足止めをするのか？」

「いえ、玉砕します」

「……玉砕って比喻表現だろ？」

「いえ、この命尽きるまで戦い続けます  
なぜ玉砕前提？」

愛国心がある訳でなし。王国に借りがある訳でなし（むしろ貸しがある）。帝国に恨みがある訳でなし。帝国兵を減らしたいなら玉砕より王都へ後退しながらじわじわ削っていった方が断然良いことは俺にだって分かる。エマーリオは俺よりも分かっているだろう。

そんなエマーリオが。

「なぜ」

「私も男だった、という事です」

「わけわかめ」

説明を要求するとエマーリオは丁寧に答えてくれた。こいつは頭良い上に凡人の思考回路も下手すりゃ本人以上に理解してくれるから助かる。

曰く。

確かに始めは逃げるつもりであったが、帝国軍が近づき、寿命が

近づくとつれて何か惜しくなってきた。

果たして本当にこのまま最後まで研究漬けで人生を終えて良いものか？ エマーリオは超一流の研究者であるが、シルフィアの祖父であり人間であり、男である。

エマーリオは研究結果以外のモノを遺そうと考えた。エマーリオを構築するモノは「魔法研究」だけではないのだ。後世、自分が魔法研究だけの男であると評されるのは不快であるし、避けたい。

自分でもこれほど自分に自己顕示欲があるとは思わなかったらしいが、その欲は決して悪いものではないとも思ったそうだ。

だからエマーリオは帝国が接近すると研究を止め、様々な物をつくった。

絵画を。彫刻を。武具を。服を。人形を。レシピを。音楽を。劇を。小説を。数式を。設計図を。

そしてこの世にヒトが在る限り永劫に語り継がれる、戦闘者としての姿を。

つまりところエマーリオは一匹の男として最後に一華咲かせたかったのだ。

逃げも隠れもせず、

単身大軍にぶつかり、

暴れ足掻き、

碎け散る。

エマーリオが語る全てを聞いた俺は不覚にも泣きそうになった。

エマーリオは生きている。猛烈に生きて、輝いている。それは俺が二百数十年も前に失ってしまった命の輝きだった。

二度も死んだ俺は死にそこまでの「何か」を見いだせない。二百年以上性欲も睡眠欲も食欲も無いゴーストはをやっていたせいか俺の喜怒哀楽は薄く、熱意も弱く、エマーリオの感情は理解できなかった。だからこそそんな感情を抱ける事が羨ましいとすら思った。

エマーリオの真似をしようとは思わんけども。

一方エマーリオの行動に難色を示したのは、やはりというかシル

ファイアだった。

無駄だと分かっているだろうに、しつこく苦言を呈す。何を言ってもやっぱり拒否されるシルフィアは、苦虫を噛み潰した様な顔で決まって俺をターゲットしてグチグチ言い始める。

「何も死ぬまで戦う必要も無いでしょう。王都へ撤退しながら削っていけば最終的な戦果は玉砕を上回るはずですよ。大軍を散々翻弄し苦しめ追跡を振り切って逃げおおせた、では駄目なのですか」

「何も分かってないな。死ななきゃ意味無いんだよ。あと俺に言うな」

「お祖父様がなぜあんなに死にたがるのか分かりません。怪我したら痛いでしょう？死ぬのは苦しいでしょう？ まだ健康な身体で生きられるのになぜ命を道端に捨てる様な……」

「死にたがっている訳じゃないだろ、死に場所を選んだだけだ。あと俺に言うな」

「理解できません。それにお祖父様は残された者の気持ちを無視しています」

「お前はエマーリオの気持ちを無視している。生き汚いのも潔く死ぬのも両方美德だと思うがね、俺は。シルフィアは前者でエマーリオは後者なんだろ。だからこういう事は直接エマーリオに言えって」

「お祖父様に言うと言得されてしまうので嫌です」

んな理不尽な。なんとなく気持ちは分かるが。

エマーリオによるとあと二十二〜二十四時間で帝国軍の先鋒が町に到着するだろう、との事だった。数日の内に帝国が攻めてくるから逃げると町中でふれ回っていた王国兵よりも情報が正確っぽいのは何故なんだ？ …… エマーリオだからか。

既に町民のほとんどは北へ逃げている。人気の無い通りに淋しげに吹く風が無人の民家の戸を軋ませていた。家財道具がかなり残っているが火事場泥棒はいない。なぜなら王国が徴収するから。

町に残っているのは百人程度の王国兵と、俺、エマーリオ、シルフィア、エルマー。プラス魔法使いが一人。

魔法使いはともエマーリオの監視の為に潜伏しているらしいのだがバレッバレだ。エマーリオが教会が自分を監視している可能性が非常に高いと言うのでゾンビネズミのローラー作戦で探したらあっさり見つかった。やっこさんは教会の地下室で時折魔力をエマーリオ屋敷近くに伸ばして何か魔法を使いながら普通にワインを飲んでた。それでいいのか魔法使い。

監視役の魔法使いはちよいちよい屋敷にやってきてはエマーリオを引っ張り出そうとしてシルフィアに追い払われていた奴だった。下手に刺激して帝国に寝返ったら目も当てられないため、権力を振りかざし無理に王国側に立って戦えとは言わなのが好印象だったが、単に以前下手撃って引退された挙げ句田舎に引っ込まれてしまった反省を生かしているだけという事を考えると冷める。

まあ監視魔法使いは王国に敵対行動をとらない限り敵にはならないだろう。

恐らくメインでエマーリオ、サブにシルフィア、ついでにエルマの行動と帝国の様子を探って王国に報告する心積もりだろうが、心配せずともエマーリオは特攻をかます。シルフィアとエルマーに

ついて上手くごまかし、俺の存在に気付かれないようにすれば問題無い。

王国兵が百人ほどいるが、連中は大体ただの王国公認火事場泥棒と思っただけ。家財道具を次々と馬車に積み込み、金目のものが無くなった家に油をしこたまぶちまけている。ロクな武装もしていないようだし、火付け役以外は帝国が来たら逃走するのだろう。

王国からの妨害は家を焼き払い略奪を阻止するのと、土壁と落とし穴で町を囲む事。土壁と落とし穴は二日前に王国から帝国の情報を対価に要請されたエマーリオが一晩で作ってくれました。

分かつてはいたが魔法卑怯過ぎる。高さ二ミールの壁で小規模とは言え町を丸ごと囲むのは正攻法でやれば数百の兵士を投入しても丸一日はかかる。普通の魔法使いでも一晩でやるとなると二十人は必要だと言っただからエマーリオの狂いつぶりがよく分かった。単純計算で魔法使い×20人〓熟練兵20人×20〓熟練兵400人。エマーリオの場合そこに天才補正がつく。もうこれ人間じゃねーよ。種族エマーリオだよ。

で、俺達と言えば屋敷にバリケードを築き町と運命を共にすると見せ掛けながら逃走準備を完了させていた。

ゾンビやらスケルトンやらは既に全員東の森へ退去させ、人間ゾンの指示で例の木霊の木を中心に集落を作成させている。募集した方がいいが実験に使われず残った純粋な人間も五十人弱いるし、ヴァンパイアの吸血用にそのあたりの人間も匿われている。生きた人間が暮らすのだから衛生管理やら食料確保やらが大変になりそうだがそれはまた後で考えるところ。

帝国に対する俺達のアプローチはこうだ。

まずエマーリオが突っ込んでいく。ある程度戦ったらシルフィアが隠れながら自分の外見に似せた土人形を作り、エマーリオを助けに行くような形で突っ込ませる。所詮土である以上腕を切り落とされたり魔法の効果時間が切れたりしたら偽物だとバレてしまうが、その前にメガンテして周囲の兵を巻き込んで爆散すれば分かりやし

ないだろ。

エルマーは簡単だ。シルフィアと一緒に手順で爆散。以上。

俺は監視魔法使いに気をつけながらエマーリオの戦いぶりを目に焼き付け、エマーリオが死ぬか帝国軍が壊滅するかその他状況次第で撤収。

どうせ王国も教会も滅びるのだから偽装死する必要も無い気もしないではないが、シルフィアは帝国を野蛮であると軽蔑していて関わりたがらない。

吸血しなければ生きられないヴァンパイアに帝国がどんな印象を抱くか分かったモンじゃないから、軽蔑云々を度外視しても足跡を消して東の森に隠れるのは間違いではないだろう。

そして最後まで食い下がったシルフィアの説得も失敗に終わり、エマーリオ最後の戦いが始まる。

時の皇帝、エカテリーナは当時の手記にこう書き残している。

『小高い丘を越え、私が目にしたのは町を囲む土壁を背に立つ一人の老人だった。短い、真っ白な髪は確かに積み上げられた歳月を感じさせた。藍色のローブを風にはためかせ仁王立ちする彼に牙をうち鳴らし前脚に力を溜める猛獣の群を幻視したのは私だけではないだろう』

『遠目にも分かる、老いてなお力強い覇気。私は彼が王国最強の魔法使いであると確信した』

『私は右手の采配を上げた。合図を受け、高々とラツパが鳴り響く。全軍が一旦停止し、素早く対魔法使いの陣形に変わっていく』

『油断は無い。王国の魔法使いには幾度となく辛酸を嘗めさせられてきた。一切手心を加えず、全力を以て押し潰す』

『帝国の強兵にかかれば魔法使いも嵐の海の小舟に相違ない』

『その時、私は分かっていたのだった。王国の魔法使い達の中で彼だけが唯一　大　魔法使いと呼ばれる、その由縁を』

ロバートは上空から一面紫色の帝国軍と相對するエマーリオを見ていた。身体の形を変え、少し歪な鳥の姿をとり、ゆっくりと旋回する。こうしていれば遠目には魔力覚醒していてもゴーストだと分からないだろう。

シルフィアとエルマーは町を囲む土壁に開けた覗き穴から様子を窺っている。

監視役の魔法使いは二人から少し離れた位置で同じ様に外の様子を窺っていた。

帝国の進軍は丘を越えた所で止まり、陣形を変え始めた。密集していた兵の間隔が広がっていく。魔法で一網打尽にされるのを防ぐためだ。帝国も無策ではない。

本隊から少し離れた後方に居る補給部隊を除外すると、帝国の兵は約八万。八万の兵がうごうご動いて陣形を変えていく光景はかなり気持ちが悪い。

帝国の装備は不揃いで、最前列には槍兵が、その後ろには弓兵が揃っているが、三列目からは鎌の者もいれば剣の者もハンマーの者もいて、防具も革が主流だがデザインはバラバラ。産業革命も起きていないのに八万の兵に統一規格の装備を配給するのは不可能だった。唯一統一されているのは剣と盾が描かれた赤い帝国旗のみ。

帝国が陣形を変え終わる。それなりに訓練を積んでおりなかなか早い。

今回エマーリオは狡い手は使わない。落とし穴を作っておいたり

油を撒いておいたり火薬樽を埋めておいたり、事前準備をしておけば帝国の被害は倍増するが、帝国にとって幸いな事にエマーリオは王国の為に戦う訳ではない。自らのプライドのために戦うのだ。

だから陣形が整うまでエマーリオは攻撃しなかった。

高らかとラツパの音が鳴り響き、声の大きさだけで命を奪おうとしているかのような雄叫びが上がった。

蹂躪が、始まる。

槍を正面に構えた槍兵を先頭に全軍が地響きを立て一斉に駆け出した。魔法使いのアドバンテージは攻撃の瞬間まで攻撃が見えない事と、長い射程。一気に距離を詰めようとするその作戦は正しい。

しかし次の瞬間突撃する槍兵達は全員身体が上下泣き別れになり上半身が宙を舞った。下半身が血の噴水を上げ、倒れて血の川を作る。地面と水平に紙の様に薄く薄く広げた魔力を、槍兵と重なった瞬間ほんの一瞬物質化したのだ。人を殺すのに派手な魔法は要らない。

魔力が見えなければ訳が分からない怪奇現象でも帝国は慣れたもので、焦らず全軍急停止。エマーリオとの距離はおよそ九十ミール弓の射程圏内だ。

弓兵達は素早く弓を構え、一斉に放った。

ヒョウヒョウと風切り音をたて無数の矢が緩い弧を描きエマーリオに降り注ぐ。

対してエマーリオは足元の草むらに隠しておいたタワーシールドを拾い上げ、斜めに立てかけその後ろに隠れた。殺到する矢の雨は全て分厚い鋼鉄の盾に阻まれ地に落ちる。

帝国の弓兵達は動揺した。無理もない、普通の魔法使いは魔法で防御するか跳ね返す。

魔法使いは後方で守られているのが常識で、エマーリオの様に単騎で姿を表す事自体帝国にとって初めての経験だ。

魔法使いを相手にする時とはとにかく魔法を使わせ続けなければならぬ。休む間を与えず押し押して、魔法が尽きた所を仕留める

のだ。盾で防がれてしまうと射かける意味は無い。

後方で帝国を指揮する工カテリーナは二射目の号令を躊躇した。その躊躇が一射目と二射目の間に致命的な空白を作る。

エマーリオは第二射が来る前に盾を投げ捨て、ローブの下に隠した鞘から抜剣すると帝国軍のド真ん中に瞬間移動した。直後移動先地点で剣が閃き瞬きする間に四人の首が飛ぶ。

エマーリオの周囲の兵は恐慌状態に陥った。

熟練の魔法使いの最大射程が九十メートル。これは弓の射程と大体重なる。

帝国は度重なる魔法使いとの交戦で魔法の射程を凡そ把握していた。魔法使いは敵を自分に近づけたがらないから、射程圏内に入った瞬間に魔法を使ってくる。最前列の槍兵は言わば射程を見極めるための捨て駒だったのだ。

ところがエマーリオの射程は帝国の想定より遙かに長い前代未聞の二百七十三メートル。加えて有り得ないと思われていた特攻の動揺する兵の間をエマーリオが縫うようにして駆け抜けた。すれ違いざまに剣が幾度も風を切り、はねられた首はその数二十。

エマーリオはエルマーの剣の師であり、若かりし頃は王国一の剣士でもあったのだ。肉体は衰えようと技の冴えに衰えはない。

血と脂で切れ味が鈍り、二十一人目の首をねじ切る様に斬り落とした剣は折れ飛んだ。

くるくる回り地に落ちる刃を見て我に返った兵達は狂乱の絶叫を上げ、エマーリオに殺到した。

一秒でも早く殺さなければ自分が死ぬ。恐怖に身体を蝕まれながらも逃走しなかったのは流石訓練を積んだ帝国兵と言えるが、エマーリオは斬り殺した兵の手から大剣をもぎ取り、即座に腰を落とす一歩大きく前に踏み込み尻払う。正面にいた三人の兵が纏めてあばら骨を粉々に碎かれ崩れ落ちた。エマーリオは振り抜いた大剣の遠心力を殺さず、重心を後ろに残した足に戻しつつ反転、背後に迫っていた兵二人の肋骨を粉碎し吹き飛ばす。

一連の動きで折れ曲がった大剣をエマーリオは手近な兵に投げつけ怯ませ、代わりに屍の手から今度は棍をもぎ取る。そして半狂乱でがむしゃらに斬りかかる兵に応戦した。

前のめりに上体を倒し左から首を持つていこうとした剣の下を潜り、右からハンマーを振り下ろそうとしている兵の鳩尾を棍でしたたかに打ち据えつつ背後に蹴りを放ち後ろの兵の股関節を潰す。

頭上の剣が過ぎるや身を起こしたエマーリオは、剣を振り抜き隙を見せた兵の利き腕に鋭い棍の一閃を見舞った。呻き声を上げ取り落とした剣の腹を蹴り上げ、左手で柄を握る。

右手に棍、左手に剣の歪な二刀流をとったエマーリオは群がる兵を片端から薙ぎ倒した。

踊るような戦い、という表現があるが、エマーリオの戦い方はまさしくそれだった。動きに無駄が無いのは勿論、一つ一つの動作が次の動作を意識しており、止まる事なく滑らかに繋がっている。まるでエマーリオの殺戮の舞に兵が吸い込まれていくようだった。

八万を相手にするとは言え、一度に相手にしなければならぬのは精々三、四人。三、四人を相手に戦い続ければ良いのだ。エマーリオにとってそれは不可能な事ではない。血の臭いを嗅ぎ付けたピラニアの様に群がる兵を紙一重で、しかし確実に捌き戦闘不能にしていく。

そうしてエマーリオを中心についてしか密集していた兵達は全員身体を半分に斬られ、絶命する。

近接での戦いを続ける事で魔法への警戒を薄れさせ、一網打尽にしたのだ。エマーリオを囲んでいた兵の上半身が一斉にずりりと地に落ち鮮血が噴き出す様は白昼夢。それも最悪の悪夢のようだった。

全身に返り血を浴び、屍に囲まれたエマーリオは息を整えつつ口を脱ぎ去った。

上半身に鎖帷子を身に付け、下半身には頑丈な革の長ズボン。鎖帷子の下にはとても老人のものとは思えない引き絞られた筋肉があ

った。

エマーリオは手の甲で口の端を拭い、刃こぼれした剣と亀裂が入った棍を捨て、大鎌を拾い上げ構える。白髪に赤い斑点をつけ大鎌を掲げるエマーリオはもはや死神にしか見えない。帝国兵は本能的恐怖に身震いし、我知らず後退る。完全にエマーリオに吞まれていた。

その時、ようやく指揮系統が復活した。ラツパの音が粘つく緊張を孕んだ空気を切り裂いて鳴り響き、兵が波の様に引いていく。エマーリオは追わず、その場で油断無く大鎌を構えながら荒い息を整えた。

魔法使いは魔法しか使えない、という事はない。鍛えれば普通に近接戦闘も可能だ。遠近両方の戦闘ができれば当然その方が強い。

ではなぜ普通の魔法使いがそれをしないかと言えば単純に死ぬ可能性が急上昇するからだ。敵の攻撃が届かない安全な位置から一方的に攻撃できるならそれに越した事はない。

しかし今回エマーリオが相手にしているのは八万の兵の津波。魔法攻撃一辺倒ではあつという間に魔力が尽きる。

故に上手く魔法と近接を交互に使い、魔力の消費を抑えつつ体力の回復を図るのだ。一歩間違えればあつという間に死ぬが、間違わなければ恐ろしい戦果を叩き出す戦い方だった。

エマーリオは帝国軍に完全に包囲されているが、むしろ危険なのは帝国の方だった。特攻する魔法使いの対策をしていなかった事もあり、被害は既に想定を越えつつある。それでもまだまだ増えるだろう。

しかし撤退して態勢を立て直す事はできない。時間を置けば魔力は回復し、魔法の使用回数も回復する。半端に攻めて撤退して、では被害は増えるばかりだ。更に撤退すれば今まで常勝だった分士気も著しく低下する。

無理やりにも押し切ってしまうしかない。そのための八万の兵だ。

エマーリオの息が整うのとほぼ同時に帝国は陣形を組み直し終えた。

今度は一斉に斬りかかってくる事なく、一人が倒されたらすぐもう一人が切りかかる、という一対一を延々と繰り返させる戦法に切り替わった。視界の端でエマーリオを遠巻きに取り囲む兵もただ見ているだけではなく、武器をちらつかせ時折投石を行いプレッシャーをかける。

エマーリオは魔法も使わず延々と敵を斬り伏せ続けた。心臓を貫き、槍を受け流し、喉笛をかつ切り、斧をかわし、頭を殴打し、投石を弾き、首を折る。

手にした武器は次々と壊れていき、そのたびに新しい武器に代えていく。

武器を持ち替える隙が無ければ素手で戦った。鞭の様にしなる腕で顎を強打し、脳が揺れてふらつく足を刈り、自分と体の位置を代えさせ背後からの鎚の一撃を防御すると同時に同士討ちさせる。あるいは手刀で目玉をえぐり、絶叫する兵を背負い投げして地面に叩き付け、情け容赦なく首を踏み潰した。

足元には地面が吸いきれない量の鮮血によって紅い池ができていた。むせかえるような血の臭いの中で碧眼を爛々と輝かせエマーリオは悪鬼にも英雄にも見えた。どちらにせよ凄絶には違いない。

やがて積み上げた屍が高くなるにつれエマーリオの動きが鈍り始める。老いた体では集中力が続いても体力が続かない。

疲労していくエマーリオをと反比例して帝国兵の士気は上がっていった。

魔法使いも人間だ。かつてないほど優れた魔法使いではあるが、決して勝てない相手ではない。

戦場の空気にアテられた帝国兵達は自らの命を省みず、我こそ彼のを討ち取らんとエマーリオに挑み、そして散っていく。消えた命の数だけ確実にエマーリオの体力は削られていた。

耳をつんざく爆音が戦場に轟いたのは、エマーリオが大上段から

振り降ろされたグレートソードをシミターで受け止め、押し込まれて膝を折った時だった。

帝国兵は何事かと反射的に音源に目を向けた。

下手人は町を囲む土壁から飛び出した絶世の美女とそれに追従する精悍な剣士、シルフィアとエルマー　　を模した土人形だった。本人達は土人形を創ると同時に自らに透過魔法をかけ姿を消している。

土人形とは言え外見は完全にオリジナルをコピーしており、見た目で判別するのは不可能。そこに感覚同調と操作魔法をかけ、本人と遜色ない動きを可能とする。

結果だけ抜き出せば魔法の行使者が土人形に憑依して操っている形になる。体が欠損した瞬間大爆発する条件付けをした魔法もかけであった。

それぞれの魔法は多重持続魔法で効果時間を伸ばしてあり、一分は身体を保っていられる。

二人は疾風の様に駆け抜け、慌てて武器を構えた帝国兵を数人天高く殴り上げた。

その明らかに有り得ない腕力に、帝国兵は魔法使いだ！　と絶叫を上げる。

エマーリオと戦う前ならば魔法使いに強化魔法をかけられた非魔法使いである可能にも頭が回っただろうが、まさに肉弾戦を仕掛ける異色の魔法使いと戦闘中の帝国兵は疑う事も無く新手の魔法使いだと信じ込む。

それは町の中から魔法で戦況を監視していた魔法使いも同様で、本人達の姿が先程いた場所から消えている事もあり、二人はエマーリオの助太刀へ向かったのだと思ひ込んだ。

しかし数人に鉄拳を見舞い殴り上げた所で二人は帝国兵に襲いかかられ、剣で数回切り結び、切り傷を負う。

瞬間、大爆発が起きた。

爆炎と爆風が周囲の兵をなぎ倒し吹き飛ばし、離れていた兵も爆

音で一時的にショック状態になった。

爆心地には半径三ミールほどのクレーターができ、灰と肉片と武器の破片がパラパラと落ちてくる。

帝国兵は呆然とし、困惑した。呆気ないと言えばあまりに呆気ない魔法使いの最後。強力な人型爆弾を投げ込まれた様なものだった。二人の突撃から自爆まで時間にすれば精々十数秒だっただろう。

その間にエマーリオの動きは最高潮に戻っていた。レイピアが手が霞む速度で空を切り、正面にいた兵の首から血が噴き出す。

再び敵陣奥へ瞬間移動したエマーリオの暴風の如きレイピア捌きにバタバタと兵が倒れていった。

魔法知識が半端な帝国兵にはほんの少し目を離しただけで体力を全快させた様に見えた。兵達はあれだけ犠牲を出して削っても無駄だったのか、と恐れおののく。

有り得ない速度での体力回復も「これは魔法ではない」と思わせってしまう異常さをエマーリオは持っていた。

はったりの効果は絶大だった。どれだけ攻撃し続けても切り傷一つ負わず隙一つ見せないエマーリオ。たった一人の魔法使いに帝国が押されている。

帝国兵の間にじわじわと絶望感が広がっていく。

こいつは化物だ。人間が勝てる存在ではない。

そんな戦場の空気の変化を敏感に感じ取ったのは、後方で指揮を飛ばしていた。エカテリーナだった。

このままではまずい。

帝国の被害が出るばかりでエマーリオに有効打を与えられず、士気が落ちている。負ける事こそ無いだろうが士気の低下は死傷率の上昇を招く。

帝国はエマーリオを倒して終わりではないのだ。王都へ攻め登り、残存勢力を叩き潰し、戦後も軍の体裁を保てるだけの戦力を維持しなければならぬ。ここで兵を損耗させる訳にはいかなかった。

既に帝国の死者数は千を超えていた。もっともいつそ清々しいまでの必殺で、負傷者は驚くほど少ない。

エカテリーナは決断する。自分がこの流れを変えなければならぬ。でなければ総大将が前線に出た意味が無い。

エカテリーナは横に控える副官に采配を預け、馬から降りた。

訝しげに何のつもりかと尋ねる副官にしばらく指揮を頼むとだけ言い、エカテリーナは姿勢を低くし戦場を駆けた。背後から聞こえる泡を食った副官の声は無視した。

総大将が前線に立つと指揮を出し易くなるのは勿論、土気上昇効果がある。兵としても命をかけるならば後方でふんぞり返っている大将よりも同じ戦場に立つ大将の方がやる気も出る。

大将の存在は大きい。討ち取られれば帝国は瓦解する。

しかしそれ故に、大将が剣をとり武威を見せつけければ兵はこれ以上無いほど奮起するだろう。

兵の間をすり抜け疾走するエカテリーナの顔は抑えようもない笑みを作っていた。帝国の皇帝は即ち帝国最強の武人。エマーリオの獅子奮迅の戦いを見て血が騒いでいた。

分厚い兵の壁を走り抜け、エカテリーナは回し蹴りを兵の腹に深々と食い込ませ蹴り飛ばしているエマーリオを視認した。舌なめずりをし、肉食獣のような狩りの雄叫びを上げ腰の双短剣を引き抜く。が、エカテリーナは突然急停止し、短剣を投擲しながら無理やり後ろに跳んだ。直後、エカテリーナのいた空間にほんの一瞬亀裂が見える。エマーリオとエカテリーナは互いに驚愕に目を見開いた。エマーリオは魔法を回避された事、エカテリーナはかつてないほど濃密な覇気を感じ取った事に少なくとも動揺を感じた。

魔力の密度差は魔力覚醒しているか否かに関係なく圧迫感、威圧感を生む。

エマーリオは人類最高峰の魔力密度を持ち、反対にエカテリーナは人類最低の魔力密度を持っていたのだ。

エカテリーナは常に他者に威圧され、しかし鋼の精神力ではねの

け続け生きてきた。エカテリーナはほとんど全ての人間に対してプレッシャーを受けるのだが、それを逆手に取り相手の動きや気配を読む事で帝国最強にまでのし上がっていた。

そんな威圧感、つまり魔力に殊更に敏感だからこそ、エマーリオが伸ばした魔力が自分の身体に侵入する事に強烈な違和感を感じ、避ける事ができたのだった。

エマーリオは投げられた二本の短剣を避け、弾き、場にそぐわない落ち着いた興味深そうな目でエカテリーナを満た。エカテリーナはごくりと息を飲み、予備の短剣を抜く。

戦場の音が死んでいた。兵は皆動きを止め、二人の動きを固唾をのんで見守る。

数年前、エマーリオが常時展開している魔力は半径八ミールだった。しかし魔術を修めきれず半端に習得してしまったため魔力操作が乱れ、現在常時展開できているのは精々半径二ミール。それ以上の距離で魔法を使おうと思えば意識的に魔力を伸ばすしかない。

エカテリーナはエマーリオが伸ばしてきた魔力を察知し、横つとびに避けた。エカテリーナの身体があつた場所で小さな爆発が起こる。

その反応に魔力覚醒しているのか？ と眉をひそめたエマーリオだが、エカテリーナの魔力密度の低さからすぐさま正答を弾き出した。

エマーリオは直接エカテリーナに向かわないよう、左右へ回り込ませるようにして魔力を伸ばした。それを察知した訳ではないが、エカテリーナがその俊足をもってエマーリオの懐へ飛び込んだ。

刹那の一瞬、短剣とレイピアが交差する。

エカテリーナが腹を狙った左の短剣はレイピアに防がれたが、コンマ一秒の時間差で首を狙い下から振り上げられた右の短剣はエマーリオの頬を切り裂いた。

エカテリーナは一回転しながらエマーリオの脇腹に肘鉄を入れ、突き飛ばした勢いに乗って走り抜ける。小爆発がエカテリーナの背

中の肉を抉ったが、齒を食いしぼりなんとかその場を離脱する事に成功する。エマーリオはエカテリーナを包囲しようと前方に伸ばしていた魔力を背後に向けたが、魔力の移動よりもエカテリーナの足の方が数段早い。エカテリーナは一撃離脱に成功した。

途端に歓声が爆発した。

総大将が一騎打ちでエマーリオに手傷を負わせた。帝国兵の士気はこれ以上無いほどに上がる。

一種のトランス状態に嵌った帝国兵は、今度こそエマーリオの氣迫に打ち勝ち怒濤の攻勢を見せた。

なんとか後方に駆け戻ったエカテリーナは大歓迎を受け、引きつった笑みでそれに答えた。

エマーリオから離れた事でどっと嫌な汗が吹き出していた。遅れてきた極度の緊張に手足がガクガクと震えるのを抑えるのに全精力を費やす。ここで大将が崩れ落ちては命をかけた意味がない。

エカテリーナは平静を取り繕い、衛生兵に背中への傷の手当てをさせながら今にも張り裂けそうな心臓を押さえた。

次は、死ぬ。

エカテリーナが生き残っているのは運が良かったからだ。エマーリオの魔法の発動がほんの少しでも早ければ命はなかった。

二度目はこうはいかない、とエカテリーナは思う。次は必ずタイミングを合わせてくるだろう。

しかしその「次」はない。エマーリオはここで死ぬ。死ななければならぬ。

エカテリーナはかつてないほど鮮烈な死を感じさせたエマーリオに深い畏怖と畏敬を抱いた。彼が味方であればどれほど頼もしかった事か。

だが今それを言っても詮無き事。

賽は投げられたのだ。もはや帝国はエマーリオを 王国を飲み込むまで止まらない。

決して。

帝国兵は止まらなかった。

全長二十メートルの土の巨人（中身は空）を創っても怯まず、竜巻を起こしても突き進んでくる。

熱狂した帝国兵はほとんど死兵と化していた。戦好きな帝国民の血がそうさせるのだ。王国の兵ではいくら士気があがるうところはいいかない。

エマーリオは体力を回復させる暇がなかった。帝国兵には威嚇もはったりも通じなくなっており、ひたすら愚直に向かってくる。魔法で疲労を消したり土壁で自分を囲み安全地帯を作ったりはできるが、体力回復のために魔力を消費してはわざわざ斬り合いを演じる意味がない。一度魔法で体力を戻したのははったりをかけるためであり二度目は無意味。

やがてエマーリオは斬り合いを控え魔法を頻用するようになった。そうせざるを得なくなっただけとも言っても良い。

エマーリオを囲む兵の体が魔法で横一線に両断されていくが、兵

の密度が薄いため一度にあまり多くは仕留められない。エマーリオを中心に円形に空いた空間はすぐさま後詰め兵に埋められた。それをまた魔法で一掃し、命を惜しまぬ兵がまたエマーリオを囲む。

同じ魔法の繰り返しで相当数の兵が倒れていったが、魔法の知識が無い帝国側は兵の密度を薄くする以上の対策を立てようがなかった。

エマーリオは多大な犠牲を帝国にもたらしながらも確実に疲労していく。

数度魔法を使い、斬り合いに切り替え、疲労が溜まれば魔法で兵を倒しながら体力回復を図る。

朝から始まった戦闘はいつしか昼になっていた。

エマーリオの莫大な魔力は効率良く節約して使ってはいたが、もう残り少ない。

休憩を挟もうと抜けきらない重い疲労にととうエマーリオは腕が痙攣し始め、長槍を地面に突き刺しそれに掴まって立つ様になった。鎖帷子の下に無数の青あざができ、頬の他にも手に背中に足に傷を作り血を滲ませている。

吐き出す息は荒く、額から汗が珠になって赤い地面に落ちた。エカテリーナから受けた傷を皮きりにじわじわと受けた怪我はエマーリオの動きを鈍らせ体力回復を遅らせる。

エマーリオは短剣を拾い上げ、魔法をかけて鋭く投擲した。狙いが甘く標的の心臓ではなく肩に突き刺さったがそれでも良い。短剣は内部で小さな小さな爆発を起こし、飛び散った破片が数人の兵を負傷させた。

しかし負傷した兵は無言で頷き合い、体の至る所に食い込んだ破片を抜きもせず武器を構えエマーリオ突撃をかけてきた。逝かれているのは自分なのか兵なのか、それすらエマーリオには考えられないほどの疲労が蓄積している。

エマーリオは地面から槍を引き抜き、背筋を伸ばし、構えた。

切りかかってくる負傷兵に渾身の力を込め一閃。槍は革鎧の上か

ら骨をへし折り、変わりに折れて木の皮一枚で繋がっている状態になる。

その一撃でエマーリオの体力は底をつき、手から壊れた槍が滑り落ちた。そこに追い討ちがかかる。

ドス、とふらついたエマーリオの背中に一本の矢が突き刺さった。エマーリオは目を見開き、がくりと膝をついた。

どこか遠く、帝国兵の歓声が聞こえる。灼熱の痛みに声を出さず喘ぎながらも、手を握りしめまだ体が動く事を確かめる。エマーリオは矢が心臓や脊髄を傷つけなかった事に安堵した。痛覚は半分麻痺しており、痛みはあまり感じない。

ふらりふらりと、エマーリオは幽鬼のように立ち上がる。

これでとどめだとばかりに獣の様な雄叫びを上げ呐喊する兵の波を、エマーリオは両手を広げ微笑みすら浮かべて迎えた。

そして先頭の兵の剣の先が届く寸前にエマーリオの体から最後の魔力を注ぎ込んだ火柱が上がる。

エマーリオはこの戦いでずっと小さな魔法ばかり使ってきたため、直径三ミールに及ぶ火柱は鮮明に帝国兵の印象に残った。

空を焦がす火柱は十数人の兵を焼き尽くし、しばしの間燃え続け、唐突に消えた。

後に残るのは真っ黒に焼け焦げうつすらと煙を上げる地面のみ。

討ち取った兵数、六千八百。

帝国に重すぎる痛打を与えた大魔法使いエマーリオの体は、骨も残さず燃え尽きた。

二十話 The end of . . . . . (後書き)

くエマーリオが手段を選ばず戦っていた場合く

- ・撤退を意味するラツパの音を魔法で再現し、指揮を混乱させる
- ・エカテリーナに化けて更に指揮を混乱させる
- ・事前に大量の落とし穴を作っておく、火薬樽を埋めておく
- ・王国軍の大隊の幻影を創り威圧をかける
- ・帝国兵の体を操り同士討ちさせ、疑心暗鬼に陥らせ内部から崩す
- ・補給部隊を襲い食料や予備兵装を奪う
- ・シルフィアがしたように土人形を使い死んだと見せかけ、気が緩み油断した隙に強襲
- ・わざと殺さず負傷に留め、動けない兵数を増やし、士気の低下を狙う

などなど。王国のためにそこまでする義理は無かったのでやりませんでした。が、やろうと思えば帝国の被害を三倍ぐらいにできたでしょう。

書いててエマーリオを勝たせてしまいそうになった。一人で六千八百人倒すとかそれなんて中二病？でも魔法があれば案外いけそうなのがするんだ

賢者は、生きられるだけ生きるのではなく、  
生きなければいけないだけ生きる

ミシェル・ド・モンテーニュ

【既出設定集】（前書き）

本編最新話の時点で判明している、主に魔法についての設定をまとめたものです。

最新話の更新と平行して更新していきます。

設定を思い出すために本編を読み返すのが面倒な時にでもお使い下さい。作者も使います。

## 【既出設定集】

### 【魔力覚醒と秘薬について】

特定の植物から作られる秘薬を摂取するか、植物を直接摂取する事で魔力を感じ取れるようになり、また操れるようになる。

魔力を感じ取れるようになり、また操れるようになる事を「魔力覚醒する」と言う。

現在確認されている秘薬薬草は三種類。

#### ・マンドラゴラ

帝国が独占中。有毒。毒の中和剤が存在する。毒の中和をしなければ身体に重度の機能障害が生じるが、魔力覚醒自体は問題無い。ロバートの手によって絶滅した

#### ・ムスクマロイ

主人公が村の近くの森の奥で発見した薬草。甘い。毒は無い。摂取して数日は凄くムズムズする。普通に群生しているが存在を知っているのはロバート、シルフィア、エルマー、ロバート配下の人間ゾンビのみ。苗を村に持ち込み試験栽培中。ちなみに名称の出席は F F T A

#### ・トレント

薬草ではなく、大根に酷似した形の木。東の森の奥に存在する。葉、枝、幹、根など、全ての部位に魔力覚醒効果があるが、いずれの部位も猛毒。摂取すると死ぬ。中和法は発見されていない。

## 【魔力について】

魔力は万物に宿る。基本的には物質に宿るが、真空中にも存在できる。

魔力には量と密度が存在する。

密度と量は反比例する。

魔力は形質魔力と純魔力に分けられる。

純魔力…… 大気中や土中など無生物中に含まれる魔力

形質魔力…… 人間が持つ受け渡し不可能な魔力。どうやらゾンビ・ヴァンパイアの腐敗を止めるはたらきがあるらしい。

形質魔力は外部の純魔力を取り込み体内で変換して精製している。

魔力密度差が四倍以上あると密度が低い生物は高い生物に対し圧迫感、威圧感を感じる。

自然状態で帯びている魔力密度は「大気中・無機物中<草<木<小動物<大型動物<人間」

人間の保有魔力密度には個人差があり、平均を1.0とした時、最低値はエカテリーナの0.2、最高値はエマーリオの10.0強。ロバート2.0、シルフィア4.0弱、エルマー5.0（一章十話時点）。密度判断はロバートの感覚と主観に基づく。

生物の場合通常魔力を体内に保有し、肌から弱く発散している。他者の形質魔力が混ざっても、最長で二日も経過すれば混ざった状態から戻り、自分の形質魔力になる。

生物が死ぬと保有していた魔力は空気中に拡散する。その時魂のような魔力の塊が一瞬見えるが、それが何なのかは不明。

## 【魔術について】

魔術とは『魔力操作によって起こる魔法的現象』の事。広義では魔術を起こすために必要な魔力操作技術も含む。

魔力放出……魔力を体から伸ばし、もしくは切り離れた状態で維持する技術

魔力固定……密度差がある魔力と接触した際の魔力拡散を防ぎ魔力を固定する技術

魔力体内操作……魔力を体内で循環・移動させる技術

魔力圧縮……魔力密度を上げる技術

魔力希釈……魔力密度を薄める技術

放出・固定・体内操作・圧縮・希釈を纏めて『魔力操作』と呼ぶ。

魔力放出が可能な距離の外に出た瞬間に形質魔力は純魔力になり、制御を離れる

魔力操作は集中力の問題で基本的に四日程度までしか継続できない。例外として並列思考ができる者はこの限りではない。また習慣化した魔力操作も除外する。

・不完全固定（クリエイトゾンビノリッチノスケルトンノグール）  
死体を魔力固定が不完全な魔力で包み、拡散しようとする魔力を体に押し戻す。この時混じった創造者の形質魔力が支配力とテレパシーの源になっている。

・完全固定（クリエイトレッツサーヴァンパイアノヴァンパイアノデユラハンノリビングデッド）

死体を魔力固定が完全な魔力で包み、拡散しようとする魔力を体

に押し戻す。この時創造者の形質魔力は混ざらない。

・ゴースト化

死亡時に拡散する魔力を魔力操作により留め、体を保持する。木の霊の木の寿命が尽きるとゴーストが生まれるが、プロセスは前述のものとは変わらない。

・ドッペルゲンガー技術

ゴースト系ノーライフが行使する。魔力固定、体内操作、圧縮、希釈を高度なレベルで操る事で自在自身の体の形状と大きさを変化させる。これを習得する段階に至ると凡そ二年に1・0（ロバート主観）程度魔力密度を上げられるようになる。

・純魔力授受

「形質魔力は外部の純魔力を取り込み体内で変換して精製している」「魔力放出が可能な距離の外に出た瞬間に形質魔力は純魔力になり、制御を離れる」この二つの性質を利用したもの。他者の形質魔力を純魔力にして受け取り、約三日かけて自身の形質魔力に変える事で一時的に最大魔力密度の上昇ができる。純魔力授受には取り込む純魔力と自身の形質魔力の密度差にも左右されるが強烈な不快感を伴う。

【魔術で生まれた存在について】

ゾンビやスケルトンは肉体ではなく形質魔力が「個」を作っているらしい。

ノーライフの動力源は魔力。魔力が切れると活動停止するか、魔力が回復するまでの数分間一時停止する。

ノーライフ……魔術によって生まれた存在の総称

下記の定義で分類呼称されるが、クリエイト系の魔術が使える様になると頭に「ハイ」がつき、動物だと「アニマル」、植物だと「プラント」がつく。

つまりトレントのゴーストは「プラント・ゴースト」。木霊は種族名ではなく個体名となる。

生物（不完全固定） ゾンビorリッチ（不完全固定） スケルトン

生物（不完全固定） ゾンビorリッチ（完全固定） デュラハン

生物（完全固定） ヴァンパイアorレッサーヴァンパイア（不完全固定） グール

生物（完全固定） ヴァンパイアorレッサーヴァンパイア（完全固定） リビングゲッド

『非実体』

・ゴースト

今の所存在しているのはロバート、木霊のみ。生前の姿をトレースしている。誕生時、魔力密度は生前のおよそ十分の一になる。魔力は自然回復しないが、純魔力を取り込む事で回復できる。飛ぶ事ができる。体が魔力で構成されているため魔力覚醒していなければ認識できない。物質をすり抜ける。魔法に対して脆弱で、魔力密度差による圧迫にも弱い。常時魔力固定をしていなければ消滅する。

魔法が使えない。

・レイス

魔法が使える事以外ゴーストと同じ。ただし肉体が無いので魔力で構成された体を削って魔法を発動するハメになる

・ドッペルゲンガー

身体の形状を自在に変えられる事以外ゴーストと同じ

・ドッペルレイス

レイスとドッペルゲンガー両方の条件を満たした者

・シルフ

ハイ・ドッペルレイスから分裂した存在。分裂には四ヶ月間魔力を切り離し固定保持し続けなければならない。分裂後の各個体の最大魔力密度と量は大元の素体と同じレベルまで戻せる。

基本的には素体になった者と変わらないが、自身の魔力に同調（連動）して空気を動かす事ができる。何かにつかると空気だけが衝突し魔力はすり抜ける。すり抜けた先に空気があれば再び即座に同調する。同調状態ではレイスやゴーストと比べ移動速度が飛躍的に上昇する（主観魔力密度8.5で時速70km）が、同調状態ではなければレイスやゴーストと大差ない。空気と同調していなくとも全く問題なく存在できる。

魔力密度が高いほど空気との同調率が上がる。魔力と空気が剥がれにくくなる。つまり魔力密度に応じて移動速度も風の威力も上昇する。主観魔力密度8.5でなんとか小枝を切り落とせる程度。

素体と記憶や意識、感覚、視界を共有している。ただし一つの思考で群体を統御しているのではなく個体一つ一つがそれぞれ同じ意思の下で思考している。

素体になったレイスが持っているノーライフへの命令権を共有している。完全にシンクロしている訳ではなく、分裂した群体のどれか一個体が体を欠損させても他の個体に影響はない。魔力量は一体別個扱いになっている（ex・全四個体の内三体を消滅させても一体は消滅せず残る）。

#### ・ウンディーネ

ハイ・ドツペルレイスから分裂した存在。分裂には四ヶ月間魔力を切り離し固定保持し続けなければならない。分裂後の各個体の最大魔力密度と量は大元の素体と同じレベルまで戻せる。

基本的には素体になった者と変わらないが、自身の魔力に同調（連動）して水を動かす事ができる。何かにぶつかると水だけが衝突し魔力はすり抜ける。すり抜けた先に水があれば再び即座に同調する。水と同調していなくとも全く問題なく存在できる。

魔力密度が高いほど水との同調率が上がる。魔力と水が剥がれにくくなる。つまり魔力密度に応じて移動速度も水の威力も上昇する。素体と記憶や意識、感覚、視界を共有している。ただし一つの思考で群体を統御しているのではなく個体一つ一つがそれぞれ同じ意思の下で思考している。

素体になったレイスが持っているノーライフへの命令権を共有している。完全にシンクロしている訳ではなく、分裂した群体のどれか一個体が体を欠損させても他の個体に影響はない。魔力量は一体別個扱いになっている。

#### ・ノーム

ハイ・ドツペルレイスから分裂した存在。分裂には四ヶ月間魔力を切り離し固定保持し続けなければならない。分裂後の各個体の最大魔力密度と量は大元の素体と同じレベルまで戻せる。

基本的には素体になった者と変わらないが、自身の魔力に同調（連動）して土を動かす事ができる。何かにぶつかると土だけが衝突し魔力はすり抜ける。すり抜けた先に土があれば再び即座に同調する。同調状態ではレイスやゴーストと比べ移動速度が低下する（主観魔力密度8 / 5で時速2.5 km程度）が、同調状態でなければレイスやゴーストと大差ない。土と同調していなくとも全く問題なく存在できる。

魔力密度が高いほど土との同調率が上がる。魔力と土が剥がれにくくなる。つまり魔力密度に応じて移動速度も土の威力も上昇する。素体と記憶や意識、感覚、視界を共有している。ただし一つの思考で群体を統御しているのではなく個体一つ一つがそれぞれ同じ意思の下で思考している。

素体になったレイスが持っているノーライフへの命令権を共有している。完全にシンクロしている訳ではなく、分裂した群体のどれか一個体が体を欠損させても他の個体に影響はない。魔力量は一体一体別個扱いになっている

#### ・サラマンダー

ハイ・ドツペルレイスから分裂した存在。分裂には四ヶ月間魔力を切り離し固定保持し続けなければならない。分裂後の各個体の最大魔力密度と量は大元の素体と同じレベルまで戻せる。

基本的には素体になった者と変わらないが、自身の魔力に同調（連動）して火を動かす事ができる。何かにぶつかると火だけが衝突し魔力はすり抜ける。すり抜けた先に火があれば再び即座に同調する。同調状態ではレイスやゴーストと比べ移動速度が飛躍的に上昇

するが、同調状態でなければレイスやゴーストと大差ない。火と同調していなくとも全く問題なく存在できる。

魔力密度が高いほど火との同調率が上がる。魔力と火が剥がれにくくなる。

いつでもどこでも常に熱と光を発生させ続ける能力がある。主観魔力密度8.5で熱は50程度、光は暗闇で仄かに赤く光って見える程度。自分の意志で光熱を止める事はできないが、魔力希釈・圧縮で強さは操作できる。

素体と記憶や意識、感覚、視界を共有している。ただし一つの思考で群体を統御しているのではなく個体一つ一つがそれぞれ同じ意思の下で思考している。

素体になったレイスが持っているノーライフへの命令権を共有している。完全にシンクロしている訳ではなく、分裂した群体のどれか一個体が体を欠損させても他の個体に影響はない。魔力量は一体一体別個扱いになっている

#### ・駄レイス

精霊に分裂できない事以外レイスに同じ。二種類以上の精霊が合体するか、精霊が他の種類の精霊になろうとする事で生まれる。

同種の精霊は各個体の形質魔力が限りなく近い性質を持っている。100%完全に一致しているかどうかは不明だが、同種個体間で転送魔法が使える。

#### 『実体』

## ・ゾンビ

死んでから大体八〜十時間で体に魔力が定着し動き出す。細胞活動が完全に停止している。心臓が動いておらず、体温も無い。食事、呼吸の必要が無い。不老。首を落とされると活動を停止する。負傷が自然回復しない。魔力量と密度は生前とほぼ変わらない。創造者に服従する。創造者とテレパスが繋がっている。創造者側からのイメージは正確に伝えられるが、ゾンビ側からのイメージは非常にぼやける。簡単なイメージなら比較的是っきり伝えられる。魔力は自然回復する。魔力覚醒している。創造者からの命令が無い限り生前と同じ思考で自律的に行動する。疲労しない。魔法が使えない。

「進化、変化」においてゾンビトカゲが夜行性になっていたが、単に食事の必要が無くなったので天敵に見つかりやすい昼間に餌を探しに行く必要が無くなり、夜に動くようになっただけである。

## ・リッチ

魔法が使える事以外ゾンビと同じ

## ・スケルトン

活動を停止したゾンビを不完全固定の魔力で包む事で誕生する。肉や皮膚が腐り落ち骨だけになっている。創造者に服従する。創造者とテレパスが繋がっているが、反応が悪い。魔力がある限り高速再生する。魔力は自然回復しない。ほどよい密度の魔力を注がれれば保有魔力量は回復する。思考能力が低く、命令されない限り全く

行動を起こさない。魔法に必要なイメージができないため魔法は使えない。

#### ・デュラハン

活動を停止したゾンビを完全固定の魔力で包む事で誕生する。創造者に服従する。創造者とテレパスが繋がっているが、反応が悪い。再生能力は無いが代わりに身体能力が高い（魔力密度にもよるが凡そ二倍前後）。

誕生時に首はとれているのだが、行動を視覚や聴覚情報などに頼っていないらしく首がとれていても体は普通に動く。頭を潰しても動くもののやっぱり魔力が尽きれば停止する。リビンググデッドと區別をつけやすくするためデュラハンの首はもげたままにされる。魔力は自然回復しない。ほどよい密度の魔力を注がれれば保有魔力量は回復する。思考能力が低く、命令されない限り全く行動を起こさない。魔法に必要なイメージができないため魔法は使えない。

#### ・ヴァンパイア

死んでから大体八〜十時間で体に魔力が定着し動き出す。細胞活動が完全に停止している。心臓が動いておらず、体温も無い。食事、呼吸の必要が無い。不老。首を落とされると活動を停止する。負傷が自然回復しない。魔力量と密度は生前とほぼ変わらない。創造者の形質魔力が混ざらないため、誕生時に魔力覚醒する事は無い。ただし生前魔力覚醒していればその状態が継続され、ヴァンパイアになつてから魔力覚醒する事もできる。創造者の形質魔力が混ざらないため支配力もテレパスも発生せず、完全に自律行動する。魔法が使える。

蘇生後数日は問題ないが、十日ほどで身体が動かしくなくなり

じめ、二十日で思考の混濁が始まり身体が動かなくなり、三十日で意識を失う。それからゆっくり身体が腐り落ちていく。定期的に生きた人間の肉を食べるか、血を吸う事で（自身と組成が近い有機物  
即ち肉や血を体内に入れ、物質から放出される形質魔力を  
取り込む事で）この症状は解消される。

#### ・レッサーヴァンパイア

魔法が使えない（密度不足 or 魔力未覚醒）事以外ヴァンパイアと同じ

#### ・グール

活動を停止したヴァンパイアを不完全固定の魔力で包む事で誕生する。自動再生能力（弱）があり、落ちた首がくっついて一見ゾンビの様に見える。スケルトン並に自我が薄く、しかし支配力は発生している。命令の効きが鈍いのはスケルトンと同じ。魔力の自然回復ができず、魔力が切れると一気に腐敗して骨になる（活動停止する）。ほどよい密度の魔力を注がれば保有魔力量は回復する。創造者に服従する。創造者とテレパスが繋がっているが、反応が悪い。思考能力が低く、命令されない限り全く行動を起こさない。魔法に必要なイメージができないため魔法は使えない。

スケルトンに見られる超再生能力が腐敗の進行を止めているらしい。常に腐敗を止めるために再生し続けているため、何もしないなくても魔力の消費が早い。スケルトンと比較して倍ほどの早さで減っていく。

#### ・リビングデッド

活動を停止したヴァンパイアを完全固定の魔力で包む事で誕生する。

身体能力が高い（魔力密度にもよるが凡そ二倍前後）。魔力は自然回復しない。ほどよい密度の魔力を注がれれば保有魔力量は回復する。ヴァンパイアと同様に腐敗していく（防止策も同じ）。自我がはつきりしていて支配力が発生していない。

身体能力が高い、というのは魔力を消費して自動で行われる強化が原因らしく、スケルトンと比較して倍ほどの早さで魔力が減っていく。

復活時点で首が落ちているが、目から得た情報で体を動かしているらしく頭がとれていると体の動きが滅茶苦茶。首を体に縫い付けてやると普通に動く。リビングデッドの首は復活後すぐに体に縫い付けられる。

### 【魔法について】

魔法とは『自身の形質魔力を自らの意思により変換して起こす現象』の事。

魔法行使には一定以上の密度の魔力が必要。

魔法は魔力に干渉可能。

念話魔法……慣れるまでは酔う。

複製魔法……コピー元になる物とコピー元を再現するために必要な材料を用意し、両方を魔力で包み魔法を使う事で複製を行う。生物を複製する場合は高等な（？）生物ほど高い魔力密度が必要になる。治療魔法……原則的に「治療促進」を行う。従って自然治癒しないものは治せない。魔法の効果が行使者の認識に依存しているため手

足の再生や目に見えない内部の損傷も不可能。

魔法使い一人で熟練した兵士二十人分の働きをすると言われている。魔法に覚醒し、まともな戦闘が可能になるまでには最低一年間の修練が必要となる。

魔力密度が魔法の威力、量が規模にそれぞれ反映される。魔法は己の形質魔力を消費して発動され、魔力が尽きれば使えなくなるが、おおよそ一晩休めば全快する。また魔法は己の形質魔力が存在する場所でのみ発現する。魔力覚醒直後は自身の体内、体表にのみ魔力を纏っている状態であり、従って行使可能な魔法は自己に作用するものに限定される。

他者の形質魔力と混ざった形質魔力では魔法は使えない。操作もできない。

魔法は魔法に変換する魔力を意識しつつ起こす魔法を強く想像する事で発動する。魔力を意識するだけでは発動せず、魔法を想像するだけでも発動しない。

魔法は密度と量により威力と規模の制限はつくが、想像次第でどんな現象でも起こす事ができる。

ex . 炎魔法は魔力を消費し一気に燃え上がり消滅し、念動魔法は魔力密度が持続時間に影響する。魔法で物質を創造した場合は効果時間が切れると同時に物質が消失する。

魔法の効果時間と威力は魔力密度と基本的には比例しているが、同系統の魔法を幾度も行使していると威力と効果時間は微々たるものだが上がっていく。

特定の条件により発動する魔法を行使した場合、行使者が条件が満たされた事を知覚できなければ発動しない。

発動待機状態の魔法は時間経過と共に徐々に威力を落とし、やがて発動しなくなる。

対象を二重の魔力で包み、魔法を発動させ、『魔法を持続させる魔法』を連続して発動させる事で魔法の持続時間を伸ばす事ができる。水魔法の場合は水の出現から消失までの時間が約四倍に伸びる。他の魔法も二〜六倍に伸びる。三重、四重にする事で更に持続時間は伸びる。これを二重持続魔法、もしくは多重持続魔法と呼ぶ。

魔法で消費された形質魔力の八分の七は純魔力になる。八分の一が魔法になっているのだろうと予測されている。

特定の性質を記録した魔力を持つ精霊はその性質に基づく魔法の魔力効率が良く、特に記録した物質・現象を擬似的に創造した時に効率の上昇が顕著である

#### 【対外的な設定について】

ロバート達が世界の魔法、科学、文化の発展などを影から操るためにつくられた設定。

魔王：人間を滅ぼそうとしている邪悪な存在。現在は魔王城にいる。古代文明を滅ぼし、自身も時の精霊使い達に滅ぼされたが、千年ぶりに復活した。

アンデッド：魔王の配下。邪悪な存在。ゾンビ、リッチ、スケルトン、デューラハン、ゲール、ウィスプ（駄レイス）の総称。人間社会に溶け込んで不和と腐敗を撒き散らしたり、人間を襲って殺したりする。アンデッドは悪人を優先的に襲う。邪悪な心に惹かれているらしい。アンデッドに殺された者はアンデッドとなる。

魔王軍：アンデッドの軍勢。各地のアンデッドが魔王城に集められたもの。

魔王城：大陸北西の山中にある城。魔王がいる

精霊：古代人が創造した魔法生命体。土水火風の四種類がいる。古代、魔王と相討ちになり力を失ったが、現在少しずつ取り戻しつつある。呪文に呼応して精霊魔法を使用できる。人間に紛れたアンデッドを見分ける事ができる。善良な存在で、魔王を挫くために色々がんばってる。豊かな自然の中で力の回復が早まる

古代人：高度な文明を築いていた黒髪黒目の人々。魔王に滅ぼされた。

古代語：古代人が使っていた言語。呪文。精霊魔法はこれを唱える事によって発動する。

精霊魔法：呪文を唱える事で精霊の力を引き出し魔法を行使できる。

精霊使い：精霊と契約し、精霊を使役して精霊魔法を使う者。

契約：精霊魔法で高度な呪文の使用制限を開放するために必要な儀式。

里：里長がアンデッドを使役していたが、魔王の復活に伴って制御しきれなくなり手放した。精霊が集まる集落である。なにかアンデッドと因縁があるらしい

LV1スペル開放条件：なし

LV2スペル開放条件：握手を交わし、精霊に自分の専属になってもらう

## 【精霊魔法について】

ロバートの分身達による魔法代行システム。呪文に反応し、ロバートの分身がその呪文に応じた現象を起こす。呪文を唱えれば誰でも使えるのが最大のメリット（魔力覚醒している必要がない）。呪文は古代語と呼ばれるがぶっちゃんけただけの日本語である。

デフォルトでは簡単な呪文で簡単な現象しか起こせない（本当は起こせるが起こしてくれない）が、複雑な呪文の習得、契約の締結儀式のクリアなどにより制限が解除されていき、より便利で強力な現象を起こせるようになる（という設定）。

精霊魔法（笑）には四つの属性がある。

土属性……土の精霊、ノームが起こす土の魔法

水属性……水の精霊、ウンディーネが起こす水の魔法

火属性……火の精霊、サラマンダーが起こす火の魔法

風属性……風の精霊、シルフが起こす風の魔法。風の精霊とか言っちゃってるけど実の所空気（窒素、酸素、二酸化炭素、アルゴン）を成分とする混合気体を指す、その他微量物質は考慮しない）の精霊。

## ・ノーム

容姿のベースはロバートの父。身長は140cm程度。灰褐色の短髪には白髪が混ざり、風雨に削られた巖のよう顔はゴツゴツした印象の他にも不思議な滑らかさを感じさせる。長い口髭と顎髭は髪よりは白っぽい。頭には赤いトンがり帽子が乗っかっている。

背筋はシャキッと伸び、こげ茶の長袖シャツとズボン、革の長靴を装備。声は重々しい威厳のある低音。設定上の性格が「寡黙」のため喋る機会はほとんどない。

・ウンディーネ

容姿のベースは今は亡きロバートの娘の大人の姿。優しく麗しく  
儂げな美貌に、イヤミにならないギリギリのレベルの起伏に富んだ  
身体。腰まで届くロングストレートの髪は凧いだ海を思わせる深い  
蒼。反対側が透けて見える極薄の布を何重にも重ねてできたゆった  
りとした水色の羽衣を身にまとい、胸元には貝殻のペンダントをか  
けている。

声は微かにエコーがかかった耳にするりと入り込む優しげな美声。

・サラマングー

猛禽類をイメージした厳つい青年の顔に、短く刈り込まれた燃え  
るような（実際燃えてるようなもの）赤毛。全身ムキムキで、上半  
身裸だから鍛え上げられた筋肉を見せつけるにはもってこい。着て  
いる服は黒いハーフパンツのみ、靴すらはいていない。裝飾に乏し  
い代わりに身体の輪郭が陽炎のようにゆらめくエフェクトがついて  
いる。

声は若本さんリスケット。

・シルフ

外見年齢は十一、二歳、容姿のベースは今は亡きロバートの妻。  
可愛らしく顔立ちに、好奇心にキラキラ輝く碧眼。セミロングの金  
髪は緑色。服装は若草色の薄手のワンピースで腰にベルトがついて  
いて、その上から深緑色のベストを着ている。靴は先が少し尖った  
よく妖精がはいているような革靴。蔦と花の冠をかぶっている。ち  
なみにワンピースの下は覗いてもなんだかよくわからないモヤモヤ

が邪魔して見えないようになっていた。  
子供らしい無邪気な、ただし多少霞がかって神秘的な声。

属性をかけあわせる事で魔法の拡張ができる。たとえば水+風で治癒魔法が使える。四種類の精霊の力を合わせれば通常の魔法を全て再現できる(という設定)。

風属性Lv2スペル：ウィンドカッター(我が敵を切り裂け風の刃)  
……風の刃で敵を切り裂く

### 【勢力について】

名前右の表記は(没年の年齢、生きている場合は年齢)。死者には故がつく。

・里

ロバート、シルフィア、エルマー、エマーリオ(故)、主にロバート配下のノーライフ、人間が所属。

王国領の東にある森を拠点にしている、その森の植生は針葉樹落葉樹広葉樹、松の木の様なものからバオバブっぽい太い木まで節操が無い。拠点作成完了、規模は村。村の入り口は一つしかない門のみ。それ以外から侵入しようとするスケルトン達が襲い掛かってくる

およそ文明的生活に必要な資源は全て無事発見された。鉄はまだ発見されていない

村の文化は随所に日本的傾向がある。瓦、甚平、きんつば、芋の

煮つ転がしなど。でも住民はバリバリの金髪碧眼。シユール。

機密文書には日本語が使われる。

生物(含ノーライフ)の複製は禁術。研究以外での使用は禁止されている。

(名称)……………(個体数)……………(仕事)

レッサーヴァンパイア……………16……………森の探索

ヴァンパイア……………3……………狩猟・里長・魔法を使った雑用

人間……………150……………普通に生活

ノーム……………264……………森や岩山に潜む

ウンディーネ……………272……………澄んだ湖や川に潜む

サラマンダー……………20……………火の中に潜む

シルフ……………2280……………風通しの良い草原や山に潜む

プラント・ゴースト……………2?……………踊る

九人のリッチはムスクマロイの監視に一人、里の警備に一人、帝国での諜報に七人(内三人は帝国人)配備されている。

ロバート(20)……………イケメンになり損ねた普通の面構え。金髪碧眼。何か影が薄い主人公。ハイ・ドツペルレイス兼シルフ。生前の無欲さがゴースト化した事で更に磨きがかけれ、異常なレベルになっている。里の魔法管理長兼諜報(探索)部長。

シルフィア(18)……………現実離れた超絶美女。金髪碧眼、ポニテ。ヴァンパイア。エルマーへの愛が異常なレベル。里のリーダー  
エルマー……………(19)精悍な顔立ちの美男。金髪碧眼。天才的な

剣士。ヴァンパイア。シルフィアへの愛が異常なレベル。里の食料調達係

エマーリオ(故、75)……あらゆるスペックが異常なレベル。ナルガザン帝国に一人挑み、6800人の兵を道連れに玉碎した。ロザリー(20)……ひよろつとした細身長身でそこそこの胸、金髪ショートカット。日溜まりで丸くなった猫のように弛んだ顔。頭が回る。生前は小さな商家の一人娘だった。ロバートの側近

ラキ(15)……ヴァンパイア少女。金髪セミロング。素直な性格。シルフィアによく従う

ランバン(40)……出オチ要員。ヴァンパイア。里の支配を画策してあっさり返り討ち。実験に使われグールになった。

ガロン(48)……小柄なリッチの爺さん。自分は人間よりも優れた別種になったのだと自負しており、人間を物のように扱い見下す。精霊魔法の礎となって死亡した。

木霊……ロバートが最初に会ったプラント・ゴースト。踊りの腰つきが悩ましい

木霊の相方……木霊が連れてきたプラント・ゴースト。踊りの腰つきにキレがある

#### ・ビルテファ王国(没)

魔法を管理する「教会」、王族、貴族、平民が存在する。魔法を掌握する教会の権力が大きい。国民は金髪碧眼の白人。帝国に滅ぼされた。

言語は王国語。アラビア文字に似ているが左から右に書く。

・ナルガザン帝国

「強いは正義」な国。王国と大河を挟んだ南に位置する大国。国土面積はビルテファ王国（没）の三倍ほど。人口は十倍。魔法を求めてビルテファ王国を侵略し、滅ぼした。

黄色人種。紫髪黒目。好戦的。言語は王国南部の訛りを更に強くした帝国語。鉄器も使うが防具は革が主体。

それほど高度な文明を持っているわけではない。建築、治水、農業、政治システム、服飾、芸術、全て王国に一段二段と劣る。

一年に一度武術大会が開かれ、優勝者と皇帝が戦い、勝者が次の一年間皇帝を務める。武官も大会の成績優秀者から選ばれる。流石に文官は別の筆記試験による採用だが、皇帝がある意味武官筆頭であるため発言力は低い。魔法使いは武術大会に出席できない。

皇帝は名実共に国内最強であり、武人氣質の国民の圧倒的支持を得ている。愛すべき脳筋国家。

王国を侵略した結果マンドラゴラを手に入れたが、毒の中和法は失伝させてしまった。身体障害を負った魔法使いが誕生しており、彼らは強制的に死ぬまで軍属になる。

帝国での地位の序列は、皇帝>武術大会入賞者>魔法使い>帝国民>元王国民。

帝国軍は魔法隊と戦士隊に分けられる。

魔法使いの扱いをめぐって不穏な空気に包まれている。シルフィア達の企みによって最近ますますしつちやかめつちやかに。

精霊使い百五十人、魔法使い現在百七十人。

帝国の総人口が一千二百万、帝国軍が十万。

エカテリーナ（一章終了時27）……小柄な女性。猫科の猛獣を彷彿とさせる顔つき。双短剣使い。魔力密度が非常に低いがそれを生かして皇帝にまでのし上がった。九年という最長在位記録を打ち

立て退位。病にかかり、息を引き取った。

ベッキー&マックス……二章十五話で肝試しに来たカップル。もう出番は無い。

エマールイオ像……帝都の公園に立っている。実物よりも若々しい。

・魔王勢力

ハイ・ドツペルレイス……1……魔法管理、諜報、精霊魔法システム統括、魔王  
ゾンビ……70  
リッチ……15  
スケルトン……40  
グール……5  
デュラハン……10  
アニマルゾンビ……200  
アニマルスケルトン……60  
アニマルグール・デュラハン・リビングゲデッド……？  
ウィスプ……2816(300)

【単位と地理について】

一ミール 一メートル  
1km(一キロミール) 一キロメートル(一クロネ) 一グラム  
一年≒365日、12ヶ月、一日24時間。

実際の王国語での発音は「じかん」「ふん」「ねん」では無いが、発音が違っても意味する所は同じなので、妙な単位に変更して読者の記憶量を無為に圧迫するよりはマシだと判断し、このような表記をとる。

キロに相当するノールライフ世界の単位を考えようとしたが面倒になつて手を抜いた

東の森く町の距離、およそ2500km(東西)

大陸北にビルテファ王国が存在した

大陸南北にナルガザン帝国が存在

東の森の村からさらに東に行くと言に出る

東の森の北方には山がある

## 【年表】

- B・C・235    ロバート、転生(?)
- B・C・229    ロバート、ムスクマロイ発見。魔力覚醒
- B・C・215    ロバート死亡、ゴースト化
- B・C・205    ロバート、魔力密度を上げはじめる
- B・C・190    ロバートの村が火災で焼失
- B・C・166    ロバートの魔力が大気と同密度まで回復
- B・C・136    ロバートの魔力が草と同密度まで回復
- B・C・?    木霊の発見
- B・C・?    ロバート、クリエイト・ゾンビノスケルトンの習得
- B・C・76    エマーリオ、誕生
- B・C・5    ロバートの魔力が生前と同密度まで回復
- B・C・6    ロバートとエマーリオの邂逅。魔法と魔術の分類。 「  
学問としての魔法」がつくられはじめる

B・C・1 エマーリオ、死亡

法暦元年 ビルテファ王国の滅亡。東の森に里がつくられる

法暦11年 生物の複製魔法が禁術指定される。東の森の地図完成

法暦12年 シルフの誕生

法暦13年 ウンディーネ、ノーム、サラマンダーの誕生

法暦15年 エカテリーナ病死、精霊魔法運用開始、マンドラゴラ

絶滅

## 一話 ある日森の中

エマーリオの戦いを見届けた俺は、その場で進軍を停止して大休止の準備を始めた帝国軍を放置し、鳥もどきの姿のまま東へ飛んだ。シルフィアとエルマーは既に逃走中。今頃東の森へ向かって平地を延々と走り続けている事だろう。

ああ、エマーリオの散り様については正直あまり語る事がない。ルーデルと舩坂とヘイへを足して割らなければこうなるんじゃないかと思った、とだけ言っておく。

東の森への距離は長い。かなり長い。以前東の森から町へ移動した時は1ヶ月ほどぶっ通し飛び続けなければならなかった。

ゴーストの飛行速度は精々徒歩と同程度だから……4×24×30で2880km（キロミール キロメートル）？ 途中で変な形の岩とか泉とか動物を見つけたときに少し寄り道したから実際はもう少し短いと思うが、2500kmぐらいはありそうだ。

道中、暇で暇で仕方ない。人がそばにいる環境になれていた分、東の森から町へ移動した時よりも感じる退屈さは酷い。

始め数日は暇潰しに先行して東の森に入っている人間ゾンビとテレパシーでやりとりしようとしたが、あちらから伝わるイメージが曖昧過ぎてイライラしてきたので止めた。

帝国が王国を攻め滅ぼすのが先か、俺が東の森に着くのが先か。

結局、東の森の入り口に着いたのが町を出て二十七日目、森の奥の木霊の木のもとに着いたのが二十九日目の朝だった。王国が滅びているかどうかは電話もネット環境も無いこの世界では知りようもない。

身体の形状を鳥モドキからデフォルトに戻し、作成中の集落にお邪魔する。

巨大大根な木霊の木を中心にして円形に木々が切り倒され、広めの広場ができていた。広場の外周では数人が麦藁帽子を被って木の幹にコーンコーンと斧を入れ、声を合わせてゆったりとした歌を歌っている。

「ヨサクは木を切る」

……俺は何も聞かなかった。以前戯れに口ずさんでいた記憶があるから、それをシルフィアが覚えて教えてしまったと見える。

ハイホーハイホー言いながら斧を振りイイ汗かいている男達から目を逸らすと、残った切り株を小さな木製スコップで掘り起こしている子供達やら森と広場の境界線で草むしりをしている女性達やら、まあ色々いた。

枝を落とされた木は広場の端の陽当たりの良い場所にまとめて転がされている。乾燥中のようだ。その付近にスケルトンもゴロゴロ転がっていた。こちらも乾燥……中……？

木霊の木を囲むように建てられてはいるのは見るからにやっつけ仕事な掘っ建て小屋が五軒と、やけにしっかりした造りで掘っ建て小屋よりもふた周りは大きなログハウスが一軒。

聞くまでもなく分かる。ログハウスはシルフィアとエルマーの愛の巣だ三、四回爆発してから幸せになれ。

さて、色々作業中の人達の周りをチヨロチヨロしてみても反応が

なく、全員ただの人間らしい事が分かった。広場にいるのはスケルトンのみ。複雑な命令をこなせないから放置されているのだろう。で、ゾンビとヴァンパイア連中はどこに行った？ 見当たらない。探しに行つてすれ違いになるのも嫌だったので木霊の木の周辺をふよふよしながら広場の拡張をしている人達を眺めていると、エルマーが森の奥から姿を表した。小熊っぽい獣の死骸を背負っている。俺が手を振るとすぐに気がつき、獣を近くの人間に渡して寄ってきた。

「お帰り、ロバートさん」

剣を肩に担いだエルマーが爽やかな笑顔で片手を差し出してくる。俺も手を差し出すが当然のようにスカった。

「あれ？ …… ああそうだった。魔力覚醒しても触れないのか」

「触れないし斬れないからな？」

「やだなあ、人を辻斬りみたいに」

「初対面で斬りかかられた思い出は絶対忘れねーぞ」

「はははっ」

なぜそこで笑う？

「…… まあそれは置いておくとして。一応報告しておく。エマーリオは逝った」

「あー…… 分かってたけどさ、本当に惜しい人を亡くしたよ。シルフィアが悲しむなあ……」

エルマーは担いだ剣を地面に突き刺し、柄に額を乗せて俯き深々と溜め息を吐いた。思考がすぐにシルフィアの方にいくあたりが実にエルマーらしいが、こいつにとってエマーリオは剣の師だったと聞く。シルフィアが悲しむ悲しまないを抜きにしても色々思う所はあるのだろう。

しばらくそうしていたが、いつまでもこうしている訳にはいかなので聞くべき事を聞いておく。

「シルフィアとゾンビ連中はどうした？」

尋ねるとエルマーは顔を上げた。

「ああ、森の中で食料調達中。木の実集めたり動物狩ったり。あと一部のゾンビは万が一に備えて帝国が来ないか集落の西の方で見張ってる」

「確かに食料確保は急務か……にしてもなんか妙に人間の数が多くないか？ 五十人ちよいだったはずだろ？ ざっと数えただけで百人超えてるんだが」

「そりゃ難民を受け入れたからさ」

「難民？」

エルマーによれば、王国の町々から逃げ出した人々の一部が東の森に流れてきたらしい。大多数の国民は北へ北へと追い込まれているのだが、王都まで追い込まれてしまえばもはや袋の鼠。

帝国に恐れをなし、王国の滅亡を予感した人間は、なるべく王国の中心から離れた辺境、つまり東へ逃げ出した。王国の東方面には本当にぽつりぽつりと点在する寒村しかなく、大抵閉鎖的な小社会を築く小さな村は見ず知らずの難民を受け入れる事はない。

そうして途方に暮れていた難民を拾っていったそうだ。

受け入れてくれる村がないなら自分達で作ればいいじゃない、というね。ゾンビという反則的労働力があるからこそできる短期村作りだった。普通にやれば悠長に森を開拓してる間に餓死するか、食料確保に手一杯で開拓の余裕がなくなる。

今は村というか集落程度だが、これから体裁は整っていくだろう。ゾンビ+ヴァンパイア、総勢七十人で食料調達、ノーマルの人間百三十人で開拓と家屋の増築を平行して行っているとの事（スケルトンは放置）。

……ん？

「待て、アンデッド組は屋根の下で寝る必要も無いかもしれないが百三十人が五軒の掘っ建て小屋に入るのは無理があるだろ。家の数足りなくないか？」

「家で寝るのは順番制。あぶれたら野宿一択」

「うわぁ……今が秋で良かったな」

冬までに人数分の家と春までの食料を確保しなけりゃならんのは少し厳しそうだが、まあなるようにしかならん。

人が増えればそれだけ問題も増える。数日おきに起こるいざごさはシルフィアが処理し、現状はまずまず安定しているようだった。

エルマーから情報収集していると、シルフィアが背後にぞろぞろとゾンビとヴァンパイアを引き連れて森から出てきた。ゾンビ達が担いだ兎や鳥などの獲物を見て広場の人間は歓声を上げる。

獲物を地面に下ろして解体を始めたゾンビ達を尻目に、シルフィアはエルマーに走り寄り腕を絡ませ豊満な胸を押し付けた。

「ああ寂しかったですエルマーエルマーエルマーエルマーエルマーエルマーエルマー……あ。ようこそ、そしてお帰りなさい、大御祖父様」

「あー、ただいま……でいいのか。シルフィアにも一応伝えとく。

エマーリオは

「言わないで下さい。分かっています」

「……そうか」

シルフィアはエルマーのがっしりした胸板に顔をうずめた。

流れる沈黙。

時間を開けて顔を上げたシルフィアは一見平然としていたが、何を思っているかは神ならぬ俺には分からない。一番エマーリオの最後の戦いを決めたのはシルフィアだから、恐らく一番エマーリオの死を悼んでいるのも……

……空気がしんみりし過ぎて無いはずの心臓が痛い。話題を変えよう。

「集落、というか村を作ってその後はどうする？」

「周辺諸国の動向を窺いながら当面の間このまま暮らそうかと思っ  
ています」

幸いシルフィアは涙声になる事もなく普通に答えた。気まずい云々の前に俺としても今後の見通しを立てておきたい。必要そうな事を片端から聞いていった。

王国を飲み込み更に強大になるであろう帝国に抵抗するだけの力も体力も俺達には無く、かと言って帝国の下につくのも癪なので、まずは出来る限り隠れたまま力を蓄える。そのために魔法研究を進め、ある程度安定した形になるまで村を大きくしておく。

ぶつちやけシルフィアとエルマーはお互いがいて幸せに暮らす事ができれば良い。従って武力が有り余る状態になっても他国に侵略をかける事はしない。

小さな村で、文化的で幸せな暮らしができれば満足である、という面だけ見ればシルフィアもエルマーも慎ましい良い奴だ。が、その後、「ただし生活を脅かす奴はぶち殺す」が入る。やっぱり逝かされていた。

しかし隠れてばかりで引きこもっていると、いつの間にか森の外では核兵器が開発されていて……なんてことに……は流石にならないだろうが、文化的科学的に取り残される。常に情報を収集し、自分達が相対的にどの程度の武力を持ち、どのような立ち位置にいるか把握しておかなければならない。よって森の外の情報収集も欠かせない。

つまりは「村の基礎固め」「情報収集」「研究」「防衛」の四つを進めていく訳だ。

まとめるとそんな感じになる。

「それならわざわざヒッキーにならんでも王国と帝国のゴタゴタが一段落ついてから魔法技術を帝国に売り込めば……いや駄目か。魔法はとにかく魔術は知られると色々手に負えなくなりそうだ」

「それもそうですが、私は単純に帝国の下につきたくないんですよ。帝国は嫌いです。お祖父様を殺した国ですから……ああ、分かっています。確かにお祖父様は自ら命を差し出したに等しいのですから、私が帝国を嫌うのは筋違い、逆恨みかも知れませんが、理屈じゃないんです、この感情は」

「分かるような分からんような……まあいいか。で、俺は何をやればいいんだ？ 村の事はシルフィアが仕切ってるんだろ？」

「はあ、確かに私が指示を出していますが……別に大御祖父様は無理に私達につきあわなくてもいいんですよ？ 面倒事は嫌いでしょう？」

「馬鹿言うな。俺達は家族だろ？ お前とエルマーが嫌がらない限り手助けするさ。他にやる事がないってのもあるが」

「意外です。『内政？ ダルいからパス』ぐらい言われるかと思っ  
てました」

「言わねーよ。シルフィアは俺をなんだと思ってるんだ」

「御先祖様」

「そういう意味の質問じゃないがなんかもうそれでいいわ」

「あはは、冗談ですよ。私にとつても大御祖父様はエルマーの次に大切な家族です。えー、と、それで……大御祖父様をお願いしたい事は……さしあたっては魔法管理でしょうか。魔法を使いたいざこざが起きたり魔法使いの離反が起きたりしたら目も当てられませんから、配下のゾンビとスケルトンの手綱をしっかりと取っておいて下さい」

「それは当然だろ。他は？」

「エマーリオほどではないが、魔法使いというものは誰もが普通の人間とは隔絶した力を持つ。魔法の管理を怠るとするのはマシンガンを子供に持たせて放置するぐらい危険な事だと俺は認識している。味方の内は頼もしい。しかし敵に回った魔法使いほど恐ろしいものはない。」

「もつともゾンビとスケルトンの管理は楽だ。命令するだけで絶対服従だから離反の心配も何も無い。」

「他ですか。ではヴァンパイアの管理もお願いできますか？」

「……ああそうか、ヴァンパイアは支配力が発生してないからなあ。ヴァンパイアは完全な自由意志で行動し、命令できない。魔法が使えるヴァンパイアは定期的な吸血の必要があるが、寿命が無い分人間の魔法使いよりも質が悪い。」

「形質魔力を混入させて常に魔法が使えない状態にしておけばいい

か。で、人間のゾンビにそれとなく見張らせる。魔法が使えなければ俺達に牙をむこうとしても早々厄介な事にはならんだろ」

「はい。それでお願いします」

シルフィアは思っていたよりも素直に頷いた。小生意気な反応を返してくるかと思構えていたので拍子抜けする。

「意外だ。お前なら疑わしきはデストロイしそうなもんだが」

「厄介事を起こされる前に始末するって事ですか？ そこまでやりませんよ。大御祖父様は私をなんだと思っっているんですか」

「エルマーの嫁」

「大正解です」

シルフィアはエルマーに身を寄せたままむふんと胸を張った。ヴァンパイアになってもこういう反応は変わらない。

先程からやけに静かなエルマーは恍惚とした顔で穴が空くほどシルフィアの横顔を見つめていた。危ない人に見える。というか実際危ない人だ。

「この村の人間で魔力覚醒している者はいませんから、アンデッドを管理するだけで私達が保有する魔法の全てを管理できます。大御祖父様はこの村の魔法をほぼ全て握っている、ということですね。信用してますからね？ エルマーの次に」

「最後の一言が無ければ完璧だった」

未だトリップしているエルマーと、そのエルマーの頬にキスしてうっとりしているシルフィア。

早くもこの村の行く末が心配になってきた。

一話 ある日森の中（後書き）

王国の顛末については多分次話

## 二話 ないせい

村の掘っ建て小屋の数が両手で数えられなくなり、なんとか人間全員が夜露を凌げるようになった頃、俺はシルフィアに魔法管理長に任命された。

仕事は魔法研究管理。魔法そのものやそれに付随する技術の流出を防ぎ、また発展させる。これで魔法関係については一任と言うか丸投げされた形になる。

手に職をつけたのは死んで以来か？ ゴーストになってからこっち、ずっとプーさんだったから感慨深い。

アンデッド連中の管理にはあまり労力が必要ないが、エマーリオが遺した研究資料の編纂やら秘薬薬草の保護やらでなかなか忙しい。例のシルフィアとエルマーの愛の巣だとばかり思っていたログハウスは倉庫だったらしく、エマーリオの芸術品や書物の類が劣化しないよう傷まないよう丁寧に保管されていた。

その中から研究資料を取り出し、選別し、まとめる。資料の余白に書かれた意図が読めない走り書きなどの解読と補足も平行しているから、編纂が終わるまで一年二年じゃ済まないだろう。長いスパンで片付けていきたい。

秘薬薬草の保護は俺が発見した方の薬草の話だ。木霊の木は食べると死ぬし、王国の薬草には手が出せないが、俺が発見した薬草は無防備によきによきと生えている。一番使い勝手がいい薬草が一番無防備。イカンよ、実にイカン。

東の森とその周辺は辺境だが、いつになるかは知らんがいずれ開拓され、秘薬薬草を発見されるのは確実。分かっている放置するのも阿呆らしいので、とりあえず群生地に魔法が使えるゾンビを一人派遣して見張らせ、また、苗を村に持ってきて栽培を試みている。

あといつまでも秘薬薬草秘薬薬草呼んでるとややこしくて仕方がないのでムスクマロイと命名した。あと木霊の木もついでにトレ

ントに改名、王国の薬草も「神秘の草」やら「魔法の草」やら、無闇やたらと名称が多く正式名称がないようだったので（あるのかも知れないが俺達は知らない）マンドラゴラと呼ぶ事にした。別に人型でもないし悲鳴も上げないらしいが、有毒だし魔法の草だからいいかなと思った。反省も後悔もしていない。

で、俺ばかり動いているわけもなく、愛に生きるのだと主張している割にシルフィアとエルマーも普通に働いていた。

シルフィアは魔法管理以外のほぼ全ての問題処理をしている。

ゾンビ達が集めた食料の分配、冬に向けた保存食作りとその貯蔵、不平不満の対応、喧嘩の仲裁、制裁、仕事の指示、e t c……

人数が少ないとは言え村を上手く回しているシルフィアを見ていて、こいつは研究者よりも為政者向きだと思った。

シルフィアはみてくれが異様にいいから第一印象がいい。初対面でシルフィアを嫌える奴はまずいない。

更にちよつと微笑むだけで特殊な性癖を持つ男以外はコロリと落ちる。一部の女も特殊な性癖に目覚めてコロリと墮ちる。ブラックホールのような吸引力だ。

熱い視線を向けられていても本人がエルマーの嫁を公言して憚らないから痴情のもつれでブスリも多分ないだろーし、村人がシルフィアに好意的ならそれだけ統治は楽になる。

美人は何かと得だ。当のシルフィアはエルマーのために肌と髪の手入れやら体重食事睡眠時間管理やら適度な運動やらを徹底しただけであつて、エルマー以外の人間に好かれようなんて思っていないかっただけだ。

そしてそんなシルフィアの愛を一身に受ける果報者、エルマー。エルマーは孤児の出という事もあり平均的な王国民を少し下回る程度の知識知能しか持っていないのでシルフィアを手伝う事はできず、専ら単独で狩りに出かけている。頭使うよりも剣を振る方が性に合っているらしい。

エルマーは毎日剣を手にふらつと森に入り、獲物を担いで帰って

くる。で、狩りの後はあれこれ指示を出したり陳情を聞いたりするシルフィアの傍でひたすらぼーっとしている。

一度ぼんやりとシルフィアを目で追っているエルマーに暇じゃないのか？ と聞いたら、返った言葉が

「は？」

だった。真顔だった。シルフィアを見守っているだけで満足らしい。気持ちは分かるが若干キモい。

魔法管理を俺、統治総合をシルフィア、一匹狼で食料補充をエルマーという役割分担。俺はゾンビ達に食料を集めるように指示を出しているから食料調達係も兼任している形になる。

ちなみに採取してきた物が食べられるかどうかの判断は俺がしている。以前この森で長いこと暮らして動物を観察していたため、記憶にある動物が食べていた物と照合して食べられる食べ物を見分けられるのだ。データが無く食べられるか分からない物を除外しても順調に越冬のための食料はたまってきている。

そして食料調達を一手に引き受けるゾンビ達だが、ノーマルな人間には魔法使いだと認識されているようだった。魔力覚醒もしていない人間に魔法も魔術も分かりやしない。

不思議な事は全部魔法。魔法使いは神の僕。偉い。凄い。そんなイメージらしい。

魔法にできる事できない事が分からないため、ゾンビ達が不眠不休で動いていたリ、傷から血が出ていなくなったり、触れた手の体温が外気温と同じだったりしても「そういう魔法なんだ」と納得していた。

実に都合のいい勘違いなので放置確定。死んで蘇ったなんて知られたらどうなるか分からんから。なあに、黙ってりゃあ大丈夫だ。何年か経って歳を取らない事に気付いも「そういう魔法」で押し切れる。魔法万歳。

さて、情報収集は基本的にゾンビのテレパスを利用する事にした。配下のゾンビを派遣し、テレパスで情報を送ってもらう。

ゾンビ側から俺に送られてくるイメージはぼやけるが、色々試してみた所単純なイメージなら比較的是つきり伝わる事が判明したので、曖昧なイメージの補足にモールス信号を使う事に。ただしトントーの組み合わせで言葉を表すという事しか覚えていなかったため正規のモールス信号とは違う。そもそも日本語でもアルファベットでもなく王国語変換だから否が応でも正規のものとは違う物になるんだけども。

こんな面倒な事をせずとも創造者 被支配者のテレパスが鮮明、被支配者 創造者のテレパスが曖昧、という法則が成り立つなら配下のゾンビに更にゾンビを創らせればもっとスマートに行くのだが（）、配下にクリエイトゾンビができるほど魔力操作に熟達したゾンビがいなかったため検証すらできない。

クリエイトゾンビは「魔力を放出して対象を包み込み」「対象から魔力が漏れないよう、かつ自分の魔力が混ざらない魔力固定し」「その状態を八〜十時間保つ」という手順を踏まねばならず、高度な魔力操作が要求される。もう五年ほど訓練しているシルフィアでさえまだできないのだから、魔力覚醒して一年も経っていないゾンビにできる道理はない。

しばらくはモールス信号で我慢しておく。致し方なし。

それでまあ、念の為情報収集をする諜報員には魔法が使えるゾンビを抜擢した。

魔法があればちょっとやさつとの不都合厄介事はちよちよいと解決できる。情報収集だけとは言え敵国に潜入するのだから予防線は張っておいて損はない。

俺の配下のゾンビ五十名の内、魔法が使えるゾンビは六人。一人はムスクマロイの群生地を監視していて、一人は村の警備に残しておきたい。従って諜報員は四人だ。

四人にできるだけバラバラな町に入り辺境に避難していたが戻ってきた難民のフリをするよう命令し、送り出す。人間の思考を保っているから臨機応変に対応して人混みに溶け込めるだろう。出戻り難民という設定も半分ぐらい本当だ。

そして情報が届きだしたのが送り出して十日後。ゾンビは疲労しないため夜通し走り続ける事ができる。移動にかかる時間は俺よりよっぽど短い。

情報によると、やっぱり、王国は滅びていた。王国側は残存勢力を王都に集めて抵抗したものの、古来より援軍の見込みがない籠城をすればその先に待つのは敗北のみと相場が決まっている。王国は帝国に包囲され、物量に押し切られて滅亡。どうやら教会もアボンしたらしい。

諜報員四人が短期間で集めた情報で分かった事はあまりないが、もう一つ愛すべき馬鹿話も知る事ができた。

帝国がエマーリオを「敵ながら天晴れ！」と賞賛しているらしい。馬鹿だろ。懐広すぎるだろ。阿呆だろ。もう大好きだ。

自軍をメタメタにした敵国の英雄をヨイシヨするなんてどうかしてる。政治的に見ればド三流だ。勝ったなら思う存分自分達を美化し、正当性を主張し、自国の戦績を誇張するべき。たった一人にいいようになぶられた戦いを喧伝していい事なんざ何一つなく、むしろマイナスにしかならない。

しかし武人として見れば喝采すべきだろう。単騎であれだけ暴れ

華々しく散ったエマーリオは称えられては然るべきだという意見には深く賛同する。

それを政治レベルでやってしまう所には呆れるが、素晴らしい阿呆だと言わざるを得ない。

とシルフィアに言ったら阿呆なのは大御祖父様ですと言われた。なぜ。

「お祖父様に対する帝国の対応はおおまかに考えて二通り考えられました」

シルフィアが指を二本立てる。

「お祖父様との戦いで出た犠牲は少なかったと偽り、大魔法使い恐るるに足りずと喧伝する」

指を一本折る。

「逆にお祖父様との戦いで出た犠牲をそのまま公表し、それほどの大魔法使いも帝国の前にはひれ伏したと喧伝する。帝国が選んだのはこちらですね」

残った指で俺の頬をつついた。スカツたが。

「……なるほど。しかしどうも帝国は何も考えずに褒めちぎってるようにしか感じられないんだが」

ゾンビからのイメージからもそんな印象を受けた、と言うと、シルフィアはそうでしょうねとあっさり頷いた。

「武術大会の優勝者が王になる野蛮な国ですし、素直に賞賛しているだけで裏の意図はないのかも知れませんが、裏の意図があってもなくても民衆へ及ぼす効果は同じです」

「それもそうか。まー俺はエマーリオが正当に評価されたならなんでもいい」

「私も同じです。ほんの少し帝国を見直しました」

どうやら帝国は気持ちのいい国であるらしかった。そう思わせるのが策略なのかも知れんがそれはそれで。

## 二話 ないせい（後書き）

解説する必要も無いかも知れませんが一応補足

? 創造者がゾンビ（A）を創る。

? ゾンビ（A）がゾンビ（a）を創る。

? 創造者とゾンビ（a）は村に残り、ゾンビ（A）が情報収集を行う。

? 村 任地は創造者 ゾンビ（A）、任地 村はゾンビ（A）  
ゾンビ（a）でテレパスを使えば鮮明なイメージのやり取りができる。

6 / 2 1 帝国の記述について修正

### 三話 冬

森に初雪が降った日にはなんとか村の概形が完成していた。

トレントを中心として森が円形に切り開かれ、中心付近に密集して掘つ建て小屋が二十数軒建てられている。

密集地から森までは十五ミールほど何もない土地が開いていて、そこは春になったら畑にする予定だ。一応小麦や雑穀の種は持つてきてあるが、町の辺りとは気候も土壌も違つたため育つかは分からない。一年目の収穫を期待できないだろう。

森と畑の境界線には大人の腰の高さ程度の柵を作成。大型の獣が来たら突破されるし小型だと隙間を抜けられるが、中型の獣はある程度防げる。現在ゾンビ達が柵の外側に堀を作り補強中。掘り出した土は内側に盛つて土塁にしていた。森 堀 土塁 柵 畑、という形になる。

畑に使う水、飲料に使う水は村の近くに湧いている石清水を利用している。当然生水だが飲料にする分は魔法で煮沸しているので腹を壊す心配は無い。魔力にも限りがあり百三十人分の飲み水を沸かせる訳ではなかったが、魔法で足りない分は普通に薪を使えばいい。魔法煮沸はあくまでも薪節約のために使っている。

雪が降り始めてから外で働いているのはゾンビとヴァンパイアのみだった。

寒さは筋肉を硬直させ、体力を奪う。エネルギーの消費が増えれば食料も多く必要になる。冬は大人しく屋内でじつとしてるのが一番だ。

が、物理とは別の何かで動いているゾンビ達にはそんな物関係ない。氷点下で霜が降りていても普通に動ける。寒い事は寒いが肌寒い程度にしか感じていないようで、寒空の下で毎日元気に働いている。

尚、ゾンビは命令さえすればそれが当たり前だと思って行動する

ため延々とこき使っても不満が出ないが、ヴァンパイアは自由意思で動いているため適度に休みを入れさせている。肉体は疲れなくとも精神的疲れはたまるし、一日中休み無く働き続けるのは苦痛だ。

人間の方は昼間の比較的暖かい時間帯にちよるちよる外で働き、朝夕は屋内で内職して日が暮れたらさっさと寝ている。

雪の日の夜なんぞは特に冷え込むが、秋に狩った獣の毛皮があるので防寒はなんとかなる。

あ、内職は皮なめしとか木製食器作りとかなんかそこらへん。指示出してるのはシルフィアで、俺の管轄じゃないから詳しくは分からん。

冬の間は身を寄せ合って家にこもるため男女のカップルがちらほらできる。が、下世話な話だが子作りは禁止されている。

少なくとも四、五年は人口を増やしたくない。なぜってそりゃあ食い扶持を増やさないと決まっている。食料の安定供給ができるようになるまでは生活環境の整備に腐心したかった。

どんどん産ませて増やしてある程度育ったら殺してゾンビにして忠実な手駒を確保する、という人間家畜化超鬼畜ルートも無いではないが、それが必要になる程切羽詰まってもいないのでやらない(シルフィア談)。切羽詰まってもやろうとすんなよと思うのは俺が甘いからだろうか。

人間にはできるだけ普通に暮らしてもらいたい。ゾンビ、ヴァンパイアetcの情報を漏らされると困るので村の外には出せないが。

最近の俺の仕事は情報整理と分類だ。帝国の潜入捜査員から送られてくる情報を纏めてシルフィアに伝えたり、魔法についての資料をまとめたり。

ヴァンパイアは大人しくしてるし、ムスクマロイの栽培は植え替えの時期が悪かったのか失敗したが春になってからまた色々試す予定なので今は原生地の監視のみでいい。すると増えるのは別の仕事、つまり情報収集とその編集で。

敵を知り、己を知れば百戦危うからずと言う。俺達の場合「敵を知り」が帝国の偵察、「己を知れ」が魔法魔術研究に当てはまる。

それ両方俺の仕事じゃねーか馬鹿。帝国の情報纏めてる内についての間にか謀報部長になってたしさあ。役職が増えたふあつく。

生活に適度な張り合いがあるのは実に結構な事だが、忙殺されるのは御免だ。家族のためならちったあ頑張るが頑張りすぎるつもりはない。シルフィアにはこれ以上俺の仕事を増やすなと念押ししておいた。

勿論忙しくなった対価として新しく情報も入った。

それによると、帝国はマンドラゴラは入手したものの毒の中和法は手に入れ損ねたそうだ。毒の中和法は口伝でしか残されておらず、中和法を知る魔法使いを皆殺しにしまったため綺麗さっぱり失伝したとか。ざまあ。南無。

えー、それで、仕事が増えるにあたり、秘書というか側近というかそんな役割のゾンビを一人常に俺の傍に置く事にした。

書類をまとめるためにいちいち魔法で物理干涉していたら文字通りの意味で体が保たない。適当なゾンビを場当たりに呼んで物理干涉を代行させるより、一人をそういう役に任命して鍛えていった

方が断然効率がいい。

選んだゾンビはロザリーという名の女性だ。肉体年齢は二十歳、ひよろつとした細身長身でそこその胸、金髪ショートカット。日溜まりで丸くなった猫みたいに弛んだ顔してる割に頭が回り、そこを買って側近にした。生前は小さな商家の一人娘だったそうだ。

「ロバさんロバさん、魔法が使えるゾンビ魔法が使えないゾンビって書き分けるのめんどーじゃないですか？　というか私がめんどーなんですけど」

「ああ……まあそうだな。別個の名前つけとくか。案あるか？」

「ゾンベ、ゾンボ、ヴァンパイパイ、ヴァンパインとか良さげじゃないでしょーか」

「……俺が考える」

ロザリーを採用してから間もなくそんなやり取りがあり、不死族の名称を細分化した。

ノーライフ……魔術によって生まれた存在の総称

ゴースト……魔法が使えない霊体

レイス……魔法が使える事以外ゴーストに同じ

ドッペルゲンガー……身体の形状を自在に変えられる事以外ゴーストに同じ

ドッペルレイス……レイスとドッペルゲンガー両方の条件を満たした者

ゾンビ……従来の定義のゾンビの中で魔法が使えない者

リッチ……魔法が使える事以外ゾンビに同じ

スケルトン……そのまま

レッサーヴァンパイア……従来の定義のヴァンパイアの中で魔法が使えない者（密度不足or魔力未覚醒）

ヴァンパイア……魔法が使える事以外レッサーヴァンパイアと同じ

上記に加えてクリエイト系の魔術が使える様になると頭に「ハイ」がつき、動物だと「アニマル」、植物だと「プラント」がつく。

つまり俺は人間のゴーストで、魔法が使える、魔術が使える、ドツペルゲンガー技術は他人に化けようとする福笑いになるレベルに留まっているため「ハイ・レイス」となる。

そしてこの分類に従って村の人口を分けると、

ハイ・レイス…… 1  
ゾンビ…… 44  
リッチ…… 6  
スケルトン…… 30  
レッサーヴァンパイア…… 16  
ヴァンパイア…… 4（内二人はシルフィアとエルマー）  
アニマルゾンビ…… 120  
アニマルスケルトン…… 40  
人間…… 130

となる。

アニマルヴァンパイアが居ないのは同種食がネックになって町から村への移動の際に皆腐り落ちたためだ。

アニマル系は村の付近の森の中で自由にさせているから補食されたり魔力が尽きたりしていくらか減っているかも知れない。

分類統計が終わったあたりで人間にスケルトンの存在を認識させたりもした。それまではスケルトンは単なる不気味な野晒し白骨死体としか認識されていなかったのだ。

しかしゾンビやヴァンパイアは見た目人間なので違和感なく魔法使いとして受け入れられてきたが、流石に骨だけのスケルトンが魔法使いだと言い張るには無理がある。

そこでシルフィアは死体だと認めたと上で嘘を吐く事にした。

スケルトンは死してなお同胞を護らんと蘇った、かつて魔法使いであった者だと説明したのだ。スケルトンは村で侵入者撃退に使うつもりだし、まああながち嘘とも言い切れない。

さらにデモンストレーションとしてスケルトン達に木槍を持たせ整列させ、シルフィアの号令に合わせて行進させた事で、ただの動く骨ではなく理知的な存在なのだと誤認させる事に成功した。それでもまだ薄気味悪そうな目を向ける者は多いが、拒絶感を示す者は見受けられない。

そんなこんなでちやくちやくと案件を処理している内に長い冬は過ぎていった。

村のあれこれが一段落ついて手が空いたら今日も森のどこかで踊り狂っているであろう木霊を探しに行くのもいいかも知れない。

三話 冬（後書き）

文がガタガタになってきた。更新間隔が短いとやっぱりキツイ

## 四話 吸血鬼

私がヴァンパイアになったのは必然だったと思う。

人伝に帝国がすぐそこまで迫っていると聞いた母は、すぐに私の手を引いて村を出た。荷物は僅かばかりの銅貨と、ありったけの食糧、寒さを防ぐための一枚の毛布。

父は二年前に徴兵され戦死していたから、家族二人だけで北へ北へ逃げた。

荒れた街道の脇での野宿は獣の遠吠えと物音が怖くてはほとんど眠れなかった。母は毎晩小さい頃にしてくれたように子守歌を唄ってくれて、お陰で浅い眠りにつくことが出来ただけで、子守歌を聴いていると安心する一方で子供扱いされてるみたいでちよつと恥ずかしかった。もう十五になるのに。

夏だから夜に凍える事はなく、でも代わりに昼間が辛かった。ジリジリと照りつける太陽が私達を焦がし、すぐに喉が渴いて、汗で重くなった服もいつの間にか乾いてしまう。母が水筒を多めに持ってきてくれなかったら絶対干からびて死んでいた。

幸い水筒の中身が尽きる寸前に町につき、一日だけ休んで次の町へ。それを三回繰り返して、私達は目的の、母の兄夫婦がいる町に着いた。

銅貨も食糧も尽き、毛布は旅塵に汚れてボロボロ。毎日毎日少ない休憩少ない食べ物で歩き続け、水で拭く事さえ出来なかった身体は汚れていて酷く臭った。

それでも命あるだけで充分。あのまま町にいたらきつと帝国に殺されていた。帝国人は人間を生きたまま食べるというし、そんな死に方は絶対に嫌だった。

疲れた体を引きずって、私達は町外れの叔父夫婦の家の戸を叩いた。叔父は徴兵されていても、叔母が留守を守っている、はずだった。

でも神様はとことん私達に厳しかった。

家はもぬけの殻だった。外出中、と思うには家具が少なすぎて、生活感がなくて。不審に思った私達が隣家の戸を叩き聞いてみれば、叔母はつい先日馬車に轢かれて亡くなったのだと言う。

それを聞いた私達はきつととてもひどい顔をしていたんだと思う。隣家の人は不憫そうに膝をつく私達を見ていたけれど、厄介事に巻き込まれるのはごめんだと思ったのか無情にも鼻先で戸は閉められた。

命からがら逃げてきて、たどり着いた場所は崖っぷち。今更故郷の町にも戻れない。目の前が真っ暗になって、頭の中は真っ白になった。絶望する以前に衝撃が大き過ぎて何も考えられなかった。

叔母は町の共同墓地に既に埋葬され、財産家財道具は戦時中という事で徴収されていたけれど家は残っていたから、屋根がある事だけが幸이었다。

その日、精魂尽き果てた私達は何もない寒々しい部屋で身を寄せ合って眠った。

次の日朝一番で役場へ向かい、確認をとると叔父は戦死していた。正式に叔母の家の所有権を移してもらう。これで叔母の家は私達のもの。

でも家はあっても食べ物が無い。井戸があつたから水は飲めたけど空腹は誤魔化せなかった。胃の中はずっと水びたし。

部屋の隅で小さくなって、なんでこうなつたんだろう、と空腹で回らない頭で考える。町を捨てて逃げた母は悪くない。それに着いていった私も同じ。馬車に轢かれた叔母が悪い訳がないし、徴兵された叔父だってどうしようもなかった。

だからきつと叔母を轢いた馬車の業者が悪いんだ。でも顔も知らない人間をどう恨めばいいのか分からなかった。

とにかく何か食べたかった。母は兄と義姉の死を悼む余裕も無く、私と一緒に一切れのパンを手に入れるために仕事を得ようと駆けずり回る。でもどこも雇ってくれなかった。私達と同じ様に町を捨て

て逃げてきた人がたくさんいて、私達が入り込む余地はなかった。

苦し紛れに家売りに出したりもした。でも買い手がつかない。

この町も一年後に王国領のままか怪しいから。食べられる野草を探しても、皆考える事は同じで町の近くには殆ど生えてない。

打つ手がなくなった母は最後の手段として身体を売った。痩せてはいても井戸水が使えるお陰で身綺麗だったから、なんとかはした金は稼げた。

私も同じ様にして稼ごうと思ったけど、母が断固として認めてくれなかった。この期に及んで「初めては好きな人のためにとっておきなさい」と言う母の言葉に私は大泣きする。

母は優しすぎた。

この極限状態で自分の分のパンを私にこっそり回すぐらい優しくで。

だから飢えて、死んでしまった。

朝、私は物言わぬ母の骸を茫然と抱え、その軽さに愕然とした。

母がまともに食べていなかったのだという事に気付くのは遅過ぎた。墓堀の人足を頼むお金も無くて、私は独り黙々と母の亡骸を埋葬する。涙はもう枯れていた。

母の死は私の氣力を根こそぎ持って行った。

なぜ母が食べていない事に気付かなかったという自責と押し寄せる理不尽への無力感と、全てがぐちゃぐちゃになって、もう何も考えたくなかった。

生きる屍の様な日々だった、と記憶している。

日がな一日部屋で寝転び天井を見上げていて、昼も夜も曖昧だった。この辺りの記憶は薄く、二日か三日だったかも知れないし、一週間だったかも知れない。

虚無感と空腹感に途切れ途切れになって消える寸前の意識の中で、どうせ死ぬなら安らかに死にたかったとぼんやり思っていた。

だから綺麗な女の人が家に入ってきて私の顔を覗き込んだ時、ああ天国からお迎えが来たんだ、と思った。真っ白な清楚なワンピース

又に身を包んだその人の周りだけ別の世界の様。

その人は私の目の前に手を翳し、生きてる、と呟くと手に持った水差しを私の口につけ、ゆっくりと傾けた。甘い液体が喉を通り、頭に電流が走る。

気付けば注がれる甘い水を貪るように飲んでいた。枯れたはずの涙が零れて頬を伝う。命そのものを取り込んだ様に体が安らいでいった。

水差しが空になり、私は久しぶりに生きた感触の籠もった息を吐く。するとじつと私を見ていた女の人が優しく私に尋ねた。

「あなたの名前は？」

「……………」

声にもならなかった私の声を聞き取って、女の人は頷いた。

「そうですか。ではラキ、私のためにもう少しだけ生きてくれますか？」

……………首を横に振ればこの人はきっと私を置いていってしまう。また独りになってしまう。

断るなんて、できるわけなかった。

私がありつたけの力を込めてなんとか小さく頷くと、体がふわりと宙に浮いた。びっくりして身をよじると、女の人は

「大丈夫、魔法です」

とだけ言って踵を返した。

神の遣いではなかったようだけど、魔法使いは神に祝福された人だからそんなに違いはない。私は安心して身を任せた。

先導して歩く女の人のちよつと後ろをふわふわ浮いて着いていく。すれ違う人々に見られているのを意識しながら私が運ばれた先は立派なお屋敷だった。

女の人はお屋敷に入ると、庭でたむろしていた人の内一人の女性を呼び止めた。

「追加人員です。丁重な持て成しと簡易説明を」

「了解シルさん。じゃあお嬢さん、早速だけど湯あみしよーか。そ

の後食事ね」

なにがなんだか分からない内に私は湯船に放り込まれ、丸洗いされた。暖かな湯に疲れが染み出して洗い流された気がした。

湯から上がったもぼんやりと動かない私に、ロザリーと名乗った女性はなんだか怖くなるぐらい肌触りのいい綺麗な服を着せてくれる。

事ここに至って、沸き上がる疑問。

どうして私なんかこんな事をしてくれるんだろう？

怪しいだとか恐れ多いだとかそういう事じゃなくて、純粹に不思議だった。

「……………あのう」

柔らかな座り心地の椅子に座る私。甲斐甲斐しくトロトロに煮込まれ塩が効いた麦粥をスプーンで口に運んでくれるロザリーさんに、私は勇気を出して聞いてみた。蚊の鳴くような小さな声しか出なかったけど、ロザリーさんはスプーンを置いて耳を私の口に近づけてくれた。

「ん、何？」

「……………あの……………どうして……………私……………その……………」

「体を洗ってくれたり食べさせてくれたり？」

意を汲んでくれたロザリーさんに頷く。

ロザリーさんは頬をかき、ふにやっとした気の抜ける顔で答えた。

「ロバさんにシルさんの言う事聞けって言われてるから、じゃあないよね聞きたいのは。んー、シルさん……………シルフィアさん、お嬢さんを運んで来た人の事ね。シルさんにも色々考えがあって、しばらくお嬢さんにいー暮らしをしてもらいたい訳さ」

「……………天使さん、なんですか？」

「くはっ！……………ああいや失礼。最近似た事言う人多くてね。ただの……………うん、ただの魔法使いさ、シルさんは」

ロザリーさんはぼやんとした顔で遠くを見ていたけど、すぐに我に帰って麦粥の残りを食べさせてくれた。

碗一杯の麦粥をお腹に入れた私をロザリーさんは軽々と抱きかかえてベッドに運ぶ。

ベッドはかえって居心地が悪くなるくらいふかふかで、私は夢の中にいるんじゃないか、目が覚めたらあの薄暗い部屋で独り転がっているんじゃないか、と怖くなる。

ここが現実である確信が欲しくて開こうとした口は、しかしロザリーさんに人差し指で押さえられてしまった。

「まー小難しい話は後。取りあえず寝た寝た！質問は起きてから。私はここにいるからさ、安心してお眠りよ」

そう言っつて私の手を握り、ベッドの横の椅子に腰掛けるロザリーさん。

ロザリーさんの手はびっくりするくらい冷たかったけど、もう何年も感じていなかったように思える安心感に包まれて、私は瞬く間に夢の世界に落ちていった。

それは体が朽ちた後も魂に刻まれ、決して忘れられない、夢のようない日々だったと思う。

一日三回お腹一杯美味しい料理を食べて、遠目に見た事すらないような綺麗な服を着て、本を読み聞かせてもらったり、庭を散歩したり。

屋敷の中にも庭にも私と同じ様な人がたくさんいたけど、皆思い思いに過ごしていた。

じつとそんな人達を見てみると、昨日見た人がいなくなる事がある事に気がついた。ロザリーさんに説明は受けていたから、その人達は多分死んじゃったんだろうなあ、と人事のように思う。明日は我が身かも知れないのだけど。

屋敷に集められた人達は魔法の実験に協力しないといけなくて、失敗すれば死ぬ。そして成功すればちよつと特別な体になる、らしい。

運が良ければ魔法使いになれると聞いてびっくりして、ここが大魔法使いの屋敷だと知って二度びっくりした。

あと数日で死ぬかも知れないと聞いても不思議と怖くはなかった。一度死を身近に感じて慣れてしまったのか、今が幸せ過ぎて実感が沸いてないだけなのか、私には分からない。

中には死にたくない、と逃げようとする人もいたみたいだけど、そんな人は次の日には消えていた。

やがて三日が経って、私は薬を飲まされた。これで数日経つと魔法が使える様になるとロザリーさんは言った。

「秘薬は教会にしかないはずじゃ……」

「こまけーこたーいいんだよ！」

何度聞いても頑なにそれしか言わないロザリーさん。私も細かい事は気にしない事にする。大魔法使いだからなんとかかんとかしてゐるんだろうなと考えるのを止めた。

薬を飲んで数日は凄く体がムズムズしたけど、魔力はしつかり分かる様になった。体の中にある魔力が分かるし、他の人や物が持っている魔力も分かる。土にも木にも水にも魔力があつて、魔力が無い場所なんてない。

中でも屋敷の中のある部屋の前を通ると強い魔力を感じた。後でそこが大魔法使いの部屋だと聞いて納得する。噂に聞く大魔法使いの名は伊達ではなさそうだった。

魔力に目覚めて魔法が使える様になったものの、体から魔力を離せなかったからまともな魔法は使えなかった。自分の力を強くする魔法を使って重い物を持ち上げてもなんだか実感がわかかったし、怪我を治すためには怪我をしないといけない。かと言って分かりやすい炎魔法なんて使ったら全身丸焼けになってしまう。

魔法使いは皆魔力を伸ばす練習をすると聞いて、魔力を体から離す練習を始める私。

でも練習を始めて半日もしないうちにロザリーさんに呼ばれた。呼ばれてしまった。

「ラキ、呼び出し。シルさんの部屋へ行くよ、案内するからさ」

「……はい」

「あら素直。嫌だ、やっぱり死にたくないって逃げ出そーとする人多いんだけどね」

「もし死んでも最後に幸せな思い出をくれた恩があります。私、幸せでした」

嘘じゃなかった。三月か四月ぐらいの間だけど、ずっと辛かった。毎日足が棒になるまで歩いて、夜は怯えて寝て、町に着いたと思ったら絶望の底に叩き落とされて、母が死んで。

それでも最後に綺麗な思い出を抱いて死ねるなら……全く恐怖を感じない、と言えば嘘になるけれど。

「あららら、ラキが眩し過ぎて私浄化されそう。私は直前になって死にたくないって泣き叫んだ口だから……ラキには生き返っ……死なないでいて欲しいと思うわ個人的に」

「ありがとうございます。あの、ロザリーさんはもう実験を？」

「そーよ、終わってるのよ私は。実験終わってからずっとロバさんの部下やってるのよね。しかし今になってそれ聞かかー」

「なんとなく聞き難くて……」

話している内に目的の部屋の前に着く。

ふとロザリーさんを見ると珍しく神妙な顔をしていた。

ロザリーさんに向き直り、胸の前に右手の握り拳を当て、ゆっくり

り一礼する。

何か言いたげなロザリーさんに声を掛けられる前に、私は意を決して微かに震える手で部屋の扉を開けた。

「これから『ヴァンパイア』と名乗って下さい」

シルフィアさんにそう言われ、私は複雑な心境で頷いた。

ちよつと変わった体になるとは聞いていたけど、まさか一度死んで生き返るとは思わなかった。

私は最終確認のための実験だったらしく、一度死んで、ヴァンパイアに生まれ変わった。

実験が済んだという事でシルフィアさんから正式にすっかりした説明を受ける。

ヴァンパイアは老いない。子供は作れない。心臓が動いていない。体温が無い。食事、睡眠がいらぬ。怪我したら魔法を使わぬと直らぬ。首をはねられると再び死ぬ。定期的に血を吸わぬと腐って死ぬ。

……ちよつと変わった体、どころじゃない。完全にヒトとは別のナニカだった。

教会には蘇った事を話すな、指示に従え、裏切ったら相応の処分を覚悟してもらおう、とも言われた。

変化した体に戸惑ってはいたけれど、シルフィアさんに逆らうなんてとんでもない事はできない。この先何があっても、彼女が私を救ってくれた事実には違いないから。

シルフィアさんは素直に頷いた私をしばらく胡散臭そうに見ていたけど、扉を指差して行きなさいと言った。

行きなさいって言われてもこれからどうすればいいのか。疑問は部屋の外に待機していたロザリーさんが答えてくれた。

「ロザリーさん？ 待っていてくれたんですか？」

「やー半日ぶり。待ってたんじゃないかって呼び出しを受けたのさ。

一気に色々言われて混乱してるでしょ？ 説明してあげるからおいでな」

「は、はいっ」

ひらひらと手を振って、ロザリーさんは私を別の部屋に案内した。

そこは小さな窓と小さなテーブル、それに小さな椅子が二脚あるだけの小さな部屋だった。ロザリーさんがすすめてくれた椅子に腰掛け、向かい合う。ロザリーさんはほんと咳払いして切り出した。

「さて、と。まずはラキ、また会えて嬉しいよ」

「私ですか。ロザリーさんもヴァンパイアなんですか？」

「惜しい、ヴァンパイアね。いや違うよ、私はゾンビなのさ」

「ゾンビ？」

「んー……血を吸わなくていい代わりにロバさんの手下になったヴァンパイア、かな。ほら、時々私が呼び出しがどうのって言ったのはロバさんからのテレパス。常に通信魔法が繋がってる状態なのよね」

「それは……便利ですな」

ヴァンパイアの上位互換みたいと私が感心しているとロザリーさんはなぜか苦笑した。変なの。

「あはは……知らぬがなんちゃらかね。えー、それじゃー説明していきこうか。ラキはもう食事の必要が無い、というか無闇に食べたり飲んだりしたらダメだよ。胃の中で腐って酷い臭いがするからね。」

血を吸った後も一日ぐらい腹の中に入れたら吐き出す事」

「え、お腹減って動けなくならないんですか？」

「そこはホラ、魔法さ」

「魔法ですか。なるほど」

魔法って凄い。

「それで今のとこ特に仕事は無いから、基本的に地下室で待機しててね。用があれば誰かが呼び出しかけるから。ちょっと狭いけど何日か前にアニマルゾンビを森に送ったからぎゅうぎゅう詰めにはなつてないはずさ。まー暇潰しに本でも読んでる事をおすすめするよ。灯りは蝋燭だけだけどね」

「あの、私、文字はあんまり」

「あ、読めないんだったね。それならとらんぶでもやってるといーよ。ラキの他にもヴァンパイアはいるからさ、その人達に教わりなよ。身体の調子が悪くなってきたと思つたら地上へ出てきて私か口バさんにも言うてくれればどの人間の血を吸えばいーのか指示するからね。血吸いに最初は抵抗あるかも知れないけどすぐ慣れるさ。まー何か困った事があれば地上に上がつて私に言えばいーさ」

地下室では仲間のヴァンパイアが迎えてくれた。なぜこんなおぞましい体にした、と怒っていたり嘆いていたり、平然としていたり、死と餓えから解放された事をシルフィアさんに感謝していたり、色々な人がいた。

意見の違いはあつても同じ境遇という事で皆良くしてくれて、すぐに私は薄暗い地下室での暮らしに慣れた。とらんぶで神経衰弱をやる事もあれば、簡単な文字と単語の手解きを受けたり噂話と小話を交換し合つたりして退屈しない。

狭い地下室で気が滅入った人は地上に上がつて日の光を浴びに行つたりもしていた。

私も最初は吸血が怖かったけど、私が血を吸うのを怖がっていると吸われる方も余計に怖がらせてしまう事に気付いてからは口ザリーさんの言う通りすぐ慣れた。それが良い事なのか悪い事なのかは

分からない。

経過観察でシルフィアさんに呼び出される以外は特に何もするべき事が無くて、ずっとこのまま地下室で暮らすのはちょっと嫌だなと思う。それをロザリーさんに言ったらもうすぐ東の森に引っ越すからそれまでの辛抱と教えてくれて気持ちが悪くなった。

そのうち私と同じ様に経過観察の呼び出しを受けても帰ってこない人がいる事に気付く。それは決まってシルフィアさんに反抗的な事を言っていた人だった。

シルフィアさんに『相応の処分』をされてしまったのかな、と想像する。

ヴァンパイアになって思う事は人によって違う。一度死んでも二度と死にたくないと思ったり、一度死んでもう死は怖くないと思ったり。でも私達をヴァンパイアにしたロバートさんやその指示を出すシルフィアさんを恨むのはおかしいと思った。

だってシルフィアさんは私達が自ら命を絶つ事を止めない。そんなにヴァンパイアになったのが嫌ならもう一度命を手放せばいいのに。

それをせずつになんて体にくれたんだと文句を言うのは変。私達は短くても幸せな暮らしをさせてもらう代わりに死を受け入れる事をシルフィアさんに約束した。ヴァンパイアになって生き続けるから文句を言うのは筋違い。

それから数ヶ月が経って見当違いな恨み言を言う人が皆いなくなった頃、私達は東の森に移動する事になった。地下室から解放されて堂々と青空の下で暮らせると聞いて皆嬉しそうだった。

夜陰に乗じて屋敷を抜け出し、東の森にひた走る。この時私達は昼夜通して走り続けられる疲れ知らずの体の便利さを実感した。この体は色々欠点もあるけれど、良い事も多い。

東の森の木霊の木の下にたどり着いた私達はゾンビ達と共に森を切り開いていく。

ゾンビの人達はロバートさんから指示を受けてそれをヴァンパイ

アの私達に伝えるから、立場的にヴァンパイアはゾンビの下につく事になる。それに納得しているヴァンパイアもいればしていないヴァンパイアもいて。

屋敷の中ならとにかく、今は人里離れた辺境の森の中。帝国の目からも王国の目からも（大魔法使いの目からも）離れているのだから、上の指示に従ってコソコソする理由がない。そうだ、下剋上しよう……と私に持ちかけて来たのは私と同じ魔法が使えるヴァンパイアのランバンさん。四十近い痩せこけた男の人で、時々粘っこい視線を向けてくるから苦手だった。

勿論私は 遠回しに お断りする。

男の人の権力欲というか支配欲というか、そういう物が私にはよくわからない。

私はなるべくしてヴァンパイアになったんだと思っているし、シルフィアさんに感謝していて、逆おうなんて思わない。

第一下剋上に成功したとしてもこんな体で何を指針に永遠の時間を生きていけばいいのか分からなかった。

ランバンさんはあからさまに舌打ちすると私に今の話を忘れる様に言い含め、立ち去る。

独立したいならシルフィアさんに直接そう言えばいいのに。シルフィアさんは裏切り者には容赦ないけど正直者は悪く扱わない、気がする。

はつきり言ってランバンさんの企みがシルフィアさんに通じるとも思えなかったので私は言われた通り黙っておく事にした。

できればシルフィアさんのためにもランバンさんのためにも改心して反抗は止めて欲しいけど、どうなる事やら。

#### 四話 吸血鬼（後書き）

ドラキュラ ラキ。単純ネーミング

いまのどこ登場人物全員にラ行の文字が入っている不思議。わざとじゃないんですがパツと思いつく名称に全部ラ行が入っているから仕方ない。作者はラ行に呪われているらしい

## 五話 春

長い冬が終わり、春になった。

堀と土塁が完成し村の防備も整っている。食料はギリギリだったがなんとか足りて、餓死者凍死者が出る事もなく。ヴァンパイアが一人シルフィアの寝込みを襲ってエルマーに真つ二つにされていたがまあ何事もなく冬を越せてなによりだった。

で、雪溶けと共に正式に種族毎の役割分担を決定。

人間は専ら種まきと水やりと近場での狩猟。あとは皮をなめしたり、薪を集めたり、家を増築改築したり、要は普通に生活してもらう。しかし税の類を飢饉が起きた時のための蓄え以外一切とらないのは良心的ってレベルじゃねー。それもはじめ数年は免除だしさあ。超優良労働者・ゾンビがいるからこそできる荒業だ。

アニマルゾンビ・スケルトン、スケルトンは村の周囲での侵入者撃退。基本的に村に入ろうとする野生の獣を追っ払うのだが、有事の際の防衛（壁役）も担っている。

シルフィア、エルマーを除けば一人になってしまったヴァンパイアは村に残り魔法を使った雑用。俺の研究で魔法が必要になった時は応援に来たりもする。

ちなみにそのヴァンパイアはラキという少女で、シルフィアの信用を得て魔術訓練を始めている。クリエイト系魔術を身につけて離反反抗されると色々致命的だから、魔術を教えるというのは最上級の信頼の証だ。まあゾンビとリッチは離反もクソもないから最初から魔術訓練させてんだけどな！

そして余ったゾンビ、レッサーヴァンパイアは森の探索を開始。

泉や湿地の場所、植生、各動物の生息域。東の森は王国　今は帝国　の東端だが、更に東には何があるのか。諸々調べてもらう。時間がかかる重要な仕事だ。

一応統一規格の目盛りがついた簡易オリジナル測量器具も渡した

から……それなりに正確な地図ができる……はず。専門知識もない素人仕事に期待はできんが、まあ何キロミールも狂った地図にはならんのだろ。

調査で見つかった新種の植物や動物は逐一ゾンビのテレパスで俺に報告され、目録に追加される。そして可能なら現物を村へ輸送させ、何かに使えないか調べるのだ。

原生植物で主食になりそうな穀物があればそれを活用したいし、薬用になる植物、砂糖を作れそうな植物があれば是非欲しい。いや俺は食べれんが、村の人間が獣の肉をお湯で煮ただけのスープを飲んでいたり果物を丸かじりしたりしているのを見ているとなんか切なくなってくる。彼等には文明的な食生活を堪能してもらいたい。

ああ塩も欲しいな。調査の結果海が遠いと分かれば岩塩を探すはめになるのだろうか。というか岩塩あるのかこの辺りは。

大量に持ち込んだ羊皮紙も供給が無いからいずれ不足するだろうから紙が作れる植物の発見も急務だった。いやね、パピルスならあるが使い勝手が悪すぎるんだ。ちよつと水に濡れるとすぐダメになるしさ。

欲しいものは多い。欲しい物が全て発見できるなんて思っちゃいないが、幾つかは見つかってくれと非常に助かる。探索隊の活躍に期待したい。

んでもって話は変わり研究の方だが、まーた新種のノーライフが出腐った。今度は名称変更ではなく新種。

アワレにもずんばらりとエルマーに真つ二つにされたヴァンパイアの首を落とし、せつかくだから死体でクリエイトスケルトンをしよつとしたら妙なモンになった。

骨にならない。腐りもしない。ゆつくりとだが負傷が自動再生する。自我はスケルトン並に薄く支配力が発生している。そんなノーライフ。

なんぞこれ。

不思議に思つてアニマル・レッサーヴァンパイアを首チョンパし

てクリエイトスケルトンしてみると同じような状態になる。

ゾンビからの再復活とヴァンパイアからの再復活では違う変化をするようだった。

ゾンビとヴァンパイアの誕生の過程で違うのは魔力固定が不完全か完全か。もしや不完全固定か完全固定かで復活の際の性質が決まるのか、と思いいアニマルゾンビやら新しく創ったアニマルレッサーヴァンパイアやらをかき集めて試してみたらビンゴだった。

ヴァンパイアを不完全固定で復活させると、命名グールに変化する。

グールは自動再生能力（弱）があり、チョンパした首がくつついて一見ゾンビの様に見える。前述した様にゾンビと違いスケルトン並に自我が薄く、しかし支配力は発生している。命令の効きが鈍いのはスケルトンに同じ。また魔力の自然回復ができず、魔力が切れると一気に腐敗して骨になる。

どうやらスケルトンに見られる超再生能力が腐敗の進行を止めているようだった。常に腐敗を止めるために再生し続けているため、何もしていなくても魔力の消費が早い。スケルトンと比較して倍ほどの早さで減っていた。

一方ヴァンパイアを完全固定で復活させるとこちらは命名リビングデッドになる。

特徴は魔力が自然回復しない。身体能力が高い。ヴァンパイアと同様に腐敗していく（防止策も同じ）。そして自我がはっきりしていて支配力が発生していない事。

身体能力が高い、というのは魔力を消費して自動で行われる強化が原因らしく、こちらもスケルトンと比較して倍ほどの早さで魔力が減っていく。複数種の動物で実験した所、魔力密度にもよるようだが凡そ二倍前後の身体能力を発揮していた。

首チョンパで死んでリビングデッドになるのだから復活時点で首と胴体が泣き別れになっている訳だが、目から得た情報で体を動かしているらしく頭がとれていると体の動きが滅茶苦茶だった。首を

体に縫い付けてやると普通に動いたので、これからリビングゲデッドの首は復活後すぐに体に縫い付けようと思っている。

ゾンビを不完全固定するとスケルトンになるのは当然として、完全固定するとこれは命名デュラハンになる。

支配力・自我はスケルトンと同様、再生能力が無い代わりに身体能力が高い（リビングゲデッドと同じ）。ただし腐敗はしない。

こちら首はとれているのだが、行動を視覚や聴覚情報などに頼っていないらしく首がとれていても体は普通に動く。頭を潰しても動くもののやっぱり魔力が尽きれば停止する。で、リビングゲデッドと区別をつけやすくするためデュラハンの首はもげたままにしておく。

首無しでふらふら動く死体は見ていてすんげえホラーだった。夜道でばったり出くわしたら悲鳴を上げてしまいかも知れない、と呟いたら横で聞いていたロザリーが私も夜道でロバさんに出くわしたら悲鳴を上げてしまいかもと言っていた。いいだろ別にノーライフがノーライフ怖がっても。

それでまあそんな感じに新種族が発見された訳だ。しかし一番使い勝手が良いのは今のところゾンビなので種族ごとの研究の掘り下げは後になるだろう。わざわざ実験のためだけに使えないノーライフを増やしても管理が大変だ。

いや実験後にさっさと処分すりゃいいんだけど、本格的に実験をするとなるとどうしても人間が必要になる訳で。たった百三十人の人間をバカス力殺してノーライフにしたら流石に暴動が起きるわ。特に後から村に加わった難民連中は研究のために命を云々の契約をしてないからさ。

大罪人が出たり寿命が来た人間が出たりしたら実験に協力していただく予定。そのへんは人間達を刺激しないよう、のんびり行こうと思っている。

もう一つ冬の間に分かった事だが、ノーライフの動力源は魔力らしい。

ある時リッチが魔法で水を煮沸していて魔力を使い切ったら動かなくなつた。

うわこりゃ死んだか、と慌てたが数分で何事もなかったかのよう  
に再起動。試しにもう一度魔力を空にさせ、無魔力空間を作つて閉  
じ込めたら十分以上経つても再起動しなかつた。しかし無魔力空間  
を解除すると数分で再起動。

従つてリッチは魔力で動いている事が分かつた。十数分ではなく  
二時間三時間と無魔力空間に入れておいた場合も再起動できるかど  
うか興味があつたがそれは試さないでおく。本当に動かなくなつた  
ら困る。

ゾンビやヴァンパイアに魔力を捨てさせても同様の結果になり（  
魔力を体外にポイ捨てするだけなら魔力操作訓練は必要ない、魔力  
覚醒直後の俺でもできた）、ある程度保有魔力を減らした後で極端  
に激しい運動をさせてみた所魔力回復が遅くなつたので、魔力が運  
動エネルギーとして使われているのだという結論に至つた。

物理的に有り得ない体質になるうが、運動エネルギーが無限に沸  
く事はない。当然っちゃ当然の話だ。まだ魔法や魔力の原理・性質  
については不明な部分ばかりだからやりようによつては無限にエネ  
ルギーを取り出せるのかも知れんがそれはともかく。

魔法を使わずとも魔力をエネルギーとして使う事ができる。これ  
は実に興味深い。

考えてみればスケルトンの超再生も保有魔力密度に関係無く魔力  
を消費して起こしている魔法現象な訳で、研究次第では魔法行使に  
必要な最低密度の引き下げも可能、かも知れない。どうい道順で  
それを実現するのかのビジョンはさっぱりだが、まあこれも気長に  
行くつもりだ。

ちなみに後日エマーリオの研究資料の走り書きに推論としてだが  
俺が発見したのと全く同じ事が書かれているのを見つけて吹いた。  
死んだ後もその頭脳を見せつけてくれるエマーリオがもうどうしよ  
うもなくエマーリオだった。



## 五話 春（後書き）

内政と研究の折衷で話を進めていこうとしたのに研究ばっかになっ  
っていたでござる。話についてこれているでしょうか。

あ、NAISEIではありません内政です。現代知識はそれほど  
利用しません。急激な発展もしません。次話からは内政・ストーリ  
ーメインにできるといいなと思っています

## 六話 日本語と踊る大根

東の森に移住して二年も経つとどこか落ち着かず不安気だった住人達の暮らしも安定し、さも昔からここで住んでいたかのような顔つきをしはじめた。

ノイロ化びん 兵農分離ができてるのは最初からだ。近頃では職業の分業化が進んでいた。大工やる奴、畑耕す奴、薪を割る奴、水を汲む奴、狩りをする奴、その他諸々。職業が分かれるところ……秩序みたいなモンが生まれてなんか安心する。地に足がついているというかなんというか。俺自身が文字通り地に足がつかないフワツフワした暮らしをしてるもんだから余計に感じ入る物があった。

内政担当のシルフィアは現状の流れを崩さず村を安定させていくために四苦八苦しているようだが、基本的に俺はノータッチ。そもそも部署が違う。

リッチによる帝国での情報収集とその編集も手慣れてきたため、自然最近の研究資料の編纂に力が入っていた。

仕事場は件のログハウス風倉庫に新しく併設された書庫。床面積にして八平方メートルほどの部屋の壁際は天井まで届く書棚で埋められ、スカスカの中身を晒している。まあその内埋まってくるだろう。その棚に包囲された部屋の奥に設置された小テーブルでガリガリ羽ペンを動かすロザリー。の背後に漂い前世の音楽を口ずさみながら時々修正指示を出している俺。

「そこは『フ』じゃなくて『ワ』だ。……おい『フ』にしてどうする。落ち着け」

「落ち着いてますー」

「落ち着いてそれか」

「これです。日本語難し過ぎて発狂しそーなんです」

ウダウダ言いながらロザリーは羊皮紙をナイフでカリカリ薄く削り、間違った箇所を書き直した。

そう、研究資料は編纂の際に全て日本語に変換していた。勿論これには水溜まりよりも深く膝小僧よりも高い理由がある。

以前ロンバンだかりンバンだかいうヴァンパイアが殺人（？）未遂事件を起こした事があったが、その時に研究資料の秘匿性が問題になった。

もしもシルフィアやエルマーを狙わず研究資料の奪取を狙われていた場合、守り切れたかは微妙だ。ゾンビを見張りにつけておく手もあるが、強引に突破され強奪され逃げられる可能性は否めない。万一帝国にでも情報をリークされたら一巻の終わりだ。

なら盗まれてもいいように暗号化すればいいじゃない、という事で研究資料の暗号化を決定。

しかし一から暗号を作っても俺如きではあつという間に解読されるものにはかならない。シルフィアは俺よりも脳のスペックは高いが暗号というものに馴染みが無く、前後に一文字ずらすとか一文字飛ばして読むとかどこかで聞いたような発想しかできない。エルマー？ 論外。

そこで問題だ！ この状況でどうやって研究資料を暗号化するか？

3択 ひとつだけ選びなさい

答え？ ハンサムなロバートは突如暗号のアイデアがひらめく

答え？ エマーリオが生き返って助けてくれる

答え？ ロクな暗号にならない。現実是非情である。

答え？ 答え？ 答え？

うむ、日本語にすりゃあいんだよ。素人考えの暗号化よりも全く別の言語にしまうのが一番手っ取り早く確実だ。

普通二百ウン十年経てば前世の言語なんて忘却の彼方だろう。しかし俺は知恵熱で強化された高い記憶力がある。難解で使用頻度の低い単語以外はほぼ全て思い出す事ができた。

魔法の効果は行使者の認識に依存するため、魔法を使っても知らない事は分からない。従って未知の言語に対する翻訳魔法は存在しない。日本語は前世に数多くあった言語の中でも難しいと言われているが、真つ当な手段で解読しようと思えば十年やそこらでは不可能だろう。ナイスアイデア俺。

……しかし難しい言語なだけあって習得も難しく、ロザリーがなかなか覚えてくれない。

こうしてつきつきりで間違いを直し教え込んでいても未だ間違える。今度は『ケ』が『ク』になっていた。間違え過ぎだろ。

「えーと、『形質魔力は本質的にはじゅん魔力と』……純魔力の純つてどんな漢字でしたっけ」

「こんな感じの漢字」  
「把握」

テレパスで文字をダイレクトに伝えられるおかげで説明の手間はかなり省けていたが、ロザリー一人に翻訳作業を任せられるようになるまでにはしばらくかかりそうだった。

夜になり、文字が読めなくなった所で本日の翻訳作業は終了。ロザリーに自由にしていいと言うとそそくさ村の端の小屋へ入っていた。またラキと四方山話でもするのだろう。前は徹夜で話続けて

いた事もあった。

一体何をそんなに話す事があるのかと思うが女つてのはそんなものなのだろう。奴らはたまに喋り続けていないと死ぬ病気に罹ってるんじゃないかと思うぐらい喋りまくる。偏見かも知れないが。

俺はロザリーが入っていった小屋に背を向け、ムスクマロイの様子を見に行った。

畑の隅に作られた小さな囲いの脇に月明かりに照らされた一体のグールがぬぼーっと立っている。俺を映さない空虚な瞳が自業自得とは言え憐れみを誘った。

創っておいて放置するのもなんなので見張りっぱくムスクマロイの側に配置しているが、ぶつちやけ「待機」しか命令していないので無視してムスクマロイを摘み取る事もできる。下手に「ムスクマロイを守れ」だのと命令すると水やりに来たゾンビにすら襲いかかる単細胞具合なので待機しか選択肢はなかった。誰もいないよりはいいだろう、程度の認識だ。

植え替えて1ヶ月ほどになるムスクマロイは暗さのせいもあり葉も茎もしなびて元気が無さそうに見えた。原生地の土を持ってきて日照量を調節し一日あたりの水やりの回数を試行錯誤してもやはり徐々に枯れてきてしまう。当初は植え替えて三日で完全に駄目になってしまったのだから進歩はしているものの栽培して増やすにはまだ無理があった。

ムスクマロイは迂闊に水をやれば根が腐り日照量が多ければ葉がしなび暗がり育てると黴が生える鬱陶しいほどデリケートな植物だ。原生地はなぜあんなに勢いよく繁茂しているのだろう、と首を捻っていると、視界の端で何かが動いた。

何気なく視線を移せばそこでは根分かれした大根が踊っていた。ただし二本。

「こだ……ま？」

思わず疑問系になる。探しに行く前に向こうからやってきた。しかもなんか分裂してやがるこいつ。いや別個体か？

俺の眩きに反応して片方の大根が悩ましい動きでクイクイ腰を振りながら手……のように枝分かれした根を振ってきた。反射的に振り返す。

懐かしさは感じるもののいざ再会するとどう反応すればいいやら分からない。あちらは植物、こちらは動物。意思疎通は難しい。

どう声をかけるべきかかけないべきか少し悩んだが早々に思考放棄した。こいつはひたすら踊るだけのゴーストだから踊らせておけばいい。

じつと見ているといきなり一体が独楽の様にくるくる回りはじめた。充分に回転速度が上がると今度は回転する個体の上にもう一体が飛び乗り逆回転しはじめる。

そして上の回転が充分になると下の個体がジャンプして跳び上がった。頂点に達した所で上の個体が二段ジャンプをする。そして着地。

跳ぶ、跳ぶ、着地。跳ぶ、跳ぶ、着地。跳ぶ、跳ぶ、着地。

二体のプラント・ゴーストはぴよこぴよこ跳びながら村をゆっくり横切り、再び森の奥に消えていった。

……なんだっただ。

呆然と見送った次の日から、木霊達は時折夜になると村にやってきてはコンビネーションダンスを一方的に見せ付けて去っていく様になる。意味不明だが踊りはやたらと上手かった。

六話 日本語と踊る大根（後書き）

答え？ハンサム（笑）なロバートは突如暗号のアイデアがひらめく  
ロバートは別にかっこよくも悪くもねーです

## 七話 なんだ、ただの大きな水たまりじゃないか

海が見つかったらしい。

木霊の襲撃を辛くも退けた日の翌日、東へ向かっていたゾンビ達から森を抜けて海に辿り着いたとのテレパスが送られてきた。

そこは広い砂浜になっていて所々に岩場もあるらしく、貝を中心とした磯の生き物の採取、漁、そして塩田としての活用に夢が広がる。

移住の際村に持ち込んだ塩は既に尽きはじめていたため、早速ゾンビを三人ほど塩作りの任につかせた。塩は戦争で戦略物資として扱われるほど重要な資源だ。摂取不足が深刻になると最悪死ぬのだから無理もない。

交易を断ち引き森の奥に引きこもった拳げ句塩不足で人間全滅とか笑い話にもならん。

さて塩を得るには海水を煮詰めりゃいいわけだが、如何せん海水塩分濃度はさほど高くなく、そのまま煮詰めても大した量はとれない。

そこで塩田だ。

塩田は確か砂浜に海水撒いてその後析出した塩の結晶をとるのだと記憶していたが、真夏の快晴の日に五日ほど続けても結晶になるどころか白っぽくもならなかった。何度繰り返しても砂に海水が染み込んで、乾いて、それだけ。

なぜだ。間違った方法を記憶していたのか。砂浜に問題があるのか。それとも五日では足りないのか。くそ、前世知識は中途半端で困る。海水を砂浜に撒いて、の部分は間違っていないはずなんだが。「という訳でまだ塩はできない」

「役立た……役立たずですね」

途中経過をシルフィアに伝えたらなじられた。なんだとゴルア、俺だってそれなりに頑張ってたよ。しまいにゃ怒るぜ？

「言い直せてないぞ。俺が役立たずならお前は何か良い考えでもあるのか？ ん？」

「いえ、現代知識（苦笑）の事です。どれもこれも半端で虫食いじゃないですか。以前言っていた最強の剣の作り方も穴だらけでしたし……エルマーがぬか喜びしてましたよ？」

「それは日本刀の事か？ そもそも鉄の供給の目処も立って無いんだ。製法を教えられた所でどうしようもないだろ」

森では未だ砂鉄も鉄鉱石も見つかっていない。

「それはそうですけど……やはり森での暮らしは生活資源の確保がネックですね。お祖父様が帝国に行きたがらなかったのも分かる気がします」

生活水準が下がると堪えますから、というシルフィアに同意する。俺は人間とかけ離れているが、だからこそ人間らしい人間を見たいと思う。

シルフィアだって髪の手入れに使う櫛、靴、服、椅子、ベッド、他にも色々と物に依存した暮らしをしていて、そういった物の使い心地の良さを求めている。ヴァンパイアはただ存在し続けるだけなら人間よりもハードルが低いが、豊かな暮らしをしようと思えばやはりそれなりの努力はしなければならぬ。

まあエルマーはシルフィアさえいればその辺りに頓着しないっばい。今はあいつの話はいい。

現状服の素材や調味料になる植物もなく、加工技術も拙い。足りない物が多過ぎた。

エマーリオが新しい実験器具やら建築物やらの設計図を遺しているがそれをつくれるだけの水準にも色々達していない。もつとも設計図の中にはコレ加工用の機械作らないと無理じゃねってレベルの物もチラホラあったし、王国レベルの技術力を村に反映できてもつけない物は多かつただろうが。

「まああれだ。話戻すが取りあえず思いついた改良案を片っ端から試してみるさ。海水を普通に煮詰めても塩を作れん訳じゃないから

量産の目処が立つまではその方針で」

「そうですね。仕方ありません。一日あたりの生産量はどの程度になりそうですか？」

「あー、と……」

海水の塩分濃度が3・5%（前世の海と同じなら）。大鍋をいくつか持ち込んで一日中煮詰めたとして……ゾンビ三体で一日に確保できる燃料の薪の量が……

「……大体五十クロネ（ほとんどグラムと同じ量を表す単位）ぐらい、か？」

「ふむ。ではそうですね、ひと月に一度村へまとめて運んで下さい。人間への配給はこちらで行います」

「あいよ。しかしなんだな、村人育成ゲームやってる気分になってきた」

「あ、それなんとなく分かります。私も時々家畜を繁殖させてるような気分になります」

「ちょ、おまつ……まあいいか、実害はない」

人間として見て奴隷の様に扱うよりは家畜として見て丁重に保護する方がマシだろう。

早朝、村から少し離れた小さな空き地の真ん中で、エルマーは剣

を片手に静かに佇んでいた。それを囲むのは棒切れを持ったスケルトン十体プラス俺。

だいたい週一でやっているちよつとした模擬戦だった。

エルマーが頷いたのを見てスケルトンに「殺せ」と命令する。スケルトンはカタカタ言いながら一斉にエルマーに襲いかかった。

エルマーはエマーリオを師と仰いだ優秀な剣士だ。文字通り頭空っぽの猪突猛進骸骨兵なぞもの数にもしない。剣が一閃するたびにスケルトンが一体また一体とバラバラになっていく。

が、崩れ落ちたスケルトンの骨は磁石に吸い尽く砂鉄の様に集まり、高速でカシャカシャと組み上がり再び立ち上がる。エルマーは斬っても斬っても再生するスケルトンに襲われ続けた。

エルマーは蹴りやら肘やら体当たりやらを挟み実戦的に戦ってはいたが、エマーリオと比べるとなんか動きが泥臭く感じる。もつと言えば余裕が無く無駄に緊張感がある。

ヴァンパイアであるエルマーは首を落とされない限り死なないから、多少の痛みに耐えれば（ノーライフは五感が鈍い）心臓が破裂しようがどてっ腹に風穴空こうが問題なく戦える。人間よりも弱点が格段に少ないのだ。

しかしそれでも腕が折れたら剣は握れないし、足を斬られたら機動力が落ちる。捨て鉢に戦い過ぎるのは愚策。

エルマーはヴァンパイアの性能を活かした効率的な戦い方を模索していた。人間だった頃の癖を消し、ヴァンパイアならではの剣技を開発しているのだ。それは一朝一夕に完成する物ではなく、癖を消すために四苦八苦して現状人間だった頃よりも弱体化しているが、熟練すれば厄介な強さに仕上がる事だろう。

魔法を考慮しなければ。

いくら剣技を磨いても遠隔で魔法ぶっぱされたら死ぬ。そのへんどう考えてんだらうねエルマーは。

つらつら考えている内にスケルトンの魔力が尽きてきた。スケルトンに攻撃中止命令を出し、退かせる。

一息ついたエルマーが剣を肩に担いで注文を付けてきた。

「ロバートさん、骨ばかりと戦っていると飽きる。デュラハンカリ  
ピングデッドかグール出せない？ゾンビでもいい」

「アニマルで良ければ」

「いや、人を斬りたい」

「……ほんつとにお前達の将来が心配だよ、俺は。ひゃっはー人間  
は虐殺だア！なんて事にならないだろうな」

「んえ？ ああいやそういう意味じゃなくてさ。骨だけと肉アリじ  
ややっぱり斬り応えも立ち回りも違って来るんだ。別に俺は人間を  
斬るのが楽しい訳じゃない」

ほんとかよ。じと目で見るとエルマーは爽やかな微笑で返して  
くる。……まあいいか。

「ゾンビは労働力に使うから外せない。デュラハンは再生能力がな  
いから斬られたら直すのが手間だ。リビングデッドは命令できない  
から無理やり戦わせても腰が引けて模擬戦にならないだろ。多分な。  
出すとすればグールか、一体しかいないが」

「それで充分……あれ、そのグール、シルフィアを襲った奴か」

「そう」

「燃えてきた」

エルマーの微笑が獰猛な肉食獣の笑みに変わる。うへえ、こりゃ  
ランバン細切れにされるな。

ランバンの成仏を祈りながらエルマーと共に村へ戻る。村から出  
るのはどこからでも良いが、入る時は一つしかない門を使わなけれ  
ばならない。門以外の場所から侵入しようとするスケルトン達が  
一斉に襲いかかってくるのだ。

エルマーは時折わざと門以外から村に入るが今回は俺がついてい  
るため普通に門から入る。

スケルトンへの魔力充填も楽じゃない。無闇やたらとぶっ壊され  
たら流石の俺も怒る。もっとも怒った所で模擬戦の中止ぐらいしか  
報復手段はないのだが。

最近建てられたシルフィアとエルマーの小さな屋敷に帰ると、執務室でラキが書類片手にシルフィアに報告中だった。

「　　以上の理由から故郷に帰りたがっている村人が多いです」「そうですか。喉元過ぎれば熱さ忘れる、ですね。愚劣極まりない。この村を体の良い避難所扱いするつもりなのでしょうか」

シルフィアは言いながら自然な動作でエルマーに歩みより、腕を絡めてもたれかかった。

ラキがちらりと俺に視線を送ってきたので肩をすくめておいた。いつもの事だ。

「一人でも返せば村の存在が露見します。来る者拒み、去る者殺す。誰一人として逃がしません。」

その代わりに村に留まる限り王国時代と比べ無に等しいほど税、魔法を使った怪我の治療体制を敷いている訳ですが……」

「着心地も臭いも悪い毛皮の服、バリエーションに欠けた料理、嗜好品の不足、隙間風が入る家、四方全てを森に囲まれた閉塞感、子供が作れず性欲の発散も難しい。まあ不満を数えりゃキリないわな」  
人間良い事にはすぐに慣れ、悪い事にはなかなか慣れない。毎日タダでパンが出れば初めこそ感謝するがやがてワインを要求するようになる、それが人間だ。上手い事飴と鞭を使い分けなければならぬ。

シルフィアはエルマーの肩に頭をこてんと持たせかけながら考えていたが、やがてついと俺に目を向けた。

「今年の森は実りが良いと聞いていますが？」

「確かに去年一昨年よりは良いな」

俺の答えにシルフィアは頷く。

「では子作りを解禁しましょうか。森の探索に出しているゾンビを一部海に回して下さい。釣りと貝採りをしてもらいます。浅瀬で可能な漁があればそれもお願いします。」

ラキ、畑を拡張しましょう。畑の面積は1.3倍程度までなら今の人間だけで回せるはずですよ。」

それで食料は足りるでしょう。新しく生まれた子供が成長期に入るまでには畑作も安定した収穫が見込める様になるはず。余程の凶作に見まわれでもない限り餓死者は出ないでしょう」

「余程の凶作になったらどうするんだ」

「何人かゾンビになってももらいます。口減らしになり労働力も増え一石二鳥ですね」

俺の疑問にシルフィアはサラツと答えて続けた。

「子供が作れるとなれば性欲の発散にもなりますし、子供が生まれれば故郷に帰り難くなるでしょう。更に生まれた子供の故郷はこの村。帰属意識がこの村に働いている人間が増えればそれだけ管理も楽になります」

なるほど。食料さえ間に合えば良さそうな方策だ。しかしこういふ話の時にエルマーが空気過ぎて泣けてくる。

「何か異論、質問はありますか」

「ない」

「いえ、ありません」

「是非もなし。そもそも内政はシルフィアに任せてるからな、好きにやれ」

全会一致で決定した。トップが一枚岩だと楽なもんだ。

仕事増やすなど言っておいたにもかかわらず新しく海産物調達任務が追加されたがまあ許容範囲内。村の社会体制が安定するまでは少しぐらい仕事増えても黙ってやるさ。

七話 なんだ、ただの大きな水たまりじゃないか（後書き）

魔女の宅急便は五、六回観なおした

## 八話 兆し

村ができて五年が経ち、農作業をする人間達の背に負われた幼児が見られるようになった。

幼児は体が弱く死亡率が高い。体力不足を魔法で補う事ができるためあまり死ななかったが、それでも五人生まれた赤子の内一人は寒さの厳しい冬に死んでしまった。

シルフィアも俺も赤子をノーライフにするつもりはなく（そもそも朝起きた時点で冷たくなっていたため復活不可能だった）、遺体は村の端の墓地に埋葬される。冥福を祈る。

で、他の赤子は順調に成長している訳だが、毎晩毎晩夜泣きがうるっさいのなんの。改築増築を繰り返して山小屋レベルに進化しているとは言え家の防音は紙レベルで、赤子の泣き声が筒抜けだった。近所から苦情が山ほど寄せられたため子供ができた夫婦はできる限り村の外れの家に住ませる事になる。

他にも大工の心得がある奴は木材を運んだり加工したりする関係で村外れに移動させた方が良く、研究資料があるログハウス風倉庫改め研究室や食料倉庫、シルフィアとエルマーの屋敷など行政系統の家屋は村の中心部に集め……などなど区画整理が必要になってきた。

家ができて、通りができ、広場を作り、森を切り開き村を広げる。五年かけた甲斐があり、随分と村らしい村になってきた。

「ここのとこ結構使える資源が見つかってきましたねー」  
「見つかった、より用途が判明した、の方が正しいだろ」

日課である研究資料の編纂をしながらロザリーと探索隊の成果の近況について話す。

ロザリーはシルフィアの雑用っぽい立ち位置についているラキと親交があるため、ある程度行政の状況も掴んでいる。逆も然り。そ

ういう内情を話題に上らせられる程度にはラキの信用は高まっている。勿論普通の人間の前ではそういった話は控えるよう言っている。「こまけーこたーいーんです。個人的には紙が嬉しいですねー。羊皮紙使い潰しても安心ですし」

「使い潰すなよ、丁寧に使え。しかしまあ羊皮紙は細かい字で書き込んでもいずれ無くなる物だからなあ」

紙の原料になりそうな繊維質の植物が見つかったため開始した製紙は現在改良中だ。今のところ質が荒過ぎて使い物にならないが、二年かそこらで及第点になるだろう。

「そっいやシルフィアは砂糖人参に狂喜してたな」

「甘い物が嫌いな女はいませんよー」

「ヴァンパイアに食欲は無いはずなんだけどな。それに食ったら吐き出さないといかんだろ？」

「食欲がなくても嗜好品として楽しみたいんですよ。吐き出さないといけないのは複雑な心境ですけど、それでもね」

なるほど、それで砂糖人参を優先して増産させてるのか。前世の世界では昔砂糖を薬として使っていたと聞くし、そっち方面かと思っていた。

嗜好品への執念は人間もノールライフも変わらないな、などと思っていると、ロザリーが羽ペンの先をナイフで削り尖らせながらふと思い出した様に言った。

「エルさんの窯造りはなんなんでしょうか？ 良質な粘土層が見つかったから真っ先に造らせてましたけど」

「ああ、アレは製鉄用だ。刀が欲しいんだとさ」  
「え」

ロザリーが呆気にとられた間抜け顔をする。

サムライブレードの逸話を吹き込み過ぎたのか、エルマーは刀に並々ならぬ関心を示していた。

西洋剣は力で斬る物が多いが、刀は技で斬る。肉体が成長しないノールライフは筋肉がつかないため技を磨くしかない。その点、刀は

確かにノーライフ向きの武器であると言えるだろう。世界最強の剣士を目指しているぐらいだし単純に異世界で最強をうたわれた剣への厨二的憧憬もありそうだが。

「まだ鉄は見つかってなかったと思いましたが」

「いつ見つかったても良いように製鉄の準備だけ終わらせとくつもりなんだろ。よっぽど刀が欲しいと見える」

エルマーが森の北方にある山の優先的調査を要求してきたのも鉞床を期待しての事だろう。早々都合よく見つかるとは思えんがね。

それに製鉄技術は帝国に派遣しているリッチに盗ませればなんとかなるが、刀の鍛造は俺の虫食いの記憶が頼りだ。まともな刀が出来上がるのはいつになるか分からん。

それよりも俺は粘土の発見で陶器や煉瓦が作れる様になったのが大きいと思っている。

「はあ、皆お気に入り発見があるんですねー」

「そうだな、それはいいから手を動かせ。止まってるぞ」

「バレた。ああ今日も王国語を日本に翻訳する作業が始まるお……」

「黙ってやれ」

「はい」

村の基礎固めが進む一方で、森の外、帝国ではポツポツ魔法使い

が生まれ始めていた。マンドラゴラは有毒だが別にそのまま摂取しても死にはしない。半身付随になったり内臓がボロボロになったり目が潰れたりはあるようだが一応魔法使いになれる。

魔法の効果は行使者の認識に依存しているため、外傷はすぐに治せるが内部のダメージを治すのは難しい。帝国の魔法使いは中和法を再発見しないかぎり身体的デメリットを背負い続けるだろう。

帝国での地位の序列は今の所、皇帝>武術大会入賞者>魔法使い>帝国民>元帝国民、となっているようだ。

元帝国民でも武術大会に参加できるが、帝国民と比べ武芸の適正が低く、武人氣質の帝国民には到底適わない。元帝国民が優勝して皇帝になれば実質王国を取り戻すどころか帝国を乗っ取り逆転勝ちも可能ではあるものの、そんな奇跡は夢のまた夢だった。

その内魔法大会が開催されるのではないかと、という噂がまことしやかに囁かれているが信憑性は低い。噂話なんてそんなものだ。

魔法を駆使して帝国の中枢に忍び込み正確な情報を盗み見られれば良いのだが、今は帝国側にも魔法使いがいる。俺達の存在を気取られる危険は冒したくなかったし、そうまでして正確な情報を求めるほど切羽詰まってもいなかった。

情報収集に出しているリッチ達は外見が変わらないため怪しまれやすく、旅暮らしをしてもらっている。顔が変わらないだけなら数年ぐらい定住できるが、髪も伸びないから数ヶ月もするとこれが結構怪しまれる。貴人でもないのに毎日切ってるというのは苦しい言い訳だ。素直に旅鳥になるに限る。

ちよいちよい日雇いの仕事をこなし、仕事場で噂話を集め夜にはその日稼いだ金を使って酒場でちびちびやりながら更に噂話を集めるのがリッチ達のスタンダードだった。

いつの間にかあの酒場は酒が安いとかその店のウエイトレスが可愛いとか流行りの怪談とかどうでもいい情報もかなり集まってきているが、後々何が幸いするか分からないのでそれも一応書き留めてある。まあ役に立たない可能性大だから羊皮紙ではなくパピルスや

紙の試作に書いているのだが。

帝国の情報をまとめた書類をロザリーに言っただけに行かせた俺は壁をすり抜け研究室の外に出る。そこではラキが切り株に座り込み、考える人のポーズをとってうんうん唸っていた。

ラキの体表を覆っている魔力がぐによくよ蠢き、全身から絞り出され真上にゆっくり伸びていく。魔力の柱は目測で十ミールほど伸びると急に揺らぎ始め、弾けて拡散してしまった。

「魔力固定が甘いな」

「あ、ロバートさん」

声をかけるとラキは顔を上げて会釈した。難しい顔で手のひらから伸ばした魔力をうによ動かしながら聞いてくる。

「あの……これ……なかなか……上達しないん、ですけど……あつ」  
ラキは魔力を切り離れたそろそろと体から遠ざけていたが、二ミールも離れない内に拡散するのを見て落胆の声を上げる。

単に触手のように魔力を伸ばすよりも切り離れた魔力を維持する方が難易度は高い。どちらも体から遠ざけるほど維持は難しくなる。ラキだけに限らず配下のノーライフには魔力放出と魔力固定を平行して訓練させている。方向性が正反対の技術訓練なので伸びは遅いが、バラバラに訓練して変な癖をつけるよりはマシだろう。俺は魔力固定ばかり磨いたせいで魔力放出が未だに最大八ミールほどだし、シルフィアは魔力放出ばかり磨いたせいで魔力固定が未だににザルだ。

「まあ気長にやれ。魔力の出し入れは呼吸するイメージだ。最初はゆっくり出してゆっくり戻せ」

「うつつ……」

「馬鹿、速くやっても魔力固定乱したら意味がない。急ぐな。どうせ一年二年じゃ終わらん」

「そんなあ……ロバートさんぐらいになるには一体何年かかるんですか？」

「さあ……俺は二百数十年かかったが毎日真面目にやりやあ五十年

ぐらいには短縮できるんじゃないか？」

「う、ごじゅうねん……」

ラキは絶句した。半永久的な寿命があっても体感時間は人間と同じだ。ノーライフにとっても五十年は長い。

俺は眉根を寄せて魔力操作訓練をするラキの横でぐによくによ自分の魔力を操作し、馬やら猫やら剣やら本やらの姿に次々と変化した。最近では三秒もあれば大体なんにでも化けられるようになっていた。地道な訓練の成果だ。

ちなみに先日、満を期してシルフィアの姿をとってシルフィアの前に飛び出し「ドツペルゲンガー！」と叫んでみたのだが失笑された。ひたすら心が痛かった。畜生。

## 八話 兆し（後書き）

おや、ロバートのようすが……

おめでとう！ ロバートはドッペルレイスにしかした！

## 九話 文化

早いもので村ができてから八年になり、土地っ子第一世代が明るい笑い声を上げながら村中を元気に駆け回るようになっていた。相変わらずヘイホー歌いながら斧を振るう男達に、ゆったり雑談しながら草むしりに精を出す女達。村は平和そのものだ。

一 昨年はちよつとした凶作になったが蓄えていた食糧を放出し海へ派遣するゾンビの数を一時的に増やす事で事なきを得、新たに赤子が四人産まれすらした。

しかし死人が出ない訳ではない。大分歳がいつていた村人が三人亡くなっている。

一人が天寿を迎え、一人が雨の日に転び頭を強打して死に、一人は狩りの最中に油断して獣に喉笛を噛み千切られた。天寿を迎えた者は衰弱の予兆があつたため死亡時に俺が立ち会う事ができ、本人たつての希望でスケルトンになっている。

村人の中でスケルトンはかつて魔法使いであつた者、という認識だが、シルフィアの発案により後付け設定で非魔法使いでも条件次第でスケルトンになれるようになったという事にしてある。んなご都合主義が通るもんかね、と俺は最初は半信半疑だったが、魔法について無知な村人はあつさり納得していた。色々ひどい。

とにもかくにもスケルトン村の守護者、という概念はかなり浸透してきており、死後はスケルトンにしてくれと頼んでくる者は存外多い。大体は村というか家族を守りたいがためにスケルトン化を希望していた。くう、泣かせやがるぜ。

ちなみにスケルトンに自我が無い事は知らせてあるため不死の躰を求める者はいない。

村人には「スケルトン村の守護者」「ゾンビ」なんか凄い魔法使い、「ヴァンパイア」なんか偉い魔法使い」と捉えられているようだった。ヴァンパイアに高貴なイメージが定着してきているのは

村のトップとその雑談役にがヴァンパイアだからだろう。ヴァンパイアに血を提供するのを嫌がる者はいない。

俺？ 俺は村の守護霊のイメージを持たれている。

地道な魔力操作訓練のお陰か魔力固定・圧縮技術が向上し、俺の自己魔力密度はエルマーを僅かながら上回る程度にまでなっていた。魔力密度の差が圧迫感を生むのは周知の通りで、魔力覚醒していなくても圧迫感威圧感を感じとれる。従って人間が高い魔力密度を保持するようになった俺を認識しただのだ。

勿論俺の姿が見える訳でも声が聞こえる訳でもない。ただ漠然と、しかし確かに感じ取っている。

で、そんな存在がなにやら村をうろついでいて、どうもヴァンパイア達と協力関係にあるらしい、と。

件のスケルトンを創る時に俺がずっと死体を見守っていた（ように見えていた）事もあり、村の守護者の同類スケルトン 見えないスケルトンという公式が成り立ったようだった。論理の飛躍があつた気がしてならないがそうになっていたものは仕方ない。魔力覚醒しておらず魔法についてほとんど何も知らない人間に魔術を理解しろというのは無理な話だ。

スケルトンはあくまでもシルフィアの配下という事になっているので必然的に俺もシルフィアの下に見られているのだがそれはむしろナイスだ。俺としては実質的に自由なら有象無象の人間にどう思われようが構わないし、俺が下についていると認識されればシルフィアの権力強化になる。独裁体制な村でのシルフィアの権力基盤の補強は重要だった。

人口は増加傾向にあり、畑の収穫も治安も政治基盤も安定していく一方で変わっていくものもある。

まずは食文化が変化した。

これは東の森は王国とは育つ作物が違うのだから当然とも言える。王国から持ち込んだ作物は結局小麦粉以外まともに育たなかった。

海からゾンビが定期的に運んでくる海産物、砂糖人参から生産さ

れる砂糖、東の森固有の獣の肉。魚の干物があり、芋の煮っころがしがあり、肉じゃがモドキがあり、きんつばモドキがある。

なんとなく日本臭いのは俺の仕業だ。森や海の食材は、村人に親しみは無くても俺は前世で似た食材を知っていた。調理法も想像がついたためロザリーを通して口出ししていたら自然にこうなってしまった。

綿の発見による布地の変化と植物染料の発見による服装の変化も大きな変化だろう。平原にある王国と違うため森の中は湿気が多く、比較的露出度が高く風通しが良い服が好まれた。中には甚平を着ている者もいる。例によって原因は俺だ。

いや洋服より涼しげで風通しがいいイメージがあつたもんだからさ。実際目新しい（と村民は感じる）デザインもあり、村人には好評を博している。

甚平を着た村人達が日本好きの欧米人の様に見えて時々笑いそうになるのは秘密だ。

一番予想外だった変化は建築だ。

粘土が見つかったため家を煉瓦造りに移行していかうとシルフィアは考えていたのだが、大工職の人間がこの八年間で木造建築に愛着を持ってしまい、今更煉瓦の家は建てたくない（建築ノウハウも違う）と主張し頑として首を縦に振らなかつた。職人氣質だ。

そして何をトチ狂ったのかその大工が瓦を作り始めた。というか最初は屋根に煉瓦を敷き詰めた。

なんでそんな事をしたと問い詰めた所、大工は「とにかく煉瓦を使って家を建てればゴチャゴチャ言われなれないと思った。全て煉瓦造りにするのは癪なので一部だけ煉瓦にした。反省も後悔もしていない」と供述。雨漏り対策の意味もあつたらしい。

木造建築の屋根にとって付けた様に乗せられたら煉瓦は非常にシユールだったが、大工が気に入ってしまった次も似た様な家を建てると宣言。

村の全ての建築はその大工が主導しているため、このままでは妙

ちくりんな家が乱立してしまう。慌てたシルフィアは俺に大工を殺しゾンビにして言う事を聞かせてくれと過激な注文をつけてきた。いやねーよ。なにその信長と秀吉の折衷ホトトギス思考。

聞けばシルフィアは自分の美意識を逆撫でしない建物になるなら文句は無いとこの事だったので、俺は大工に煉瓦を瓦に変えるようにいった。

木造（和）に煉瓦（洋）はシルフィアのお気に召さないようだったので木造（和）に瓦（和）で行く。シルフィアの美的感覚は悪くない。きつと和風建築にも理解を示すだろう。

大工は瓦でも煉瓦でも良いそうで賛同が得られ、建設。できた建物は多少の違和感はあるものの日本家屋に見えた。

俺はその建物に懐かしさを感じたがシルフィアはエキゾチックに感じたようで及第点を出す。村の建物の屋根が全て瓦になる事が決定した瞬間だった。

しかし料理に服に建物に……木こりの歌もそうだが、どうも日本の匂いが強い。

そりゃあ村をつくるにあたり俺の現代知識が火を吹いた、とまではいかなくとも火の粉を飛ばすぐらいはしたのだから、俺の前世である日本の文化が全く侵食して来ない方が可笑しいのだが。

村のどことなく牧歌的で日本風な雰囲気、俺はロザリーと影ながら村の事を「里」と呼んだ。なんとなくそちらの方がじっくり来る。

その内小国ぐらいにはなるのかな？　そもそもシルフィアとエルマーが平和に暮らすためにつくられた里なのだから管理の手間を考えれば最低限の規模に抑えようとするのだろうけども。

しかし永遠に隠れ住める訳は無い。いつかは存在を外部に知られる。その時外交で平和を保つか、武力で平和を保つか、大穴で新天地に逃げるか。長生きしていても未来は読めない。それが怖くもあり、嬉しくもあった。

……まーアレだ、なんくるないさあ。



## 九話 文化（後書き）

この話を読んで村がどこに終着するか分かった読者様には履歴書の資格欄に「対クロール読心術検定一級」と記入する事を許可しよう！

ふふふふ……ふはははははははははは！

実際に記入する方は自己責任でお願いします

## 十話 編纂終了

研究室でいつものようにロザリーがカリカリと羽ペンを動かしていた。俺もいつものように背後に漂い前世のポップミュージックなんぞを口笛で吹いている。

毎日毎日ひたすら王国語をひたすら日本語に訳し続けていたお陰でロザリーの日本語力は俺の次に高く、淀みなく手は動き白紙を埋めていく。

書いている紙が半分ほど埋まった所でロザリーは手を止めた。

王国語で書かれた原本と自分が書いた紙を何度も見比べ、羽ペンを机に投げ出しいつにもましてふにやけて脱力した声で言った。

「終わりましたあー……」

「そうか。……長かった」

俺は研究室の壁にならんだ棚の内一つを半分ほど埋めている研究資料を見て感慨深く息を吐く。

東の森に移り住んで十一年。「里」の呼称を気に入ったシルフィアが村から里に改称して二年弱。

エマーリオの研究資料の編纂が、この日終了した。

これほど編纂に時間がかかったのは単に日本語に訳していただけではないからだ。

エマーリオは当時、生来のスパコン頭脳に加え俺の魔術の概念と現代知識という核燃料をぶち込まれ、超絶ブーストがかかっていた。俺とエマーリオの共同研究期間は約五年、エマーリオの脳内で超高速処理され導き出された情報を一から十まで紙媒体に出力する時間はなかったと断言できる。人間は書くよりも喋るよりも考える速度の方がはるかに速いのだ。エマーリオの場合はそれが顕著だった。従ってエマーリオは多くの考察を結果しか書いていない。途中経過がすっぱ抜けている。ただでさえ天才ならではの卓越した発想力と精密な論理展開に裏打ちされた考察だ。経過が書かれていたとし

ても理解できるかは微妙な所。

勿論エマーリオは凡才にも理解できる様に噛み砕いて説明する術を知っている。しかしそんな事をやっていけばますます思考速度と出力速度の差が広がってしまう。

だから結果しか書かない。本当に前後の脈絡なく結果だけ走り書きされている考察の多い事多い事。凡才である俺やロザリーには半分謎かけか暗号に見えた。フェルマーが残した数式の証明に挑んだ数学者達はこんな気持ちだったのだろうか。

そんな考察の意図を少しでも推測推察推理し、分類整理し、可能ならば略された文を補足する。並大抵の労力ではなかった。

結局論理が飛躍し過ぎていて意味不明のまま放置する事になった資料は全体五分の一に及ぶが、それでも現状で可能な限りは上手く編纂できたと自負している。

俺はなんだか偉業を成し遂げた気分になった。魔法を始めて使った時のような充実感を噛みしめる。いや偉業を成し遂げたのはエマーリオなんだけどなんとなくね。

俺達頑張った。エマーリオとの隔絶したスペックの差を見せつけられ何度も打ちのめされそのたびに立ち上がりやがて悟りを開き……とにかく頑張った。

「よくやった俺。よくやったロザリー」

「どーもーロバさん……もー一生分頭使った気がしますわー。このまま十年ぐらい眠りたいー」

「そうか。それなら喜んでシルフィアに報告に行ってくれるな？」

「どーいう文脈ですか？ ちょっと休憩したいですけど。肩凝ったんで」

「嘘つくなやオイ、ノーライフの筋肉が疲労するかよ。さっさと行け」

「はい」

ロザリーを追い出し、俺はテレパスで帝国に派遣中のリッチと連絡を取る。情報収集は毎日欠かせない。

帝国ではエカテリーナが九年という最長在位記録を打ち立て一線を退いていた。加齢による肉体の衰えが理由らしい。

エカテリーナは帝国軍の訓練官になっていた。王国を攻め滅ぼし、歴代皇帝の中で最強と評されるエカテリーナの指導が受けられる軍は従軍志願者が倍近くに増え選抜が必要になったとか。

帝国軍は魔法隊と戦士隊に分けられるようになっていた。

帝国は魔力密度によって魔法が使えたり使えなかったりする事に気付き、魔力密度が高い帝国民の希望者から順に魔法使いにしていた。王国と違い魔法使いになる際に金は取らないが強制的に死ぬまで軍属になる。当然だ。貴重な魔法を野放しにするのはいくら帝国でもやらないだろう。

帝国民である事以外完全に素質（魔力密度）が物を言う登用で、努力の余地が無いという事でこのシステムはあまり評判が宜しくない。才能も必要ではあるが日々の努力が物を言う武術大会とは正反対だった。

一方戦士隊は従来の部隊に加え精鋭隊が新設されている。

精鋭隊は魔力密度が低いか高い者で構成される。魔力密度が低ければ魔力覚醒していなくとも魔力を察知し易い。魔力密度が高ければ魔力密度が低い者を威圧し心理的に有利に立てる。どちらも白兵戦で有効だ。

エカテリーナの指導に加え王国と帝国の戦争を経験した世代がまだ現役である事もあり戦士隊の練度は全体的に高水準でまとまっていた。

しかし年々魔法使いが台頭してきている。

魔法使いの人数が増え、また魔力放出の熟練度上昇により射程が伸び凶悪な戦力として幅を利かせ始めているのだ。

魔法使いは武術大会に参加できず、いくら強くなっても皇帝にはなれない。それが気に入らず魔法使いは戦士を敵視し、戦士は素質だけで魔法を得た魔法使いを敵視していた。

強い正義な帝国だがそれは今まで武術や剣術を土台に成り立つ

ていたものだ。帝国の魔力覚醒の代償に肉体的に弱体化し、肉弾戦は実質不可能。

帝国はそもそも身体能力にプラスされる魔法を評価し欲しがっていたのであり、身体能力を代償にする魔法に対する評価は微妙なものになっていた。

身体的に弱いならば魔法が使えても皇帝には相応しくないと主張する派閥があれば、身体能力は関係無い、魔法有りで戦闘能力が高ければその者が皇帝になるべきだと主張する派閥もあり、今帝国は魔法をめぐり不穏な情勢になっている。

これは銃や爆弾が発明され、戦闘における技術の比重が下がり装備性能で勝敗が分かれるようになれば噴出した問題だ。きっかけがたまたま魔法だったただけであり、起こるべくして起こった問題であると言える。

俺達としてはできればこのまま亀裂を広げ内紛でも起こしてもらいたい所だ。内側にかかりきりになってくれれば里に目を向ける余裕も無くなるだろう。

俺がリッチ達からテレパスで送られた情報をまとめてみるとロザリーがこのこのこ戻ってきた。

「ロザリー、報告書」

俺が言っているとロザリーはあからさまに嫌そうな顔をしたが渋々椅子に座り羽ペンをとった。

「ロバさんゾンビ使い荒くないですかね……」

「いや？ 自分で言うのもなんだが良識的な方だろ。あと今日は大した情報入ってないからすぐ終わる」

「よしきた」

ロザリーは背筋を伸ばして俺が言う最新情報を書き付け始めた。

良識的、というのは冗談ではない。シルフィアなら命令で縛りまくってゾンビに一切の口答えと自由行動を許さないだろう。

しかし俺は最低限の命令だけして後は好きにさせている。だからロザリーは文句を言ったり冗句を飛ばしたりするのだ。

こき使っただけでも自由意思を許してるんだから十分良識的だろ。命令しなけりゃゾンビは勝手に自分で考え自分の意思で動く。

いやまあ命令で雁字搦めに縛ると言動も行動も機械的になりそばに置いていても面白みがないという自分本意の理由も七割ぐらいはあるのだけでも、三割は自由意思を奪うのが忍びないからだからよし報告書作成完了。

「よし、シルフィアに届けに行くぞ」

「えええ二度手間じゃーないですかぁ」

「……気にするな」

余計な事を考えている内に報告書作成が終わった。並列思考ができるって便利だ。全然別の事を同時進行で考えられる。

報告書を持ってロザリーが再び研究室を出る。今度は俺も着いていく。シルフィアが時々報告書の内容について質問してくるからだ。通い慣れた短い道を通り俺とロザリーはシルフィアの屋敷へ向かった。

シルフィアはほとんど一年中屋敷に籠もっている。大体俺やラキからの報告をまとめているか人間の陳情を聞いているかエルマーといちゃついてるかだ。たまには外に出るよ不健康な、と思うがノライフには健康もへったくれも無いわけで……

「ん？」

突然背後に感じた魔力に俺は振り返った。が、何も無い。周囲を見回してもこちらに魔力を伸ばしてきている者どころか見える範囲では人間すらいない。

「……気のせいかな？ いや、一瞬握り拳程度の魔力の塊が見えたよ  
うな……あれ？」

「ロバさん？ どーしたんですかゾンビでも見たよーな顔して」

「それいつも通りの顔だろ。……なんでも無い、行くぞ」

釈然としなかったが、なにせ一瞬の事だ。資料の編纂が終わり気が抜けて変な物が見えた気がしたとかそんな所だろう。

俺は少し先で怪訝そうにこちらを窺っているロザリーを促し屋敷

に向かった。

報告書も機密扱いなので日本語で書かれているがシルフィアも書きは怪しいが読みはほぼ完璧でロザリーの次に日本語ができる。執務室でロザリーが渡した報告書をざっと流し読みしたシルフィアは紙面を睨みながら言った。

「大御祖父様、帝国はまだ魔力放出訓練ばかりしているんですね？」

「遠目に監視させているが訓練内容を変更した様子は無いな」

「良かった……」

シルフィアがホッと息を吐く。

俺達が魔法技術を発達させれば当然帝国の優位に立てるが、帝国の魔法技術が停滞してくれば相対的に優位を保つ事ができる。帝国の魔法技術発展はシルフィアの望む所ではないし、俺も自分の国というか里が優位に立っていて欲しいと思っている。王国と違い里とその住人には愛着があった。

俺達が魔力の神秘に多少なりとも近づけたのは、現代知識と、エマーリオと、魔術のお陰だ。

現代知識については俺がいなければ地道に文明を発展させる以外に入手法は無いと言っている。

勿論俺と同じように現代世界から新しく転生してくる輩がこれから現れ、帝国に現代知識を齎す可能性も無いとは言えない。俺は自

分だけが転生した特別な存在なのだと自惚れるほど馬鹿じゃない。

しかし現代で死んだ誰もがこの世界に転生してくるとは到底考えられない。未だに俺以外に転生した者を見た事も聞いた事も無く、その痕跡を見つけた事も無い。

この世界に転生するには何か達成がひつじょくに難しい条件があると思われる。例えばトラックに跳ねられて入院した先のベッドで刺し殺された十八歳の男限定、とか。まあ何がフラグになって転生したのかさっぱり分からない以上は推測は無意味だ。

要するに俺以外の転生者が現れ帝国を発展させる可能性は限りなく低いという事だ。

次にエマーリオだが、エマーリオ級の天才がポコポコ生まれたら今頃人類は宇宙に飛び出しているだろう。俺はあと五百年はあれほど多方面に突出した天才は生まれないと見ている。

で、最後に魔術。これは何かのきっかけ、偶然があれば簡単に習得できる。現に俺がそうだった。

最悪帝国は人口にあかせてノーライフ軍をつくるかも知れない。洒落にならん。

他にも何かの拍子に俺もエマーリオも気付かなかった、魔法でも魔術でもない第三の魔力活用法を見つけないとも限らない。これは心配しても仕方ない事ではあるが。

「どうにか帝国の魔法技術発展を妨害できればいいのですが……」  
シルフィアがポツリと言った。

「そうは言ってもなあ」

一番ありそうなのは魔術の発見で、妨害できそうなのも魔術の発見だ。魔法使いを全員監視し、誰か一人でも魔力体内操作の訓練を始めたら暗殺すればいい。相手が魔法使いでも一人暗殺するぐらいならなんとかなるだろう。

しかし問題は帝国の魔法使い全員を監視する人手がないという事だった。帝国が「きっかけ」を掴まない事を祈るのみだ。まあ王国が少なくとも二百数十年気付かなかった事に帝国が十年やそこらで

気付く事はない。と思いたい。

俺が黙り込んでいるとシルフィアは肩をすくめ、報告書を机の上に放った。

「まあいいです、この件は心の隅にでも留めておいて下さい。大御祖父様は明日から研究を進めるといふ事で良いですか？」

「その予定だ。あんまり期待するなよ？ エマールオがいないんだ、前よりも研究速度は落ちる」

「分かってます。期待してますよ」

「分かってないじゃねーか馬鹿」

「期待するなと言われても期待してしまいます。魔法技術の発展は里の生命線ですから」

微笑を浮かべてのたまうシルフィア。この小娘プレッシャーかけてきやがった。

いいさ、なかなか成果が上がらない研究にガツカリするがいいさ。研究に手を抜くわけじゃないがもっと凡才をあなどれよ！

十話 編纂終了（後書き）

伏線……あからさまな伏線……！  
次回から研究再開。

## 十一話 魔法の活用と応用

研究を再開するにあたり、まずはエマールオの遺した資料の中で検証が不足している物を補充していく事にした。

魔力密度の上限や自然状態で生物が保持する魔力密度と量の法則性など労力が必要だったり検証方法の見当がつかない物は保留。簡単な物から片付けていく。

最初のテーマは魔法の活用についていくつか。

一つ目、魔法射程延長。

魔法は自身の形質魔力がある座標にしか魔法を発現できない。従って「最大魔力放出距離」射程」となる訳だが、厳密には少し違う。例えば三ミールまでしか魔力を伸ばせない魔法使いがいるとしよう。その魔法使いの射程は三ミールだ。

しかし三ミールまで魔力を伸ばし、その先端の魔力で「前方に向かって飛んでいく火球」を発生させれば魔力を伸ばしても届かない距離へ攻撃できる。別に火球以外……水球や土槍でも良いし、なんなら手近な木材か石ころに魔法をかけて投げつけても良い。

その際の射程は魔力を伸ばし直接発動した場合と比べ飛躍的に伸びる。

火球や水球をあまり遠くへ飛ばそうとすれば途中で効果時間が切れ着弾前に消失するが、石ころや木材を投擲すればその心配もない。……が、火球だろうが石の投擲だろうが遠方から飛来するのが見えればいくらでも対策のとりようがある。防御するもよし、回避するもよし、迎撃するもよし。

魔法の最大のアドバンテージは攻撃の瞬間まで（魔力覚醒していない者には）見えない所にある。射程が伸びても見えてしまうと普通の矢や投石とあまり変わらない。

それでも外見的には非武装無動作で攻撃できるのは大きい。使い方次第だろう。

ここまでが前振りだ。

本題。自身の魔力が存在する場所が射程圏なのだから、物質に魔法をかけて射出するのと同じように魔力に魔法をかけて射出できれば隠密性を維持したまま射程を伸ばす事ができる可能性がある。

魔力そのものにそのまま射出する魔法をかけても飛ばすべき魔力が射出する魔法の発動に消費されてしまったため、「射出される形質魔力、核」を「射出する形質魔力、殻」で包み込み、殻に魔法をかけて射出してみた。

結果、失敗。

確かに目論見は上手くいき核を飛ばす事はできたのだが、魔力放出距離外に出た瞬間に形質魔力が制御を離れ純魔力になってしまったのだ。純魔力では当然魔法は使えない。

殻への魔法行使と核の魔力維持の二つを一人でやろうとしたのが拙かったのかと考え、俺が全神経を集中させて魔力固定している形質魔力をシルフィアの魔力で包み込み射出してみたりもしたのだがやはり失敗。

どちらの場合も射出された核は制御を離れ純魔力になりこそしたが、殻の魔法が切れるまで密度を保ち拡散しなかった。

射程延長には失敗したものの、実験から分かった事が二つ。

一つ、形質魔力は魔力放出の限界距離を越えると拡散するのではなく、一度純魔力になりその結果制御を離れ拡散する。

これは利用できる。

人間の魔法使いa、bがいるとしよう。aの魔力密度は5・0、魔力固定はある程度できるが魔力圧縮ができない。bの魔力密度は10・0。bがそのままaに魔力を受け渡しても、bとaの形質魔力が混ざりaは魔法を使えない。

ここで今回の発見が問題を解決する。

まずbが魔力を伸ばし、aが自分の魔力でbの魔力を包み込む。その状態を保ったままaとbが距離を離すとbの最大魔力放出距離を割った時点でaが包み込んでいるbの魔力が純魔力になる。あと

はaがb由来の純魔力を体内に入れて一晩もすれば純魔力はaの形質魔力、それも魔力密度10・0の形質魔力に変化する。

aは魔力圧縮できなくとも自身の魔力密度よりも高い密度の魔力で魔法を使えるようになるのだ。

まあゴーストがそんな事したら純魔力に押されて体が保てなくなり消滅する事確実だから俺には使えない方法だが、肉体があれば問題無くできるはず。

近いうちに魔力密度上昇実験もしてみたい。俺はいくら自分の魔力密度を上げて魔法を使うたびに一々手動で魔力密度と量を戻さなければならぬが、魔力が自然回復する種族ならば一度上がった魔力密度がそのままデフォルトの密度になる可能性は十分ある。

上手くいけばゾンビを全員リッチにして無双状態に！……とはいえ今のところ捕らぬ狸の皮算用。検証結果次第だ。

二つ、魔法は魔力に干渉可能である。

魔法が完全に物理化しているならば殻は核を置き去りにしてかっ飛んで行ったはず。「射出する魔法の殻」が「魔力の核」を運ぶ、即ち魔法が魔力を包み込み拡散を防ぐ性質を多かれ少なかれ持っていたという事。

もつともこれは確信に近い推論ができていた事でもある。

エマーリオの屋敷にいた頃に既にゴーストに魔法が効く事は分かっていた。ゴーストは形質魔力の塊であるから、ゴーストに魔法で干渉できれば魔力にも魔法で干渉できる事は推測できる。ただゴーストは意思を持ち人間の姿をとり行動する変則的な形質魔力であるため普通の形質魔力にも当てはまるとは断言できなかった。

既存の理論の補強をした形になる。

変わって実験の二つ目、複製魔法について。

複製魔法はいつだったかエマーリオが爆発した砂時計を修復する時に使っていた魔法だ。コピー元になる物とコピー元を再現するために必要な材料を用意し、両方を魔力で包み魔法を使う事で複製を行うというもの。

材料と本物さえあれば寸分たりとも狂いのない完璧な複製を作成できる反則魔法である。王国でも密かに一部の芸術品の複製に使われていたとか。

なにせ陶器でも剣でも傑作を一度でも造れば同じ品質のものを量産できるのだ。まさにチート。お陰で現代知識の一つ、活版印刷が完全に要らない子になっていた。

勿論良い面ばかりではなく悪い面もある。例えば通貨の偽造。どれほど精密な細工を施しても、材料がありふれた物であれば簡単に完璧に複製されてしまう。紙幣なんてもつての他。

村に貨幣経済を導入する時は用意するのが難しい稀少な材料が必要になってくるだろう。金か銀か、それ以外か。シルフィアはあと四、五十年ぐらいで村人（人間）に魔法を開放すると言っているからそれまでには丁度良い材料を用意しておかなければならない。

ここまで前振り。

本題、複製魔法は生物にも使えるか？

生物の複製は禁忌に分類される魔法だと思う。前世、クローンでさえ物議をかもししていた事を思えば、生命の完璧な複製は神をも恐れぬ所業だろう。

とは言っても神様なんて存在しないのだから恐れるも何も無い。

サクツと実験に入る。

まずは植物から。草の種を試す。

見本となる種と、見本の種と同種の種を二つすり潰したもの（材料）を用意する。材料が種二つなのは個体差による組成の微妙な違いを考慮したからだ。二つ分の材料を用意すればまさか足りないなんて事はないだろう。

実験の結果は成功。見事オリジナルと全く同じ種が出来上がった。余分だった材料は使われずにそのまま変化していない。

試しに植えてみるとオリジナルも複製品も両方発芽し、見た目だけでなく中身も複製できている事を示していた。

成功する可能性は半々ぐらいかと根拠もなく思っていたので、複

製した種が発芽しているのを見た時は魔法に対して畏敬の念が湧き上がった。俺が知る限り前世の科学でも不可能だった完璧な生命の複製をこれほど簡単に成し遂げたのだ。魔法すげえ。

続く草木の複製も成功。しかし動物実験の段階に入り、ネズミで実験したら失敗した。

材料の死体二匹が組み立て途中で放置されたかのように骨まる見え内蔵剥き出しのデロデロしたナニカになってしまった。時々ピクピク痙攣するのが気色悪くおぞましい。

くっ、やはり生体錬成は禁忌っ……右腕を持っていかれなかっただけマシか……

なんて事も思わないでもなかったが、植物が成功して動物が失敗するのはなにか相応の理由があるのだろう。ネズミの複製も全くの失敗ではなく、ネズミになりかけた形跡が見える。

データが植物と哺乳類一種類だけでは法則が掴めない。植物、昆虫、哺乳類、魚、爬虫類をそれぞれ数種類ずつ試してみた。

結果、哺乳類、魚、爬虫類は失敗。植物は成功。昆虫は一部成功。多少主観も混ざってはいるが明らかに哺乳類や魚の失敗度合いに差が見られ、どうも高等な生物ほどデロデロ具合が酷かった。ネズミはまだなんとか原型を留めていたが、熊はグチャグチャの肉塊にしかない。逆に魚はネズミよりも少し原型が分かる。

成否が分かれた昆虫にもその傾向があり、カブトムシが失敗、しやくとり虫が成功していた。動物が高等かどうかなんぞ人間の主観なのだからはつきりしないが、種族差による法則性があるのは間違いない。

光明が見えたのはやはり唯一成否が分かれた種族である昆虫だ。シルフィアの所からラキを借りて複製実験を手伝わせていたのだが、あるダンゴムシを複製した際にラキは失敗し俺は成功した。

ラキが複製に失敗した、しかしあまりデロデロしていないダンゴムシと、俺が複製した元気に這い回っているダンゴムシを見比べた時に電流が走った。

ラキは俺よりも魔力密度が低い。魔力密度が複製の成否を分けているのではないか？

思い立ったが吉日、すぐに魔力密度を下げて複製してみた所、今まで複製できていた昆虫が二種類ほど複製できなくなった。

予想通りだった。複製の成否には魔力密度が関係する。確認されている限り非生物は全て魔法発動に必要な最低密度で複製でき、生物は魔力密度が高いほど高等な（？）ものを複製できるようになる。恐らく魔力密度さえ足りていれば人間の複製も可能だろう。人間が複製できるほど魔力密度が高まるのはいつになるか分かったものではないが、流石に嫌な気分になる。材料があり、魔力密度が足りていれば同じ人間を苦もなく量産できるのだ。さながら工場のように。

シルフィアも同じ心境だったのだろう。

生物（含ノーライフ）の複製は禁術となった。研究以外での使用は禁止。

死体を蘇らせるのはアリで複製は無しというのはおかしい気がしないでもないが、自分をベースに考えるとよくわかると思う。

自分が死んだら生き返らせられた。血を吸わなければ生きていけないが不老、その他色々。

いつの間にか自分のコピーが量産されていた。全く同じ顔、全く同じ記憶、全く同じ性格の人間が何人も自分を見ている。

どちらが恐ろしいだろうか？

俺もシルフィアもエルマーも後者だった。自分は自分だけでいいしんみりした所で三つ目、治療魔法について。

原則的に治癒魔法では「治癒促進」を行う。従って自然治癒しないものは治せない。

裂傷や打撲、火傷などであればすぐに治る。軽い擦り傷程度ならば三十秒程度で痕も残さず完全完治だ。

傷が重くなれば何回も魔法をかける必要がある、ものによっては数日に渡り断続的に魔法をかける必要がある。魔力密度が高いほど

(魔法の威力が高いほど)急速に治癒するが、瞬間完治は不可能なのだ。

あくまでも治癒を促進する魔法だから手足の再生をしようとしても無駄だ。

例えば腕を生やそうとしても「腕のような何か」が生えてくるだけで、生えても神経は通っていないし動かない。血行も悪く、やがて腐り落ちる。

生えてきた腕を解剖すると組成も構造も違っている。これは魔法が行使者の認識に依存し、「ぼくがかんがえた健康な腕」を生やす事しかできないからだ。人間がイメージする漠然とした腕だから当然本物の腕とは似てもつかない。

切られた新鮮な腕があれば切断面をくっつけ治癒魔法をかけまくって繋げる事ができるので、生やすよりはそちらの方が現実的だろう。

治療魔法の効果が行使者の認識に依存するというのがネックで、目に見えない内部の損傷に弱い。魔法があれば切開せずに癌を摘出するのも理論的には可能だが、まず癌がどこにあるかミリ単位で正確に把握しなければうつかり心臓を摘出しかねない。

事前に身体の異常を探る魔法をかければ損傷部も分かりそうな物だが、過去にそれを試みた者が突然昏倒し、目を覚ました時には廃人になっていた、という記録が残っている。

エマールイオは研究資料の中で「対象の膨大な量の肉体情報を一気に取得したため脳がパンクしたのだろう。音声のみを送る念話魔法ですら慣れるまでは酔うのだから(要約)」と推測していた。俺も同意見だ。

実際に色々と検証してみたい所ではあるが、それには確実に複数人の魔法使いを犠牲にしなければならない。今の里の状態では到底無理だった。

また上記のような理由でマンドラゴラによる帝国の魔法使い達の疾患の治療は現状不可能だ。

と、ここまでが前振り。といつても本題も大した事をしないのだが。

本題は複製魔法を利用した移植手術。例えば片方の腎臓が駄目になった時に残った腎臓を複製して移植したり。自分の臓器なのだから拒絶反応の心配は全くない。……治療魔法というか複製魔法の分野かもしれない。

人間の臓器は複製できないので虫の臓器と云うか手足で試してみたらが上手くいった。しかしまあ虫で成功したから人間でも成功すると断定する訳にもいかないので魔力密度の上昇を待たなければどうにも、ね。

そんなこんなでいくつか実験してみたが、やはり魔力密度が高い方ができる事が多い。

魔力密度を上げる地味で地道な飽きやすく少し不快な作業……面倒臭いがコツコツやらなきゃなるまいて。ああ面倒臭い面倒臭い。

## 十一話 魔法の活用と応用（後書き）

あんまり推敲してないから解説が不十分だったり矛盾してたりする、かも

## 十二話 進歩

「最近こまごました仕事減ってませんか？」  
「いや？」

新しく研究室に併設された殺風景な実験室でムスクマロイの状態・時間経過による劣化検証をしているとなにやらロザリーがおもむろに聞いてきた。

「気のせいだろ。アレだ、編纂が終わったからじゃないか？」

「そーいうんじゃないんですよ。なんかこう、あの、あれですあれ」  
「分かるか」

干したムスクマロイの葉が入った小瓶を棚から出しながらモニョモニョ言う。編纂が終わっても研究を再開したから仕事量はそれほど変わっていないはずだ。ロザリーはもどかしげにテレパスで曖昧な感覚を伝えてきたがただでさえ曖昧な情報がテレパスで更に曖昧になってさっぱり分からん。

なんかもどかしさだけが伝わってきて俺までそわそわしてくる。なんだこれ鬱陶しい。

「忘れる。こういうモンは思い出そうとすると全く掴めず忘れた頃にスルツと思ひ出す」

「気になって夜も眠れねーのです」

「お前ホントいつまで経っても人間気分だな」

無くした物は探すのを諦めて新しく買った直後に出てくる法則みたいなものだ。この手の事には何か人間にはどうしようもない力が働いていると思った方がいい。

前世でゲームソフトを無くした時の苦い思い出を思い出しながら俺は手を物質化させ、ムスクマロイの茎から煮沸抽出した薄緑の液体が入った小瓶をとって色を確かめた。ラベルを見ると三日前の日付が書かれている。

あまり劣化してないように見えるな。煮沸したんだからこの緑色

は葉緑素ではないだろう。十日前の物と比較すると若干色が

「それです！」

「のわっ！ 馬鹿いきなり大声出すな馬鹿この馬鹿め！」

ロザリーの大声に危うく瓶を取り落としそうになった。あつぶん  
ーな！

「や、すみません。でも馬鹿言いきすぎじゃーないですか？ ……え

ーと、ロバさんが最近そーやってちよつとした事を魔法でやるよー  
になったじゃないですか」

「そーいやそーうだな」

「何から何まで私が物理干渉を代行する必要が無くなったから仕事  
が減ったように感じたんです」

「あー……なるほど」

俺は納得して頷き、小瓶を棚に戻した。丁度魔法の効果時間が切  
れて手が消える。右手首から先が消失した状態だ。

「身体削って魔法使うのは嫌だったんじゃないですか？」

「すぐ戻せるようになったからなあ」

喋りながら魔力希釈で身体の魔力を薄め量を増やす。その増えた  
魔力を右手首に回し、ドツペルゲンガー技術の応用で右手を再現す  
る。

この間二秒ほど。うむ、随時とまあ早くなったもんだと自画自賛  
してみる。

「この通り」

「ほへー」

ロザリーは感心してるのか溜め息なのか微妙な声色を出した。目  
を細めてじつと俺の手を見つめる。

ドツペルレイスになってから熟練度の上昇が著しかった。約二年  
で最大魔力圧縮密度が1.0ほど伸びていつてる。驚異的成長速度  
だ。

比較対象が無いためにはつきりしないがこれはドツペルゲンガーに  
なった事が原因だろうと推測している。

魔力操作は魔力体内操作から魔力固定に派生し、魔力圧縮と魔力希釈に至る。

ドツペルゲンガーをマスターするには魔力固定は必須だし、身体が大きさが違うものに変身しようと思えば魔力希釈と圧縮もこなさなければならぬ。自分の身体を構成する魔力を操るのだから魔力体内操作も必要で、しかもそれは思い描いた姿を魔力で正確に再現する精密さを求められる。

そりゃあこれだけやって魔力操作が巧くならなかつたら詐欺だろ  
う。

魔力放出の伸びがイマイチなのは仕方ない。いやね、ドツペルゲンガー技術に魔力放出が必要なのは勿論だが、戦闘しないなら別に魔力放出距離を伸ばす必要もないもんだから練習にも身が入らないんだ。研究に使うだけなら八ミールも伸ばせりゃ十分。有事に備えて磨いておいた方がいいってのは分かってるからチマチマやってはいるんだけどさ。

魔法を使つてばかりだと魔力密度が下がる一方だが、薄まった分の魔力を純魔力で補充すると肉体が無いせいか純魔力が完全に形質魔力になるまで三日ほどかかり、なじむまで魔法が使いにくくなる。こまめに密度を戻すよりは魔法行使に必要な最低密度を割ってから戻した方がよい。

そんな事を考えながらワキワキ手を動かしているとロザリーがぼそつと呟いた。

「えつちなのは駄目ですよー」

ハア？

「いきなり何を……ん？　なんかデジャヴ……まあいいか。そりゃ  
どういう意味だ」

「ロバさんも野郎ですからきつと夜な夜な理想の女の身体を物質化して鼻の下伸ばしてあんな事やそんな事を」

「やんねーよ」

だからゴーストに性欲は無いと何度言えば。それに俺は健全な二

百ウン十歳だから。色々超越してるから。悟ってるから。

「そーですか？ ま、そーいう事にしときましょーか」

「今また新しい悟り開いた。ロザリー、ム力つく」

最初はもつと素直な奴だったのに段々はっちゃけやがって、仮にも創造主にこの言い草。誰に似たんだ？

しかしまあニマ〜ツと笑っている所を見るに別に本心から言っているわけではないのだろう。ロザリーと俺は気の置けない上司と部下のような間柄だと俺は思っているし、ロザリーも多分そうだ。

なんだかんだ言いながら俺は今の生活を気に入っていた。適度に張り合いがあり、無理なく働きほどほどに快適な日々。やっぱり人生腹七分目がベストだ。

ムスクマロイの抽出液の経過観察を終えた俺達は魔力密度上昇実験に入った。

「ではこれより魔力放出限界距離を利用した形質魔力の純魔力変換を用いる魔力密度最大値上昇実験を行う」

「長つたらしかないですか？」

「俺もそう思った。名称公募」

「エマさんのロバさんによるシルさんのための実験その108、ド

キツ ノーライフだらけの丸秘実験くグチャリもあるよ、あたり  
ですかねー」

「突っ込まねーぞ。……純魔力授受を用いた魔力密度上昇実験、に  
するか。すまんね毎度安直なネーミングで」

「やー、ロバさんのネーミングは安直ですけど分かりやすくしてい  
と思いますよ。魔力放出限界距離を（中略）純魔力変換⇨純魔力授  
受って事ですよね？」

「イエス」

本当はもつとクリエイティブな命名をしたいんだが仕方ない。俺  
の頭では既存の単語を単純にくつつけるしかできないんだ。しかし  
いかにも「カツコイイ英語と漢字を混ぜて美味しく仕上げました」  
な厨二ネームよりはマシだと信じたい。

今回の検証実験は例の形質魔力を純魔力に変える実験を利用した  
アレだ。成功すればゾンビが全員リッチになる。こりやちよつとワ  
クワクが止まらんね。

現状里で最高密度の俺の魔力密度8.0をある程度魔力操作がで  
きる者全員で共有できるようになる訳で、生来の魔力密度1.0、  
だろつが……なんだろうが……

……あー……

なんか曖昧でいかな。いい加減俺の主観ではなく客観性のある  
魔力密度計測手段が欲しい。魔力密度は人間の平均を1.0として  
俺が独断で感覚的に判断しているに過ぎないからどうしてもあやふ  
やになる。正直誤差プラマイ0.3ぐらいは出ていると思う。

正確な単位測定は科学でも物理でも経済でも基本中の基本だ。ど  
こにそのへんのコップ使って目分量で科学実験する奴がいるんだっ  
て言うね。それは魔法でも同じだろう。

よくファンタジーに魔力を測る器具があつたりMPを数値化する  
システムがあつたりするが、あれってよくよく考えればとんでもな  
く便利だよなあ。

くそ、古代魔法文明の遺産とかなんとか言っちゃってオーバーテ

クノロジーなマジックアイテムの一つや二つゲットできればそれを足掛かりに研究を進められそうなもんだが、魔法の歴史は少なくとも確認されている限りではビルテファ王国が始まりで、都合よく過去に魔法文明が存在していたりはしない。

俺達は一つつ手探りで地味に地道に研究を進めるしかないのだ。エマーリオが大体の方角を示してくれたお陰で五里霧中ってほどでもないのが幸いだがどうにもこうにも

「ロバさん？　ロバさん、生きてますかー」

「……んあ？　すまん考え事してた。んじゃまあちやちやっつとやるうか、ホレ」

ゴチャゴチャ考えるのは後回しにして、とりあえず密度8・0の魔力をバスケツトボール程の大きさにして体から切り離した。宙に浮かぶ俺の魔力をロザリーが伸ばした魔力が獲物を補食する軟体動物のように包み込み、

「あ」

「げ」

一瞬にして拡散した。

「えーとあの、すみません密度差ありすぎです」

「……それ以前に固定力が足りてないんじゃないか？」

「それはそーですけども、密度差がちーさければ私の固定力でもいけるかと。だいたい8・0って私の四倍じゃーないですか」

「悟空でも界王拳三倍で体ガタガタになってたもんな。二倍の4・0いけるか？」

「多分なんとか」

気を取り直してもう一度。

俺が放出した魔力をロザリーがしっかり包み込んだのを確認し、一旦実験室の壁をすり抜けて外に出て十分距離をとってから戻る。

そしてロザリーが確保した俺の魔力が純魔力になっているのを確認し、体内に取り込ませた。

純魔力を体の中に入れたロザリーは途端にカマドウマを丸ごと喉

に押し込まれたような顔になる。

「おい大丈夫か？」

「大丈夫に見えます？ …… 此人間がやったら確実に吐きますよ…… 異物感が天元突破なんですが」

ロザリーは口元を手で押さえてよろよるとその場に座り込んだ。

無理もない。俺が魔力密度を上げる時は1.1倍にも満たない魔力しか取り込んでこなかったが、それでも気持ち悪さに散々悩まされた。密度二倍の魔力を取り込む不快感想像を絶する。

しかしそれを最長で三日も我慢すれば一気に魔力密度が二倍になる…… 見込み…… なのだからやる価値はあるだろう。

段々丘にあがったヒラメみたいな顔になりはじめたロザリーを見ていると流石に心配になってきたが、理論上は死にはしないはず。

サンプルを増やすために他のゾンビ数体にも試すとして、ヴァンパイアには…… 任意でやってもらうか。特にシルフィアが今のロザリーのような状態になったら政務が滞る。

で、打診しに行つてラキ以外に実験拒否されて戻ってきたらロザリーが正座して舌を出し片目を瞑りやつちやつたねテヘペロをしていた。

ロザリーから感じられる魔力密度は2.0のみ。なにしてくれんの？

「おい」

「はい」

「どういう事が説明してみる」

「はい。あの、外の空気を吸いに外に出たらですね、目の前に蚊が飛んできたので叩き潰そうと一瞬集中切らしたらですね、魔力固定が乱れてですね」

「…… おじゃんか」

「…… はい」

お前それはないだろ。開始一時間もしない内にやり直しか。

俺が白けた視線を向けるとロザリーが口を尖らせて講義する。

「体調の悪さを理由にするつもりはありませんけどね、三日間ずっと純魔力を逃がさないよーに魔力固定し続けるなんて無茶ですよ。徹夜は余裕ですが集中力が保ちません」

「俺はできるぞ」

「そりゃロバさんは必要に駆られて本能レベルで魔力固定身に付けてますから簡単でしょうよ」

「うーむ……」

単にロザリーの集中力が低いのかロザリーの言う通り俺が特別なのか判断しかねる。

とりあえず二倍から一・五に下げてもう一度トライさせつつ他のゾンビにも試させよう、と考えをまとめた所で実験室の戸がノックされた。誰だ？

「開いてるぞ」

「し、失礼します……」

ラク이었다。ラクには密度8・0の魔力を渡していたはずだがどう見てもデフォルト密度に戻っている。

まさか、というかやっぱりというか。

ラクは上目遣いに俺を見上げてモジモジしながら言った。

「あ、あのですね、書類整理に没頭していたらですね、いつの間にか、あの、魔力固定が切れててですね、なんだか気持ち悪さがなくなってるなあ、と思っていたらですね」

お前もか。

魔力固定が習慣付いていないとこの実験は難しい事が分かったので、日々をシルフィアの雑用に追われどうしても意識が乱れるラクには今回の実験参加は見送りとした。いずれ呼吸するように魔力固定ができるようになってからリトライしてもらおう。

一方ロザリーは特に俺の助手以外にやるべき事もないので実験を継続させる。要は気が散る要素を排除すれば良いのだ。

俺はロザリーに全身全霊で三日間魔力固定を維持するよう「命令」し、実験室の隅でひたすら待機させた。夜な夜な行われているラク

とのガールズトークも禁止。

命令すればそれを忠実に実行するのがゾンビの特性だ。ロザリーは実験室の隅で丸三日彫像のように微動だにせず大人しくしていた。やらせておいてなんだが普段軽口叩いているだけあり相当不気味だった。あまり見たい光景ではない。

とにかく三日経過し、純魔力は無事ロザリーの形質魔力に変換された。感じられる魔力密度は3.0、ここまでは成功。

命令を遂行したロザリーが動き出す。大きく伸びをしてこれ見よがしに欠伸をかます。

「ああやつと解放される。退屈でしたー」

「ほー？ 命令しても退屈さは感じるのか」

「そりゃーそーですよ。ゾンビも時間の感覚は人間と同じですからなるほど。途中で音を上げるかと思っただが」

「え、なぜですか？」

「……いや、いい。忘れてくれ」

「はあ」

心底不思議そうな顔をするロザリーに少し寒気を覚えた。ゾンビは命令された事に疑問を持たず、遂行するのが当然だから遂行する。それに対して感想は抱くが、遂行しない、途中で辞めるという発想は出てこないのだ。

なんとという完璧な洗脳……いや今更過ぎるか。

「ではロザリー、魔力を空に」

「いいですとも」

俺の言葉でロザリーは自身の魔力を全て捨て、一度保有魔力を空にした。ロザリーは糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ち、数分で再起動する。

「これで一晩経てば回復したロザリーのデフォルト魔力密度が3.0になつてる訳だ」

「私、魔力密度が3.0になったら結婚するんだ……」

「誰と」

「エルさ……ロバさんと」

「危なかったな、冗談でも言い切ったら多分殺されてたぞ」

「心臓止まりかけました」

ぐだぐた喋りながらロザリーの魔力回復を待つ時間を使って今回の実験についての資料をまとめる。

やがて出来上がった結果の欄だけ空白の資料から目を離してロザリーを見ると、回復途中のため魔力量は少ないがどう見ても密度が2.0です本当にありがとうございます。

「ロバさん……この実験は失ば」

「いや待て。一応魔力が完全回復するまで様子を見る。もしかすると一度2.0で回復しきってから3.0に密度が上がるのかも知れん」

「希望的観測ですねー。有り得ないと思いますよ私は」

「可能性はある。低いけどな。それに俺が認識できていないだけで2.05ぐらいに上がってるのかも知れん。3.0の形質魔力を一度獲得しただけで一気に3.0になると考えるのは安直に過ぎる。

あるいは3.0の魔力を体に宿す時間が短かったという事も考えられる。考えられる事は片端から試すぞ。諦めたらそこで実験終了だ」

「アイ・サー」

そんなやり取りの後数ヶ月かけて検証実験を行い、しかし結局軒並み失敗という悲劇。やるせなし。

ロザリー以外のゾンビも、つまりゾンビという種族はデフォルト密度上昇不可能という事が発覚した。ヴァンパイアは不明、他のノライフ族も人間も不明。その内実験してみたい。

魔力授受で一時的に魔力密度が上がっても、魔力を消費して回復するとデフォに戻る。レイスも減少した魔力密度は能動的に回復しなければならぬのだから、個々の最大魔力密度突破は種族問わず一時的なものに限定されるようだ。いやドツペルレイスとゾンビしか検証してないんだけども。

「最大魔力密度の恒久上昇は魔力の法則的に不可能なんだろうか？ やり方が拙いだけか？ 別のアプローチから行かないと駄目なのか？」

「ドッペルレイスもゾンビも駄目なのだから少なくとも肉体の有無が直接的にデフォルト密度の上昇可否を決定付けているわけではなさそうだが、そもそもなぜ同一種族（人間）で密度差があるのか分からない。生まれた日にちか、気象か、地理か、遺伝子か、その複合か、それらとは全く違う何かか。」

「如何にして魔力密度が決定されるかもわかっていないのに魔力密度を上げようとするのは非効率的かも知れない。しかし凡才である所の俺達には少ない情報から理論を構築する能力が欠けている。だから実験の数を増やしてサンプルを揃え、そこから方向性を推測していくしかない。」

「魔力の神秘の探求は亀の歩みになりそうだった。」

## 十二話 進歩（後書き）

研究成果を羅列するだけではなく研究風景を軽く描写してみたら文章量二倍強で内容三分の一になった。執筆時間は三倍。予定していた話数がばんばか増えていく

ロバートが強くなってきました。魔力密度8.0ですが体の体積の半分までしか使えないので限界使用MP量でみれば魔力密度4.0の人間と同程度。ドツペルレイスのメリットデメリットを考えれば個人の戦力的には平均的な魔法使いを多少上回る程度でしょうか？ 勿論配下のノーライフ軍団を使えばもっといきますが。

2011/8/24 追記

純魔力授受ですが、形質魔力を使って間接的に大気魔力を圧縮できるの（一章・十二話参照）別に形質魔力を遠ざけて純魔力にしてという手順を踏む必要はない事に気付いた。圧縮の手間は省けますけど。

## 十三話 赤にしん

一連の純魔力授受を用いた魔力密度上昇実験が全て失敗しガツカリして数日、とうとう探索に出していたゾンビ達が森の地図を完成させた。

探索を始めかれこれ十一年。進捗状況から十二年目にかかるかどうかと想っていたのだがなんとか年内に終わってくれた。

時間がかかったのかどうかは判断しかねる。伊能忠敬の日本全国測量が、あれ、何年かかったんだっただか？ …… まあいいか比べても意味ないし。

「変な印がたくさん書いてあるんですけど大丈夫なんですか？」

シルフィアの遣いで研究室に地図のコピーを取りに来たラキが首を机に広げられた地図を覗き込んで首を傾げた。完成したから呼んだのに大丈夫じゃない地図見せるかよ。

「地図記号だ」

「ああそっか、日本式の？」

「機密だからな」

「日本語はまだ地図記号まで覚えてないですよね……」

「今度私が教えよーか？」

「いいんですか？」

「いいんですよー。というか今教えよか」

ロザリーがラキに地図記号を教えている間に俺は地図を見直した。東の森の総面積は約160000k?、北海道の二倍ほどの面積だ。南北に緩く伸びた楕円形になっていて、その中心に里がある。

森の北端には急峻な山々が連なり、更に北に何があるかを隠している。森から山の領域に入ると途端に草木が疎らになるのでもしかしたら鉱山なのかも知れない。鉱山には草木が生えにくいという覚えの記憶が…… 廃鉱のハゲ山と覚え違いをしている気もするが、まあ調べるだけ調べみようと思っている。採鉱地マークの横の「？」

は消えるかどうか。

そして東に行くと大海原が広がり、南も海。西は帝国に接する平原、とまあそんな感じになっている。

森の中には池や泉、沢が多い。窪地や盆地が点在していてそこに水がたまり、霧が出ている所もある。水が豊富で土も栄養に富み、生き物の種類も数も多い。非常に豊かな森であると言える。

一方で毒性のある危険な植物も気性の荒い猛獣もワラワラしているから人間が住みやすい土地であるとは決して言えない。冬は最高二ミール近く雪が積もる厳しい気候でもある。

俺が聞いた限りでは大陸最大の大森林である東の森が手付かずだったのは、首都から離れているのもそうだが半端な開拓団では一年と保たずに全滅するからだ。不眠不休食事要らずのチート労働力、ゾンビと魔法がなければ俺達の開拓も失敗していただろう。

所々に書き込まれた赤字の「T」はトレントを示している。

トレントは一本一本がかなりバラバラな場所に生えていて、生息域と環境に一貫性がない。一体どうやって種を運んでいるのかと疑問に思っただけで観察していると、ファンキーなモンキーが時折トレントの実をもいで持ち去っていく事が分かった。

まさか食べる事はないだろうし何に使うんだ、とモンキーを追跡すればもいだ実を天敵の猛獣に投げつけて撃退している場面に遭遇する。猛毒の実をぶつけられた猛獣は嫌がって逃げていくか運悪く体内に毒が入って死ぬか二択。猿のくせになかなか賢い。

それでまあぶつけられて飛び散った実の種から芽が出て大根になる訳だ。モンキーが実を爆弾代わりに持ち歩くもんだからかなり広範囲に種を運べる。いっちょ前に共生してやがった。

トレントのゴーストがモンキーの踊りを学習したのは間違いなくこの共生関係が原因だろう。

トレントのゴーストと言えば木霊を筆頭にしたトレント・プラント・ゴーストがまた増えて三匹になった。

連中が里へやって来る周期は固定され、決まって毎月一度満月の

夜に連れ立って襲来し、時に優しく時に激しく踊り、去っていく。

毎回毎回一方的に踊りを見せ付けてくるので試しに口笛で剣の舞を吹いてみたら踊りが滅茶苦茶に激しく躍動感溢れるものに変化した。優雅な曲を吹けば優雅な踊りに、和やかな曲を吹けば和やかな踊りに見事に合わせてくる。最近では俺の演奏を待つて踊り始めるようになっていた。

次の満月は測量事業が終わり手が空いたゾンビに楽器で伴奏させようと画策している。俺は別に音楽の才がある訳ではないが、この世界よりは圧倒的にレパートリーが豊富な前世の音楽を知っている。当分は木霊に新しい音楽を聴かせ続けられるだろう。

今の内に譜面に起こしておいた方がいいか？ ……でも楽譜の書き方なんて知らねえ。蓄音機も無い。蓄音機の原理も分からん。この世界流の楽譜の書き方ぐらいなら帝国からパクれるか？

「いや待て、ロザリー、エマーリオが遺した美術品の中に楽譜あったよな。読み方付きで」

「いきなりなんですか？ ありましたけど。読み方付きで」

「OKそれを参考にしよう。ラキ、複製用の紙とインクはこっちだ」  
「あ、はい」

わき道に思考をそらしていたらちょうどロザリーがラキに説明し終えたので棚に整頓して積まれた紙束とインク壺を指す。ラキは紙を二枚抜き出し、インク壺と抜き出した紙、地図を魔力で包み複製した。

「ではロバートさん、私はこれで。ロザリーさん、ありがとうございまして」

「どーいたしました。分からんとこあったらどんどん聞きな〜」

ラキは複製した地図を丸めて小脇に抱え、俺達にぺこりと頭を下げてはたばた研究室を出て行く。すっかり雑用が板についたラキだった。

帝国が魔法の扱いを巡って意見が分かれ、二つの派閥に割れた。皇帝工カテリーナが現役の時は奴のカリスマでどうにかまとまっていたが、病を患い退役してからはもうぱっくりとね。

派閥は急進派と保守派に分けられる。魔法を前面に押し出し魔法国家として国を発展させていこうという急進派。

今まで通り筋肉と剣を優先し魔法はあくまでも補助的に使っているという保守派。

帝国が内輪もめすれば東の森に目を向ける余裕もなくなる、いいぞもつとやれ……と言いたい所だがそうもいかなかった。

急進派も保守派も揃って魔法使いを増やしやがるのだ。帝国は王国よりも魔法使いになるための敷居が低く、魔法使いが増えやすい。急進派は言うに及ばず保守派も魔法使いを増やす事そのものには依存はないらしく、双方素質ある者を見つくるっては魔法使いにしていた。ある意味根本的な所ではまだまだ一枚岩だ。

日課である帝国の近況報告を受けたシルフィアは報告書を放り出して頭を抱えた。

「冗談じゃないですよこの状況、ますます魔法が広まりそうじゃないですか」

「魔法使いの人数だけでいえばもう里を超えてるもんなあ」

しかもそれは俺が掴んでいる限りの情報で、だ。実際はもつとい  
るかも知れない。帝国、恐るべし。

もつとも王国の教会と違い洗脳教育をしているわけではないので  
その忠誠心には疑問が残る。魔法使いは非常に強力な戦力である分、  
離反が恐ろしいのだ。

「それだけではないです。魔法使い人口が増えれば増えただけ魔術  
に辿り着かれる可能性も高まります。まいました」

シルフィアは顔を上げ、椅子に背を預け天井を仰いだ。

「本格的に妨害に出るか？」

「どうやってですか？ 魔法使いをいくら殺してもマンドラゴラが  
ある限り後から後から湧いてくるんですよ？ マンドラゴラの栽培  
場所は分かりませんし」

確かに里に諜報の心得がある奴はいないし、帝国語を喋れる奴も  
いない。こちらには魔法があるがそりゃあちらも同じ。そんな手駒  
で帝国の最大機密にあたるマンドラゴラ場所を突き止めるのは簡  
単には行かない。

こちらのアドバンテージは「存在を知られていない事」と「魔術」  
だ。ならばそれを上手く使う。

「俺が帝国に出向いて地面の下か壁の中を伝って権力者に接近する  
で、殺して、ゾンビにして、マンドラゴラの情報を抜き出して、ま  
た殺して証拠隠滅。どうだ？」

「エグいですね……」

えげつないけどこれって戦争なのよね。

チマチマ情報かき集めるよりもある所から奪っちまおうっていう  
ね。俺が魔法使いに目撃されなければ首が落ちた死体が残るのみ。

部屋を荒らせば強盗に見せかけられるのも可能。

マンドラゴラ場所さえ分かればあとはこっちのもんだ。リッチ  
を送り込んで撲滅すればいい。五十年もすれば魔法を持つのは俺達  
だけになるだろう。

「良い案ですが却下です」

あん？

「なぜ」

「その作戦では大御祖父様の身を危険にさらさなければならぬじゃないですか」

シルフィアは真面目な顔で俺をいたわるように言った。

エルマー原理主義のシルフィアが俺の心配とはなんの冗談か、と一瞬思ったがそういえばこいつは家族は大事にするんだった。エマ―リオの神風に最後まで反対したのもシルフィアだ。エルマーが関係しなければ普通に俺を気遣う。

「気持ちは嬉しいが、それほど危険性も高くないだろうし俺は構わないぞ。帝国は魔法使い対策はしててもゴースト対策なんてしてないだろ」

「万が一という事があります。一発でも魔法の直撃もらったら消滅ですよ？」

「直撃もらうシチュエーションが分からん。出会い頭に攻撃か？」

無いだろ。お前だって初めて俺に会った時は化け物じゃなくて魔法使いだと思っただろうが」

「誰もが私と同じ反応をするとは思わない事です。いくら自在に変身できると言っても半透明なんですから、あからさまに怪しい魔法的ナニカですから見つかった瞬間『であえ！ であえ！』のパターンも十分有り得ます」

「そりゃまあそうだけどなあ。成功すれば今後の憂いが九割方無くなるんだから多少の危険は踏み越えるべきじゃないか？」

「ですからその『多少の危険』が看過できないと言っているんです。大御祖父様の命は換えが効かないんですよ？」

「……………」

大局的利益よりも個人的感情を優先させるか。

俺は二度とも死んだせいか死への恐怖は希薄だが、別に命を懸けるのは好きではない。生きれるなら生きたい。

しかし今回の俺の案は必ず死ぬ訳ではなく、成功する可能性の方が失敗する可能性よりもよほど高いと睨んでいる。ローリスクハイリターンだ。

そりやまあ俺だってローリスクではなくノーリスクの手があればそつちを選ぶがそも言つてられなくなつてきている。長い目で見れば多少の危険は犯してでも今の内に魔法を奪つておいた方が絶対に良い。

いつまでも内側に引きこもつて力を蓄えてるだけでは駄目だ。いづれ必ず限界は来るのだから機を見てアクションをかけていかなきゃならん。今がその時だ。

と、まあそのあたりを懇切丁寧に説明したのだが、シルフィアは頑として首を縦に振らなかつた。

シルフィアが里を開拓した目的はエルマーと幸せに暮らす事。その青写真の中には俺の姿もしつかり入つていたようだった。

エルマーにちよつかいかけたらその限りではないだろうが。

「……では少し趣向を変えましょうか」

しばらく言い合い、平行線の論争に疲れた顔をしたシルフィアが不意に話題を変えた。

「かねてから考えていた事なのですが、直接的に魔法発展を妨害するのではなく、誤つた方向に発展を誘導する、というのはどうでしょう?」

「ミスディレクションか。まあ欺瞞情報流すのも一つの手だな」

しかし誤つた方向に発展つてのは王国語がおかしくないか? どの方向であれ発展させたら駄目だろ。

疑問が顔に出たのか、シルフィアが言葉を続け補足する。

「恐らく大御祖父様の想像とは少し意味合いが違います。えー、と……遠回りな話になりますが一から説明した方が良さそうですね……大御祖父様の前世には様々な魔法があつたのでしよう?」

「は? ……ああ、創作だけだな。精霊術とか陰陽術とか神通力とか超能力とか、そういうものの事だろ?」

「はい。それですね、私が大御祖父様から前世の魔法の話聞いた時に一番面白いと思ったのが『呪文』です。世界に意識を繋げたり自己暗示をかけたたり、はたまた超自然的存在に呼びかけるために発声し、それを引き金にして魔法を起こす。非常に独創的で興味深い。こちらでは呪文と言えばなんの魔法の意味もない祝詞ですからなるほど。呪文も魔法陣も要らない世界だからかえってそういった物が新鮮に感じる訳だ。

「で、それが？」

「偽りの魔法法則を作りましょう。呪文を唱える事で私達の手の者が魔法を代行する。そんな新しい魔法形態を作ります。勿論魔力はこちら持ちで。

呪文が必要である代わりに、自身の魔力を消費せず魔法を使えるとなれば必ず食いついてきます。

そうですね、できれば代行役はドッペルレイスが良いです。如何にも神秘的姿に変身し、意味深な呪文に呼応して魔法を使う、擬似的な詠唱形式魔法。馬鹿共にはちょうどいい目くらましになるでしょう」

「……ははーん。要するに魔法の貸し出しか。呪文やら契約やら貸し出しに付随する制限をつけて、そちらに目を向けさせる訳だ。」「こうすれば制限を解除しますよ」という分かり易い指針を示せば飛び付いてくるだろう。暗中模索で魔法を研究するよりはずっと楽だから。

でもなあ。

「……良さげな案だがパツと思いつくだけでもいくつか問題がある」「例えば？」

「そう簡単に新しい魔法形態が広まるもんか？」

「当然何の脈絡もなく広めたりはしませんよ？ 怪しまれますから。適当なバックストーリーをつけます」

シルフィアは唇を吊り上げてニヤ〜ツと笑った。あくどい笑みでさえ気品が漂うあたりこいつは真正の美女なんだろうなあ……真性

の狂人でもあるけどさ。

「参考までに聞いておくが、どんな？」

「遺跡で発見された古代の魔法。封印されていた精霊がもたらした奇跡。異世界からの漂着者が持ち込んだ新技術。他にも色々考えます」

なんつーベタな……

「そんなありがちな設定で大丈夫か？」

「大丈夫です、問題ありません。大御祖父様視点ではありがちかも知れませんが、私達からしてみれば非常に目新しく映るのですよ」

ふむ、思ったよりしつかり考えているらしい。

「呪文魔法があるからといって従来魔法の発展が遅れるとは限らないぞ。むしろ併用して凶悪化するんじゃないか？」

「呪文魔法と従来魔法は相性が悪いという事にすればいいんです。

呪文魔法の利便性が高ければ従来魔法は自然に衰退していくでしょう。」

呪文魔法は基本的にサービス精神で押していきます。声に反応する性質上魔力覚醒していない者でも使え、できれば使用回数無制限、最低限従来魔法よりも使用可能回数を多く。一定の条件を満たせば誰でも使える様にすればわざわざ身体障害を負ってまでマンドラゴラで魔力覚醒する者はいなくなるでしょう。

なによりこの手法の最大のメリットはこちらの肝一つで魔法を取り上げる事ができる所にあります。普段は忠実に呪文に依っておき、こちらに不利な状況でここぞという時に応じない。帝国は私達の手のひらの上で踊る事になります」

シルフィアは得意気に髪を後ろに払い、胸を張ってそう締めくくった。

確かに聞いた限りではナイスな案だ。裏から帝国を牛耳る事すら可能になるかも知れない分、今俺がマンドラゴラを潰して終わり、よりも良い。

ただ、残念ながら、一つだけ、致命的な問題が、残っているのだ

よ。

「ドツペルレイスが俺一人しかないんだが？」

「……そう、そこだけが問題なんですよね……」

シルフィアはどや顔から一転、辛気臭いため息を吐いた。やっばりこれの対策は考えてなかったか。ダメだこりゃ。

シルフィアの呪文魔法作戦には大前提として魔法代行役が必要だ。代行役は俺達側で魔法が使える者、即ちレイス、リッチ、ヴァンパイア。この内リッチとヴァンパイアは見た目があからさまに王国人だ。シルフィアの考えたバックストーリーのほとんどは使えなくなるし、神秘性もへったくれもありやしない。むしろその不老性に目を付けられてひゃっは「解剖だー！ になりそうで怖い。ドツペルレイスなら変身次第ではなっから人外にしか見えないからバックストーリー次第でそんな心配は無いんだけども。

百歩譲ってリッチ連中も代行役に起用するとしても十人に満たない。それっぽちでは到底需要に供給が追いつかないだろう。

いくら便利でも使い手が十人以下の呪文魔法がメジャーになるかなるわけがない？

新しくドツペルレイスを増やそうとしても「人間を魔力覚醒させる 数年魔力体内操作を磨かせる ゴースト化 事故死に注意しながらじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわじわ」というなんとも地道な作業をクリアしなければならず。特に「ゴーストになりたての頃は魔力密度が低い上に魔力固定が身に付いていないからうっかり消滅しやすい事この上ない。

新規にドツペルレイスを増やすのは非常に難しいと言わざるを得なかった。

「ドツペルレイスの個体数が増やせれば全部解決なんですけどね……大御祖父様、身体千個ぐらいに分割できません？」

「アホか、そんな事できる……わけが………ん？」

「………え？ まさか本当に？」

「いやいや流石に………あ？」

シルフィアが身を乗り出してきた。

待て、俺も確証はないんだ。考えもまとまってない。

しかしゴーストの存在原理からすると………不可能では、ない？

「できるんですか？」

「分らん。が、試す価値はある」

「試して下さい」

即応したシルフィアに頷きを返す。これはもし成功すればとんでもないチートになる。

やってみるか、ゴースト分裂研究を。

十三話 赤にしん（後書き）

プラナリアの予感！

## 十四話 遍在色々

ゴーストは生前の身体と記憶をトレースしている。ゴーストは物質に依存せず完全に魔力のみで身体を構成しているから、魔力が：形質魔力が物質の状態、即ち肉体や記憶、精神の情報　纏めて個体情報とする　を保存していると見て間違いない。

ならばゴーストは完全に生前の身体をそのままコピーしているのかと言えばそうでもない。ただコピーしただけなら頭が吹き飛ばせば死に、足がもげれば生きてこないはずだ。

ところが実際は手足もがれて芋虫になろうがなんだろうが身体の体積が半分以上残っていれば再生できる。それは残った半分が欠損部の情報を持っているという事であり、逆に欠損部が残った半分の情報を持っていたという事に他ならない。

つまり所、ゴーストの身体は同一の個体情報が複数集まって構成されているのだ。

ならばその複数の個体情報を独立させれば分裂もできるはず。

「で、どうやって独立分離するんだが」

「どうやるんですか？」

「思いついた手を片っ端から試す」

「出たよロバさんお得意の出たとこ勝負。エマさんが草葉の陰で嘆いてますよー、もつと考えるって」

いつもの様に研究室でロザリー相手に考えをまとめる。

もうほんと好き勝手言うようになったロザリーは時々ラクにたしなめられているが、俺の考えに反対意見を出してくれるのは有り難いので構わないと伝えてある。

いつでもゾンビへの強制命令で黙らせられるのだから、ロザリーの軽口とそれに対する俺の突っ込みも茶番みたいなもんだ。

「アインシュタインとゴッホとフェルマーとベートーベンを足して割らないようなタガが外れたリアルチートと一緒にすんな。何も思

いついてなくせに漠然といじくり回すってえ訳じゃないんだから別にいいだろ」

一応考えてはいるんだよ。エマーリオほど深く考察できないだけで。

「まーそーなんですけどねー。ロバさんが何しても私はついていくだけですから……それはそうとロバさん、今回の実験の趣旨はロバさん分身の術なんですよね？」

「是」

「エマさんの資料の中にそんなのがあったような気がする」

「ん？ ……ああそっぴいあつたな」

確かにエマーリオの意味不明な走り書きの中にそんな感じのやつがあつたはずだ。俺は手を実体化させ、棚から冊子を抜き出しめくる。

エマーリオの走り書きを纏めた冊子にびつしりとズラズラ短文が並んでいる。えー、『世界魔力・限定極薄魔力保持（子孫）不／可逆移動』……これじゃなくて……『高魔力強干渉 未元物質』……これも違う……『魔法生物・魔術科学』……わけわかめ……『霊体遍在分離 ゾンビ』……ああこれだ。抽象的で判然としないが、そういう目で見ればゴーストは分裂できる、と書いてあるように受け取れる。いや分離「できる」とも「できない」とも書いていない以上断定もできず注釈の「ゾンビ」の意図もよくわからないんだけども

エマーリオももう一文か二文解説を書いてくれてたらなあ……

俺が冊子を手に惜しんでいるとロザリーが横から覗き込んできた。

「この米印は結局なんなんですかね？ 分離にはゾンビが必要？」

「いや、ゾンビベースのゴーストって意味かも知れん」

「単純にゾンビを参照、とか」

「ゾンビの何を参照するんだ？」

「さあ……？」

エマーリオの考えてる事は分らん。

二人で額を突き合わせあれこれ討議する。気分は暗号解読だ。英

語で言うとコードブレイク。

「ちよつと引つかかっているんですけど、この『遍在』ってなんなんですかね？」

「風のスクウェアスペルだろ？いや冗談だから真顔になるな。順当に考えれば……分離したゴーストは全て同一個体になるって意味だろうな」

むしろそれ以外考えられない。桃を挿し木して蜜柑が生るわきゃあねー。

「ゾンビみたいなもんですかー」

「ゾンビは遍在とは違う。あくまでも各個体の制御権を創造者が一括して持っている言わば縦の繋がりであつて横の繋がりは……横、の……… ナイスだロザリー、閃いた」

その時俺の脳に電流走る。そうか、そういう事か。

ちよつとしたきつかけで散々手こずってきた問題が一発解決するからたまらん。今回は早めに分かったが、数ヶ月延々と悩んでから基本的見落としに気付いたりすると徒労感が凄まじい。

「閃いちゃいましたかー……」

「おいなんでちよつと『やつちやつたなあこの人、どうせ斜め下方向の閃きなんだろうなあ』みたいな雰囲気出してんだよお前あんま調子乗るなよ命令すんぞおい真面目にやれや」

「はい」

ロザリーの真面目スイッチをONにしてから続ける。

「つまりある意味ゾンビも遍在みたいなもんだつたんだよ。

ゾンビが浮かべたイメージは俺に伝わるし、逆も然りだ。それを今まで俺達は『イメージを送受信している』と解釈していたわけだが実際は『イメージを共有している』んじゃないかってのが肝だな。

ゴーストは形質魔力の塊で、形質魔力は体・精神の情報を保存しているから、ゾンビが創造者の形質魔力を持っているという事はイコール創造者の体・精神の一部を持っている、共有しているという事だ。

だからテレパシーが繋がる。自分が何を考えているか自分で分かるのは当然だろ？

もっとも厳密に言えば俺の形質魔力がそのままゾンビに入っている訳じゃない。それなら俺はゾンビの中の俺の形質魔力を操作し、魔法を使えるはず。しかし実際には不可能だ。

ゾンビに混ざった創造者の形質魔力が完全に創造者の形質魔力の性質を保っているなら、二種類の形質魔力が混ざり、リッチが魔法を使えるのはおかしい。反対にゾンビに混ざった形質魔力が創造者の形質魔力の性質を失いゾンビの形質魔力に変化しているならテレパシーが繋がるのは不自然。

ゾンビに混ざった創造者の形質魔力は『創造者の形質魔力であり、かつゾンビの形質魔力である』状態に変質している訳だな。

変質していても限定的テレパシーが繋がるのだから変質しなれば同一存在になったとしてもおかしくない、というかそうなる方が自然。ゴーストの分裂は自分の身体を切り離し独立させるだけなんだからな。

ああ、あと同じ創造者の形質魔力を共有しているゾンビに横のテレパシーが発生するはずだがそうならないのは形質魔力の変質が原因だろうな。理論上個々のゾンビが持つ変質した形質魔力はそれぞれ異なっているから。

急造の理屈だから穴はあるだろうが主旨は大体こんな感じになる。分裂したゴーストは全員全く同一の意識を持つ同一存在になるか、ほぼ同一の意識を持ちながらゾンビと同じように大元のゴーストが優位性を持つ存在になるかどちらかだ。どちらにせよ意識を共有する遍在状態になる事は間違いない。

と、いう事を多分エマールリオは言いたかったんだよ！」

「三行で」

「お前……」

真面目スイッチ入ってもそれか。

まあいい。文章を短く纏めるのが下手なのは自覚している。

「ドッペルレイスが

分裂すると

最強になる」

「把握」

よろしい。ならば実験に入ろうか。

ゴースト、というか俺の分裂実験は長期戦を覚悟しなければならなかった。なにせ実験台が俺一人だ。実験に失敗して身体パーン、消滅なんて事はなんとしてでも避けたい。危険性のある実験はできない。否が応にも慎重になるってなもんだ。

さしあたっては単純に身体を切り離し放置してみる事にした。自分の形質魔力を五分の一切り離し、一ミールほど離して自分と同じ姿になるよう魔力操作した上でその状態を保ち続ける。それを二つ同時に。

人間をゾンビにする際、八〜十時間の時間がかかるし、ヴァンパイアは十日で変調が現れる。時間経過がノーライフに影響を与えるのは実証済み。実験はやたらめったにあれこれ試せばいいってもんでもない。放置して観察するのも立派な研究だ。

切り離れた魔力の内片方は延々と放置し続け、もう一方は色々と刺激を与えて失敗したらデリートリトライ。単純に時間経過で分裂

独立するなら前者にいずれ変化が現れるだろうし、何かしらの刺激で分裂独立するなら後者で成果があがるだろう。

まーどちらもほとんど時間放置するだけの簡単なお仕事だから助手はいらない。手の空いたロザリーには別の研究をさせた。

「魔力覚醒成分を含んでるのはやっぱり葉だけみたいですねー。根も茎も駄目でした」

「シケてやがんな」

「こればかりは仕方ないですよー」

ロザリーはムスクマロイの抽出液が入った小瓶を手に肩をすくめた。茎と根に覚醒成分が含まれていれば秘薬の生産量も上がるんだがそう上手くはいかないようだった。

今度は暴れる実験用のネズミの口をこじ開けて抽出液を流し込み始めたロザリーを横目に、遍在のメリット（予測）を書き連ねたりストにまた一文書き加える。リスト化してまとめると改めて遍在が成功した時の俺T U E E E E 具合に目眩がした。

まず魔法の射程が伸びる。アホみたいに伸びる。俺が二人いれば単純に考えて射程距離は二倍。三人いれば三倍。四人いれば四倍。

さらに遍在を複数作り各地に散らばれば遍在がいる場所全てが射程圏。空恐ろしい。

次に監視。恐らくゾンビよりも鮮明な情報をリアルタイムで取得できるようになる。ゾンビと違いゴーストは例え木の中水の中草の中森の中あの子のスカートの中、どこにでも存在できる。数が揃えば帝国の情報は余すところなく筒抜けになるだろう。

加えて遍在は倍々ゲームで増えていく。仮に一年で一回分裂できるとしても二年で4、三年で8、四年で16、五年で32……と増殖し、百年も経つ頃には天文学的数字になっている。

総魔力量も跳ね上がる。俺の魔力量を10として、半分に分裂すると5・5。魔力を回復させて10・10。もう一度分裂して5・5・5・5。魔力を回復させて10・10・10・10。馬鹿みたいに増えていく。

酷いチートだ。いや別に不正手段を使わない純粹な研究成果（予定）だからチートって表現はおかしいんだけども気分的にね。

しかしこれだけ妄想を膨らませといてやっぱり分裂できませんでしたあ（笑）なんて事になったら首吊るかも知れん。いや待て、失敗してもこれまでと変わらないだけで損をする訳でもない。落ち着け俺。逆に考えるんだ。「失敗してもいいさ」と考えるんだ。

俺が自己暗示をかけていると、乳棒で乾燥させたムスクマロイの葉をゴリゴリすり潰していたロザリーがおもむろに言った。

「考えてみれば二体に分裂できればその時点でノーリスクで例の情報を引き出してマンドラゴラ駆除作戦ができるじゃーないですか」

「そうとも限らんぜ？ 存在そのものか魔力量が全体で共有になる可能性がある」

「なるほど。……なるほ、ど？ すみません詳しく」

今度は短くまとめすぎたか。メリット（予定）表を横にどけてメリット（未定）表を取り出す。

「あー、と……ああこれだ。存在そのものが共有になるってのはな、分裂した個体が別座標の完全同一存在になった場合の話だ。そうすると遍在のどれか一体が体を一割を失うとシンクロして他の個体も体を一割失う、ってな事が起きる。

で、魔力量が共有ってのは遍在の各個体の魔力が一括だった場合だな。つまり例えば三体に分裂して全員魔力密度と量が均等だった時、二体が一度に消滅すると体が半分以上欠損した事になっちゃう訳だ」

「なあゝるほど。遍在は七面倒な可能性に溢れてるんですね。メリットもデメリットも」

「まあどれも分裂が成功しない事には検証のしようがない。気長に行くさ」

「気長にいつたら帝国が力つけますよ？」

「……気長に急ぐさ」

これはゴースト分裂が難航した時のためにサブプランを用意した

方がいいかも分からんね。シルフィアが何か企んでいるっぽいから俺のはサブのサブだが、考えるだけ考えておくか。

## 十四話 遍在色々（後書き）

『世界魔力・限定極薄魔力保持（子孫<sup>ll</sup>不ノ可逆移動』

ロバートの生前の世界の世界法則がこの世界と同一であったと仮定した場合（中略）限定的に極薄い魔力を持っていた者は（中略）子を成す事ができたという事は同一種族であると考えられ、即ち（中略）ホールの通路が存在するという事であり、個人（中略）移動可能であると推測される。

『高魔力強干渉 未元物質』

高密度の魔力は低密度の魔力に対して（中略）干渉の程度が強くなっており、仮に密度が極端に（中略）物質に変化する、と推測される。

『魔法生物・魔術科学』

魔法は生物の電気信号（中略）一方魔術はその性質上必ずしも人間の（中略）双方同一の魔力という（中略）喩えるならば二重螺旋構造のような（中略）であると推測される。

走り書きを詳しくするとこんな感じですが。ちなみに上記の推測は全て正しい。いずれ本編で再発見されていきます。

## 十五話 拉致

人間は土地っ子世代に完全に切り替わるまで魔法使いにしない事になっている。反乱防止のためだ。

里の人口は百五十人を超え、土地と畑の開拓も進み生活水準は上昇し続けている。旧王国レベルにはまだ届かないが十数年もあれば追いつくだろう。ゆっくりと確実に着実に里は発展している。

シルフィアは非常に慎重に里を運営していた。ただの一人の脱走者も出さず、一件の殺傷沙汰も起こしていない。急激な変化が生む歪みを恐れて義務教育の導入を筆頭にした様々な制度の導入を差し控えている。

そして地盤が固まらない内の魔法の一般化は劇薬に等しい。個人によつて魔法が使えたり使えなかったりするから少なからず差別が起きるだろうし、魔法を使った犯罪、反乱、問題点を列挙すればキリがない。

中でも特に魔法とそれに伴う技術・知識を里の外に出すのだけは防がなければならない。王国はそれなりに厳重に管理していたがまだ甘かった。俺達は執拗に魔法管理にこだわるつもりだ。

里の人口全てが里の外を知らない世代になれば脱走の可能性は飛躍的に低下する。帰属意識が里に向くし、里の外に頼るべき知人、村、町、出身地が無いからだ。

また里の人口全てが土地っ子になる頃には俺の配下のノーライフも数を大分増やしているだろう。犯罪も反乱も起こさないのが一番だが、もし起きても力づくで鎮圧できれば最悪の事態は避けられる。魔法を里の人間に授ける時は予測される問題への対策をガチガチに固め終わった時。その目安が三、四十年後、という訳だ。

最近はスケルトンはとにかくゾンビは労働力だけではなく技術保存の役割も出てきた。

知識を継承するのは比較的簡単だが技術の継承は難しい。年若い

た技術者は膨大な経験に高い裏打ちされた高い技術力を持っている事が多い。彼等が寿命や病気で死んでしまふ前にゾンビにしてしまえば蓄積された技術を失わずに済むのだ。

ゾンビになると肉体的変化は止まっても精神的・技術的变化は止まらないから死後さらに腕が高まる事すら期待できる。ゆくゆくは人間の死後技術者はゾンビに、魔力が高い者はリッチに、その他は状況と状態に応じてゾンビかスケルトンにするようになっていくだろう。

状況と状態に応じて、というのは専ら戦力と労働力の兼ね合いを指す。

ゾンビは負傷するといちいち魔法で修復する必要があり、首を落とされると死ぬため戦闘向きではない。一方で意思がはっきりしているからスケルトンよりも複雑な行動が可能で使い勝手が良い。労働力向きだ。

スケルトンはあからさまに人外な姿で命令の効きが悪く使い道は限られるが、魔力がある限り何度でも蘇る実にいやらしい身体をしているから兵士としてはゾンビに勝る。戦力向きだ。敵方からすれば砕いても砕いても復活して襲ってくる不気味を通り越して禍々しい骸骨、相手をしているだけでさぞかしS A N値がガリガリ削れていく事だろう。前世の俺だったら発狂するレベル。

ゾンビもスケルトンも一長一短だった。

最近二刀流で戦い始めたエルマーと恒例の模擬戦を終えて里に戻ったらシルフィアに呼び出しを受けた。

執務室の机に頬杖を突いて俺を迎えたシルフィアは一枚の紙を寄せた。

「大御祖父様、ちょっと帝国の高官拉致るので出張お願いします」  
「そんな『キャベツ切れたからスーパー行ってきて』みたいに軽く言うなよ……」

紙を受け取ってみると何やら不穏な作戦の全容が書かれていた。俺が直接出向いて帝国の誰かをゾンビ化して情報を奪うのはリスクを伴うが、誰かがターゲットを捕獲して俺の所に連れてくればリスクを負うのはその誰かだ。ならばリッチを派遣して攫ってしまおう、と。

手順としては次のようになる。

実行犯はリッチ。魔法を使い帝国の高官を人知れず拉致する。そして現場からそれなりに離れた安全な場所で待機する俺の元に運び込み、ゾンビ化。情報を抜き出して帰還させる。帰還したゾンビは近日中に遺書を書いて自殺。情報漏れの証拠は残らない。

マンドラゴラの所在地情報が手に入ればそれでよし、運良くゾンビがマンドラゴラの管理に携わっているようだったら自殺の前に処分させてもいい。所在地情報が手に入らなくてもマンドラゴラの管理者の情報が入手できれば次はそちらを狙いに行けばいい。マンドラゴラの情報が何も分からなかったとしても最悪帝国の詳細な内部情報が手に入ればまあ及第点だ。

何かの不都合で作戦行動中に実行犯のリッチが捕まりそうになっても魔法を使えば逃げ切れるだろう。予め髪を紫色に染めておき、逃走時にチラ見せすれば内部犯の疑いをかけられる。にっちもさっちも行かなくなった場合の最後の手段は自爆。舌噛んでも服毒して

も死ねないから死に様はどうしても派手になるが仕方ない。

と、まあ大体そんな計画。確かにこれなら俺の身に危険は無い。代わりにリッチが危険にさらされるがシルフィアにしてみればどーでもいーんだろうなあ……

読み終わった計画書を優雅に紅茶を飲んでいるシルフィアに返し、いくつか質疑応答。計画に問題は無いようだったので即日出張する事になった。

「ああ、紅茶の葉がそろそろ尽きてきたので帰りに盗ってきて下さいね」

「なんとというおつかい感覚」

こういう楽勝ムードの時に限って失敗するんだよなあ。なんだか嫌な予か……ウソウソ嫌な予感なんてしないむしろ大成功の予感。失敗フラグはべっきべきに叩き折る。

ロザリーに留守を任せ徐々に里を出た俺は南西、帝都の方角へ飛んだ。帝国の首脳陣は帝都に集中しているから拉致するとすればそこになる。

ひたすら太陽と星で方角を確かめながら飛びつつリッチに命令を送り、帝都で落ち合うよう取り計らう。リッチの方が先に帝都に着くようだったので先行して手筈を整えておく指令も出しておいた。十年以上の地味で地道な情報収集でマンドラゴラの所在を知っているような官吏にある程度まで目星をつけてあるが、もっと絞り込みたい。警戒心が薄かったり、一人で出歩く事が多かったり、スケジュールがパターン化していて行動を掴みやすかったり、要は拉致し易い不幸な生贄を選ぶのだ。

森を抜け南下していくと眼下にポツポツ旧帝国領の村々が見えるようになった。王国よりも若干点在する村と村の距離が近く、規模も一回り二回り大きい。建築様式は王国のものと大差なかったがどの村にも中央に広場があった。

しかしなによりも大きな違いは髪の色。上空からでも紫色の髪が目立つ目立つ。白鳥の群の中に混ざった鴉なみに目立つ。一体どう

いう進化の過程でそんな髪の色になったのか分らん。森でも草原でも海でも岩石地帯でもそりゃもう孔雀の如くだよこれは。天敵に見つけて下さいと言わんばかりの。それともあれか、警告色か擬態か？ 過去に人間似で紫色の危険な生物がいたとか。まさか婚姻色ではないだろうし。

ファンタジーによくあるピンクとか青とかそんな髪の色の人種もそういう歴史を歩んできたのかね？ メタな事言えば単にキャラを立てるためなんだろうけどさ。

暇にあかせてそんなどうでもいい事を考えながら飛び続け、やがて帝都近郊に着いた。山裾にあるやたらとデカイ造りかけの城を遠目に見ながら街外れの廃屋に壁をすり抜けて侵入すると、暇そうに腐りかけた床板をつま先でつついていた先客が顔を上げた。

「お久しぶりです、ロバートさん」

「いよう、ご苦労さん」

小柄な初老リッチ、ガロンだ。金髪に白髪がまじりはじめたナイシルバーエイジなのだが今は紫色に染まっている。

軽く会釈してきたガロンに片手を挙げて応え、俺は廃屋を見回した。

家具は何もなくがらんとした一室で、板がx印に打ち付けられた窓の棧には埃が薄く積もっている。しばらく誰も訪れていないようだった。

「いい感じの場所だな。どうやって確保した？」

「住人が自殺して無人になった小屋に更に夜になると人肉を喰らう怪物が出る、という噂を流しまして。滅多な事では人は近寄らなしょう」

……微妙にデマとも言い切れない気がしなくもない。

「上出来だ。噂流したって事は帝国語喋れるのか？」

「カタコトならば。十年以上帝国で草の根活動をしていればそれに話せるようになるものです」

「ますます上出来だ。手筈は」

「万全です。標的は週末に一度、夜になると決まって一人で娼婦の元へ通う習性がありまして、今日がその日。途中人通りの無い狭く見通しの悪い通りを通りますのでそこで攫う予定です。娼婦の元へ通った日はこれも決まって朝帰りですのでゾンビ化にかかる八〜十時間家を空けた所で家人は露ほども怪しまないでしょう」

エクセレント。問題らしい問題は無いと見て良さそうだ。

「夜になるまでしばらく時間あるな……観光に行けないのが残念だ。エマーリオ像、見てみたかった」

エカテリーナが立てさせたというエマーリオ像は帝国城のお膝元の公園にある。大魔法使いにあやかろうと帝国の魔法使いが頻繁に訪れるため危なっかしくて行けやしない。

「あまり本人とは似ていませんが」

「だろうなあ。しかし帝国民の間でエマーリオが大人気なのが解せぬ。普通敗戦国の英雄を歴代皇帝の像の隣に立てるか？ エマーリオをヨイシヨしてるお陰で旧王国民の反感はちったあ収まってるみたいだけだな」

「近頃はエマーリオ殿の英雄譚が書籍になったと聞きます」

「どんだけだよ……」

そのままぐだぐだ話している内に日が沈み、ガロンがフードを目深に被り待ち伏せしに出掛けて行った。一人取り残される俺。

天井やら壁やらそこかしこに開いた隙間と乱雑に塞がれた窓から隙間風が入りヒュルヒュルとか細かい音を立てている。薄ぼんやりと月明かりに照らされたポロポロの床は汚れとささくれで何かの顔に見え……あれ、もしかあの赤黒い染みは血の痕か？ こええんだよ。今にも何か出てきそうな雰囲気。

……沈黙が、痛い。

いや独りには慣れてるんだけどね。こう、閉鎖的な場所ですつとしてるのと大空の下で自由にうろちよろしてるのでは感じ方も違う訳で。早く帰ってきてくれガロン。いたたまれない。

願いは虚しく、しかし計画通りに、ガロンが男を背負って小屋に

戻ってきたのは真夜中になってからだった。

「万事上手くいきました。尾行も私が分かる範囲ではありません。それは魔法で眠らせてあります」

ドサリと物を放るように男を床に投げ、ガロンは報告した。仰向けになつて転がる男は吞気そうに口の端から涎を垂らしている。

ふむ、良い夢を見ているようだ。すまんね、今から悪夢に強制変更させていただく。

「OK、やっちなえ」

「御意」

ガロンが懐から薬瓶を取り出し、蓋を開けて中の液体を丸ごと男の口に注ぎ込んだ。男はむせ込んだが、ガロンに無理やり口を閉じられ苦しそうな顔で飲み込んだ。

エマーリオ屋敷にいた頃使っていた楽に死ねる毒薬だ。十分程度で完全に心停止に至る。で、こいつを不完全固定の魔力で包んで、と。

「ところで指示通り背中に背負ってきたのですが本当に良かったので？」

「いーんだよ。コソコソしてるから怪しまれるんだ。下手に隠して運ぶより『潰れた酔っ払いの輸送中ですがなにか?』みたいな素知らぬ顔して堂々と運んだ方がいい」

「はあ、そんなものですか」

念のため声を潜めてボソボソ話す。ゾンビ化するのは明け方だからそこから聞き取り調査を開始するとして昼前には家へ帰せるだろうか？ 昼過ぎまでずれ込みそうなら家人に怪しまれないよう一度家へ帰して出直させるとして……

帝国語通訳のためにガロンを待機させ、ひたすら無言でクリエイトゾンビを続ける。一番の山場はもう越えた。暇な作業だ。

……と思つたのが悪かつたのか、二時間ほど経つた頃、外から話し声と足音が聞こえてきた。俺とガロンは顔を見合わせる。

こんな夜更けにこんな街外れに来る人間？ まさか感付かれたん

じゃああるまいな。

息を潜め……まあ元々息なんてしてないが……じつと耳を澄ませていると段々足音と話し声が鮮明になってきた。近づいてきている。声から察するに男女二人組か？なにやらペチャクチャ喋っている。

「……から絶対嘘よ！ 怪物なんているわけないわ！ 帰りましょ  
うっ」

「いやわからんぜえ？ ここに住んでたやつあ自殺したっていうじやねえか。案外本当に化けて出るんじゃないの？ヒヒヒッ」

「や、やめてよお」

なんて言っているんだ？ 帝国語分からん。ガロンにテレパスで聞くと絶句した気配が返ってきた。

なんだどうした。まさか本当に追っ手が来たのか？ ……はあ？

……え？ ……肝試し！？ おまつ、なにもこんな時に来なく

ていいだろ！ マジもんが居る時によお！

「お、鍵かかってねえな」

「ほ、ほんとうに入るのお？」

来ちゃったよ。扉の前まで来ちゃったよ。

やべえ、とりあえず死体をつてああああもう扉が開く！ ガロ

ン、ここの住人のフリして追い返せ！

「どちら様で？」

「ぬおっ！」

ガロンが素早く立ち上がり、なんとか入口の扉の前に立って闖入者を遮る事に成功した。

「な、なんだよ人がいたのかよ、無人かと思つたぜ。あー、実はこの小屋に夜になると人を攫って生き血を啜る食人鬼が出るって噂が  
ですね」

「ちょ、ちよつとマックス、あれつてもしかして……」

「あーん？ ……あ？」

……ガロンは小柄な爺さんだ。闖入者は二人共背が高く、当然の帰結としてガロンの頭越しに死体が見えるわけで。

ガロンから離れて様子を窺っていた俺には闖入者の顔から血の気が一瞬でなくなり、口が大きく開かれるのが分かった。やばい。「ガロンッ！ そいつらの口塞げ！」

遅かった。女の甲高い悲鳴が夜の静寂を切り裂いて響き渡る。

はいアウトオ！ 終わつたよ！ 拉致作戦終わつた！ ここでこいつら始末してもすぐに悲鳴を聞きつけた野次馬が寄ってくる！

入口で硬直したガロンがかなりテンパったテレパスで指示を仰いできた。そんなの決まってるだろ！？

「逃げるんだよオオッ！」

慌てに慌てたせいで集中が乱れ二ヶ月近くずっと保っていた遍在実験魔力が拡散してしまつたがそれ所ではない。死体を包んでいた魔力を解除、壁抜けしつつ地面に潜り一目散に現場から離れる。

ガロンも逃げる！ フードがあるし顔まではバレてない！ ハズだ！ 万一看られていても髪染めであるから帝国人だと思ってくれ！ ハズだ！

ああああああド畜生！ 失敗！ 作戦失敗！ 紅茶の葉を盗るか買つかする余裕なんてねーよ馬鹿があ！

## 十六話 シルフ

俺は里に逃げながらリツチ諜報部隊に失敗した作戦の顛末について集中的に調べさせた。最速情報伝達手段が手旗信号（ノーライフ族のテレパスは除く）なこの時代、情報の広がりには現代よりも遅かったがそれでも十日ほどで噂は広まり、それらを収集整理しておおよその成り行きは掴めた。

ガロンは現場から逃げる時に打ち合わせ通り髪をチラ見せして姿を消す魔法を使った。これにより目撃者の肝試し二人組は犯人が帝国の魔法使いであると誤認。小屋の中の死体が死体である事を恐る恐る確かめるや詰め所に駆け込んだ。

すぐに帝国の治安維持組織が集まっていた野次馬を押しつけて現場に到着。死体の身元調査と目撃者からの事情聴取をしてお上に報告、高官殺人事件はあつと言う間に行政府に知れ渡った。

不幸中の幸いで予防線が見事にハマってくれたようで、誰もかれもが犯人は帝国の魔法使いであると信じ切っていた。

「俺達んトコの派閥の高官殺つたのテーマ等だろ！」

「ハア？ 知らねーよ自作自演かあーん？」

「すつとぼけんじゃねー証拠は拳がってんだ！」

「知らねーって言うってんだようるせえな！ やるかコリアア！」

そんな具合。

高官を殺された方の派閥は敵対派閥がシラを切っていると思っっているし、疑われている方の派閥は自作自演で濡れ衣を着せいちゃんを付ける気だと思っっている。

信頼関係がすっかりしていれば外部犯を疑っただろうに、互いに互いを信じられないばかりにその可能性に頭がいつていない。今回の件で更に亀裂は広がっていくだろう。計画通り……！

しかし肝心の情報収集が失敗に終わったのは事実。里に戻り再度シルフィアと拉致作戦を練った、のだがすぐにボシヤった。

帝国の警戒レベルが上がってしまったのだ。

どうやら互いに敵対派閥を警戒しているだけで俺達の存在に気付いた訳ではなさそうなのだが、結果的に俺達への警戒にもなってしまうている。リスクが上昇し、こちらの手札は変わらず。念のため声と身長を知られたガロンを里に駐留しているリッチと交代させ、拉致計画は一時凍結になった。

……しかしリッチの数が足りない。諜報四人、ムスクマロイ原生地監視一人、里の警備一人、計六人から未だ変動なし。平時ならいいんだが、有事の際は情報収集が追いつかなくなる。今回もたった四人で情報収集をしたため十日もかかった。

それだけではない。帝国での王国人は立場が弱く、見た目が王国人で帝国語に訛りがあるリッチでは行動が制限され何かと不便だ。喧嘩に巻き込まれた時に一方的にこちらが悪い事にされたり、給料が当たり前のようにさっ引かれたり、宿屋の宿泊費が割高だったり、武器屋道具屋が粗悪品不良品ばかり出てきたり。

王国人でも腕っ節が強いとやたらフレンドリーにしてくれるのだが、まさか魔法を使ってぶちのめす訳にもいかない。身体強化魔法ならパツと見それとは分からないが魔法使いが見れば一発でバレル。平民でもいいから帝国の魔力密度が高い奴を攫ってリッチにするか？ 平民なら警戒していないから拉致りやすい。

でもなあ……

家族いる奴拉致ると後々面倒くさいからなあ。孤児や独り身拉致るとして……またあんな事にならねーだろうな。つーか帝国人に孤児とか独り身ってあんまりいない。戦死した兵の家族への保障とか養子縁組み割としっかりしてやがるし。王国人の方はほったらかしだけでも。

ちなみにゾンビは汎用性が低く偵察活動に向かない。万一捕まったら自害できないし。服毒しても舌噛み切っても死なないのが裏目に出る形になる。リッチなら魔法で自爆すりゃいいんだけど。

なんか一度失敗したせいか色々怖くなっていかん。リスクばかり

思い浮かぶ。

……一応魔力密度の高い手頃な奴を探してマークしておくか。今度は念入りにしつこくねっとり下調べと下準備をしよう。

やがて里ができ十二年目になった。

ネチネチ準備した甲斐あって帝国人を三人リッチにする事に成功し、全員情報収集に当てる。諜報部隊が四人から七人になり情報収集の効率も精度もかなり向上した。欲を言えば大都市に三人ずつ、中規模の町に二人ずつ、小さな町に一人ずつは配置したいからまだまだ足りない。

帝国の派閥争いは激しくなるばかりで、内乱状態になるのもそう遠くはないだろう。そうなった時に正確な情報を掴むためにも密やかにかつ迅速に増やしていこう……と思った矢先の事。

俺が分裂した。長期間切り離して保持していただけの魔力が分身体になっていた。

一度拉致失敗した時にパーになったのを考えると約四カ月で分裂した計算になる。

「えーっと……どちらが大御祖父様なんですか？」

「どっちも」

「俺だ」

「なにそれこわい」

喜び勇んで俺と『俺』がシルフィアに報告に行くと戦慄された。ぶつちやけ俺も分裂したてでよくわかっていないんだが。

分裂した『俺』の姿は俺と何も変わらない。まあ元になった俺がドッペル技術を修めているせいか『俺』も自在に姿を変えられたから姿に意味はないとして。

俺と『俺』は記憶や意識、感覚を共有している。『俺』は俺の記憶を持っていて、人格も精神も全く同一だ。

『俺』の知っているものは俺も見えるし俺の知っているものは『俺』にも見える。考えている事も同様。どちらが上だ下だなんて事はない。

一方で思考能力そのものは分割されている。俺は二つの物事を同時に考える並列思考ができるが、現在俺が二、『俺』も二で四つ同時に考えられるようになっていた。

まー大雑把に二個体を一つの意志が動かしていると考えれば大体あつてる。

俺と『俺』をキョトキョト交互に見ていたシルフィアは間違い探しに失敗したのか両手を挙げて降参した。

「さっぱり見分けがつきません。どうやって見分けたらいいんですか？」

「別に」

「見分ける必要は」

「無いと思うが」

「強いて言えば」

「なんか」

「分身した方が」

「空気に」

「依存してる」

「みたいなんだよな」

「……あの、交互に喋るの止めてもらえます？ 混乱するので」

「「そうか？ 分かった」」

「ステレオも止めて下さい」

ちい、つまんねえな。

「まー百聞は一見に如かず。こっちの俺をよく見てみる」

『俺』は手を挙げてひらひら振った。シルフィアの正面に立って反復横跳びを開始。そのまま腹筋したりスクワットしたりしていると同じくと『俺』を観察していたシルフィアが首を小さく傾げた。

「微妙に……空気が歪んでいる……ような？」

正解。今度は筋トレを止めて平手でシルフィアの横っ面を叩く。

「え？ 今、風が」

シルフィアは驚いて頬を触った。

「レイスは魔法なしに物理干渉できないはずでは？」

「んじゃあ俺はレイスじゃないナニカなんだろ」

レイスは物質に依存しない存在だが『俺』は『空気』に依存しているというか宿っているというかなんかそんな状態になっていた。人間の魔力が肉体に宿るように『俺』の魔力も空気に宿っている。詳しい原理は不明だが魔力を動かすと動かした魔力と重なっている空気が動くのだ。だから平手すれば風が吹く。

『俺』マジ空気。文字通りの意味で。

ちなみに魔力は完全に空気に宿っている訳ではないらしく、平手した時に空気はシルフィアの頬に当たったが魔力はすり抜けていった。すり抜けた魔力は再び空気と同調している。

「ふむむむむ……アレですね、なんだか大御祖父様が以前話していた四大元素の……風の」

「シルフか」

「それです。それみたいですね」

シルフか……風の精霊。悪戯好き。少女……少女？ 俺が？

「まあいいか。そんじゃざっとスペックチェックしてくるわ。詳しい性能が分からん限り使い道も決定できないだろ？」

「いつもすみませんねえ」  
「そうだもつと言え」

面通しを済ませロザリーが待つ研究室に戻り、早速検証に入る。

「ロザリー、メモ」

「はいな」

「仮称シルフ。素体となったレイスと視界共有、精神共有、思考枠分割。魔力と同調して空気を動かす事ができる。他、レイスとの差異については要検証」

「……要…検…証、と。にしてもシルフですかー。シルさんと被りますねえ」

「略さず呼ばばいいだろ」

「長いじゃないですか」

「長いか……？」

「ということと敬意を込めてエアロバさんと呼びます」

「どう考えてもシルフさんの方が短い件について」

俺がロザリーと話している間に俺が簡単な検証からしていく。

適当に魔法を使ってみると……OK、使える。魔法使用で消費した魔力がレイスと共有される気配はなし。

空気と魔力が同調して動くなら魔法を使わずに物を動かしたりは

……無理か。紙を持ち上げようとしたら一瞬浮いたものの魔力だけすり抜けた。

「ロバさんBとか？」

「なんとという量産型」

雑魚臭が酷い。

何かを持つたり移動させたりは無理でも動かすぐらいならできるか？

研究室の入口の扉に勢いをつけて体当たりする。体（魔力）はスルツと研究室の外にすり抜けたが空気は扉をギシギシ軋ませた。

おおお……これはいいな。魔力を消費せずとも移動するだけで攻撃になる。レイスよりも移動速度早いし。レイスのノロノロ飛行では扉を軋ませる風速はとてでもないが出やしない。

試しに里の端まで移動し、手頃な木の枝に腕を振るう。風を受けて枝はゆらゆら揺れた。やはり魔力は素通り。枝を通過する瞬間は空気と同調が切れるが枝を通過した直後にまた同調しているようだ。ふむ、ならば。

肘から先を刀状に鋭く変形させる。枝に狙いをつけ、大上段に振りかぶり、全力で 斬る！

「……おお」

真つ二つ、とまではいかないまでも小枝がほとんど断たれ、皮だけでプラプラぶら下がっている。こりゃ使えるね。鎧は無理だろうが服ぐらいなら切り裂けそうだ。

しかし研究室の外にいるのに同時に研究室の中でロザリーの変なネーミングを阻止しようとしているってのは妙な気分だな。一つの思考で二個体を動かしている訳ではないので特に混乱せず普通に動けてはいるが……なんとというかこう、携帯を新しい機種に変えて操作感の違いにモヤモヤする程度の戸惑いがある。

……あ、結局エアロバさんなのか。

今度は全身土の中に潜る。真つ暗闇で何も見えないが、土の中だからといって身体がどうこうという事はなかった。空気と同調せず

とも存在しているだけなら問題なしと。

ぬ、流石に空気は動かせても土は動かせないな。それに土の中の移動速度はノロノロになるっばい、いや通常速度に戻ってるのか？ 空気と同調していると速くなるのか。

判明した事は俺の方からロザリーにどんどん伝えていく。

「ロザリー、メモ追加。魔法使用可能。空気と同調せずとも存在可能。空気と同調している状態だと移動速度がレイスよりも段違いに速い。同調しなければレイスと同速度。正確な速さは後で計測する。空気との同調は攻撃に転用可能。最低でも小枝を切断する程度の威力はある模様。あ、魔力操作熟練度は素体のレイスと同じだ」  
「ちよちよちよ、そんな一気に言われましても……えー……転用……可能……」

「そして『動くな』」

「！」

俺が頭だけ研究室に突っ込んで命令するとロザリーは硬直した。  
シルフ  
羽ペンを持ったまま固まってピクリとも動かない。俺はそれだけ確認して外に戻る。

「……シルフからの命令も有効なのか。動いてよし。これもメモつとけ」

「あわわメモが追いつかない。これって単純に考えれば実験速度二倍じゃないですか！」

「すげーだろ」

「すげーです」

「多分更に4カ月毎に倍々で増えるからな」

「なにそれこわい」

四カ月で一回分裂。一年で三回分裂。今レイス含めて二体だから一年後には十六体、二年で百二十八体、十年あれば2,147,483,648、ってシルフからシルフは分裂できるのか？ 理論的にはいけるはずなんだがどうだろう。にしても十年で億単位とかどんだだけだよ、数の暴力ってレベルじゃねーぞ。

帝国対策も希望が見えてきた……といつかもう数年すれば蹂躪で  
きるんじゃないかこれは。  
まだ色々確かめるべき項目は多いがおっそろしい事になりそうだ。

十六話 シルフ（後書き）

俺、ロバート（、エ、）ピヤ  
俺もロバート（、エ、）ピヤ  
俺もロバート（、エ、）ピヤ  
俺もロバート（、エ、）ピヤ  
俺もロバート（、エ、）ピヤ  
俺もロバート（、エ、）ピヤ

以下略

## 十七話 俺と契約して精霊使いになってよ！

初めての分裂から十ヶ月も経つ頃には現状可能な範囲でシルフの性能を把握できていた。

魔力密度が高いほど空気との同調率が上がる。魔力と空気が剥がれにくくなる。つまり魔力密度に応じて移動速度も風の威力も上昇する。現在の最高密度8.5でなんとか小枝を切り落とせる程度だが、身体中に剣を生やしてスピンしながら突っ込めばズタズタにできる。

魔力消費無しで攻撃できる分、レイスよりも使い勝手が良かった。一回目の分裂から四カ月後、シルフは三体に増える。

レイスからシルフが分裂し、シルフからもシルフが分裂した。シルフとレイス、全個体でやはり視界や意思は同一で、思考能力そのものは二掛け四で八並列になっている。計算やブレインストリーミングに役立つ。計算ミスを防ぐために検算するから計算力八倍にはならんけども十分だ。

なんせ記憶にあるエマーリオに匹敵する計算速度がだせるようになったのだ、これに喜ばずして何に喜ぶのか。実質八人がかりつてのが多少情けなくはあるが……それでも嬉しい。俺にとってエマーリオはそれだけ大きな存在だった。今の俺全員でエマーリオに挑んでも全く勝てる気しないしさ。

分裂後の各個体の最大魔力密度と量は大元の素体、レイスと同じレベルまで戻せるので魔力量で言えば約3.4、エマーリオを越えてはいるが負けのイメージしか湧かない。

四体になった俺の密度と量を全員均等にして、シルフの一体の魔力を半分以下にしたらその一体のみ消滅した。一体の魔力を半分にしたのは俺達全員の総魔力量で言えば1.3%程度が失われただけだから、魔力量は一体一体別個扱いになっている事が分かる。全員の魔力量を総計して一個体の魔力量であるとカウントされているなら

消滅するはずがない。

要するに百体に分裂した俺を九十九体消滅させても、一体残っていればワサワサ増えていく、という事だ。なんか質の悪い雑草みたいだ。

あともう一つ、四カ月魔力切り離し保持で分裂できるならヴァンパイアやリッチ、ゾンビもゴーストかレイスかシルフを作れるはずである、という推測は外れた。というか確認できなかった。

ヴァンパイアはもとより命令したゾンビすら四〜五日で拡散してしまう。何度やっても一週間と保たない。

聞けば四日目に入ったあたりからぼんやりと眠っているような感覚になり、頭が真っ白になって気付けば魔力操作が切れているらしい。

まさか継続して魔力操作できるのが三日までなんて事はないだろう。それだったら俺はゴーストになってから三日目で消滅している。ゴースト系ノーライフだけが例外的に魔力操作ができるのかも知れないが何か違う気がした。そうなる理屈が分からん。

で、ふと思いついて試しに「一週間ずっと腕立て伏せしてる」と命令したら四日目にぐったり地面に突っ伏していた。いつの間にか頭が真っ白になっていたらしい。

俺はこれを三徹はできても百二十徹はできないのと同じようなもんだと解釈した。英訳していたはずがいつの間にか寝ていたとか、数学の問題に悩んでいる内にフツと頭が真っ白になったとか、俺にも前世で経験がある。人間・人間の精神がベースになったモノの集中力には限度があるのだ。

俺？ 俺は並列思考使えるから大丈夫なんだろ。二つの思考を交互に休ませる事で延々と集中を継続し、やがては習慣・無意識レベルまで昇華できる。

つまり！ 並列思考ができなければゴーストになっても四日で消滅！ 分裂もできない！ 実質的に人間のゴーストも分裂も俺の専売特許だったんだよ（ ）！

……エマーリオだったらできた気もするが。エマーリオマジ天才。遺伝子的にあれ以上の天才は存在できないんじゃないかってぐらいの。エマーリオの事だ、多分後天的に並列思考を修得するぐらいやっつてのけただろう……それはともかく。

結論としてシルフはいくらでも使い捨て可能ということが分かった訳で。本格的増殖と精霊魔法（笑）の細かい設定の練り直しを続ける。

執務室に設定の打ち合わせに向かうと、カルメ焼きをお茶請けに東の森産ハーブティーを嗜んでいたシルフィアが機嫌よく俺を迎えた。

「うえるかむです、大御祖父様」

「ああ、呼び方はそれで統一したか」

「個人的に呼ぶ時にレイスとシルフで呼び分けてもあまり意味ないですから。えーと早速本題なんですけど、まず前提の情報を。帝国の魔法使いの数は百五十〜百七十人。百八十を超えている事はないでしょう。このペースで行けば最大限に多く見積もって十年後に四百人程度でしょうか」

「そんなもんか……もうこれ帝国滅ぼせるんじゃないか？」

「それはそうですねですけどそんな事は流石にしませんよ。あちらから攻めてくれれば反撃しますが」

シルフィアは余裕綽々だ。

最早ちよつとやそつとで里を滅ぼされる事はなくなった。現在里ができて十二年目の夏、シルフ五体。十三年目になれば十一体だ。帝国が今から魔術訓練を始めたとしても、クリエイト・ゾンビができるようになるまでどれほど上手くいっても確実に十年以上はかかる。

そして十年後、俺は一億体以上に増殖している。

はつきり言おう、というか言うまでもないが、里と戦争状態になった時、帝国に勝ち目は一ミクロンもありゃしない。今すぐ戦端を開いてもそもそも里が見つかってもないのだ、増殖の時間はたっ

ぶりとれる。

戦力的にミジンコとシロナガスクジラ並の格差がある（ようになる見込み）ためシルフィアも余裕ぶっこいていられる。滅ぼすまでもない、見逃してやるう、と。帝国エ……

それでも念を入れて予防線だけは張っておこうと精霊魔法で魔法発達を妨害しダメ押ししようとしてるんだけどさ。

「分かってる、確認しただけだ。帝国滅ぼすのは最後の手段つてのは承知してる。俺としても殺さずに済むならそれに越した事はない」「はい、できるだけ穏便に飼育殺しましょう。追い詰められた人間の底力は侮れませんから」

「……まあ言い方は悪いが異論はない。精霊の数は帝国の魔法使いの数を上回るようにしたいよな？ 『誰でも使える』を売りしてるわけだから供給量はある程度確保したい」

「ボーダーラインが一万體です。帝国の総人口が一千二百万、帝国軍が十万。精霊を軍の主力兵器に食い込ませるなら十分の一は必要であると睨んでいます。生活に食い込ませるなら国民の半数、六百万。理想はどこに行っても精霊が居てそれが自然な状態にする事、これが二千万以上ですね」

「12,287體が三年八ヶ月、6,291,455體が六年八ヶ月、25,165,823體が七年四ヶ月」

「計算早いですね……二年後は」  
「383」

「十分です。では二年後から広めていきましょう。微妙に日をずらしながら同時多発的に帝国の全域に精霊を二、三体ずつ出現させていきます。帝国領の東西南北まんべんなくランダムに、帝国以外の弱小雑魚国家を含めて大陸全域に噂を広げる草の根活動ですね。人間に精霊の存在を認知させる所からじっくりといきましょう」

言いながらシルフィアは分厚い資料をパラパラ捲った。

「具体的には超古代魔法文明ワクテカの遺跡に眠っていた最強の魔法生物の封印が劣化したため覚醒し、一匹が目覚めたのを皮切りに

魔力の波動が広がり各地に眠る精霊達が次々に目覚め」

物凄く楽しそうに資料を捲り喋る喋る。それにしてもこのヴァンパイア、ノリノリである。

「創造主である古代人の子孫の現生人類に尽くしてくれるものの、精霊に命令するためには古代人の言語である古代語が必要で、」

途中から聞き流しモードに入ったのだがシルフィアはお構いなしに大演説をぶちあげ結局半日近く喋り続けていた。ラキが途中でテイポットを替えに来た時以外延々とノンストップ。

転生だとか精霊に選ばれた勇者だとか随分とアレな要素をよくもまあこれだけ詰め込んだもんだ。俺の黒歴史が掘り返されてストレスがマツハ。

「そして生活、宗教、軍事、あらゆる面で精霊が幅を利かせ、帝国の民は精霊無しには生きられなくなる……ふふふふ」

「あ、終わったか？ 無駄に長いんだよ、百分の一にしる。思いついた設定片っ端から入れてんじゃねー。闇鍋になっでんぞ」

「エルマーを馬鹿にしないで下さい」

これ考えたのエルマーか！ 暇に明かせてたっぴり妄想膨らませたな？

「エルマーが考えた物でも没だ没！もつとシンプルで拡張しやすい設定にしる。端っからこんなガチガチに決めてどうするつもりなんだよ」

「え〜？ だつてエルマーの案ですよ？」

頬を膨らませ不満そうな顔をする。お前エルマーの言葉にはホントYESしか言わねーな。

「黙れ。大体なんで精霊が土水火風揃ってるのが前提になってるんだ？ まだシルフィアじゃないだろうが」

空气中で分裂して空気と同調するシルフィアになるなら、土中で土と同調するノーム、水中で水と同調するウンディーネ、火の中で火と同調するサラマンダーになるのではないか、というのはまだ推測の段階だ。現在実験中で、結果が出るまでに四ヶ月かかる。

「でも複数の精霊と契約する事で魔法を拡張できるって良くないですか？」

「そりゃそうだけどな、設定に不確定要素を入れるなっつってんの」  
流石シルフィア、エルマーの事となると食い下がってくる。

「長つたらしい」ぼくがかんがえたかつこいいせいれいまほう」を要約すれば「シルフだけだと風魔法しか使えないが、ウンディーネとシルフの力を合わせれば水＋風で治癒魔法が使える。四種類の精霊の力を合わせれば従来の魔法を全て再現できる」という設定になる。

精霊に力を貸してもらうためには呪文を唱える他にも契約をなんたらかんたらしたり、より強力な呪文を使うためには儀式をつんちゃらかんちゃらしたり、まあ色々ある訳で。

無料でも精霊魔法は使えるけど、より便利で強力な精霊魔法を使いたければ課金しろ、みたいなね！ 無料サービスで味をしめた精霊使い達はこそつて新しい呪文の探求や儀式のクリアに心血を注ぐだろう。精霊を四種類に分けるのはその儀式や呪文のバリエーションを増やすために有効だ。程よく複雑な方が煙に巻いたり誤魔化したりし易いつてもある。

「呪文」古代語「日本語、って公式は大丈夫なのか？ 日本語は機密書類に使ってるだろ」

「発音してるだけで文字は読めないのでから大丈夫です。発音と文字を照らし合わせる機会を与えなければ問題ありません」

「……まあそれはいいとして。なんだよ風魔法の詠唱が『導け天空の力、集え蒼穹の覇者、我に従いて邪なるものを断つ刃となれ！』つて。厨二か。普通に『風刃』『ウインドカッター』でいいだろが」  
「え、かつこいいじゃないですか」

「ざけんな却下だ。風魔法使ったびにその呪文聞かされる俺の身にもなってみろ。拷問だぞ」

「え〜？ 大御祖父様の感性、絶対変ですよ」

ぐああ、話が通じねえ。この世界に厨二病の概念ないもんな。香

ばしい設定で精神ガスガス削られるのは俺だけって寸法か。糞が。そうして主に厨二成分の排除に四苦八苦しながら設定を煮詰めていく。エルマーは言うに及ばずラキもロザリーも厨二設定を支持するので散々手こずった。

俺がおかしいのか。俺が変なのか。しかし実際に精霊魔法を管理運営するのは全て俺なんだから設定は俺主導で決めていいはずだ。絶対妥協しねーからな！

十七話 俺と契約して精霊使いになってよ！（後書き）

トレント・ゴーストは時間をかけてゆっくりとゴースト化するため、完全にゴーストになる時には既に魔力固定が習慣・無意識化しており、問題なくゴーストになれる。ただし分裂はできない。

主観魔力密度 8.5 のシルフの速度は時速 70 km<sup>キロメートル</sup>。  
以下参考までに。

時速 70 km の風

風に向かって歩けない、転倒する人もいる、ビニールハウスが壊れる

時速 90 km の風

鋼製シャッターが壊れる、しっかりと身体を確保しないと転倒する

時速 110 km の風

立ってられない。樹木が根こそぎ倒れる。ブロック塀が壊れる

時速 110 の風

屋根が飛ばされる、木造住宅の全壊

## 十八話 精霊達と不死の剣

突然だが俺は歴史上の偉人、先人達に敬意を払っている。

俺が持っている現代知識の大部分は彼らの業績によって判明した事だ。そのどれもが俺が逆立ちしたって成し得なかった偉業でもある。

文明があまり発達していない異世界でその偉人達が積み上げてきた知識は重い価値を持つ。俺にはその知識をさも自分が考えたかのような我が物顔で振りかざす事はとてもできなかった。

遺伝子の法則について語る時はそれがメンデルが発見した物であると断っておくし、記憶の中の音楽を楽譜に起こす時は作曲家、作詞者を明記しておく。誰の考えたモノか分からない時は作者不詳だとか出典不明だとか、その手の注釈を必ずつけた。

他人の偉業の無断借用（？）は先人達への甚だしい侮辱であると思う。彼等の名誉のためにもせめて名はキチンと残すべきだ。

俺は知識の運び屋だ。世界から世界へ知識を運搬しただけ。別にそれが俺である必要はどこにもなかった。極端な話、日ビ辞典（日本語 ビルテファ語辞典）付きの小高の教科書とちよつとした雑学書があればそれで俺の代わりになる。

一方エマーリオは法則も理論もへつたくれもない漠然とした「魔法」からもの数年で「理論化した魔法」の基礎を創り上げた。それは誰も、何も代わる事はできない。

故に俺はエマーリオを高く評価しているし、尊敬もしている。

……それだけ。特に話は広がらない。

さて里ができて十三年目、俺が合計十二体に分裂した頃、シルフィアは本当に今更ながら年号を作った。名付けて法暦。現在、法暦十三年。今までもちよいちよい書類上で使っていた数字の頭に「法暦」をくつつけたのだが、「里ができてからウン年目」と表記するよりは簡潔で分かりやすい。

法暦は魔法暦の略らしい。里の生命線である魔法学の更なる発展を願ってとかなんとかそんな理由でこの名称にしたようだ。王国暦をそのまま使うのが気に入らないというのもあるらしいが。

シルフィアは選民思考が強い。家族とその他の扱いに大きな差があるのも一種のソレだろう。どうやら帝国に捻り潰された王国を情けない、一緒にされたくない、と思っっているようだった。確かに開戦初期から魔法使いを最大効率で上手く運用していれば兵数十倍でも勝ちがあつたかも知れない。

あとはエマーリオを邪険に扱った教会への反発心か、敗戦後ずっと最下級層に甘んじている旧王国民への軽蔑か……まあなんでもいしか。わざわざ尋ねて確認するほどの事でもない。

法暦十三年のはじめ、俺は合計十二体に分裂した。内訳はレイス6、シルフ5、ウンディーネ1。どうしてレイスが増えたかってーとそんなに難しい話じゃない。

今回の分裂でレイスは水の中で魔力を分離保持し水と同調するであろうウンディーネを、五体いるシルフの内二体はレイスと同様にウンディーネを、三体は土の中で魔力を分離保持し土と同調するであろうノームをそれぞれ創ろうとした。しかしウンディーネとノームに分裂しようとしたシルフからは軒並みレイスが誕生し、ウンデ

イーネが誕生したのはレイスからのみだった。

シルフ シルフ ウンディールネム レイス  
風から水と土は分裂できず無になり、風から風は分裂できる。無からは風も水も分裂できる。と、いう事は無がベースになっているのだろう。

無に保存できる属性は一つのみと考えればまあ筋は通る。無 風と無 水は新規保存だから問題なし。風 風は同じデータの上書き保存だから問題なし。風 水だと二つのデータが混ざってどちらも正常に働かない。上書き保存されりゃあいいのにな。

この推論上だと風 水で分裂して誕生したレイスがベースになったレイスと同じかどうか分からない。二つのデータが混ざった結果初期化されたのか、データが混ざり合ったごちゃ混ぜ状態のままなのか。前者ならばベースと同じレイスになるが、後者だと精霊系に分裂できない駄レイスになってしまう。できれば前者であって欲しいがそう都合よくいくもんかね？

この時、俺は「都合よくいく」とは思いもしなかったのである……  
……なんてフラグ立てて上手くいけば苦労しない。普通に今回の分裂結果待ちだ。他の可能性もいくつか考えられるし、データ保存説が間違っている可能性もある。

もつとも純魔力が形質魔力に変換され、その形質魔力が生物の個体情報を保存しており、形質魔力は他の形質魔力と混ざると操作できなくなる、という三つの法則を鑑みれば、間違っていたとしてもそう大きく外してはいないだろう。魔力が生物情報を保存するなら無機物情報 空気や水の情報 も保存していても不思議はない。

ちなみに火 サラマンダー については四ヶ月もの間分離した魔力がすっぱり入る大きさの火を維持するだけの燃料が用意できなかったので（ ）分裂実験を行っていない。

次の分裂に取りかかりながらシルフにしたような検証をウンディーネにもする。なんの事はない、基礎スペックはシルフと同じで、空気が水に置き換わっただけだった。

ただし移動速度は約時速5kmと、レイスとほぼ等速。人間が普通に歩くぐらいの速度だ。それでも空気とは質量が違うので人間に体当たりすれば転倒させられるぐらいの威力はでる。ノロいので平地で真正面からやれば簡単に避けられるものの、まあやり方次第だ。あと水と同調して変形してもあんまり上に伸び上がると重力に逆らいきれずスライム(国民的RPGではなく西洋ファンタジーの方)みたいになる。魔力密度が上がればシルフと同じように同調率が上がるデータが出ているから、このあたりはそのうちに時間が解決してくれるだろう。

新しい精霊、ウンディーネの誕生に一番喜んだのは意外にもシルフィアではなくエルマーだった。

世界一の剣士を目指している、というエルマーの目標は「剣士の中で世界一」ではなく「世界の誰よりも強い剣士」だったようで、近頃はシルフとも斬り結んで(?)いた。最初の内は素直に魔法を鍛えた方が手っ取り早く最強に近づけるんじゃないかと思っていたが、二刀流と魔力操作が形になり始めた一年ほど前からは急激に強くなりつつある。魔法一辺倒よりは魔法と剣を両方使った方がそりゃ強い。この世界では剣士と魔法使いを両方極める事ができるのが幸いした。

いつも訓練に使っている里の近くの空き地で、今日も俺達はエルマーを包囲する。数日前からウンディーネも加わった、シルフ、スケルトン、グールを合わせた四対一でのエルマーの剣術訓練が始まる。スケルトンとグールは木槍装備だ。シルフは滞空中、ウンディーネは地面でうねうねしている。

エルマーは足を肩幅にずらして半身になり、右手の剣を正眼に構え、左手の剣は脇を締めフェンシングを彷彿とさせる突きを構えた(2)。更に二秒ほどかけて体を中心に半径二ミールほどの魔力の膜を球形に展開した。

魔力結界(エルマー命名)だ。

自身の形質魔力を強く魔力固定して展開する事で、外敵の魔力の

接近を弾く効果がある。あくまでも剣で斬り伏せる事にこだわるエルマーにとって魔法攻撃に対する防御法の確立は最重要事項だった。この魔力結界だがエルマーが自分で考えた割になかなか上手くできていて、外部からの魔力の侵入を全カットできる。魔法使いが魔力を伸ばしてきても結界に阻まれ、レイスやシルフ、ウンディーネも魔力で身体ができているから侵入不可。

それだけではない。

人間や、ゾンビ・ヴァンパイアといった実体ある者達ならば結界内に侵入できるが、侵入時に魔力を剥ぎ取られる。肉体は侵入できても魔力の方は結界を抜けられず、無理に結界内に入ると肉体から魔力が抜けるのだ。当然ノーライフ系は魔力がなければ動けないため結界に侵入した途端行動不能になる。人間は侵入してからも動けるが、魔法無しで戦わざるを得なくなり、そうなればもうエルマーの独壇場。エルマーは魔法を使えるし、卓越した剣術を身に付けているからだ。

将来的に結界の範囲を広げていけば更に凶悪化するだろう。ダメージを与えようと思うなら結界範囲外から魔法を叩き込むか高威力の物理攻撃をぶち込むしかない。それさえも半端なモノでは迎撃されるか回避される。

……まあその他にももう一つだけ攻撃を通す手段があるので、俺は専らそれを使っていた。

数秒、俺達は睨み合っただまま。木漏れ日が差し込む小さな空き地に森の小鳥達の鳴き声が遠く響き　　エルマーが動いた。

前方左よりにいたスケルトンに滑るようになめらかな歩法で全く姿勢を崩さず接近し、スケルトンが愚直に突き出してきた槍の穂先を左の剣を使い最小限の動きで絡め取り明後日の方向に放り捨てる。そこから流れるように自然な動作で、右の剣の背でスケルトンの胸を強かに打ち据えた。以前聞いた所によると打撃と衝撃に重点を置いた攻撃だとかで、何度も使つと剣が曲がるのが問題だそうだ。

乾いた音と共に白い骨を飛び散らせ砕け散るスケルトン。やっば

りもうスケルトンではエルマーの相手にならん。砕かれた時に境界内に取り込まれていたら復活もしない。

シルフとウンディーネのダブル俺で背後からスケルトンを砕いたエルマーを強襲する。しかしエルマーは背中に目がついているかのように反応し、身を捻り振り返りつつ左の剣で頭上のシルフを、右の剣で足元のウンディーネを狙って鋭い斬撃を繰り出してきた。

シルフもウンディーネも物質を透過するが、それが分かっているエルマーは剣に自分の形質魔力を込めて固定している。それなら確かに魔力を斬れる。

シルフはカマイタチの置きみやげを放ちながらエルマーの剣を回避したが、ウンディーネの方は急いで後退したためエルマーに向かつて伸ばしていた一部の水が素早い魔力の移動についていけず、同調が解除された。

精霊組が下がる代わりにグールが前に出てエルマーに槍を向け牽制する。俺のカマイタチはエルマーの腕に小さな切り傷を作っていたが、エルマーは気にも留めていない。

エルマーが編み出した不死剣（エルマー命名）のメリットに多少の怪我は問題にならない、というものがある。

ノーライフ化による痛覚の鈍化、失血死の危険性の消失。怪我をしても動きが鈍らない。そりゃあ腕を千切られたりなんかすればくつつけにやならんが、ちよつとやそつとの傷ぐらいなら無傷と変わらないパフォーマンスを發揮できる。首から上が無事なら心臓を破られようが問題なく戦える。エルマーによれば胴体の防御を緩くし、その分首と頭の防御に割り振っているらしい。

そんな事を考えながらウンディーネが地面にのぺつと広がるほんの二秒の間にグールは両手両足を斬り落とされイモムシになっていた。うわあ、グールでもロクに時間稼ぎにならないか。

まーここからが本番だ。

エルマーが聞いただけで斬られたと錯覚するような鋭い裂帛の気合いを込めた声を発しながら斬りかかってきた。俺はそれを後退し

たり体の形を変えたりしながら尽く避ける。自在に変形し空を飛ぶシルフはさぞ斬り難い事だろう。へっ、ざまあ。

さて、いつまでも避けながらカマイタチ飛ばしていた所で切り傷ぐらいしか作れない。本格的に攻撃しようか。

エルマーは随分魔力操作が上手くなってきたが、まだまだ俺の魔力固定強度とは歴然とした差がある。そこを突いて崩す。

「脆いわ！」

「ちっ！」

シルフがエルマーのものより格段に高い魔力固定強度でもってエルマーの結界に押し入った。エルマーが袈裟斬りをかけてくるが、剣が帯びたエルマーの形質魔力はシルフの魔力固定を破る事ができず、剣だけがシルフの体をすり抜けていった。

「無駄！ 無駄！ 無駄ア！」

「くそ、まだ固定強度不足か！」

エルマーが悔しげに言っつて剣を構え警戒しながら数歩跳び下がった。

「それもあるけどな、剣の魔力固定が不安定なのも問題だと俺は思うね。構えてる時はいいんだが振った瞬間に固定が弱まってる」

「あー……」

言われてみれば、という納得顔でエルマーは声を漏らした。

魔術を使う者同士の戦いでは魔力の固定力が勝敗を決めると言っても過言ではない。結界の範囲が半径十ミールもあって魔力固定が勝つていれば負ける方が難しいだろう。飽和攻撃でもされたら話は別だが。

「……ん？ ウンディーネがいない？」

何事か考えながらも構えを崩していなかったエルマーがシルフの周囲に目を向けてやっと気付いた。遅いわ馬鹿者が。

「今のが実戦でなくて良かったな、実戦だったらお前はもう死んでるぞ」

「！」

地面に染み込んでコツソリ背後に移動していたウンディーネでエルマーに囁きかける。エルマーは「今のが」の時点で即座に回避行動に入ろうとしたがウンディーネの方が速い。エルマーは腰まである水流に足をすくわれてあっさり転倒した。

そしてそのまま魔法で急激に水を冷やして瞬間冷凍。エルマーの体のほとんどがガツチガチの氷漬けになる。

「はい終了」

「あああ、また負けたか……」

シルフが模擬戦終了を宣言すると、エルマーはため息を吐きながら自分を拘束する氷を魔法で吹き飛ばして立ち上がった。エルマーは戦闘中は意地でも身体強化以外の魔法を使わないが戦闘中でなければ普通に使う。よく分からんポリシーだ。

「やっぱロバートさん強いな。戦闘経験は俺の方が上のはずなんだけど」

「そりやお前、伊達に長生きしてないからな」

長生きして、努力した結果だ。

この世界には裏技も短縮ルートも親切にあれこれ解説してくれる神様も存在しない。

愛と絆で魔法の威力倍増（苦笑）とか、命を代償に大魔法を発動させる（失笑）とか、光・闇属性の魔力（嘲笑）とか、聖なる祝福（冷笑）とか、超希少で強力なレアスキル（爆笑）とか、そんなフワフワしたものも存在しない。あるのはひたすら機械的で無機質に規則正しく回り続ける魔法という名の技術・学問だけだ。

俺だって二百数十年に及ぶ時々自分でもよく発狂しなかったもんだと思う程の地味で地道な修練といくつかの幸運があったからこそ、ロバート 無双の入口に辿り着く事ができたのだ。いくら才能があるとは言えようやく三十年の年月を積み上げただけの若僧には負けねー。

俺は悔しそうにうつむくエルマーを放置したままやっと復活したグールを回収して里に撤収した。背後からは素振りの音が聞こえて

くる。まあ頑張れや。ノーライフ老いず学成り難し。

その約四ヶ月後、増殖はまだまだ止まらない。レイス6、シルフ5、ウンディーネ1からの分裂。

無1 土1、水1 風5 風5、駄5 駄2（失敗ウンディーネ）+ 駄2（失敗ノーム）+ 駄1（失敗シルフ）。  
無1、駄10、土1、水2、風10となる。

「駄」は駄レイスと呼んでいる劣化レイスで、精霊が別属性の精霊に分裂しようとしたものを指し、基本的にレイスと同じだが精霊に分裂する事はできない事が今回の分裂ではつきりした。

駄レイスを増やすぐらいなら精霊を増やした方が有用だから新しく精霊から駄レイスに転科させる事はしないが、既に駄レイスになってしまった者は仕方がないのでそのまま駄 駄で分裂させていく。精霊に分裂できない以外は何も問題ない事だし。

ノームのスペックはシルフやウンディーネと変わらず、やはり移動速度だけが違う。ノームはウンディーネよりも更に遅く、時速2kmちよいしかでない。土と同調しないほうがまだ早かった。

これについては二つ予測がある。

風、水、土の順に精霊を発生させたため、その順に速度が下がっている。この理屈だと火の精霊を作れば速度が亀になるだろう。

もしくは質量……というか密度の問題。空気よりも水、水よりも

土の方が密度が高いから、同じ出力で動かそうとすれば密度が高い物質の方が遅くなる。

俺としては後者なのではないかと思っっている。空気70、水5、土2では空気と水の速度減衰が急激過ぎる。しかし質量を移動させるのに必要なエネルギー量で考えれば順当な結果だ。

今までしつかりとしたデータに基づいて出した推測の多くは正答だった。今回もそう間違っではないだろう。

その更にまた四ヶ月後、分裂と合体。

無1、駄22、土2、水2、風18、火1、合計45体となる。

無<sup>サラマンダー</sup> 火の分裂はゾンビを動員してなんとか燃料を四ヶ月分集め達成した。

言わずもがな基礎スペックは他の精霊と同じ、なのだが、物質の中ではなく炎という現象の中にあっただせいか少々趣が異なった。

速度の方は火の中ならシルフ並に速いが（予想通りだ）、火を動かす能力の方は余り意味がない。火が揺らめく方向を動かすくらいはできるのだが、火を火元から切り離してファイアーボール！とかフレームランス！とかは不可能だった。サラマンダーはあくまでも火を動かせるだけだから、火元から離れた火を燃やし続ける事はできない。

一方でそれをカバーするような能力も生じていた。

魔力を消費せず、というと語弊があるが、ゾンビが活動のために魔力を継続的に消費したり、スケルトンが勝手に再生したりするのと同じ様に、サラマンダーもそういう魔法が発動していた。

サラマンダーにはいつでもどこでも常に熱と光を発生させ続ける能力があった。

熱も光も弱々しく、熱は精々50程度、光は暗闇で仄かに赤く光って見える程度。自分の意志で光熱を止める事はできないが、魔力希釈・圧縮で強さは操作できる。

熱で空気が歪みサラマンダーはシルフよりも視認しやすくなっていて、空中にいと結構分かりやすかった。むわっとした熱気も目

安になる。それも魔力密度が上がればなにもかも焼き尽くす灼熱の熱波になるだろう。

精霊はすべからず密度上昇と共に強くなっていく。もう二百年も経つ頃には自然災害クラスになっている、かも知れない。

あとは合体の話。シルフとウンディーネを合体させてみたら駄目イスになった。

精霊は少しぶつかったり絡み合ったりしたぐらいでは融合しないが、元々同じモノだったから比較的早く三日程度で混ざり合って一個体になった。空気と水両方に同調できるハイブリッドになってくれ、という淡い希望は見事に打ち砕かれ、空気にも水にも同調しない。分裂しようとしても精霊にならなかったから単なる駄目イスだという事は確定的に明らか。もの見事に精霊を無駄にしてしまった。

いや負け惜しみになるがこうなるんじゃないかなー、程度には思っていたんだ。でもやってみないと分からないかね。明らかに検証の必要がなければやらないけども、せっかく使い捨て式人海戦術が使える見込みが出てきた事だし細かいデータをとってみるのも悪くないかも知れない。

ま、今はなんとか四種類揃った事だし精霊魔法のアレコレを片付けておくか。

## 十八話 精霊達と不死の剣（後書き）

現状、分裂のために分離させる魔力は素体の三分の一で行っている。三分の一以下でも分離させられる可能性も考慮しているが、例えば五分の一で分裂させようとして失敗し四ヶ月丸々無駄にしまった、は痛いので今は大人しく三分の一で実験中。後々個体数が増えて余裕が出れば試す予定。

ちなみに一体が一度に三倍に増殖するのは実験するまでもなく明らかに集中力が不足するので試していないし試す必要もない。

2

作者は特に剣道、剣術の経験はありません。エルマーの構えは適当に考えたものです。その道の方から見れば噴飯モノのなっとならん構えかも知れませんが、軽く流していただけると助かります。

魔術……後に細分化予定

魔法……最も簡単な魔力運用法

精霊魔法……スタンバイ中

????……魔力密度が足りない

????……必須アイテムが無い

????……既に使っているが限定された範囲でしか扱えていない、

必須アイテムが無い

禁術……シルフィア、ロバートによって禁止された魔法や魔術。現

在は生物複製魔法のみ分類される。

話数が伸びる。どんどん伸びる。本来この話は九話あたりになる予定だった

前話のあとがきで書きそびれましたが、ロバートの並列思考は「分裂はロバート以外使えない」という状況を作り出したいがために出した設定です。それ以外に特に意味はありません。

## 十九話 ぼくがかんがえたかつこいいせいれい

法暦十四年、俺は無1、駄44、土4、水4、風36、火1、合計90体となる。サラマンダーは四ヶ月も火を燃やし続けなければならぬため燃料確保の問題で分裂していない。

研究室には精霊の分裂を受け、大人一人押し込めるぐらいの大きさの水瓶と、長方形のプリンターが設置された。研究室には常時水瓶の中のウンディーネとプリンターの中のノームとシルフとレイスが詰めている。サラマンダーがいると蒸し暑くなるのでサラマンダーだけは外にいた。

最近では全員精霊魔法の実用化に向けてルックスを調整中だ。まさかそのへんを探せば転がっているような平凡な面構えと体格で精霊を名乗る訳にもいくまい。

一番手、シルフのコンセプトは『悪戯少女』。……少女、だ。

「まさか転生後二百数十年で今更TSする事になるうとは」

水瓶の水面を鏡代わりに服装を調整しながら溜め息を吐く。普通転生と性転換はセットがお約束だろ？

「外見だけじゃないですか。大丈夫、中身は冴えない男のままですから。どんな姿になってもロバさんはロバさんです」

ロザリー、慰めてるのかけなしてるのかはつきりしろ。

シルフの外見年齢は十一、二歳、容姿のベースは今は亡き俺の妻。それなりに長い付き合いだったから笑っている顔も泣いている顔もよく覚えている。実に可愛らしく愛らしい正に可愛い正義な顔立ちに、好奇心にキラキラ輝く碧眼（精霊は全員碧眼）。ただしセミロングの金髪は緑色に変えておいた。

シルフィアには美化補正がかかっているんじゃないかと言われたがそんな事はない。

そんな事はない。

服装は若草色の薄手のワンピースで腰にベルトがついていて、そ

の上から深緑色のベストを着ている。靴は先が少し尖ったよく妖精がはいているような革靴だ。

ちなみにワンピースの下は覗いてもなんだかよくわからないモヤモヤが邪魔して見えないようになっていた。チラリズム？ お断りだ馬鹿が。

そんな愛くるしい姿でおにーさんボイスは色々致命的である事に気づいて変えようとしたら割と普通に変えられたので、そこも子供らしい無邪気な　ただし多少霞がかって神秘的な　声に変えてある。あとはちよいちよい仕草を子供っぽいものにしていきながら服飾の細かい部分に調整を加えていけばいいだろう。薫と花の冠はアリか？

「なんだかなー、俺が家族を自作自演で再現してる淋しい奴になってる気がしないでもねーなと思うね」

「んなこたーないと思いますますがその声でその口調は勘弁して下さいやほんとに」

ウンディーネで水瓶から伸び上がり縁に頬杖ついて言ったらロザリーに懇願された。

二番手、ウンディーネのコンセプトは『癒しの美人』だ。

容姿のベースは今では亡き俺の娘の大人の姿。当初はシルフィアをベースにしようとしたが、本人が嫌がったし、帝国にシルフィアの容姿を覚えている奴がいなくても限らないので止めておいた。ハマり役だと思っただけどなあ。まー仕方ない。

かつて村中の男を虜にした優しく麗しく儂げな美貌に、イヤミにならないギリギリのレベルの起伏に富んだ身体。腰まで届くロングストレートの髪は凧いだ海を思わせる深い蒼。

反対側が透けて見える極薄の布を何重にも重ねてできたゆったりとした水色の羽衣を身にまとい、胸元には貝殻のペンダントを付けている。

声は微かにエコーがかかった耳にするりと入り込む優しげな美声だ。

完璧。まさにウンディーネ。

シルフィアには美化補正がかかって（ry

シルフとウンディーネは外見上の性別が女なので擬態するにあたってなんとも言えないモヤモヤ感を抱くが、そこまで忌避感はない。微妙に人事な感覚、というか……多分女神像を彫る彫刻家が女性ロボットのデザイナーがこんな感覚を覚えるんじゃないだろうか。実際どうかは知らんけど。

それにまあ、俺の感覚云々は別にしても精霊が全員男だと将来的に精霊魔法が広がった時に男尊女卑が進む気がする。理由もなく全員男つてのも不自然だしさ。

本質的には男のままだしその内シルフとウンディーネにも慣れるだろう。慣れたら慣れたで何か哀しいが。ノームとサラマンダーは男だから半分は男のまま、いや半数は男のまま……じゃない、レイスと駄レイスをカウントすればつてか種族的には男女比が……あれよく分からなくなってきた。まあいいか。

三番手、ノームのコンセプトは『職人氣質の爺さん』だ。

容姿のベースは俺の父。ただし身長は下げた。140cmくらいか。灰褐色の短髪には白髪が混ざり、風雨に削られた巖のよう顔はゴツゴツした印象の他にも不思議な滑らかさを感じさせる。長い口髭と顎髭は髪よりは白っぽい。頭には赤いとんがり帽子が乗っかっている。

背筋はシャキッと伸び、こげ茶の長袖シャツとズボン、革の長靴を装備。なんだか庭小人かドワーフっぽいのが別に構いやしない。シルフだつて妖精似だし、この世界に四元素精霊の元ネタ知ってる奴はいない。

声は重々しい威厳のある低音。もっとも設定上の性格が寡黙だから喋る機会はほとんどないだろうが。

エルマーには思い出補正がかかっているんじゃないかと言われたがそんな事はない。

そんな事はない。

ラストバッター四番手、サラマンダーのコンセプトは『筋肉兄貴』だ。

サラマンダーだけは特にベースがない。猛禽類をイメージした儼ついで青年の顔に、短く刈り込まれた燃えるような（実際燃えてるようなものだ）赤毛。全身ムキムキで、上半身裸だから鍛え上げられた筋肉を見せつけるにはもってこいだ。着ている服は黒いハーフパンツのみ、靴すらはいていない。装飾に乏しい代わりに身体の輪郭が陽炎のようにゆらめくエフェクトをつけておいた。

声は若本さんリスペクト。

そんな感じで精霊達の外見をそれっぽく調整しながら、平行してそれぞれに設定された属性に応じた呪文・魔法を考えているのだが、想定していたよりも精霊が精霊らしい性質を持っている事が分かってきた。

端的に言えば精霊は自分の属性 同調対象と同じ性質の魔法の魔力効率が良い。

以前エマーリオと実験した時、魔法発動時に消費される形質魔力の内八分の一が魔法に、八分の七が純魔力になっている事が判明した。これが例えばサラマンダーの場合、火魔法の形質魔力のおよそ八分の二が魔法になり、八分の六が純魔力になるという結果が出た。当然威力は二倍だ。ウンディーネなら水魔法の形質魔力の八分の二が魔法になり、八分の六が純魔力になる。

ただし例えばノームが「土を動かす魔法」を使っても魔力効率はさほど上がらない。土魔法というよりも念動魔法の側面が強いからだろう。「土を創造する魔法」を使えば魔力効率は八分の二に上昇する。

特定の性質を記録した魔力を持つ精霊はその性質に基づく魔法の魔力効率が良く、特に記録した物質・現象を擬似的に創造した時に効率の上昇が顕著である、といった方が正確だろう。長つたらしいが。

特定の魔法を使い続けていると魔力効率が上がるという法則と、

今回発見した法則から考えるに、多少飛躍するが、魔法は「使用する己の形質魔力を指定（意識する） 指定した形質魔力がイメージによって魔法に適した性質に変わる 発動」という手順を踏んで発動していると考えられる。

火の情報を記録したサラマンダーなら、形質魔力を火魔法の魔力に変換する時に事前記録分の魔力が上乘せ（？）され、発動時に火になる魔力が多くなる、という理屈だ。

ちなみにゾンビの場合はゾンビを創造する魔法の魔力効率が良いし、ヴァンパイアはヴァンパイアを創造する魔法の魔力効率が良いいや成功する訳がないからやっただけだ。実際人間を創造する魔法を使っても、感覚 を研ぎ澄ましよく注視してやっとなら一瞬なにか空間に現れたような気がするけど気のせいだったかも、程度だ。魔法による質量の創造はどうしても時間制限がつく。

そうして精霊の研究をしていたら魔法の法則が判明した訳だが、科学や数学でも別方向の理論を煮詰めていくうちに一つの結論に集約される事がある。魔法もそうなのだろう。あともう一つ発見した事。

同種の精霊は各個体の形質魔力が限りなく近い性質を持っているらしい。100%完全に一致しているかどうかは知らないが、ニアイコールで結べる程度には近いはずだ。なんたって転送魔法が使えない。

通常、転送・空間転移の魔法は自分の形質魔力がある場所から形質魔力がある場所にしか行えない。里に居ながら帝都に爆弾を転送してテロ行為、なんてのは不可能だ。そんな長大な距離になるとてもじゃないが魔力を伸ばせない。

ところが同種の精霊の場合、各個体がバラバラに行動できるにもかかわらずそれぞれがほぼ同質の形質魔力を持っているし、意識も共有している。故にシルフAがシルフBの魔力を意識するという行為が成立する。シルフAが転送対象を魔力で包み、シルフBの魔力を魔法の発動に消費する魔力として意識しながら転送魔法を使えば、

シルフAが包んでいた品はシルフBの魔力がある場所に転送されるのだ(シルフとウンディーネやノームとサラマンダーなど別種の精霊間では不可能)。

簡単に言えば同種の精霊が居る場所ならどこからどこにでも、なんでも瞬間転移できるという事。資源や兵力、品物の輸送にむちゃくちゃ便利です。

世界中に精霊がはびこったあかつきには一日世界旅行ツアーを企画してみるのもいいかも知れない。妄そ……夢が広がるぜ。

法暦十五年、俺は無1、駄352、土33、水34、風288、火3、合計711体となる。いよいよ手がつけられなくなってきた。既に帝国軍を真正面から打ち破れるだろう。

精霊の数が増えてきたので各地に散らばり目撃情報作りに取りかかった。ついでに帝国……というか大陸の簡易地図作成も同時進行

シルフは風通しが良い草原や山。

ウンディーネは澄んだ湖や川。

ノームは森や岩山。

サラマンダーは山火事や長時間燃え続けた焚き火の中。

それぞれ属性に合った場所に出現し、まずは「こういう環境に出没するんだな」というイメージを民衆に植え付ける。魔力覚醒していない人間に精霊の姿は見えないが、シルフが起こした砂埃は見え

るし、ウンディーネが水と同調して水面から伸び上がれば人間の姿をしているのが分かる。認識については問題ない。

当面の間は十年スパンで精霊の存在を常識として人々の意識に刷り込むのを目的に動く。ただうるちよろするだけで何もせず何も語らず話しかけられても無視し、害もなく益もないものだと思わせ、土着の信仰との衝突を回避。神の類ではなくアニミズム的超自然存在だと思わせる事ができればベストだろう。

そうして精霊の存在を浸透させている間に人里離れた辺境に古代文明遺跡（笑）を捏造。精霊の発生源はそこであるという設定を追加、期を見計らって精霊側から精霊魔法 を持ちかける、と。

精霊の拡散ついでに情報収集も行っている。何気ない風を装って人間の周囲をチヨロチヨロするついでにね。ちよつとね。しかも精霊はそれぞれ別個の意思で独立行動してらって設定だから、万一精霊に致命的な情報がバレてもバレた精霊一体を始末すれば事足りると思ってくれる。

精霊ではないレイスの分身、駄レイスはゾンビ達と共に森の北の山々に散らばり鉱脈探しをしている。いい加減鉱物資源が欲しい。木の鋏に石の鎌ってお前、あるあー……ねーよ。草生やす気力も失せるわ。弥生時代じゃねーんだから。

そうして精霊魔法作戦を始めて二ヶ月ほどした頃。事件は立て続けに起こった。

ノームが潜伏中の人気のない森で密会していた帝国高官から、現在マンドラゴラは四つに株分けされ派閥で二つずつ計四カ所で栽培されている事が判明。内、会話内容から推測し三カ所栽培地を絞り込む事に成功。マンドラゴラを殲滅するなら一株も残さず一気に灰にしたかったため三カ所の栽培地をマークするだけマークしておく保留。

ところがその日の内に王都別邸において病床に臥していたエカテリーナが死去。その報は瞬く間に広がり、帝国の政治の勢力図を書き換えた。

帝国は真つ二つに割れ、いつ内乱になってもおかしくない一触即発状態に移行する。

同日、王都に潜伏していたリッチ、ガロンがあからさまに怪しいフードの集団がコソコソと木箱を運搬しているのを発見。不審に思いついていった所、魔力を周囲に広げて警戒している人間

魔法使いに木箱を渡している現場を目撃。その時のやりとりから箱の中身がマンドラゴラだと判明した。勢力図が変わった関係で今までの栽培場所が使えなくなり、急遽移動する事になったようだった。

この機会を逃せば四つ目のマンドラゴラはまた行方不明になる。ガロンはテレパシーで俺に許可を求め、俺はそれを了承。

他三箇所の栽培場所を張っていたシルフと同時にマンドラゴラを焼き尽く

そうとした瞬間にガロンが帝国魔法使いに捕まってしまった。あれよあれよという間に連行され、自爆もできずその体の特異性の一部を知られてしまう始末。

現在ガロンは拘束され拷問にかけられている。なにかかもが急展開すぎて正直状況についていけない。どうしてこうなった。

どうしたこうなった！



十九話 ぼくがかんがえたかつこいいせいれい（後書き）

プロットでは十六話から次話までで一話だったはずが実際書いてみるとこの始末。後半へー続くー

研究はしばらく止まります。ここから魔法カードが出るまでずっとストーリーのターン

## 二十話 マッチポンプ

情報が錯綜していた事は認めよう。マンドラゴラが発見されめぐるしく状況が変化し始めた所に、追撃のエカテリーナの病死をきっかけに起きた一連の流言、噂話、ちよつとした小競り合いに殴り合いから死を悼む人々の嘆きの声で精霊の情報網はてんやわんやだった。いくら俺が何百体もいるといってもそれを上回る情報量をぶち込まれたら機能不全に陥る。

だからガロンがマンドラゴラを発見したという情報をたれ込んできた時、迂闊にも即座に殲滅命令を出してしまった。

本来、急ぐ必要はなかったのだ。

俺の数は五年後には二十万を超える。魔術は五年で習得できるものではない。魔術無しで増やせる魔法使いの数は精霊の増殖速度と比べればたかが知れている。

いくらマンドラゴラ殲滅のチャンスでも、突発的事態であり調査も計画も不十分である以上はひとまず万全を期して見逃し、手間になろうがなんだろうが時間をかけて準備を整えてから再度マンドラゴラを探索・発見し根絶やしにするべきだった。

それを怠ったばかりにガロンは捕まった。

成り行きはこうだ。

まずガロンは遮蔽物を利用しながらマンドラゴラの受け渡しをしている魔法使いの魔力展開範囲ギリギリまで接近した。魔力を伸ばしてマンドラゴラを直接攻撃しようとするのと攻撃前に魔法使いにバシるので、魔力展開範囲外から氷槍魔法を撃ち込み邪魔な魔法使いを奇襲、殺害。そこまでは良かった。

パニックを起こした運搬役を放置し、続いてマンドラゴラを消そうとした所でガロンは背後から頭をぶん殴られ同時に魔力を突っ込まれた。簡単な話、マンドラゴラを尾行していたガロンをさらに魔法使いが尾行していたのだ。魔法使いなら魔法使いを無力化できる。

他人の形質魔力を混ぜられたガロンは魔法が使えなくなり、自爆もできなかった。

簀巻き、猿轡、目隠し、麻袋にIN、と手際よく無力化されたガロンはどこかに運ばれていく。

ガロンから不覚をとりました、とテレパシーを受けた俺は一番近くにあったシルフで現場に向かったが、到着した時には既に跡形もなく。念入りに拘束されたガロンはどこに運ばれたのか自分では分からず当然俺にも伝えられない。

ガロンを探しながら俺は考えた。今回の誘拐(?)はやり口がやたらとなめらかだ。あらかじめ計画を練っていないとここまでスムーズにはいかない。里の存在もその勢力の存在もバレていないはずだ。精霊の存在は旧王都でも帝都でも噂になりはじめているが、それがリツチの存在と結び付けられるというのは考えにくい。第一リツチは穩便に情報収集をするばかりで 帝国民を数人リツチにした事を除けば 帝国へ危害は加えていない。となるとあれだ。派閥の対立に巻き込まれたんだ。敵対派閥を引っ掛けるためのトラップにリツチがかかった。

派閥が完全に真つ二つに割れた今、派閥は互いに戦力を削ごうとしている。敵対勢力の魔法使い増産を妨害するためにも敵側にあるマンドラゴラは処分するか奪うかしてしまいたい所だろう。そこでわざと怪しんで下さいと言わんばかりの格好でマンドラゴラを運搬して……いや、中身が本当にマンドラゴラだったかどうかも疑わしいな。とにかく餌をちらつかせて敵を誘き寄せるとつつかまえようとしたんだな、多分。そこにうつかりリツチがかかったと、そういう事だ。そうでもなければあれほどスムーズに対魔法使い用の拘束をできた説明がつかない。帝国は魔法を持っているのはお互いの派閥に所属する魔法使いだけだと思っているのだから。

どこかに運ばれているガロンに俺はとりあえず死んだフリの命令を出した。体温が無く心臓が停止していて瞳孔開きっぱなし、息だつてしていない。動かなければ死んでいるようにしか見えないだろ

う。麻袋から出された時に死んでいても、猿轡を噛まされる直前に服毒したとでも頭殴られた時の打ち所が悪かったとでも好きなように解釈するはずだ。

が、すぐに問題に気づいた。

本当に死体なら魔法が使えるほどの高密度の魔力は持っていないはずだ。しかしリッチは持っている。それが生きている、または仮死状態になっている証拠になってしまう。

魔法を使って魔力を消費する事はできないし、混ぜたしまった魔力は操れない（ ）から魔力操作で体外に出す事もできない。

奇妙な死体は念入りに調べられるだろう。時間をかけて調べていればその内腐らない事にも気づく。

リッチは寿命がないし体が拘束されていれば魔法なしには自殺できないから、このままでは延々と情報を搾り取られる事になる。

さあこまっただどうしよう。死体のフリをするか。リッチとして存在を明かしながらも偽情報をばら撒いて何かしらの收拾をつけさせるか。とりあえず死体のフリをしておいて、方針が決まり動いたり喋ったりする必要が出たら死体のフリを止めるのが一番汎用性が高そうだが、カバーストーリー次第では「なんで死体のフリをしていたんだ？ 最初から喋れば良かったのに」という疑惑がついて回る訳で……重要な話だから喋るべきか迷ってたとかなんとか適当な理由をつけて誤魔化すこともできそうだが、そもそも魔法使いは紫髪黒目の帝国民しかいない事になっているのに金髪碧眼のガロンが魔法を使ったというのがすんげえ怪しく、王国の魔法使いの生き残りという主張も使えないでもないが、王国の魔法使いは一人残らず教会の言う神への信仰に殉じて死に絶えたはずで。なんだかんだと一連の不審な状況は覆せない。ある意味リッチは魔法では不可能なはずの不老不死になつてるしさ。

マンドラゴラ発見とエカテリーナ死亡によつて起こった騒動の情報収集を一端ストップし、数百体の俺の思考を全てガロン誘拐事件のりカバリーに向ける。常人の千倍以上の思考速度で俺が思いつく

限りの予測予想推測分析を行った結果、ガロンにはひとまず意識を  
持っている事をアピールしつつ無言を貫かせておく事がベストだと  
いう結論に至り、そう命じる。

俺の独断で対応を決定できる状況ではなくなったと判断し、シル  
フィアと相談を始めた時にはガロンはどこかの地下室っぽい窓の無  
い部屋に連れ込まれてすぐに尋問と拷問を開始された。速攻で既に  
心臓が止まっている事も体温がない事もバレ、拷問の手始めに爪を  
剥がされた時に血が出ない事もバレた。これはどういう事だ、貴様  
は何者だと問い詰められるもガロンは頑なに　拷問によって生  
者と同じレベルの苦痛を感じているフリをしつつ（ 2 ）　沈  
黙を守っている。

とまあ現在そんな状況。どうしたもんか。

「皆殺しますか」

緊急にシルフィアの執務室に里の首脳陣が召集された。メンバー  
はシルフィア、エルマー、ラキ、ロザリー、俺<sup>レイス</sup>。両肘を机に突き、  
組んだ手に顎を乗せたシルフィアが開口一番物騒な事をさらっと言

う。

「なんでいきなり最終手段に飛ぶんだよ。落ち着け」

そりゃー皆殺しにすれば情報の漏洩もへったくれもないが、お前には情つてもんがないのか。何度も言っているが殺さずになんとかできればそっちの方がいいに決まっている。楽だからといって安易にリーサルウエポン発動はよろしくない。

俺の言葉を受け、シルフィアは不満そうに言った。

「帝国だつて戦力を得るために魔法が欲しいという、大儀のない身勝手な理由で王国を滅ぼしたでしょう？ ならば同じように戦力を奪うために魔法を潰したいという身勝手な理由で滅ぼされる事も覚悟していなければなりません。自分たちが戦争を仕掛けるのはいいけど戦争を仕掛けられるのは駄目だなんて虫が良すぎるでしょう。宣戦布告後、即座に殲滅。それでいいじゃないですか」

それはもつともだ。もつともではあるんだけどな。

「それでも皆殺しはやり過ぎだろ。それに帝国と同じ事したら帝国と同じレベルに堕ちる事になるぜ」

「……まあ……そうですね、里の戦力のほぼ全ては大御祖父様のものですし、大御祖父様にはお世話になりつつ放しですし。断固として虐殺反対と仰るなら大御祖父様の意思を尊重しますが」

渋々、といった様子でシルフィアは控えめな賛成を示した。

「ロバートさんは善人だなあ」

「シルさんが容赦無さ過ぎなだけの気もしますけどねー」

「あ、シルフィアさん、紅茶淹れますね」

エルマーとロザリーとラキはのほほんと日和見発言をする。これ実質シルフィアと俺の討議になってないか？ 別にいいけどさあ。

「さてリッチの存在に上手いこと説明をつけながらこれ以上情報が漏れないように奪還するなり始末するなりして、マンドラゴラを一株残らず抹消して、精霊魔法を広める、と。これだけやらにゃならん訳だが、」

「別に同時に」

「やる必要はないな、うん。一つずつ片付けていけばいい。分かってる。で、叩き台の方針としてはまず潜伏中のリッチを」  
「分かっているじゃないですか。別に同時に『やってもいい』のでしょうか?」

「一箇所に集めて……あ? ああ、まあな。なんだなんか良い案でもあるのか」

「あります。折角ですし世界を巻き込んだマッチポンプといきましょう」

なんだそれ。

「詳しく」

「精霊以外のノーライフを邪悪な存在と設定し、ゾンビやリッチやスケルトンに人間を襲わせませす。精霊はノーライフから人間を守る善良な存在として人間に手を貸し、ノーライフを撃退します。ガロンがマンドラゴラを狙ったのは人間から魔法を奪うためとでもしておけばいいでしょう。そして精霊は邪悪な存在を討つためという名目でガロンを始末し、その後、念話で居合わせた人間に事情を説明。ゾンビ達に対抗するためには精霊魔法が有効という事にしてあげば人間は嫌が応にも精霊魔法を使わざるを得ません。強制的に精霊魔法を広められます。マンドラゴラは折を見て堂々とゾンビ達に襲撃させて消せばいいでしょう」

シルフィアは一気に言い切った。俺もロザリーもラキも三回連続シルフィアを見つめる。エルマーは話についてきていない。

「……それ今考えたのか?」

「そうですね?」

「お前天才か。そしてエグイ」

俺ができる発想は「ロバートの発想」に限られる。計算力や思考速度は上がってもそれを運用しているのが一つの意思である以上、発想力は何億体に分裂しても一人分だ。だから俺はシルフィアが今言ったような発想が湧かなかった。真に頭の良さを決定する要素は計算力や記憶力ではなく発想力や注意力だと俺は思っている。

シルフィアはラキから紅茶のカップを受け取り唇を湿らせた。それがまた絵画になって城に飾られていてもおかしくない様になっている。まるで穢れなき聖女のような。

「エグくて結構。どいつもこいつも私達の掌の上で踊るがいいのですよ。馬鹿共には丁度いい目くらましです」

言ってる事は最低だが。

「……………確かに俺が考えていた案よりはそっちの方が安全性も長い目で見た時の死者も少なくて済みそうだ。シルフィアの案でいくか。よし設定補強完了、確認してくれ」  
俺全員の思考を総動員して一気にシルフィアの原案の修正と補強を完了させる。数百体も俺がいると色々時間の短縮ができて実にイイ。

「まず人間を滅ぼそうとしている魔王をどこか人里離れた場所に魔王城を建てて設置する。これは俺がロールプレイする。魔王の手足として動くノーライフ……………ゾンビ、リッチ、スケルトン、デユラハン、ゲール、駄レイス、これを対外的に以降アンデッドと呼ぶ事にする。ゾンビとリッチは人間社会に溶け込んで不和と腐敗を撒き散らす。その他のアンデッドは人間を襲って殺す。

殺す人間はなるべく悪人にする……………アンデッドは邪悪な心を持った奴に惹かれるとかなんとかそんな理由をつけとくか。殺した奴は全員復活させてアンデッドに加える。一地域には常に一定数アンデッドが存在するようにして、余剰分は魔王城に移動しておく。魔王城にある程度アンデッドが溜まったら人間に侵攻をかける。

それに対して正義の味方、精霊が魔王の野望を阻止するために人間に手を貸す。精霊は見ただけでゾンビとリッチを判別できる。他にも呪文に応じて色々魔法を使ってくれる。

人間を滅ぼそうと侵攻をかけてくる魔王軍を人間が精霊の力を借りて撃退する構図だな。

王国と帝国の戦争で大量に出た死者の怨念が千年ぶりに魔王を呼び覚まして、精霊は復活した魔王の存在を感知して眠りから目覚め

たつて事にでもしとけばいいだろ。

精霊がもたらす利益とアンデッドがもたらす不利益は差し引きで利益の方が大きくなるように調節する。せめてもの情けだ。

以上。異議は」

「ありません」

「なーし」

「シルフィアさんが良いなら私も構いません」

「『対外的にはアンデッドと呼ぶ事にする』あたりから分からなくなつた」

「めんどくせええ。おいシルフィア、噛み砕いて説明してやれ」

「言われずとも。さあエルマー、私が手とり足取り他にも色々つて教えましょう。大御祖父様、寝室にいますので何かありましたら一報下さい。ただしノックを忘れずに」

議題が片付くやいなや全員そろそろと執務室を出て行つた。一人取り残される俺。

これは即断即決の美德なのか投げやりなだけなのか判断に悩む。しかし会議の内容については俺が数百人体制で検証練り直しをしてるから、一々口に出してぺちやくちゃ議論に勤しむよりは俺が一人で考えた方が早く済むのは確かだろう。加えて今は比較的緊急事態だから方針が決まった以上俺一人の独断で動いた方がスムーズに進む。連中がそこまで考えていたかは知らんけどな。特にシルフィアはエルマーといちゃつきたいだけの気がする。

それはともかく。

ベッタベタな設定を考えてみた。うむ。精霊と魔王が同一人物で自作自演にもほどがある事を抜かせばいかにもなファンタジーとしか言いようが無い。あと必要なのは勇者か？ いや別に用意しなくていいか。

アンデッドに人間を襲わせ、精霊に助けさせる。アンデッドで苦しめ、精霊で癒す。アンデッドに都合の悪いモノを始末させつつ、精霊で信用を得る。おお悪どい悪どい。

でもなんかニヤニヤしてしまうのはなぜだろう。俺もいよいよ感性が人間離れしてきたな……自覚できてるだけマシと思うべきか。さあてサラマンダーより速いシルフでガロンのとこに急行して世界を巻き込むロールプレイングの開始といきますかね。

現場が一番近かったシルフでガロンが誘拐された現場に行き、袋に詰められてから出されたまでの時間でおおまかに範囲を割り出し堂々と探索を開始した。付近にいたシルフも現場周辺に移動して順次探索に加わっていく。シルフ以外の精霊は移動速度がノロすぎて探索に向かない。

本来草原に出没するシルフだが、これまでも街中にも出ない訳ではなかったし、例え魔法使いに見つかっても「アンデッドの邪悪な魔力を感じて……」とかなんとかしたり顔で説明すればなんとでもなる。ご都合設定万歳だ。

やがて三時間ほど探し回った結果、さる名家の屋敷の庭の蔵の床下に地下室を発見した。俺は何かシルフに導かれた風を装ってふらふらと一体で地下室に侵入した。ランタンの灯りがぶら下がった天井から

によつきり顔を出す。ほの暗い石室には細かいトゲがびつしり生えたベッドやら血痕が付着したペンチやら小さな炉に突っ込まれ加熱中の焼きゴテやら拷問器具がズラリと並び、壁を見れば一部は赤黒く染まっていた。そういう用途で使われる部屋らしい。くわばらくわばら。

逆さまに部屋の中の人間を確認する。イスに鎖で縛り付けられ雁字搦めに拘束されているガロンと、その背後でガロンの頭を鷲掴みにしてゆっくりと自分の魔力を送り込んでいる、黒いローブを着た瘦せぎすの魔法使い。正面には細長い金属の針を指で弄びガロンの眼球すれすれの所でぶらぶらさせている筋骨隆々の男、拷問官。あとは入り口の見張りが一人。

コンタクトはフレンドリーに、フレンドリーに。

俺は自分に言い聞かせながらふわりと全身を地下室に出し、床から十センチぐらいのところまで滞空した。

ガロンの背後にいる魔法使いにニカツと笑いかけると魔法使い絶叫して危うくガロンの頭を握りつぶしかけた。

「xxxxxxxx! xxx!」

何いつてるのか分からん。分からんが魔法使いの突然の叫び声に地下室にいた全員が俺の居る場所を見た。こっち見ん……もつと見る。

困惑と驚愕、警戒が入り混じった視線をたつぷり二秒ほど浴びたところでガロンに打ち合わせ通り怨嗟の声を上げさせる。

「xxxxxxxx! xxxxxxxxxxxシルフxxxx! 魔王様xxxxx! x

xxx!」

帝国語は勉強中ではつきりとは分からんが、「てめーシルフこの野郎お前も復活しやがったか魔王様の邪魔はさせんぞ糞が!」という意味の事を叫んでいる。罵倒の皮を被った設定説明ご苦労。

精霊は古代語しか喋れないし、精霊の念話は言語ではなくイメージのみしか伝えられないという設定だからある程度はアンデッドに言わせた方が楽だ。固有名詞とか。

今まで大人しく沈黙を保っていたガロンが俺を見た途端に罵声を吐いて暴れ始めたので拷問官たちは度肝を抜かれたようだった。ギリギリと齒軋りし、噛み付くような目で俺を睨みながらがったんがったんイスを揺らして暴れるガロンから拷問官達は数歩距離をとった。筋骨隆々の拷問官に魔法使いがなにやらこそつと耳打ちし、拷問官は目を見開く。出入り口の前に陣取る見張りはドアノブに手をかけていつでも脱出できる体勢をとっていた。

「xxx、シルフxxx。xxx?」

魔法使いがちらちらガロンを見ながら俺に丁寧な物腰で声をかけてくる。どうも悪印象は抱かれていないっぽい。シルフの噂を聞いていたのか、今のガロンの台詞から味方らしいと判断したのか。どちらでもいい。

《このアンデッドを浄化しなければ魔王の力を強める事になります。早急に始末を》

ガロンを指差し日本語で言う「魔法使いは呆気にとられた。多分グロンギ語を聞いたアメリカ人のような感覚に陥っている事だろう。わけのわからん言語に聞こえているはずだ。」

「……あー、xxx?」

何か聞き返してきた。

《私達はあなた方の言葉が分かりません。が、このアンデッドを片付ける前に事情は伝えておいた方が良いでしょうね》

肩をすくめ、魔力を魔法使いの頭に伸ばす。魔法使いはびくつきとして魔力を押し返そうとしたが、残念ながら年季も固定力も桁が違う。俺の魔力は水に濡れたティッシュを破るようにあっさり魔法使いの魔力を貫通し、怯える魔法使いの頭を覆った。そのまま念話魔法を発動。

伝えるのは言葉ではなくモノクロの映像と淡い感情のイメージだ。

昔昔、はるか古代の懐かしき偉大な文明。高い建物が林立し、奇

妙な服装をした黒髪の人々が闊歩している　　ぶつちやけ日本の  
首都東京のイメージをちよいちよい弄つただけだ　　、そんな高  
度な文明の魔法使い達によって精霊わたしたちは創り出された。

鉄の箱に乗った人々が凄惨な速さで綺麗に舗装された道を行き交い、  
巨大な翼が動かない鳥のような物に乗って空を行く。煌びやかな衣  
装を着て展望レストランで贅沢な食事を取る人、一瞬で世界の裏側  
の情報をお届けする四角い箱。今の世界の人々には想像もつかず理解す  
るだけでも苦勞するほどの高度な文明がそこにはあった。

映像は紅く染まり、暗転する。

死屍累々、生ける者の声が絶えた町。焼ける家、起き上がる死者  
達。海は紅く染まり、どんよりと曇った空からは黒い雨が降る。そ  
してそれを統べる、良しとする邪悪な魔王（黒っぽいモヤモヤで包  
まれ姿はよくわからない）。骸骨と腐乱した死体、霞のようなモノ  
で構成された地平線が真っ黒になるほどの数の軍勢が町々を襲う。  
逃げ惑う人間達。そこへ駆けつけた精霊を傍に侍らせた精霊使い達  
が何事かを叫び、次々と強力な魔法を放ってアンデッドの軍勢を討  
ち砕いていく。しかしやがて多勢に無勢で精霊使い達は押されてい  
き、一際高い赤い塔まで追い詰められる。

眼下でおぞましいうめき声を上げながらうじゃうじゃと塔を包囲  
するアンデッド達。精霊使い達は決然とした顔で互いに顔を見合わ  
せ、円陣を組み朗々とした声で長い詠唱を唱える。

長い長い詠唱が続く。精霊達はくるくる回り、溶け合い、一つに  
なつて巨大な光の球体になる。

詠唱が終わった瞬間、球体から眩い光の波紋が広がった。

波紋に飲み込まれたアンデッド達はばたばたと倒れ、軍勢の後方  
で指揮をとっていた魔王も悲鳴を上げてのた打ち回る。力を使い果  
たし、宙に溶けて消え去る精霊達。精霊使い達もばったりと地面に  
倒れ臥しぴくりとも動かない。死者も生者も、誰一人として動く者  
はなかった。

そして誰もいなくなつた。

月日は流れ、廃墟は風雨に晒され風化し土の下に消える。やがて草木が生え、動物が戻った。

再び生命に満ちた大地。消えた精霊達も少しずつ力を取り戻していく。しかし精霊は知っている。自分達が力を取り戻しているという事は、魔王も復活しつつあるという事だ。

今度こそ魔王の息の根を止めなければならぬ。そのためには人間の助けが居る。人間が呪文を唱えてくれないと精霊は魔法を使えないのだ。

そして古代文明の面影を完全に飲み込んだ緑溢れる大地に、紫の髪の間人達がやってくる……

イメージを伝え終わると、魔法使いは沈黙した。目を閉じ眉根を寄せて額に手を当て、記憶を整理しているようだった。拷問官と見張りは動かなくなった魔法使いを固唾を呑んで見守っている。

精霊の主張を要約すると「古代文明が魔王に滅ぼされました。その時精霊も相討ちになりました。現在、魔王が復活しました。精霊も復活して魔王を食い止めようとしています。ほっとけば世界は滅亡する！」ってえこった。

あれだけの文明を滅ぼした（という設定の）魔王の軍勢に精霊の助けなしで立ち向かおうとはしないと俺は信じている。でも帝国人の感性はちよつと独特だから分からん。せつかく手に入れた魔法の運用法についてもごちゃごちゃ言ってるし、精霊魔法についてもなんだかんだと意見が割れそうだ。まー近いうちに軽くアンデッドで侵攻かけて四の五の言えなくする予定なんだけどな！使わぬなら使わせてみせよう 精霊魔法。

魔法使いは顔を上げ、まだぎゃーぎゃー言っているガロンを見て、俺を見た。年端もいかない少女の姿をしている俺だが、外見通りの存在ではないことはもう理解しているだろう。

「×××××……×××、×××。×××、×××、魔王××××。×

××シルフ。××××」

魔法使いが手をさつと振って何事か言うと、筋肉と見張りが部屋の隅に移動した。魔法使いは俺にゆっくり歩み寄る。

「×××」

ぎこちなく手を差し出してきた。握手は前世日本でも王国でも帝国でも共通の友好の印だ。俺は内心でかかったな馬鹿めが！と快哉を叫びながら表面上は人好きのする笑顔を浮かべて答えた。

《契約を交わしましょう》

俺の差し出した手と魔法使いの手が触れ合った。俺はそれっぽい雰囲気を出すために固定した魔力を魔法使いの体内に侵入させて引っ掻き回す。魔法使いは違和感に顔を顰めたが何も言わなかった。ひとしきり魔法使いの体内を蹂躪してから再度イメージを送る。契約、完了。呪文唱えれば精霊魔法が使えるようになったよ！

早速アンデッドで実験してみようか！ スペルは『我が敵を切り裂け風の刃、ウインドカッター』！ 標的に手を翳して唱えてね！言葉にすればそんな文章になる。イメージを受け取った魔法使いは若干胡散臭そうに俺を見て、物は試しだ、という風情でガロンに手を翳した。

ガロンがまだ叫んでいる。くっ、俺を殺しても第二第三のアンデッドが貴様を……という内容の事を叫んでいるはずだ。

実際の所、ガロンはこれからされる事に納得している。どうしてもと言うなら何のかんの理由をつけて逃がしてやれるがどうする？とテレパスで聞いたら別に構わないと返ってきたので人思いに斬って捨てる事にしたのだ。生き飽きたのか、俺に忠義を感じてくれているのか、大局的に見て自分の犠牲が必要だと思ったのか、それは分からないし、尋ねなかった。

今までご苦労だった。ありがとう。ゆっくり休むといい。痛みは一瞬だ、スッパリいつてやる。

「我が敵ヲ切り裂ケ風ノ刃、ウインドカッター！」

俺は呪文に応え、威力を上げるために床の埃を少し巻き上げて空

気に混ぜ、刃を作ってガロンの首に振り下ろした。

この日、世界を巻き込んだ壮大なマッチポンプが始まった。

## 二十話 マッチポンプ（後書き）

精霊魔法、はじめました

純魔力授受の場合は魔力が混ざっているわけではない。自身の形質魔力をいかなれば道具のように使って純魔力を捕獲、自分の魔力で作った袋に閉じ込めて体にしまっているだけ。

2

リッチやヴァンパイアは五感が鈍い。この時はノーライフの情報はどんな些細なものでも隠せるだけ隠しておくべきだと判断し、ロバートはガロンにこのような演技をさせている

## 二十一話 這い寄る精霊

精霊魔法（笑）システムの始動に伴い、俺は辻褃あわせに奔走する事になった。

まずアンデッドが人類の敵であるという設定上、スケルトンやゾンビが里を闊歩しているのは非常にまずい。里そのものまで人類の敵認定されかねない。

したがって、これまでは里長がアンデッドシルフィアを制御していたが、魔王が力を取り戻してきて制御が難しくなっただため手放した、という事にしておいた。

死後里を守るためにスケルトンになるのは既に里の慣習と言っても過言ではなくなっていたが、そこは魔王が復活したから今までおとなしかったスケルトンも邪悪な魔力にアテられてなんちゃら、という説明で誤魔化しておく。ゾンビも同様だ。里のスケルトンとゾンビはアニマルも含めて全員里を離れ魔王の元に集合する事になる。ただしラキ、シルフィア、エルマーはヴァンパイアでありアンデッドに含まれていないので除外。この世界には吸血行為への忌避感がほぼないため、別段吸血するからといって悪と見なされる事はない。精々が不便な体質だな、と思われる程度だろう。そりゃあ忌避感のあるなしに関係なく誰だっ自分の血を吸われるのは嫌だろうが、闇夜の晩に暗がりから襲い掛かって血をすする訳でなし。任意で吸わせてもらっているのだし相応の見返りも用意している（里ではヴァンパイアに献血した人間は三日間労働を免除　ゾンビが肩代わりする　される）。問題はないだろう。

ヴァンパイアが体質的にアンデッドに近い事についての疑問を投げかけられたら沈黙をもつて答える予定だ。世の中、弁解するよりも黙っていた方が良い時もある。意味深に沈黙を貫いてればあとは勝手に想像してくれる。

しかしそれだけでは足りない。沈黙した結果、想像が悪い方向に

いつてしまう事もある。里と魔王が結託している、とか。魔王に魂を売って不死の術を手に入れたのだ、とか。邪推すればいくらでも。そこで補強策としてアンデッドの代わりに里に精霊を大量配備した。善・正義の象徴である精霊がワラワラいればそれだけでヴァンパイアが善の側の存在である証拠になる。

更に念のため王国時代の生きた記憶が完全に人々から消え去るまで四十年ほどの間、里の存在は隠しておく。東の森への道を消したり、それとなく情報操作したり、東の森に目を向ける余裕を無くさせたり。

精霊魔法が完全に世の中に浸透した後ならば、まさか精霊が集まる里に攻め込もうなどとは思わないだろう。

一方で里から引き抜いたアンデッドは北西の山脈の奥地、魔王城建設予定地に移動させた。

俺達の住むこの大陸の北側の海に面している陸地には急峻な山脈が連なっている。その山脈は海からの湿った風の影響で雪深く、またそれなりに高緯度にある標高の高い山なので年中寒い。人間が住むには厳しく、人の手が全くと言っていいほど入っておらず、アンデッドが集まるには格好の場所だった。

建設予定地を山脈の中でも北西地域にしたのはできるだけ里から遠ざけるためだ。これから幾度となく魔王城からの魔王軍の侵攻、もしくは人間側からの魔王討伐部隊の派遣が予測されるわけで、その度に里の近くを移動されたら流石に里の存在を隠すのは厳しくなる。里としては対岸の火事を眺めるスタンスでいきたい。

その北西山脈の奥地に建てる魔王城だが、精霊魔法始動の直後から急いでほとんどの全員の駄レイスを建設予定地に移動させ、急ピッチに建設を開始した。

魔法が発動するギリギリの密度まで魔力を薄め、文字通り山の中に入り、岩盤くりぬいてを転送魔法で外に送る。くりぬいた岩盤は積み上げて城の材料にし、くりぬかれてできた山の中の空洞は出入り口をつくり蟻の巣のようなダンジョン風味にしておく。城の建築

ノウハウはエマーリオの遺した建築方式の一部の流用と帝国に建設中の城、及び旧王国の王城を参考にする事でなんとかした。設計には五日ほどしかかけていないが、例によっておよそ千人分の思考回路を使ったので実質五千日……十四年近くかけたに等しい。ノーライフは眠らないから睡眠が必要な人間の十四年よりも密度は高いだろう。欠陥設計にはなっていないはずだ。

魔法はこういう時にとつもない利便性を発揮するもので、資材をえっちらおっちら運ぶ時間を転送魔法で短縮できたし、資材を加工する時間も転送魔法で短縮できた（）。途中から加わった実体あるアンデッド達の不眠不休労働もあいまって工期五日という頭がおかしい早さで魔王城は完成した（2）。チートってレベルじゃねーぞ。

完成した城の大きさは大体安土城ぐらいだろうか。基本的に西洋城の様式をとつていて、城壁から尖塔まで不自然なまでに壁面が滑らかに加工されている。魔法で加工したのだから当然だ。その不自然さが魔王城を見た者に不気味さと異質な気配を感じさせるだろう。使われている石材に統一性はなく、一面白い部分もあれば赤黒まだらになっている部分もあった。

城は奥深い山の中の切り立った崖を背にして建っており、周囲はちよつとした広場になっていて（そうなるように整地した）見晴らしがいい。夏でも薄く雪が積もる広場には追々墓や石碑を追加していく予定だ。

そんな魔王城の中に外に、アンデッドがうるついている。

主にゾンビを城内、スケルトン、デュラハン、グールを広場、駄レイスから改名したウィスプを空、という分担で配置した。なんだかんだで人間の感性を持つゾンビはやはり野ざらしよりは屋根の下の方が良いのだ。スケルトン、デュラハン、グールは意思が希薄だから風雨に晒しておいても問題はない。

リッチについては帝国で色々引つ掻き回してもらっている。精霊がそれとなく調査しマークした悪人を襲いゾンビやリッチを増や

したり（クリエイト・ゾンビの工程は魔王城に移動しなかったウィスプが行っている）、荷馬車を襲撃してチクチク嫌がらせをしたり、帝国の城に侵入したり（今度は警戒していたので発見された直後に自爆できた）、墓場に集まって怪しげな儀式をする所を目撃させ不安を煽ったり。

アンデッドの活動が急に活発になった原因については、今までは精霊に気づかれないように大人しくしていたが気づかれたので表に出始めた、という事にしてある。

アンデッド対精霊（人間）の構図にこれヤラセじゃね？ とか自作自演だろ！ などという不埒で正しい疑問を抱く者はいなかった。アンデッドと精霊が突然沸いて出たのならそんな事を考える者もでたかもしれないが、アンデッドの出没は突発的なものではなく、予兆があった。精霊の出現とアンデッドの出現の時期はズレている。

年老いる事のない旅人の噂（リッチ偵察部隊）がそうだったし、ガロンが誘拐に失敗した時に出た人食い鬼の噂もそうだ。両方アンデッドが今回の事件の相当前から帝国に潜んでいた証拠になる。そしてやがて精霊が姿を現しはじめ、それに危機感を抱いたアンデッドが人間に牙を剥いた。ストーリーにおかしな所は何もない。

加え、実際にアンデッドの仕業な事件以外にも不審な点のある犯罪、怪しげな噂の多くがアンデッドの所為という事にされていた。それによつてますますアンデッド＝悪の公式が人々に刻まれたようだったのであえて訂正はしない。大いにアンデッドのせいにするといい。アンデッドの悪名は上げれば上がるほどいいのだ。

そんなアンデッド達に対抗するため、帝国は事態を重く受け止め急遽精霊使いを増やしにかかった。精霊は人々に紛れたアンデッドを見ただけで見破れるし、戦力増強にもなる。勿論従来の魔法使いも増やしたいところだがそこはマンドラゴラの数に限りがあるので上手くいっていない。

精霊使いによる潜伏中のアンデッドの討伐はそれなりの成果を挙げた。というか挙げるように調節した。全く成果が挙がらないので



精霊魔法システムの稼働から十ヶ月ほど経ち、年が変わって法暦16年になった。

精霊は土264、水272、風2280、火20、とそろそろ数えるのも面倒な数になってきている。駄レイスIIウイスプに至っては2816体だ。多分ウイスプだけで帝国を滅ぼせる。やらないけどな。もう一、二年前から帝国滅ぼせる状態になってるし今更過ぎる。

帝国の精霊使いの数は百五十人となり、魔法使い百七十人。当初の設定を変更して精霊魔法と従来の魔法を併用できるという事にしてあるので精霊使いと魔法使いは五人被っていて、正確には精霊使い百四十五人、魔法使い百六十五人、ハイブリッド五人だ。

ちなみに俺達がいる大陸に存在する国は、帝国を除けば国とは名ばかりの小国家がいくつかあるのみで、その小国家群もほとんど帝国の属国と化している。もちろんその国々に魔法使いはいない。が、精霊使いは数人いる。帝国にだけアンデッドの脅威を警告するのは不自然であるため小国家も精霊使いを保持するようにしたのだ。しかし彼らについては数も少ないし基本的に帝国の意向に従う形で動くので考えなくていい。

そんな帝国に対し、魔王軍はゾンビ70、リッチ15、スケルトン40、アニマルゾンビ200、アニマルスケルトン60、グール5、デュラハン10、ウイスプ300、というラインナップになっている。流石にウイスプを2816体導入したら帝国が確実に負けるので戦いに参加するのは300体しておく。もっとも帝国側の

損害に依じて増減させるから、帝国が奮戦すれば400体になる可能性もある。まあ要するに帝国がどれほど奮闘し八面六臂の大活躍をしても引き分けかそれに順ずる結果で終わるのは確定しているのだ。悲しいけどこれマツチポンプなのよね。帝国エ……

本来リツチは三十体ほどに増えていたのだが、法暦十五年の暮れにマンドラゴラを根絶やしにした戦いで死んだため十五体になっている。

帝国はマンドラゴラ警備によりにもよって精霊使いを配置したのだ。いや仕方ない事ではあるんだけどさ。普通の魔法使いにゾンビリツチを見分ける事はできないから、見分けられる精霊使い（正確には精霊が見分けているのだが）を見張りに立たせるのは当然とも言える。しかし誠に遺憾ながら精霊とアンデッドはグルな訳で……マンドラゴラの情報がアンデッド側に筒抜けになった。

精霊使いがマンドラゴラ警備に配備された直後に襲撃すると怪しまれるので、アンデッドがなりを潜めてしばらく時間を空け、緊張が緩んだところを狙ってリツチで徒党を組んで各地の栽培地を襲撃した。激しい抵抗にあったがなんとか押し切り、マンドラゴラの殲滅に成功する。更に内部からの手引き（精霊からの情報横流し）の甲斐あってアンデッド側の犠牲が予定より少なく済んだどころか密かにマンドラゴラを一株奪取することにすら成功した。

……里に持ち込んだら三日で枯れたが。栽培法は帝国がしていたものを精霊経由で知りその通りにしていたから、気候の問題のようだった。マンドラゴラもムスクマロイもデリケートでいかん。いやデリケートだからいいのか？ 適応力と繁殖力が高かったら今頃大陸中に溢れていただろうし。

そんな感じで精霊からの情報リークでマンドラゴラの処理は上手くいったのだが、そう何度も精霊から得た情報を利用する訳にもいかない。「精霊からしか得られない情報」をアンデッドが知り過ぎていると怪しまれるからだ。基本は素知らぬフリで通し、ここぞという時にこっそりと裏の繋がりを利用するに限る。

さて帝国側もいよいよ髑られてばかりではいられない。帝国にとってマンドラゴラを消されたのは致命的で、精霊使いの重要性はますます高まった。それに応じて国策として精霊の復活速度を早めにかかる。

精霊は現在力を失っており、回復している最中である、という設定だ。実際のところは力を失っているどころか今が絶好調であり、回復しているというよりも（魔力密度が）成長している真つ最中ののだが、こちらから言い出さない限り成長しているのか力をとりもどしているのかの判別はできやしない……それはともかく。

精霊から力を引き出すには呪文を唱えなければならぬ。しかし現在精霊は全盛期の力を出せず、強力な呪文を唱えても発動させる事ができない。強力な呪文を使うためには精霊に力を取り戻させなければならぬ。精霊は放っておいても自力で力を回復させていくが、環境を整えればより早く回復するし、条件が整えば分裂して増える事もある（という事にしてある。流石に四ヶ月おきに倍々で増える事ができるという性質を表ざたにすると戦力のインフレが起きるためまずいと判断した）。よしならば環境を整えてやろう、とまあそんな流れ。

精霊が力を取り戻し易い環境作りは基本的に裏表両方で利益が得るようにした。

例えばノームの場合、肥えた土に住んでいると回復が早まる、という設定になっている。ノームは東の森の土……腐葉土をベースにして生まれた精霊だ。同じ土でも砂浜や粘土などでは成分が違うため同調率が激減する。従ってノームを十全に機能させるためには帝国の国土に適したノームを作るか、帝国の国土を東の森の地質に近づける必要がある。

俺が選んだのは後者だ。地質ごとにいちいちこのノームが適している、あのノームは使えるけどそっちのノームは使えない、なんて分類するのは面倒過ぎる。時間はかかるだろうが長い目で見れば大陸全体の地質をフラットにしてしまった方が楽なのだ。流石に大陸

中の地質を完全に同一にするのは不可能だろうしそんな事したら生態系が狂うだろうからやらないが、なにも地質を完璧に同一にしないで数割腐葉土の成分が混ざっていけばノームは力を発揮できる。荒れた土地、砂と石ばかりの荒涼とした土地に腐葉土を入れて土を肥やせばノームの活動範囲は広まるし、農地だって増える。ノーム強化と農地改善・拡大が一度にできて一石二鳥って寸法だ。ウンディーネの場合は綺麗な水が回復を促すという事になっている。

ウンディーネが同調する成分は水だ。泥水でも動かせるが、その場合は厳密に言えば水が動くのに伴って泥の成分も流動しているだけで、泥は動かせない。水99%、泥1%の泥水なら同調率は100分の99になる。

さらにそこに別の不純物が混ざり、水98%、泥1%不純物1%になったとしよう。そうなると当然同調率は100分の98に落ちる。さらに不純物が多いと分裂の際に最悪ウンディーネになれない。水100%のウンディーネがどろどろの泥水の中で分裂しようとすると駄レイスになるのだ。水と泥水は別物だからこういう事もあり得る。

汚れた水が多ければ多いほどウンディーネは駄レイスになりやすくなるし、同調率も下がる。そりゃあ目に見えて同調率が下がるとなれば水90%不純物10%ぐらいからだろうし、工場もないこの時代に川や湖の水がそこまで濁るなんて早々あり得ない事ではあるものの、水が綺麗であるに越した事はない。なにもウンディーネのためだけではない。水が綺麗なら民衆にも利益がある。例えば上下水道の概念が定着すれば河川の水は飛躍的に綺麗になり、ウンディーネが住み易くなり、病気も減るだろう。今の時代糞尿たれながした川の水で洗濯したり食器洗ったり拳句の果てには飲んだりしてらんだぜ？ 正気じゃない。いや里ではそのへん徹底してるけど帝国はね。ほんと酷いから。

まああれだ、水を綺麗にすればウンディーネ強化と病の予防が一

度にできて一石二鳥って寸法だ。

サラマンダー、サラマンダーは火を食べて成長するという設定だ。それも長く燃えた火であるほどいい。長期に渡って燃え続けた火があれば分裂もできる。

サラマンダーはデフォルトで熱を発し続けているから、長い目でみれば四ヶ月もの間火を焚き続けるのもマイナスにはならない。サラマンダーが一家に一体いるだけで冬を薪なしで越す事ができるのである。その恩恵は計り知れない。魔力密度が上がれば精鉄なんぞにも使えるようになるだろう。

短期的には焚き火の燃料集めが負担になるが、長期的に見ればサラマンダーが増えて森林伐採の防止にもなり一石二鳥って寸法だ。

シルフ……シルフは特に何もしていない。大気汚染すんなっても別に大気汚染するほどガスだしちやいないなからな。シルフはこの広く清い大空がある限りどこまでも自由に飛んでいき、何ものにも縛られずあり続ける。故に四精霊の中で最も数が多い精霊なのである……本当は単に初期に分裂したからなんだが例のよって黙っていればわかりやしない。ふひひ、サーセン。

前世、俺の世界では利便性や豊かな暮らしと引き換えに多くの自然を失った。今世、分かっている前世と同じ轍を踏む事はない。

精霊を強くし、増やせば暮らしが豊かになり戦力増強にもなる、そのためには自然破壊厳禁、自然破壊しなければ豊かな自然と暮らしの両立ができる。我ながら見事な三段論法だと自画自賛してみる。サラマンダーがいれば料理も鍛冶も燃料いらす。ウンディーネがいれば早魃も怖くない。ノームがいれば畑仕事が楽になるし、土壘を築くのも簡単だ。シルフがいれば移動も通信も格段に速くなる。

まあ工業・産業による自然破壊がなくなった代わりに魔王軍による侵攻があるからそこまで良い世界にはならないだろうが……それでも収支はプラスに傾くだろう。常に魔王という分かり易い悪がぶら下がっているのも大きい。魔王が虎視眈々と人間を滅ぼす機会を伺っている限り、人間同士で大きな戦争を起こして隙を見せる事は

ないだろうから。

さて、精霊の強化に勤しみつつも帝国は魔王討伐作戦を計画しはじめていた。

マンドラゴラが根絶やしにされ、魔法使いの増産が不可能になった。以後時間が経てば経つほど魔法使いの数は減っていき、やがていなくなる。

魔法使いにできて精霊使いにできない事は多い。精霊魔法の多くは魔力を消費しないから従来の魔法と違って乱発できる一方で、属性が限られる。複数の精霊の属性を掛け合わせれば精霊魔法でも従来の魔法と同じ魔法が使えるようになるが、そこまでの……実も蓋も無い言い方をするなら、そこまでのアップデートはまだまだ先だ。今のところ精霊使いは一属性しか使えない事になっている。精霊の力が完全に復活していないため使える詠唱が限られているが、それはアンデッドも同じ。精霊が力をとりもどすのを待っていればアンデッドも強大になってしまう。

時が経ち魔法使いがいなくなってしまう前にこちらから攻めよう、という考えは帝国首脳陣の間で概ね歓迎され、武装を整えたり魔王城までの道のりを地図にしたりとちやくちやくと準備を整えている。

なんだかねでナルガザン帝国は一度も敗北した事がない。魔法使い擁するビルテファ王国を魔法使い無しで破った経歴もある。今回も犠牲は出るだろうが勝つだろうとどいつもこいつも樂觀してい

て、士気は高かった。古代文明を滅ぼしたつつつても今は弱体化してんだろ？ ちゃちゃっと叩き潰してやんよ！ というムードだ。

まー攻めてくるなら攻めてくるで一向に構わん。ぶっちゃけ潜在的にはどうやって負ければいいのか分からんレベルの隔絶した戦力差がある。英雄クラスの英傑が一ダース揃い踏みしていても蹴散らせるだろう。問題は第一次魔王城攻城戦をどう演出するか、だ。

帝国にどの程度の犠牲を強いるか。どの程度生かして返すか。アソビ側の手札をどこまで見せるか、どこまで攻め込ませるか。今年中には速攻で攻めてくるだろうからそれまでに決めておく必要がある。

正直出来レースにもほどがあるが、ここはあえて言っておこう。

大侵攻（笑）を、始めよう。

## 二十一話 這い寄る精霊（後書き）

例えば球を作りたい場合、資材の中に球形の魔力を浸透させて転送魔法を使いきり抜けは一瞬にして球を作る事ができる。

2

平均的な西洋城に使用されている石材の体積のデータがあればよかったのですが、探しても見つからなかったので（そりゃそうだ）建築にかかった日数は相当適当になっています。したがって駄レイスの魔力量と回復速度的にありえない日数になっているかもしれないが、計算が面倒なので検証していません。このあたりはまるっとスルーして下さい。

次話は帝国サイド

## 二十二話 勇者のくせになまいきだ。

帝国暦122年、夏。帝国皇帝、ババンバは魔王討伐隊を召集した。精霊使いと魔法使いを中心とした二千人の精鋭部隊である。

偵察部隊によって特定された魔王城の位置は北の山脈の奥深くである。そこは年中雪に覆われている寒々しい土地で、人は住んでおらず、当然道もない。そんな厳しい自然に抱かれた人気の無い場所だからこそ魔王の隠れ家としては最適だったのだろう。

そんな全く人の手が入っていない未開の地、魔王城の位置は特定できてもそこまでの道のりはそう簡単なものではない。強風が吹き付ける崖があり、険しい岩山があり、雪で隠れ天然の落とし穴になった地割れがあり、崩れ易い足場に滑り易い足場に加え、体温と体力を奪う雪。雪で閉ざされたその地では食料の現地採取も難しい。

魔王を討伐するには戦力が多いに越した事はないだろうが、魔王との戦いの前に自然の壁が立ち上がる。王国を攻め滅ぼした時のように十万の兵を動員する事もできるにはできる。しかし道なき道を十万の兵が進軍しても隊列と補給線はどうしても細く長く伸び、分断撃破してくれと言わんばかりの醜態を晒す事になるのは間違いない。王国を大群で攻める事ができたのは平地だったからこそだ。

だからこそその少数精鋭部隊。魔法に対処できる能力、練度を持った兵のみを用いた電撃戦が今回の戦の要となる。

そして帝国軍戦士隊精鋭部隊所属の剣士、ハンスはそんな魔王討伐隊として召集された中でも練度の高い兵の一人だった。

ハンスの一日は一杯の牛乳から始まる。

ハンスは生粋の帝国人で、特有の黒目をしており、クセのない紫色の髪は邪魔にならないよう短く切りそろえられている。男前な顔立ちとぎつくりした性格、暗さの欠片も感じさせない明朗な気性が相まって同僚からも近所の住人からも好かれている。ただし時折無茶苦茶な事をやるので間近でハンスと交友しようという奇特な人間は少ない。巻き込まれるからである。本人もトラブルになると分かっているながら我が道を行っているので性質が悪い。

さてそのハンスだが、この日も朝起きてコップ一杯の牛乳を飲むと、庭に出てこれまた日課である体操を始めた。王都の町並みから顔を出した朝日と爽やかなそよ風を全身に浴び、大きく伸びをし、手足を伸ばし、ゆっくりと身体をほぐしていく。こうする事で身体がしつかり目覚め一日を快適に過ごす事ができるのだ。

体操を終えたハンスは屋内に戻り使用人の給仕で朝食を取る。金髪碧眼、元王国人の使用人はかなり安く雇えるため、ハンスの給金でも二人雇う事ができていた。彼らには普段家の掃除や料理、買い物などの雑用をさせている。そうして空いた時間を勤務や鍛錬や勤務や訓練や勤務に当てているのだ。

ハンスは過度のワーカーホリック……というか戦闘狂だった。狂人というほどではないが頭のネジがずれていて、なにかにつけ攻撃したがる。

ハンスは朝食を腹に収めると、自室に戻って手早く軍服に着替えた。黒く染められた頑丈な革の長ズボンにチェインシャツ。その上に肩に階級を示す鷲のワッペンがついた茶色のコートを羽織り、キツチリとボタンと留める。腰には愛用の両刃剣を下げた。両手に手

甲をつけ、金具でしっかりと留める。

塗らした櫛で軽く髪を整えながら、ハンスはベット脇の小机に広げられた手紙を見て思わず無邪気な笑みを浮かべる。

強制召集令状、別名青紙。文面には貴殿には皇帝の勅令により魔王討伐隊に参加する義務が云々、と書かれている。つまり出撃である。文末の「激しい戦いが予想されるため遺書を書いておく事を勧める」という文言はスルーした。王国との戦争当時補給兵だった新兵ハンスは生き残ったし、精鋭部隊の一員となり前線で戦うようになった今も同じように生き残るつもりだった。それに遺書を書くのは負ける準備をしている気がしてハンスは好かない。

ハンスは使用人にしばらく留守にする事を告げ、大雑把に留守中の指示をして家を出た。

機嫌よく口笛を吹きながら大通りを歩く。肩で風を切るその姿は実に堂々としていて、歴戦の戦士の風格を感じさせた。

「隊長、おはようございます」  
十字路で足を止め、馬車が通り過ぎるのを待っていると横から声をかけられた。

「ああ、おはよう。シモン、君も招集されたのか」  
そこにいたのはハンスよりも頭二つ分も背が低い小男だった。尖った耳と高い鼻が特徴の顔はまだ少し眠そうな表情を浮かべている。ハンスと同じ黒目紫髪短髪。帝国の軍人にはこの髪型が多いのだ。服装もサイズ以外ハンスと同じだったが肩のワッペンだけが違う。鷲ではなく狼だ。ハンスよりも一つ階級が低い。

「は。隊長も、ですか」  
「そうだと。ここのところ、忌々しいアンデッド共も大人しくして出撃の機会が少なかったから渡りに船だ。腕が鳴るね」

「……私は侵攻より拠点防衛の方が得意なのですが」  
「仕方ない。君の弓の腕は皇帝陛下も信頼されている。この一大作戦に起用しない手はあるまいよ」

そう言って快活に笑い、シモンの背中を叩くハンス。シモンは苦

笑し、ハンスの背中を叩き返して応えた。隊長とその部下というよりも仲の良い戦友、といった雰囲気だ。事実ハンスとシモンの付き合いは入隊時から十年以上に及ぶ。

特攻隊長ハンスと狙撃手シモンと言えば屈強な帝国軍の中でも強者として名前の通りがいい。真つ先に戦場に飛び込んでいき敵を蹂躪し平然と戻ってくるハンスと、針穴に糸を通すような精密な射撃でそれを援護するシモンは魔法使いに匹敵する凶悪なコンビとして知られている。

二人は連れ立って最近の新兵の練度やらいきつけの酒場の親父の腰痛の話やら、雑談しながら兵舎に向かった。

兵舎は半壊した旧王城跡を利用して建てられた建物で、鉄壁の護りを誇る。その分厚い城壁の名残は魔法を使っても一回は耐え切る仕組みになっていた。これは大魔法使いエマーリオが考案した特殊な壁の造りで、石を一定の形に切り出し、特定の隙間を作りある法則に従って積み上げる事でどの方向から崩しても一度だけ再生するようになっている。内側から壊しても外部から壊しても石が隙間に落ちカラクリの様に連続して崩れ動く事で新しい壁になる。魔法で地上部分をまるごと内側から吹き飛ばしても地下部分に組まれた石が盛り上がりやはり新しい壁ができる。当然この特殊な壁を組むためには普通の壁よりも格段に時間がかかり労力も要るが、魔法攻撃でさえ確実に一回は防衛できるといふ点で手間をかける価値はあった( )。勿論強度も普通の壁と同等程度はクリアしている。

兵舎の建物の方は王国の建築技術でできた建物を帝国の建築技術で修繕したためどことなく歪になっている。明らかにとってつけたように穴が塞がれた建物もある。雨漏りしなければよし！と言わんばかりのやつつけ仕事だった。名のある帝国の建築家や石工、大工の多くが帝国城の建築を続けているため、旧王国領の大工達の腕はあまり良くないのだ。

もっとも慣れてしまえば気にならないもので、ハンスとヨハンは平然と門を潜り、中庭に向かった。

そこには既に百人以上の人影があつた。積み上げられた補給物資の脇に固まっている彼らは全員同じ赤か青か緑か茶のローブを着ていた。精霊使いである。色が使役する精霊の属性に対応している。

ハンスはひそひそ喋っている精霊使い達を一瞥し、フンと鼻を鳴らした。精霊使いの全てを否定する訳ではないが、ハンスはあまり精霊使いが好きではない。精霊と協力して魔法を使っているのではなく、さも自分の力であるかのように振舞う輩が多いからだ。ハンスにしてみれば強いのはあくまでも精霊であり、精霊使いは彼らが力を発揮する手助けをしているに過ぎない。精霊そのものを優遇するのは一向に構わないが、精霊使いが優遇されている現状は納得し難い物がある。

「不満そうですね」

シモンがハンスの不機嫌な表情に気付いて言った。

「……これも皇帝陛下の御意向、仕方ない。それに私が文句を言った所で実際に精霊使いが有用である事実は変わらんからね。しかし気に食わんのも事実だ。従って私達がさっさとアンデッド共を一掃して奴らの活躍の場を無くしてしまえば良い」

そう言つて気楽に肩を竦めるハンス。シモンは平常運転の突撃隊長に笑つた。

精霊使いは直接戦闘能力もさる事ながら、多彩な呪文の数々が実に有用だつた。

例えば魔王城の場所は特定した魔法、風属性スペル：ウイスパー。シルフからシルフに声を伝える魔法だ。二つの地点にシルフが

精霊使いと契約したシルフが  いれば、その二つの地点が何百km離れていても声を伝える事ができる。これは魔法使いにすらできない事だつた。魔王城の場所を探った偵察隊はアンデッド達によつて一人残らず殺され誰一人として帰らなかつたものの、この魔法のお陰で魔王城の位置情報を帝国に送る事ができたのだ。

また常に熱を発しているサラマンダーがいればそれだけで雪深い山地の行軍が格段に楽になるだろうし、水属性スペル：ウォータが

あればわざわざ水を運搬せずともその場で水を調達できる。今回の作戦には精霊使いが欠かせない。

ハンスとシモンがやってきたのを皮切りに広場には次々と人が集まってきた。誰もがハンスに親しげに声をかけていく。精鋭隊は軍服こそ同じだが、スレッジハンマーにシミター、斧、フライパン、鎌、棍、鞭と武器の種類はバラバラだ。各々が得意な獲物を使っている。

一番最後の方にやってきた魔法使い達は黒のローブ姿で、眼帯をしていたり、背中に負われていたり、片腕が無かったり、松葉杖をついていたりする。誰も彼もが何かしらの足枷を負い、筋肉が衰え貧弱な体つきをしている。しかしこれで熟練兵十五人分の働きをするというのだから魔法使いの規格外さがよく分かる。

やがて広場に足音とざわめきが満ちる頃、時刻を知らせる鐘がなり、集まった戦士達は自然と列を作って並び、見事な長方形の隊列を形成した。全員びしっと踵を揃え微動だにしない。

二千人の魔王討伐隊が見つめる先、兵舎のバルコニーに髭面の大男が現れる。第七十五代帝国皇帝、ババンバである。がっちりした巨体に鎖帷子をまとい、下半身はハーフパンツに脛当。右手にはよく磨かれた鉄の短槍を持っている。その姿は荒々しく猛々しく、威圧感はあるが品はなく、帝国という国を体言していた。

シンと静まりかえる兵士達をババンバはぐいと見回し、槍を空に向けて突き上げ街中に響き渡る大声で叫んだ。

「小難しい事は言わん！ 小癩な魔王など叩き潰してしまえ！ 征くぞ貴様ら！」

皇帝の咆哮と言ってもいい声が集まった精鋭達を叩き、精鋭達は武器を空に突き上げ大歓声を上げてそれに答えた。文句なしに高い士気と熱気をババンバは獰猛な笑みを浮かべて受け止め、自ら先陣を切るべくバルコニーから飛び降り、戦士達の列の中心を横切って堂々と歩いていく。

第一次魔王城攻城戦が、始まった。

旧王都は大陸の中でもかなり北にある都市だったが、魔王城は更にその北の山中にあった。出陣した魔王討伐隊は進路を北西にとり、ぼつりぼつりと点在する小さな村を経由して北上していく。当然どの村にも二千人もの人間が泊まれる施設も家の空きもなかったため、身体の弱い魔法使いと皇帝だけが屋根を借り、他は野宿をする事になる。二千人の人数には含まれないが慰安婦も連れているため無体を働く者もおらず、村人達に不安そうな目で見られながらも衝突を起こす事なく順調に行軍していった。

精鋭部隊二千人の戦力に加え、荷駄を運ぶ馬とそれを引く者、慰安婦、医者などを含め正確には二千三百人での進軍となっている。

北部は夏でも寒冷的な気候で、草原や丘陵を吹き抜ける冷えた風は兵士の体温を下げる。南の生まれの帝国人は知らず体力を多目に奪われ、一日の移動距離は少々短くなる。それでも鍛えているだけあり一般人のそれよりは余程ハイペースで進んでいた。

昼間でさえ肌寒いのだから夜の冷え込みはそれなりのものになる。兵士達はテントの中で毛布に包まり、固まって体温を逃がさないようにして寝た。彼らは頑健な身体を持ち、精神力も高い。慣れない

寒さや野宿に弱音を吐くようなものはいなかった。

道中アンデッド達の襲撃はなく、二週間かけて討伐軍は北の山脈の麓にたどり着いた。眼前にそびえるのは鬱蒼と木が茂る森と恵みの山ではなく、黒い岩肌を晒し中腹から頂上にかけて白い残雪を残す荒涼とした山だ。あたりには大小様々な岩がごろごろとしていて、低い木が転々と生えている。ここからは傾斜も障害物も多い山道となる。寒さも一層厳しくなるだろう。兵士達は皆毛皮のコートや襟巻きを身に着けて防寒対策を整えた。偵察隊が命がけで帝国にもたらした情報に寒さに対する強い警告があったため、防寒対策はしっかりできていた。

討伐隊は山の中に入る前に小休止をとる事にした。円をつくって建てられたキャンプの群の中心に焚き火が焚かれ、満点の星空の下で兵士達は食事をとる。出発の時と比べ彼らの口数は随分と少なくなっていた。必ず来るであろうと身構えていた道中の妨害が全くなかった事が不安を煽っていたし、今の所寒さは目立つ支障を生んでいないが、これ以上となると不具合も出てくるだろう事を誰も悟っていた。帝国が取った防寒対策と言えば厚い服、毛皮を着込むぐらいだ。薄く断熱性の高い服など存在しない。自然、厳しい寒さに対抗するには厚く着込むしかなくなり、その状態で十全に戦闘行為ができるかと言えば否だ。

戦う前から帝国は不利な状況にある。理詰めでそれをしっかりと理解している兵の数は少ない。しかしかなりの者が漠然と立ちほだかる脅威を感じていた。それがどこか重々しい空気を生んでいる。土気は依然高かったが、気楽さが抜け、険しい表情をしている者が多くなっている。

ハンスは北での暮らしにそれなりに慣れ、寒さへの耐性がついているおかげもあるが、何よりも自分を信じ、帝国軍の強さと勝利を信じていた。無駄に気負う事もなく、早くアンデッドを叩き潰す血沸き肉踊る戦いの時が来ない物かとそわそわしている。

食事を配給しているテントで列に並び皿一杯のスープを手にいれ

たハンスは、空樽に腰掛け眉根を寄せて何やら考え事をしているシモンの肩をぼんと叩いた。

「飲むかね？」

「いただきます」

シモンはハンスからスープを受け取り、木のスプーンで黙々と口に運ぶ。暖かい液体が腹に入り体を温めると自然に強張っていた筋肉から力が抜けた。そこではじめてシモンはいつの間にか筋肉がガチガチに固まっていた事に気付いた。

ハンスが近くに転がっていた空樽を拾ってきて、シモンの隣に腰掛ける。ハンスが空を見上げ、釣られてシモンも見上げた。瞬く星の光が静かに見返してくる。

「ふむ、いい夜だ」

「そうですね……」

「なんだ、元気がないな。どうした」

「いえ、隊長と同じ部隊にいるのに妙に静かだな、と思ひまして。いつもなら二、三度は襲撃されているところでしょう？」

ハンスは失礼な言い草を気にした風もなくなるほどもっともだと言った。

「嵐の前の静けさという奴だ。山に入れば嫌というほど沸いてくるだろうさ」

「そうですね？ まあ隊長が言うならそうですね。まとめて来るとなると恐ろしい数になりそうな予感がしますが」

「うむ。狩り甲斐があつていいだろう？ 今の内に矢の用意をしておくといい」

「ははは……はあ」

ハンスは腰に下げた長剣を軽く叩き、楽しそうに笑った。シモンはアンデッドやリッチが大挙して押し寄せる光景を想像するとゾツとするが、ハンスにとっては的が増えるだけの事のようにだった。イカれている。そんなハンスと長く付き合っている内に否応なしに弓の腕が磨かれ今の自分がある訳で、そこには感謝していたが、いつ

までもハンスの特攻に付き合っていたら身が持たない。いい加減次の生贄……もとい、相棒を見繕ってハンスの無茶の尻拭いを交代してもらわなければ死ぬまで引つ張りまわされる事になる。

シモンはこの戦いが終わったら退役して結婚するんだ……と思った。

山に入った最初の一日は数匹の山羊らしき生き物以外動くものは見当たらなかったが、二日目の夕方にアンデッドが襲撃をかけてきた。

そこは両側を急な斜面に挟まれた細道で、最近崩れたらしく土がむき出しになっていた。見晴らしはよく敵影はなかったのだが、突然斜面の土と砂利の中からゾンビとスケルトンがわらわらと這い出してきたのである。呼吸の必要の無いアンデッドの特性を生かした隠れ方だった。人間のアンデッドだけでなく、動物のアンデッドもかなり混ざっている。

斜面を駆け下りてくるアンデッド達を討伐隊は待ってましたとばかりに武器を抜いて迎え撃った。

「魔法使い！ 右側を狙え！ 用意！ ……撃てエ！」

皇帝の素早い指示でまず魔法使いが一斉に右側の斜面に向き直り、魔法で洗礼を浴びせた。ゾンビもスケルトンも魔力を感知するため直接内側から爆散できず、火球を飛ばす炎魔法を選択。百数十発の火球が乱れ飛び、右の斜面が赤く染まった。火球はバラバラに着弾して炸裂音と共に土ごとゾンビを吹き飛ばす。弾幕の密度に差があったため避けられたり狙いが外れたりしてかなりの数が火球を抜けてきたが、それでも半数近くは削る事に成功し、残り六十体ほどになる。が、スケルトンは瞬く間に再生して立ち上がった。目測で四十体ほどが立ち上がったので、合計百体近くとなる。

「戦士隊は左を狙え！ 精霊使いと魔法使いは右だア！ 蹴散らせ野郎共！」

再び皇帝の声が轟き、直後アンデッドと討伐隊が衝突した。

ハンスは嬉々として太い木の枝を振り回して襲い掛かってきたスケルトンに長剣の腹でフルスイングを喰らわせて打ち砕いた。骨がガラガラと崩れ地に落ち白い山を作る。そこからすぐさま再生していくスケルトンだが、再生しきる前に間髪入れず踵落としを入れて踏み潰した。

スケルトンはさして力も強くなく知能も技もないが、再生能力を持ついやらしいアンデッドだ。何度も碎いて再生力を枯渇させなければ倒せず、そのため剣士や弓使いとは相性が悪かった。切断すると切断面をくつつけるだけで再生が完了してしまうためあまり再生力を削れない。矢を射掛けても肉の無いスケルトンには刺さらず効果が薄い。点で攻める矢、線で攻める剣より、面で攻めて一気に再生力を消費させられるハンマーや魔法が有効なのだ。

ハンスは横から斬り付けてきたゾンビの錆びた剣を身体を逸らして交わし、カウンターで首を浅く斬る。スケルトンは踏みつけたまままだ。足に噛み付こうと飛び掛ってきた狼のゾンビを剣ですくい上げる様に斬り飛ばし、手甲でゾンビの剣を受け流す。ゾンビの首に入った傷に正確に追撃を入れると、首は皮一枚繋がった状態で斬れた。血が出ない傷口を晒して頭をぶらつかせながら数歩フラフラと

よるめいたゾンビがどさりと倒れる。ハンスはそれを一瞥し、近くにあった赤ん坊ほどの大きさの丸っこい小岩を足で押して転がし、スケルトンを下敷きにした。こうすれば再生力が残っていても再生できなくなるのだ。

これと同じようにノームの精霊使いは土を操り埋める事がある。再生途中のスケルトンに半ミールも土を盛ってやれば自分では動けなくなり、その内機能を停止する。再生しようとする　再生できない　再生しようとする、のループを延々と繰り返して再生力を消耗するからだ。所詮脳みその無いスケルトン、馬鹿である。

剣と剣がぶつかる音、悲鳴と怒号が飛び交う戦場でハンスはばっさばっさとアンデッドを薙ぎ倒し斬り伏せていく。時折ハンスの死角から斬りかかってくるゾンビが脳天に矢を深々と撃ち込まれて倒れていた。シモンの弓の腕前は相変わらず並ではない。敵味方入り乱れた乱戦ですら淡々と的確に強力なヘッドショットを見舞っている。

戦っている内にハンスはなぜかゾンビが二刀流の者ばかりである事に気付いた。それも素人の剣筋ではなく、体捌きも含めて明らかに何かの流派、技の流れが感じられる。ハンスは不思議に思う。数ヶ月前にゾンビ数体と市街地で戦う機会があつたが、そのゾンビは椅子を振り回したり花瓶を投げてきたりと実に粗末な戦い方をしていたし、赤子の手を捻るように簡単に倒せたのだが、今回はそうもいかない。数合切り結ぶ必要がある。

流石魔王の本拠地を護るアンデッド、街で人間に紛れているアンデッドとは質が違うらしい。

戦場が細い道だったため討伐隊の隊列も細く伸びていて、最初はアンデッド達と討伐隊は一進一退の攻防を繰り返した。ゾンビの中に一体だけ混ざっていたリッチが土砂崩れを起こし討伐隊を纏めて生き埋めにしようとしたが、そこはノームが土を操ってほとんど防ぐ。そしてリッチの魔法とノームの魔法が拮抗している隙にシモンの強力な曲射がリッチを脳天から真下へ射抜いてサクッと討伐した。

やがて後方にいた兵士達がアンデッドを包囲するように前に出、  
囲まれたアンデッド達は防戦一方になり、そのまま押し切られた。  
偽りの命をかき消され、動かない屍に戻ったアンデッド達が転がる  
戦場で戦士達は勝利の雄たけびを上げる。

無事、初戦は討伐隊が勝利を飾った。

討伐隊の犠牲もゼロではなかった。重軽傷者の数が二十人。行方  
不明が十五人。死者はいない。

その日の夜、キャンプの食事配給を受け取る時に損害報告を小耳  
に挟んだシモンは、死者がいらないとはどういう事だ、と訝った。

いくら帝国の精鋭部隊とは言えあの規模の戦いで死者がゼロとい  
う事はあるまい。現にシモンはアンデッド数体に囲まれ深々と腹を  
刺され崩れ落ちる戦士をはっきりと見ている。鮮血を地面に滲ませ  
倒れ伏しピクリとも動かない戦士もいた。

しかし現実に死傷者はゼロ。その代わりに行方不明者が十五人も  
いる。

リッチが起こした土砂崩れで全員埋もれてしまったのだろうか？  
否、ありえない。幾人かはそうかも知れないが、十五人全員が埋  
まったとは考えにくい。

恐らく死体はアンデッドが回収したのだ。邪法を使い、魔王の手駒として蘇らせるために。

ゾンビやリッチは人間が基礎になっていて、経験や記憶、技を継承している。なるほど精強な帝国軍の精鋭の死体はさぞ強力なアンデッドになる事だろう。

忌々しい。おぞましい。シモンは腸が煮えくり返る思いだった。

魔王は勇敢なる戦士の戦いと、栄誉の戦死を穢す。崇高な命のやりとりの先に待つ安らかなる死から魂を引きずり戻し、肉体に閉じ込め操り人形にしている。許される事ではない。

アンデッドとの戦いで死んだ同胞がアンデッドとして蘇り、敵となり、仲間のフリをして襲い掛かってくるかも知れないのである。なんと哀しく、唾棄すべき悪辣な手法だろうか。ますます死ねなくなつた。

それも全ては魔王の悪行なのである。アンデッド達は魔王にのみ絶対の忠誠を持ち、従う。裏を返せば魔王を倒せばアンデッドは烏合の衆と化すだろう。

シモンは改めて魔王の討伐を強く心に誓い、しかしまあ第一に死なないうちにしようと思った。

翌日。皇帝もシモンと同じ結論に至つたらしく、翌朝出陣前隊列の再編成が行われ、討伐隊が必ず一人は精霊使いを含んだ小隊で構成されるようにした。そして「決して一人で行動するな」と厳命する。

総兵力が二千人もいると、誰が死んだのか兵士同士で把握しきれない。死んだ兵が何食わぬ顔で戻ってくれば、服装も武器も記憶も同じである以上判別するのは不可能に近い。短期間で友軍の顔を全員分覚えるのが不可能に近い以上、アンデッドを見分けられる精霊使いと共にいるのが最も簡単に安全を確保できる手段なのだ。

ババンバは帝国史上最強と謳われたエカテリーナほどの武は持つていなかったが、代わりに見た目に合わず指揮能力が高かった。状況に応じて臨機応変に対応する事ができる。皇帝に精鋭隊、魔法使

いに精霊使いと帝国主力が全て出払っていても、他国に攻め込まれたり（ほとんど大陸を統一しているので攻め込めるような国はないが）、内乱が起きたりしても対処できるような一般兵と指揮官を残してきている。万が一討伐隊が全滅するようなことがあっても帝国が滅びる事態にはならないだろう。

また、魔法使いは全員討伐隊に参加しているが、精霊使いはそうでもない。魔法使いと違い精霊使いは精霊が勝手に契約者を選ぶので、軍属でない在野の精霊使いは多くいる。討伐隊の精霊使いが全滅しても彼らがアンデッドへの防波堤となるだろう。

暗雲立ち込める魔王城への道のり。皇帝は張った予防線を機能させずに済む事を祈り、シモンはいよいよハンスが暴走しださそうだと予感し、ハンスは予想以上に数の多いアンデッドに喜んでいた。

二十二話 勇者のくせになまいきだ。(後書き)

長くなったので分割投稿。まずは前半。後半は執筆中です。

再構築された壁を壊されれば流石に再生しない。つまり二回壁を壊せばいい。もしくは地上部分だけでなく地下部分ごと魔法で根こそぎ吹き飛ばす。それならば一撃で壊せる。が、初見でわざわざ地下部分も含めて壁を壊す者はいないだろう。

皇帝の名前は哀愁戦士ヒーローババーンの愛機、「ババンバイク」リスペクト。

ゾンビの武器がシヨボイのは倒された後に奪われて利用されないようにするためです。

階級ワッペンは「魚<狼<鷲<盾<剣」の順で高い位を示します。特に覚える必要もないですが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8390n/>

---

ノーライフ・ライフ

2011年10月5日14時56分発行